

福島県文化財調査報告書第403集

一般国道6号

相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅳ

柴 迫 A 遺 跡

柴 迫 古 墳 群

2002年12月

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所

一般国道6号

相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅳ

しば さく い せき
柴 迫 A 遺 跡

しば さく こ ふん ぐん
柴 迫 古 墳 群



口絵1 柴畑A遺跡・柴畑古墳群の位置

(南から)



口絵2 柴畑A遺跡・柴畑古墳群（1次）調査区遠景

(西から)

序 文

福島県浜通り地方の北端に位置する相双地域は、重要港湾である相馬港や相馬中核工業団地などの大規模な地域総合開発が進んでいます。この開発に伴い増加する交通の円滑化を図るため、主要幹線道路として相馬市～新地町を区間とする一般国道6号相馬バイパスの建設が進められています。

本バイパスの建設に先立ち、福島県教育委員会では、建設予定地内に所在する遺跡の保護と貴重な文化財を後世に伝えるため、国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所と調整を図り、昭和63年度に表面調査、平成3年度に分布調査を行い、これに基づいて平成5年度と平成12～13年度には発掘調査を実施しました。

本書は、平成12～13年度に調査を行いました柴迫A遺跡・柴迫古墳群の成果をまとめたものです。

今後、この報告書が県民の皆様が文化財に対し理解を深めていただく一助として、また文化財保護活動や学術研究の資料として、さらには生涯学習における基礎的な素材として、広く御活用いただければ幸いです。

最後にこの遺跡の調査に御協力いただいた国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所、相馬市教育委員会および地元の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成14年12月

福島県教育委員会
教育長 高 城 俊 春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に先立ち、対象地域内にある埋蔵文化財の記録保存をするため、発掘調査を実施してまいりました。

相双地域では、一般国道6号の混雑解消と沿道の交通安全を確保するために新地町～相馬市を通る新たな一般国道6号相馬バイパスの建設が進められております。本路線にかかる遺跡については、これまで平成5年度に3遺跡、平成12年度に3遺跡、平成13年度に2遺跡の発掘調査を実施し、報告書も逐次刊行してまいりました。

本報告書は、平成12～13年度実施した発掘調査のうち、相馬市柴迫A遺跡と柴迫古墳群の発掘調査成果をまとめたものです。この遺跡からは弥生時代の集落跡が発見されました。なかでも集落域に隣接している二つの大溝から出土した大量の弥生土器や石器は、当時の生活のようすを探る上での貴重な資料となっています。

本報告書の成果が、地域史研究の基礎資料として、関係各位に広く活用されるとともに、県民の皆様が郷土を理解する際の一助となれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、御指導・御協力いただきました関係諸機関並びに地元の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成14年12月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 佐藤 栄佐久

緒 言

1. 本書は、一般国道6号相馬バイパスにかかる遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成12・13年度に実施した一般国道6号相馬バイパス関連遺跡調査のうち、相馬市大字和田字柴迫・西和田に所在する柴迫A遺跡・柴迫古墳群の調査成果を収録した。
3. この調査の費用は、国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所が負担した。
4. 福島県教育委員会は、国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所と保存協議を行い、開発計画に沿って調査計画を策定した。
5. 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託した。
6. 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配し調査に当たった。

[平成12年度] 文化財主査 山田 幹雄 文化財主事 稲村 圭一

[平成13年度] 文化財主事 稲村 圭一

この他、平成12年度に、専門文化財主査 渡辺 富雄・文化財主査 高橋 信一・文化財主査 吉田秀享・文化財主査 大竹 正浩・文化財主査 香川 慎一・文化財主査 斎藤 竜一・文化財主事 笠井 崇吉、平成13年度には、文化財主査 安田 稔・文化財主査 大竹 正浩・文化財主事 大河原 勉の参加・協力を得た。

7. 本書は担当職員が分担して執筆し、執筆者名を文末に示した。
8. 本書に掲載した自然科学的分析・考察は、次の諸氏・諸機関に依頼した。

テフラ検出分析・組成分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
木製品樹種同定：パリノ・サーヴェイ株式会社
出土石器の石質鑑定：パリノ・サーヴェイ株式会社
9. 本書に掲載した地形図は、国土交通省国土地理院の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製使用した。「(承認番号)平14東復 第287号」
10. 発掘調査及び本書作成にあたり、次の機関と研究者から御協力と御指導をいただいた。

相馬市教育委員会・大阪府弥生文化博物館・山形市教育委員会
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館・橋本博幸
11. 本書に収録した発掘調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会で保管している。

用 例

1. 本書の遺構図の用例は、次のとおりである。

- (1) 方 位 平面座標の国土座標軸を基準とした真北方向を図版の真上とした。
それ以外のもは挿図中に真北方向を示す方位を示した。
- (2) 縮 尺 率 遺構図は原則として竪穴住居跡 1/40, 土坑 1/40, その他の遺構は大きさに則して縮尺し, 挿図のスケール右脇に縮尺率を表示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「 \perp 」のケバで表示したが, 相対的に緩傾斜の部分には「 ㄣ 」のケバを使用した。なお, 「 ㄣ 」は後世の人為的な削土部の傾斜を示す。
- (4) ピ ッ ト P 1・P 2…で示した。
- (5) 土 層 遺構外堆積土はローマ数字で, 遺構内堆積土は算用数字で示した。
- (6) 水系レベル 海拔高度を示す。

2. 本書の遺物実測図の用例は、次のとおりである。

- (1) 縮 尺 率 各遺物の大きさに応じて縮尺率を設定した。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器は原則として 1/3 で採録した。その他の遺物は大きさに則して縮尺し, 挿図のスケール右脇に縮尺率を表示した。
- (2) 遺 物 断 面 縄文土器・弥生土器・土師器断面は白抜き, 須恵器についてはベタ黒で表示した。また, 粘土の積み上げ痕は一点鎖線で表示した。
- (3) 遺 物 番 号 遺構内出土遺物は, 図版の番号と遺物の通し番号を組み合わせた。
- (4) 寸 法 遺物の寸法は, 原則として挿図中に記載した。遺存値は〈 〉, 推定値は () の括弧を付けて表記した。
- (5) ア ミ 点 等 図中のアミ点等には, 凡例を同図中に表示した。ただし量的にまとまりをもつ石器については, 磨耗痕にドット, 節理面には斜縞のスクリーン・トーンで示した。

3. 本文中及び遺物整理に使用した略号は次のとおりである。

相馬市……………SM	柴迫A遺跡…SBS.A	柴迫古墳群…SBS.KG
遺構外の堆積土層…L	遺構内の堆積土層… ℓ	竪穴住居跡…SI 土坑……SK
溝跡……………SD	焼土状遺構……………SG	木炭窯跡……SC 道跡……SF
ピット……………P	グリッド……………G	

4. 引用・参考文献については、執筆者の敬称を省略し巻末にまとめて収めた。

目 次

序 章	1	
第1節 開発事業の概要	1	
第2節 平成12年度までの調査経過	1	
第3節 平成12・13年度の調査経過	2	
第4節 自然環境	3	
第5節 歴史的環境	5	
第1章 調査経過	10	
第1節 遺跡の位置と地形	10	
第2節 調査経過	11	
第3節 調査の方法	14	
第4節 基本土層	17	
第2章 柴迫A遺跡の遺構と遺物	19	
第1節 溝 跡	19	
1号溝跡 (19)	2号溝跡 (48)	3号溝跡 (57)
第2節 木炭窯	58	
1号木炭窯 (58)		
第3節 土 坑	60	
1号土坑 (60)	2号土坑 (60)	
第4節 遺構外出土遺物	61	
第3章 柴迫古墳群の遺構と遺物	62	
第1節 竪穴住居跡	63	
1号住居跡 (63)	2号住居跡 (65)	3号住居跡 (69)
4号住居跡 (72)		
第2節 土 坑	79	
1号土坑 (79)	2号土坑 (81)	3号土坑 (81)
4号土坑 (82)	5号土坑 (82)	6号土坑 (83)
7号土坑 (83)	8号土坑 (85)	9号土坑 (85)
10号土坑 (86)	11号土坑 (86)	12号土坑 (88)
13号土坑 (88)	14号土坑 (89)	15号土坑 (91)

第3節	焼土遺構	92
	1号焼土遺構 (92)	
	2号焼土遺構 (92)	
第4節	塚跡	93
	1号塚 (93)	
第5節	道跡	97
	1号道跡 (97)	
	2号道跡 (99)	
第6節	階段状遺構	99
	1号階段状遺構 (99)	
	2号階段状遺構 (101)	
第7節	遺構外出土遺物	101
第4章	考察	105
第1節	弥生時代の遺構と遺物	105
	弥生時代の遺物について (105)	
	弥生時代の遺構について (114)	
第2節	柴迫A遺跡の溝跡について	117
第3節	まとめ	119
付編		173
付編1	柴迫A遺跡のテフラ分析	175
付編2	柴迫A遺跡から出土した木材の樹種	177
付編3	柴迫A遺跡・柴迫古墳群付近の地質と石器石材	179

挿 図 目 次

図1 一般国道6号相馬バイパス路線図……………1	図41 2号溝跡ℓ6出土石器……………54
図2 遺跡周辺の地質図……………4	図42 2号溝跡ℓ4出土石器……………55
図3 周辺の遺跡分布図……………6	図43 2号溝跡ℓ3出土石器……………56
図4 遺跡位置図……………10	図44 2号溝跡ℓ2出土石器……………57
図5 柴迫A遺跡・柴迫古墳群調査範囲図……………13	図45 3号溝跡出土弥生土器……………58
図6 柴迫A遺跡・柴迫古墳群グリッド配置図……………15	図46 1号木炭窯……………59
図7 柴迫A遺跡・柴迫古墳群遺構配置図……………16	図47 1・2号土坑……………61
図8 基本土層図……………18	図48 遺構外出土遺物……………61
図9 1号溝跡……………20	図49 1号住居跡……………64
図10 1号溝跡断面図……………21	図50 1号住居跡出土遺物……………65
図11 1号溝跡出土縄文土器……………22	図51 2号住居跡……………66
図12 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(1)……………23	図52 2号住居跡出土遺物……………68
図13 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(2)……………24	図53 3号住居跡……………70
図14 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(3)……………25	図54 3号住居跡出土遺物……………71
図15 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(4)……………27	図55 4号住居跡……………73
図16 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(5)……………28	図56 4号住居跡内遺物出土状況……………74
図17 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(6)……………29	図57 4号住居跡出土遺物(1)……………75
図18 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(7)……………30	図58 4号住居跡出土遺物(2)……………77
図19 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(8)……………31	図59 4号住居跡出土遺物(3)……………78
図20 1号溝跡ℓ6出土弥生土器(1)……………32	図60 1～5号土坑……………80
図21 1号溝跡ℓ6出土弥生土器(2)……………33	図61 6～10号土坑……………84
図22 1号溝跡ℓ4・3出土弥生土器……………35	図62 11～15号土坑……………87
図23 1号溝跡ℓ2・1出土弥生土器……………36	図63 土坑出土遺物(1)……………90
図24 1号溝跡ℓ7出土石器(1)……………37	図64 土坑出土遺物(2)……………91
図25 1号溝跡ℓ7出土石器(2)……………38	図65 1・2号焼土遺構……………93
図26 1号溝跡ℓ7出土石器(3)……………39	図66 1号塚周辺遺構配置図……………94
図27 1号溝跡ℓ7出土石器(4)……………40	図67 1号塚……………95
図28 1号溝跡ℓ6出土石器……………42	図68 1号塚断面図……………96
図29 1号溝跡ℓ5出土石器……………42	図69 1・2号道跡……………98
図30 1号溝跡ℓ4出土石器……………43	図70 1・2号階段状遺構……………100
図31 1号溝跡ℓ3出土石器……………44	図71 遺構外出土遺物(1)……………102
図32 1号溝跡ℓ1出土石器……………44	図72 遺構外出土遺物(2)……………103
図33 1号溝跡出土土師器(1)……………45	図73 壺形土器……………106
図34 1号溝跡出土土師器(2)・須恵器(1)……………46	図74 甕形土器(1)……………108
図35 1号溝跡出土杭……………48	図75 甕形土器(2)……………109
図36 2・3号溝跡……………49	図76 鉢形土器・底部資料……………110
図37 2号溝跡出土縄文土器……………50	図77 弥生時代中期前葉と同後葉の石器……………112
図38 2号溝跡ℓ6・5・4出土弥生土器……………51	図78 弥生時代の遺構配置図……………116
図39 2号溝跡ℓ3・2出土弥生土器……………52	図79 1～3号溝跡変遷図……………118
図40 2号溝跡ℓ1出土弥生土器……………54	

表 目 次

表1 一般国道6号相馬バイパス建設予定地遺跡一覧・遺跡推定地一覧……………2	表2 周辺の遺跡一覧……………7
--	------------------

写真図版目次

[柴 迫 A 遺 跡]

1	柴迫A遺跡全景	127	15	1号溝跡 l 6 出土弥生土器	136
2	調査前現況	127	16	1号溝跡 l 4 ~ l 1 出土弥生土器	137
3	1号溝跡全景	128	17	2号溝跡 l 6 ~ l 4 出土弥生土器	138
4	1号溝跡断面	128	18	2号溝跡 l 3 ~ l 1 出土弥生土器	139
5	1号溝跡細部(1)	129	19	1号溝跡 l 7 出土石器(1)	140
6	1号溝跡細部(2)	130	20	1号溝跡 l 7 出土石器(2)	141
7	2・3号溝跡全景	131	21	1号溝跡 l 7 出土石器(3)	142
8	2・3号溝跡細部	131	22	1号溝跡 l 7(4)・ l 6 ~ l 4・ l 3(1)出土石器	143
9	1号木炭窯	132	23	1号溝跡 l 3(2)・ l 1 出土石器	144
10	1・2号土坑	132	24	2号溝跡 l 6・ l 4・ l 3(1)出土石器	144
11	a 1号溝跡出土縄文土器	133	25	2号溝跡 l 3(2)・ l 2 出土石器	145
	b 2号溝跡出土縄文土器		26	a 1号溝跡出土杭	145
12	1号溝跡 l 7 出土弥生土器(1)	133		b 遺構外出土遺物	
13	1号溝跡 l 7 出土弥生土器(2)	134	27	1号溝跡出土土師器・須恵器	146
14	1号溝跡 l 7 出土弥生土器(3)	135			

[柴 迫 古 墳 群]

1	柴迫A遺跡・柴迫古墳群(1次)全景	149	24	3号住居跡出土遺物(3)	162
2	柴迫古墳群(2次)全景	149	25	4号住居跡出土遺物(1)	162
3	1・2号住居跡全景	150	26	4号住居跡出土遺物(2)	163
4	柴迫古墳群(2次)	150	27	4号住居跡出土遺物(3)	163
5	1号住居跡全景	151	28	4号住居跡出土遺物(4)	164
6	1号住居跡細部	151	29	4号住居跡出土遺物(5)	164
7	2号住居跡全景	152	30	4号住居跡出土遺物(6)	165
8	2号住居跡細部	152	31	4号住居跡出土遺物(7)	165
9	3号住居跡全景	153	32	4号住居跡出土遺物(8)	166
10	3号住居跡細部	153	33	4号住居跡出土遺物(9)	166
11	4号住居跡全景	154	34	2・3・9・13・15号土坑出土遺物	167
12	4号住居跡細部	154	35	a 10号土坑出土遺物	167
13	1~7号土坑	155		b 11号土坑出土遺物	
14	8~12号土坑	156	36	14号土坑出土遺物(1)	167
15	13~15号土坑, 1・2号焼土遺構	157	37	14号土坑出土遺物(2)	168
16	1号塚土層断面	158	38	14号土坑出土遺物(3)	168
17	1号塚細部	158	39	遺構外出土遺物(1)	169
18	1・2号道跡近景(1次)	159	40	遺構外出土遺物(2)	169
19	1・2号道跡	159	41	遺構外出土遺物(3)	170
	1・2号階段状遺構		42	a 1号住居跡出土石器	171
20	1号住居跡出土遺物	160		b 2号住居跡出土石器	
21	2号住居跡出土遺物	160	43	a 4号住居跡出土石器	171
22	3号住居跡出土遺物(1)	161		b 2号土坑出土石器	
23	3号住居跡出土遺物(2)	161	44	遺構外出土石器	172

序 章

第1節 開発事業の概要

一般国道6号相馬バイパスは、国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所が事業主体となり、福島県相馬市程田～相馬郡新地町駒ヶ嶺の区間に建設される延長9.9kmのバイパスである。福島県浜通り地方北半の相双地域は全国でも有数の電源開発を軸とし、相馬港・相馬中核工業団地等大規模な地域総合開発計画に基づく作業が現在も行われている。この開発により、相馬港は相双地区をはじめ福島県北東部及び宮城・山形両県南部を包含した広域経済圏の玄関口として発展し、相馬共同火力発電所を中心とする多様な工業展開がなされると期待されている。

本事業は、相馬市街の一般国道6号の増加する交通混雑の解消、沿線環境等の改善、輸送の迅速化、市街地からの大型車の排除を図り、相馬地域開発関連交通を円滑に処理するために、昭和62年度から着手されている。

(稲 村)

第2節 平成12年度までの調査経過

福島県教育委員会は、路線内に存在する埋蔵文化財の保護を図るため、昭和63年に財団法人福島県文化センター（現財団法人福島県文化振興事業団）に委託し、関係市町村の協力を得て、相馬市程田～相馬郡新地町駒ヶ嶺区間の表面調査を実施し22遺跡を確認した。その内、相馬市大字新沼地内には鷲塚B・C、大森の3遺跡が路線内に所在することが確認された。

路線内に所在する遺跡の取り扱いについては、福島県教育委員会と建設省東北地方建設局（現国土交通省東北地方整備局）磐城国道工事事務所の間で保存協議を行い、保存困難な遺跡については記録保存のための発掘調査を実施することとし、これを踏まえて平成3年度には、鷲塚B・C遺跡および大森遺跡の試掘調査が計画された。なお、この3遺跡は平成5年度に発掘調査を実施している（1995『相馬バイパス遺跡発掘調査報告I』）。

平成11年度には、和田・南飯淵地内に所在する6遺跡を対象に試掘調査を実施した。

この中で北迫A遺跡は平安時代の製鉄関連遺跡、柴迫A遺跡が縄文時代から平安時代の集落遺跡、柴迫古墳群が縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡と性格不明の塚、本笑

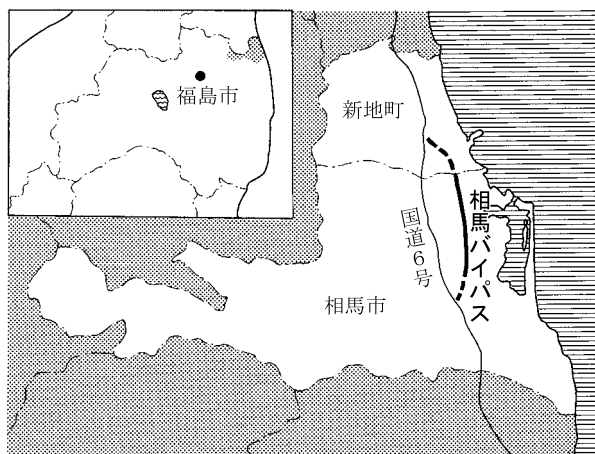


図1 一般国道6号相馬バイパス路線図

第3節 平成12・13年度の調査経過

和田横穴墓群からは墓群を構成する多数の横穴墓の存在が明らかにされた。(稲 村)

第3節 平成12・13年度の調査経過

平成12年度は、事業の進捗と共に和田地内に所在する北迫A遺跡・柴迫A遺跡・柴迫古墳群の発掘調査が計画された。平成11年度の試掘調査において、柴迫A遺跡からは溝跡等や、縄文時代～平安時代にかけての遺物包含層が発見され、柴迫古墳群からは塚と溝跡等の遺構、柴迫A遺跡から出土した遺物とほぼ同じ時代の遺物が発見され、これら2つの遺跡は遺跡の種別に相違はあるが、連続した遺跡の可能性が推定された。保存面積は、柴迫A遺跡2,500㎡、柴迫古墳群2,200㎡である。

調査の事前協議として、福島県教育庁文化課・建設省東北地方建設局（現国土交通省東北地方整備局）磐城国道工事事務所・財団法人福島県文化センター（現財団法人福島県文化振興事業団）の3者が、平成12年5月2日に、調査遺跡の面積、用地買収状況、今後の調査予定について確認し、7月14日には同じく3者で遺跡内の排水路の確保、排土場所、未買収地等、調査に必要な事項及び問題点の解決について確認した。

柴迫A遺跡の調査は、9月18日に開始した。調査を担当する財団法人福島県文化センター（現財

表1 一般国道6号相馬バイパス建設予定地遺跡・遺跡推定地一覧

新地町

(面積単位 ㎡)

No.	遺跡名	所在地	工区内面積	試掘調査		保存面積	本発掘調査年度	報告書名
				調査年度	対象面積			
1	洞山A遺跡	駒ヶ嶺字洞山	2.700	平13年度	800	未定		『福島県内遺跡分布調査報告8』
2	新林塚	駒ヶ嶺字新林	未定	未試掘		未定		
3	山中遺跡	駒ヶ嶺字山中	500	未試掘		未定		5,540㎡を相馬開発関連で発掘調査済み。『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ』
4	山中B遺跡	駒ヶ嶺字山中	14.800	平13年度	8,100	3,350以上	平14年度～	『福島県内遺跡分布調査報告8』
5	ST-B1	駒ヶ嶺字山中	1.000	未試掘		未定		
6	ST-B2	駒ヶ嶺字洞山	5.000	平13年度	1,300	未定		『福島県内遺跡分布調査報告8』

相馬市

No.	遺跡名	所在地	工区内面積	試掘調査		保存面積	本発掘調査年度	報告書名
				調査年度	対象面積			
7	鷺塚B遺跡	新沼字鷺塚	2.100	平3年度	2,100	1,960	平5年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅰ』
8	鷺塚C遺跡	新沼字鷺塚	300	平3年度	300	300	平5年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅰ』
9	大森遺跡	新沼字大森	3.400	平3年度	3,400	3,190	平5年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅰ』
10	北迫A遺跡	和田字北迫	1,900	平11年度	1,900	800	平12年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅱ』
11	北迫B遺跡	和田字北迫	2,300	平11年度	2,300	0		『福島県内遺跡分布調査報告6』
12	柴迫A遺跡	和田字柴迫	4,600	平11年度	4,600	2,500	平12年度	
13	柴迫古墳群	和田字柴迫	2,200	平11年度	2,200	2,200	平12・13年度	
14	本笑和田横穴墓群	本笑字馬場添ほか	4,900	平11・13年度	4,900	750	平13年度	『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ』
15	壇腰遺跡	南飯淵字壇腰	1,950	平11年度	1,950	0		『福島県内遺跡分布調査報告6』
16	大毛内遺跡	大曲字大毛内	9,700	未試掘		未定		
17	SM-B1	馬場野字中谷地	3,100	未試掘		未定		

団法人福島県文化振興事業団)では、2名の調査員を配して調査に当たった。既に8月9日には、北迫A遺跡(2002『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅱ』)の調査を開始しており、当初は2遺跡の調査を同時に展開させることとなった。調査を進める際に、排土場所の確保が大きな課題となることから、調査区内における排土処理が困難になった場合には、建設省東北地方建設局(現国土交通省東北地方整備局)磐城国道工事事務所の設定した場所に排土した土砂を運搬する計画とし、柴迫古墳群の調査時も合わせて、重機による表土剥ぎ作業を3回に分けることとした。

11月8日より、柴迫A遺跡の2回目の重機による表土剥ぎ作業と同時に、柴迫古墳群の第1次調査を開始した。柴迫古墳群の調査対象面積は平成12年度の当初予定2,200㎡であったが、作物の撤去時期のずれ込みから750㎡に変更になり、残りの1,450㎡については平成13年度へ持ち越しとなった。なお、今回の調査において、柴迫A遺跡では弥生時代を主体とする溝跡3条が確認され、柴迫古墳群においては、溝跡に関連している集落跡が検出された。

12月20日には、北迫A遺跡と同時に、柴迫A遺跡・柴迫古墳群のラジコンヘリコプターによる遺跡全景の空中写真撮影を行った。柴迫A遺跡・柴迫古墳群の現地調査終了日は12月22日である。

12月26日には、現地において福島県教育庁文化課・財団法人福島県文化センター(現財団法人福島県文化振興事業団)・建設省東北地方建設局(現国土交通省東北地方整備局)磐城国道工事事務所の各担当者が集まり、調査経緯・成果の説明後、柴迫A遺跡・柴迫古墳群の引渡しを行った。

平成13年度は、昨年度に引き続き柴迫古墳群の第2次調査、及び本笑和田横穴墓群(2002『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ』)の発掘調査が計画された。柴迫A遺跡・柴迫古墳群は一連の遺跡であり、昨年確認されていた弥生時代の集落が今年度の調査区域まで広がっていることが確認された。

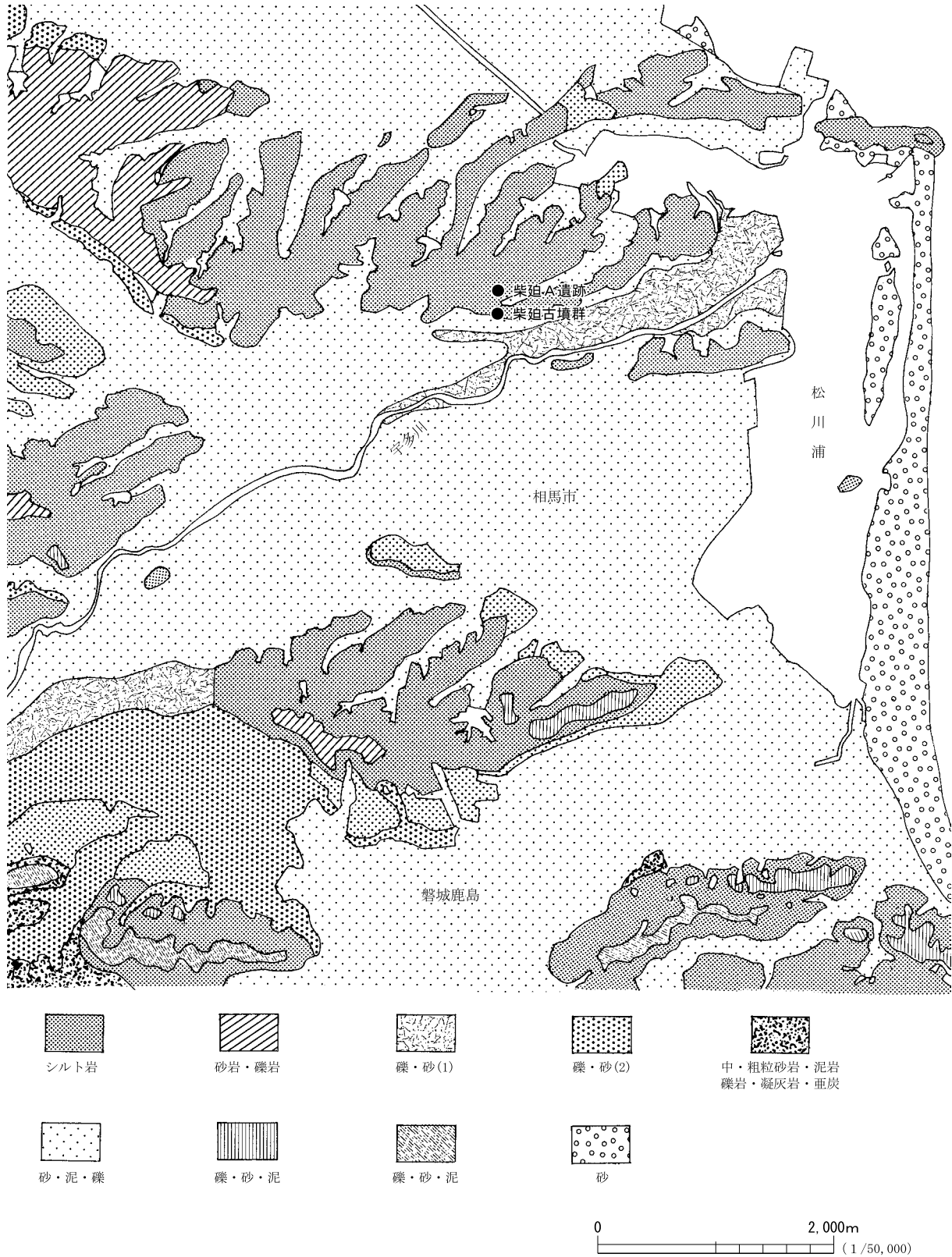
柴迫古墳群の調査は、4月16日に開始した。調査を担当する財団法人福島県文化振興事業団では、1名の調査員を配して調査に当たった。4月23日からは南接する本笑和田横穴墓群の調査も開始し、2遺跡の同時進行で調査を進展させることとなった。7月11日には、本笑和田横穴墓群と同時に、遺跡全景の空中写真撮影を行った。

7月17日には、現地において福島県教育庁文化課・財団法人福島県文化振興事業団・国土交通省東北地方建設局磐城国道工事事務所の各担当者が集まり、調査経過や成果及び引渡し時に状況等を説明し、現地調査が7月19日に終了することを確認した。(稲 村)

第4節 自然環境

福島県は、北海道・岩手県に次ぎ全国で三番目の県土を有する。県土の自然地形から地区割りでは、南北に走る奥羽山脈と阿武隈高地を境として、西から会津地方・中通り地方・浜通り地方の3つに区分されている。一般国道6号相馬バイパスが建設される相馬市及び相馬郡新地町は、福島県浜通り地方の最北端に位置し、北は宮城県との県境に接している。相馬市の面積は197.61km²・人口

第4節 自然環境



この図は『土地分類基本調査』「相馬・中村」
表層地質図(1/50,000)を加筆・修正した

図2 遺跡周辺の地質図

は36,095人（平成12年6月2日現在）、新地町の面積は46.35km²・人口は9,017（平成12年6月2日現在）人を数える。

本地域の地形を概観すると、双葉断層を境に阿武隈高地東縁部に位置する標高500m前後の高原状山地とその東方の浜通り低地帯とに分かれる。阿武隈高地東縁部に位置する標高500m前後の高原状山地は、霊山（標高804.7m）・古霊山（標高783m）・手倉山（標高672m）・天明山（標高488m）などの山々が発達している。次に、浜通り低地帯は丘陵地と沖積低地とに分かれ、丘陵地は浜通り丘陵帯と呼称されている。この浜通り丘陵帯は東西約10km、南北約100kmの規模を持ち、相馬市及び新地町はその北部を占めている。この丘陵地帯は本来1つのものであったが、太平洋を目指して東流する宇田川・小泉川・地藏川・日下石川などの中小の河川によって開析され、ちょうど東西に長い丘陵が南北に並列したような状況が観察され、丘陵間には沖積低地が発達している。相馬市や新地町周辺には北から初野丘陵・尾浜丘陵・馬場野丘陵・磯部丘陵及び新沼低地・宇田川低地とそれぞれ呼称される丘陵や低地が広がっている。

相馬市及び新地町の表層地質は図2のように、阿武隈高地域では中新世以前の団結堆積物・火山性堆積物・深成岩・変成岩、丘陵地域では新第三紀鮮新世の半固結堆積物、低地域では海岸平野堆積物・段丘堆積物・砂州堆積物などの第四紀の未固結堆積物が広く発達している。丘陵地域に発達する半固結堆積物は竜ノ口層と呼ばれ、柴迫A遺跡・柴迫古墳群が所在する尾浜丘陵南辺部では青灰色シルト岩が発達している。この青灰色シルト岩は、片岩としての堅さ及び岩体としての堅さが各々やや柔らかい部類に入り、砂岩や凝灰岩の薄い層を挟んで、厚さは80～140mを測る。この周辺では青灰色シルト岩を基盤に礫・砂からなる第四紀更新世の低位上位段丘堆積物が部分的に観察される。丘陵の土地利用は、宅地と畑である。この丘陵を取り巻く新沼低地や宇田川低地は松川浦統と呼ばれる黒沼土壌で、アシ・ヨシなどの植物遺体が分解されて腐植含量が高く、水田として土地利用されている。

相馬市及び新地町の気候は、この地方が太平洋岸気候区に属し、夏は涼しく冬は暖かい。また、四季を通じて晴天の日が多く、特に冬季には北西の季節風が卓越し乾燥した晴天の日が続く。このことは、しばしば水不足の原因ともなり、数多くの灌漑用のため池が構築されている。しかし、梅雨期において北東風（やませ）が卓越すると、日照不足・低温の日が続き、冬季には本州南岸を東進する低気圧に北東気流が吹き込むことによって降雪の日も何日か観察される。（高橋）

第5節 歴史的環境

相馬市や新地町は、『相馬市史』や『新地町史』の編纂及び『福島県遺跡地図』作成のための表面調査により遺跡台帳が整備され、遺跡の分布状況がある程度把握されている。またこの地域で、相馬地域開発・県営かんがい排水事業相馬第二地区・相馬工業用水道・一般国道6号相馬バイパス・一般国道113号バイパスなどの開発や建設に伴う遺跡分布調査が行われ、発見された遺跡の数

第5節 歴史的環境

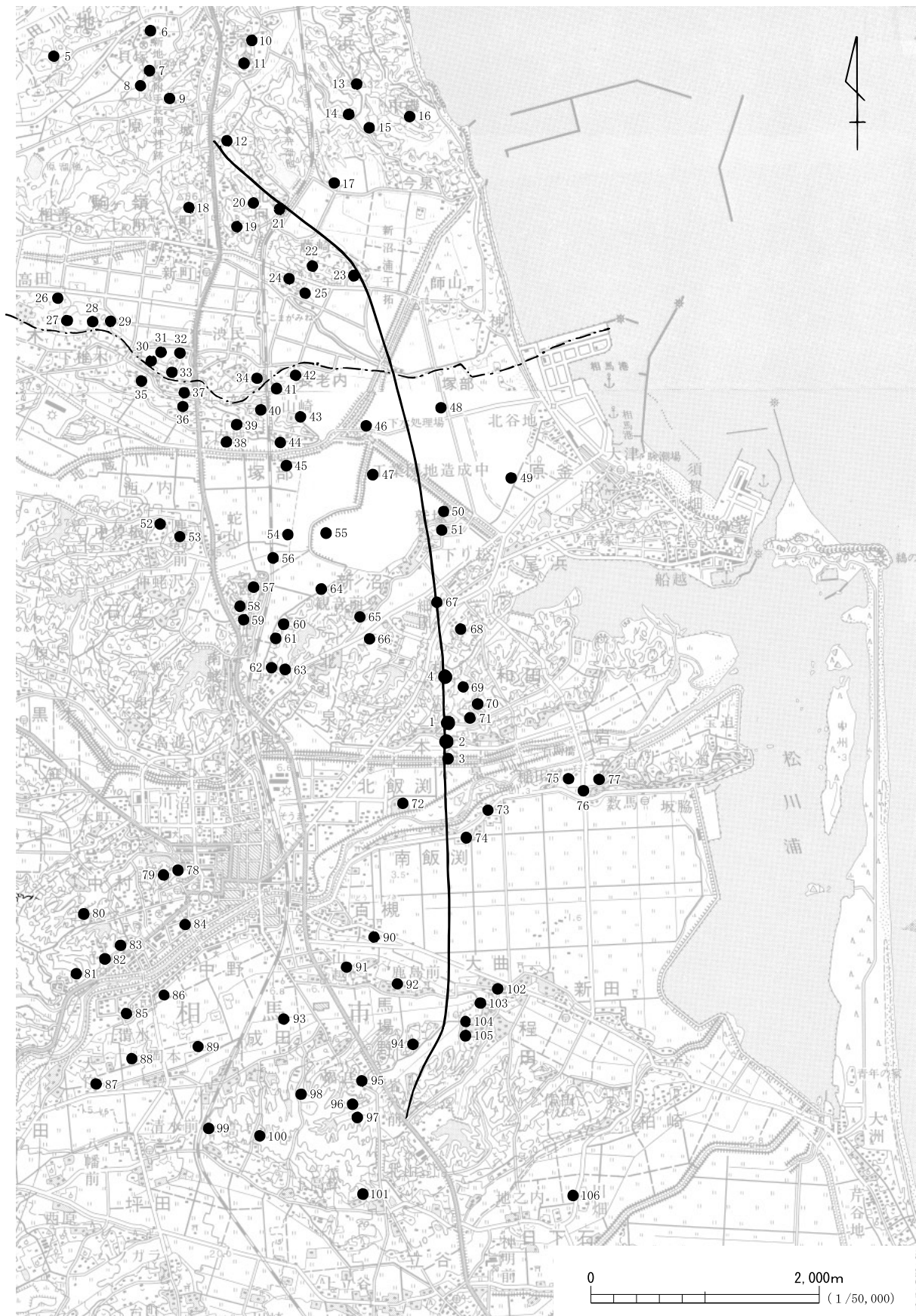


図3 周辺の遺跡分布図

表2 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	時期	番号	遺跡名	所在地	種別	時期
1	柴垣A遺跡	相馬市和田字柴垣	散布地	古墳～平安	54	南両仙B遺跡	新地町石神字南両仙	散布地	中世・近世
2	柴垣古墳群	和田字柴垣・西和田	古墳	古墳	55	古川尻A遺跡	相馬市塚部字古川尻	散布地	古墳
3	北垣A遺跡	和田字北垣	散布地	奈良・平安	56	南両仙A遺跡	石上字南両仙	散布地	奈良・平安
4	本笑和田横穴墓群	本笑字西和田	古墳	古墳	57	作田遺跡	石上字作田	散布地	古墳～平安
5	雁小屋遺跡	新地町杉日字雁小屋	散布地	縄文	58	南白髭A遺跡	石上字南白髭	製鉄跡	奈良・平安
6	貝塚西遺跡	小川字貝塚西	散布地	縄・奈・平	59	南白髭B遺跡	石上字南白髭	散布地	奈良・平安
7	貝塚遺跡	小川字貝塚	散布地	古墳	60	鹿島前B遺跡	新沼字鹿島前	散布地	古墳～平安
8	武井D遺跡	今泉字武井・駒ヶ嶺字向田	散布地	弥生	61	坪ヶ廻A遺跡	新沼字坪ヶ廻	製鉄跡	
9	原製鉄遺跡	駒ヶ嶺字原	製鉄跡		62	坪ヶ廻B遺跡	新沼字坪ヶ廻	散布地	
10	ソリ畑遺跡	駒ヶ嶺字ソリ畑	散布地	弥生	63	坪ヶ廻塚	新沼字坪ヶ廻	塚	中世・近世
11	富穴前遺跡	駒ヶ嶺字富穴前	古墳	古墳	64	鹿島前A遺跡	新沼字鹿島前	散布地	古墳～平安
12	洞山A遺跡	駒ヶ嶺字洞山	散布地	奈良・平安	65	観音前B遺跡	新沼字観音前	散布地	古墳～近世
13	茂庭A遺跡	大戸浜字茂庭	散布地	古墳～平安	66	観音前C遺跡	新沼字観音前	散布地	古墳～平安
14	茂庭B遺跡	大戸浜字茂庭	散布地	奈良・平安	67	細田A横穴群	尾浜細田	その他	
15	茂庭C遺跡	大戸浜字茂庭	散布地	縄文	68	細田B横穴群	尾浜細田	その他	
16	吾安谷地遺跡	大戸浜字吾安谷地	散布地	奈良・平安	69	北垣B遺跡	和田字北垣	散布地	
17	鞘前遺跡	今泉字西田	その他	奈良～近世	70	柴垣C遺跡	和田字柴垣	散布地	
18	駒ヶ嶺城跡	駒ヶ嶺字館	城館跡	中世・近世	71	柴垣B遺跡	和田字柴垣	散布地	
19	金子坂遺跡	駒ヶ嶺字金子坂	製鉄跡	奈良・平安	72	飯淵古館跡	北飯淵字川原崎	城館跡	中世
20	新林塚	駒ヶ嶺字新林	塚	中世・近世	73	松下遺跡	南飯淵字松下・曲淵	散布地	奈・平・近
21	北向屋敷遺跡	駒ヶ嶺字北向	散布地	縄・古～平	74	榎腰遺跡	南飯淵字榎腰	散布地	奈良・平安
22	山中B遺跡	駒ヶ嶺字山中	散布地	縄・古～平	75	一本松古墳群	岩子字一本松	古墳	古墳
23	山中塚	駒ヶ嶺字山中	塚	中世・近世	76	山野貝塚	岩子字山野・一本松	貝塚	古墳～平安
24	藤崎館跡	駒ヶ嶺字藤見	城館跡	中世	77	山野遺跡	岩子字山野	散布地	古墳
25	藤崎横穴墓	駒ヶ嶺字藤見	古墳	古墳	78	相馬中村城跡	中村字北町	城館跡	中世・近世
26	三貫地貝塚	駒ヶ嶺字田丁場	貝塚	縄文	79	北畑A遺跡	玉野字副霊山	散布地	縄文
27	三貫地遺跡	駒ヶ嶺字三貫地西	散布地	縄・古～平	80	圓應寺供養塔	中村字川原町	石造物	中世
28	高田遺跡	駒ヶ嶺字白薄	散布地	縄・古～平	81	西山横穴墓群B	西山字西山	古墳	古墳
29	境付遺跡	駒ヶ嶺字境付	散布地	縄・古～平	82	西山横穴墓群A	西山字西山	古墳	古墳
30	境B遺跡	駒ヶ嶺字境	散布地	縄・奈・平	83	西山横穴墓群C	西山字西山	古墳	古墳
31	十二所B遺跡	駒ヶ嶺字十二所	散布地	奈良・平安	84	和田古館跡	和田字館前	城館跡	中世
32	十二所A遺跡	駒ヶ嶺字十二所	その他		85	熊野堂館跡	中野字堂ノ前	城館跡	中世
33	境A遺跡	駒ヶ嶺字境	散布地	奈良・平安	86	黒木田遺跡	中野字明神前	散布地	古墳～平安
34	中丸東遺跡	駒ヶ嶺字中丸東	散布地	奈良・平安	87	今田古墳群	今田字地蔵前	古墳	古墳
35	北原遺跡	椎木字北原	散布地	縄・奈・平	88	館腰館跡	成田字館腰	城館跡	中世
36	善光寺遺跡	塚部字善光寺	窯跡・散	奈良・平安	89	丸塚古墳	成田字船橋	古墳	古墳
37	聖遺跡	塚部字聖	散布地	奈良・平安	90	篠竹遺跡	百槻字篠竹・赤屋敷	散布地	奈良・平安
38	前田遺跡	塚部字前田	散布地	奈良・平安	91	馬場野横穴墓群	馬場野字岩崎	古墳	古・中・近
39	貴布根前遺跡	塚部字貴布根前	散布地	奈良・平安	92	寺内遺跡	馬場野字寺内	散布地	奈良・平安
40	大森D遺跡	長老内字大森	散布地	奈良・平安	93	藤堂塚遺跡	成田字藤堂塚	散布地	縄文～平安
41	大森B遺跡	長老内字大森	散布地	奈良・平安	94	馬場野館跡	馬場野字中谷地	城館跡	中世
42	大森A遺跡	長老内字大森	散・他	縄・奈・平	95	福迫横穴墓群	馬場野字福迫	古墳	古墳
43	堤下遺跡	長老内字堤下	散布地	奈良・平安	96	山田古墳群	馬場野字山田	古墳	古墳
44	山崎遺跡	塚部字山崎	散布地	奈良・平安	97	山田横穴墓群	馬場野字山田	古墳	古墳
45	五反田遺跡	塚部字五反田	散布地	古墳～平安	98	上薬師堂横穴墓群	馬場野字上薬師堂	古墳	古墳
46	清水前遺跡	塚部字清水前	散布地	奈・平・近	99	高松横穴墓群	坪田字高松	古墳	古墳
47	古川尻B遺跡	塚部字古川尻	散布地	奈・平・近	100	高松古墳群	坪田字高松	古墳	古墳
48	古川尻C遺跡	塚部字古川尻	散布地	縄文	101	北山窯跡	立谷字北山	窯跡	奈良・平安
49	鶯塚遺跡	新沼字広須賀	その他	近世・近代	102	大曲館跡	大曲字天神前	城館跡	中世
50	明神前B遺跡	新沼字明神前	その他	近世	103	御宿古館跡	馬場野字中谷地	城館跡	中世
51	鶯塚B遺跡	新沼字鶯塚	製鉄・散	奈良・平安	104	朝日前貝塚	程田字朝日前	貝塚	縄文
52	石上館跡	石神字御屋敷	城館跡	中世	105	朝日前古墳	程田字朝日前	古墳	古墳
53	藤橋紀伊館跡	石神字城ノ内	城館跡	中世	106	東北田遺跡	日下石字東北田	散布地	奈良・平安

第5節 歴史的環境

は増加の一途を辿っている。『福島県遺跡地図』（1996 福島県教育委員会）では相馬市で184か所、新地町で149か所の遺跡が登録されている。

現在まで相馬市と新地町で確認されている遺跡には、旧石器時代から近世・近代にかけての散布地・集落跡・貝塚・水田跡・製鉄跡・古墳・窯跡・城館跡・製塩跡など多種多様なものがあり、その中には遺跡の全面的な調査が行われた場合も多く、日本史の中では特筆される生産遺跡もある。次に当地域の歴史的な環境について、遺跡分布や調査報告から概要を述べる。

旧石器時代の遺跡には、北原遺跡と三貫地遺跡がある。北原遺跡からはナイフ形石器1点が出土しているが、三貫地遺跡では直径約10mの石器製作跡と考えられるユニットからツール・コア・フレーク・チップが10,000点以上出土し、福島県の後期旧石器時代を代表する遺跡の一つとなっている。

縄文時代になると遺跡の数は増加し、阿武隈高地から延びる丘陵や段丘面にも多く発見されている。相馬地域開発の一環として発掘調査を実施した相馬市段ノ原B・山田B・猪倉B遺跡では前期前半の竪穴住居跡が各々100～200軒検出され、当該期の集落研究に新資料を提供した。中期後半には相馬市馬見塚遺跡や新地町山海道遺跡などで複式炉を有する集落跡が形成されている。後期には国指定史跡で後期後葉の時期となる新地式土器の標識遺跡である新地町新地貝塚、県指定史跡で多数の人骨が検出された新地町三貫地遺跡が代表的な遺跡である。この他に、低地遺跡である相馬市大森A遺跡や同市双子遺跡から、同時代としては珍しい木製品が出土している。大森A遺跡からは後期前葉の褶状木製品と晩期の丸木弓、双子遺跡からは丸木舟が出土している。

弥生時代では、際だった集落は形成されていないが、前期の成田藤堂塚遺跡で再埋葬が検出され、中期後半の桜井式期には新地町武井地区において小規模な集落が形成されている。この時期には小規模な集落が点々と形成されていたと推定されるが、調査例が少ないため不明な点が多い。

古墳時代は、高塚式古墳の造営が盛んになり、水田耕作などの生産活動も本格化してくる。山中遺跡では塩釜式期の土師器が多く出土し、大森A遺跡では水田耕作の痕跡や木製の農具や足跡などが発見されている。水田の痕跡から、当時の水田の規模や水路を中心にした水管理・足跡から当時の人々の身長などが明らかにされた。同時に田下駄や馬鋤などの木製品が出土した。

古墳の中では、相馬市丸塚古墳と高松1号墳・舟橋古墳、福迫横穴群や高松横穴群が特筆される。丸塚古墳からは人物・飾馬・円筒埴輪が多数出土し、高松1号墳からは人物・円筒埴輪の他、金銅製承盤付鏡、金銅製雲珠が出土している。その類似性から関東地方との関係が指摘される。福迫横穴群からは金銅製環頭太刀柄頭、高松横穴群からは線刻画が検出された。この他に横穴式古墳も数多く発見されているが、墓域の割合に対して集落遺跡の発見例は少なく、同時代の集落の様相については不明な点が多い。

飛鳥～奈良時代の代表的な遺跡として黒木田遺跡があげられる。部分的な調査のため、遺跡の性格について不明な点もあるが調査成果から本遺跡は宇多郡の郡家に比定されている。隣接する相馬市善光寺窯跡では焼成した瓦を黒木田遺跡へ供給している。また、この善光寺窯跡の他に、山崎窯

跡などでも須恵器生産が開始されている。

奈良・平安時代になると、新地町武井地区の鉄生産は活況を呈し、製錬から精錬・鍛冶・鍛造・鋳造まで行う一大コンビナートの様相を呈してくる。鉄生産は武井地区にとどまらず大森遺跡や北迫A遺跡など周辺地区にも波及し、相馬市西方の大坪地区の山田A遺跡、猪倉B遺跡でも製錬から鋳造まで行っていたことが判明している。飛鳥～奈良時代から宇多郡の郡家と考えられる黒木田遺跡は、この鉄生産と深い関わりが指摘されている。また、前述した三貫地遺跡などでは当該期の集落が形成されている。その後、10～11世紀にかけては当地域の調査例も少なく不明な点が多い。

中世から近世にかけて活躍した相馬氏は元亨3（1323）年頃、下総国から入部したと伝えられている。残念ながら資料も少なく、相馬市・新地町周辺の鎌倉時代については不明な点が多い。南北朝時代から戦国時代になると戦乱と共に、相馬氏の活躍を裏付ける多くの資料がある。同時に多くの城館が構築されている。南北朝時代には南朝方の霊山城の搦手として熊野堂城跡や黒木城跡があり、戦国時代には相馬氏が築城した駒ヶ嶺城跡などがある。駒ヶ嶺城跡は1589（天正17）年の伊達政宗の侵攻により落城し、藩政期には相馬藩に対する藩境警備の役目を果たしていた。

豊臣秀吉による奥州仕置き以後、相馬氏は宇田・行方・標葉の三郡を安堵され、慶長16（1611）年には小高城から相馬中村城に拠点を移した。その後、相馬氏が居城した環郭式平山城の中村城を中心に城下町が形成された。

また、近世の代表的な生産遺跡として、製塩関連施設がある。本地域では、相馬藩や仙台藩の藩営の産業として製塩が盛んに行われた。本来製塩に適していると考えられている遠浅海岸や干満差の大きな海岸を有していないが、波の穏やかな内海的性格を持つ新沼浦があり、入浜式製塩技法を用いて、専売法が公布される明治時代まで製塩産業が営まれてきた。相馬地域開発に関連して実施した、近世～近代に営まれた製塩関連施設の発掘調査成果が、同時代の塩業研究に果たした功績は多大である。

（高 橋）

第1章 調査経過

第1節 遺跡の位置と地形

柴迫A遺跡・柴迫古墳群は、福島県相馬市大字和田柴迫地内に所在する。JR相馬駅からは、北東方向に約1.8km、県道相馬亙理線から東へ約0.7kmの地点にある。一般国道6号相馬バイパスの建設が予定されている工区内では、ほぼ中央部の南側に位置する。

柴迫A遺跡・柴迫古墳群が所在する和田地区は、浜通り低地帯・尾浜丘陵の南側に位置し、表層地質は新第三紀鮮新世の半固結堆積物である青灰色シルト岩が発達している。表層土壌は、礫部統と呼ばれる黄色土壌であり、腐植含量及び養分含量が少ない。柴迫A遺跡・柴迫古墳群は、この和田地区の南端に位置し、調査前の現況は畑・山林である。柴迫A遺跡の北向きの緩やかな斜面には菜畑が広がっていた。この部分は、畑地造成のために大きく削平・盛土されているため、旧地形をとどめていない。また、柴迫古墳群の調査区内には道跡が南北及び東西方向に走っており、地形は大きく削平されている。現況での遺跡の標高は、標高の高い柴迫古墳群の南西部付近で17m、最も

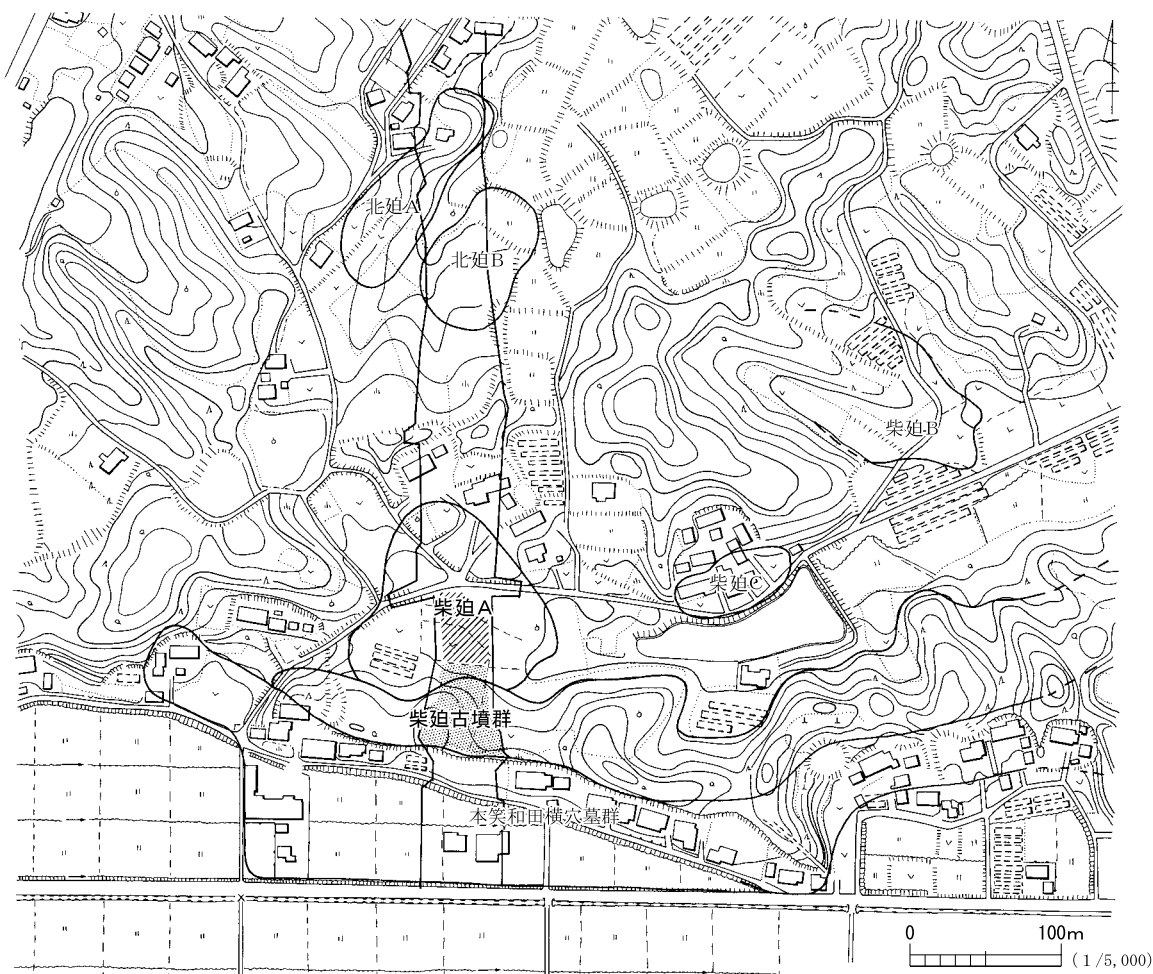


図4 遺跡位置図

低い中央部東端で10mである。周辺の遺跡としては、北側に300m離れた地点に北迫A遺跡(2002『相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅱ』)が、柴迫古墳群の南側に隣接する崖面一帯には平成13年度に本発掘調査を実施した本笑和田横穴墓群が存在する(2002『相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ』)。ともに、一般国道6号相馬バイパスの建設に伴う表面調査で確認された遺跡であり、平成12・13年度に発掘調査されている。(稲村)

第2節 調査経過

柴迫A遺跡・柴迫古墳群は、昭和63年度に福島県教育庁文化課が財団法人福島県文化センター(現福島県文化振興事業団)に委託して実施した表面調査により確認・登録された遺跡である。この結果を受けて平成11年11月4日から12月3日にかけて試掘調査を実施した(2000『福島県内遺跡分布調査報告6』)。試掘調査の結果、柴迫A遺跡では溝跡等の遺構および縄文時代から平安時代にかけての遺物の包含層を確認、また柴迫古墳群では、塚や溝跡等の遺構、弥生土器片や土師器片の遺物が発見され、弥生時代および古代の集落跡であることが判明、要保存面積は、柴迫A遺跡2,500㎡、柴迫古墳群2,200㎡が確定した。この成果を基に、工区内調査対象遺跡面積について開発側に通知するとともに、この件につき両者間で協議の結果、平成12年度以降の調査対象面積とすることに決まった。

調査に先立ち、福島県教育庁文化課・建設省東北地方建設局(現国土交通省東北地方整備局)磐城国道工事事務所・財団法人福島県文化センター(現財団法人福島県文化振興事業団)の三者が、平成12年5月2日に調査遺跡の面積、用地買収状況、今後の調査予定について確認し、7月14日には、同じく三者で遺跡内の排水路の確保、排土場所、未買収地等、調査に必要な事項及び問題点の解決について協議した。

財団法人福島県文化センター(現財団法人福島県文化振興事業団)は、平成12年9月18日から12月22日にかけて柴迫A遺跡および柴迫古墳群の1次調査を、平成13年4月16日から7月19日にかけて柴迫古墳群の2次調査を行った。以下、調査経過について年度ごとに報告する。

平成12年度

柴迫A遺跡の調査は、平成12年度一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査により9月18日に開始した。当初は、調査員1名にて重機による表土剥ぎを行った。表土剥ぎは排土場所の確保の関係から3回に分けることにし、まず北側の市道部分から一段下がる低位部まで行うことにした。耕作土の下に暗渠跡や廃材の入った盛土層が0.5～1.5m程堆積し、狭い範囲ではあったが時間を要し、1回目の表土剥ぎは9月22日に終了した。この段階で、西から東に伸びる幅4m程の溝跡(1号溝跡)を検出し、弥生時代の石庖丁、七世紀の須恵器甕などが出土した。

9月27日から調査員2名の体制で調査区北半の調査を開始した。1号溝跡の幅が広く、深さが検出面から90～150cmを測り、土量が当初の見込みより増えることになった。そのため、ベルトコンベヤーを導入し作業効率の向上を図ったが、溝跡から遺物が多量に出土したことから、調査区北半

第2節 調査経過

の調査終了は当初の予定より遅れ、11月7日となった。調査の結果、溝跡堆積土のℓ4から七世紀代の遺物が、最下層のℓ7から弥生時代中期の遺物が大量に出土した。しかし、1号溝跡は南側にさらに伸びるため、その全容を把握する事はできなかった。

2回目の表土剥ぎは、11月8日から17日までの8日間、南側に隣接する柴迫古墳群の調査区と合わせて行った。調査区南端の斜面から北に向けて行い、1回目の表土剥ぎの排土場所となった中央の平坦部に排土を集めた。かなりの土量となったため、調査区北半の調査で終了している1号溝跡の西側を重機で埋め、排土をダンプカーでバイパス建設予定地へ搬出することにした。表土剥ぎの結果、前回検出した溝跡と平行に走る形で、幅5m程の大きな溝（2号溝跡）を検出した。

なお、柴迫古墳群では、当初予定面積は2,200㎡であったが、用地内における作物の撤去時期のずれ込み等の問題で750㎡に変更になり、残りの1,450㎡については次年度へ調査を持ち越すこととなった。

11月20日から柴迫A遺跡1号溝跡の南側を中心に調査を進めた。11月28日には柴迫古墳群の検出遺構の精査を開始し、弥生時代の竪穴住居跡2棟、土坑3基について行った。12月に入り、検出した2号溝跡は、当初予想していた50cm程度の深さよりさらに60～80cm程下がることが判明した。下層より遺物が多量に出土し、堆積土の除去作業に迫られた。ベルトコンベアーの追加導入で作業能率の向上を目指したが、調査終了の見込みが立たないため、3回目の表土剥ぎの際に、溝跡の堆積土を遺物出土面まで重機で除去することにした。12月5日から8日までの4日間、3回目の表土剥ぎを行った。柴迫A遺跡の溝跡の堆積土の除去作業と中央平坦部付近の表土剥ぎを行い、ダンプカーで排土を前回と同様に搬出した。これによって、調査区の全容がほぼ明らかになった。調査の結果、2号溝跡と分流するもう1本の溝跡（3号溝跡）が入っていること、2号溝跡は1号溝跡と調査区東側で合流し、その幅は17mにも及ぶことが判明した。

12月15日にはセスナ機による遺跡周辺の地形を含めた航空写真を、20日にはラジコンヘリコプターによる柴迫A遺跡・柴迫古墳群調査区的全景写真を撮影し、12月22日には、柴迫A遺跡・柴迫古墳群の全ての調査が終了した。作業の延べ日数は58日であり、溝跡3条、土坑2基、木炭窯1基を確認した。出土した遺物は、弥生土器片、石器、古墳時代の土師器片などである。柴迫古墳群の調査は、11月6日から始まり、12月22日をもって終了した。作業の延べ日数は29日である。調査の結果、本遺跡は弥生時代中期を主体とした集落跡であることが明らかとなった。検出した遺構は、竪穴住居跡2棟、土坑3基であり、この他、道跡も確認された。出土した遺物は、弥生土器片や石器である。

平成13年度

柴迫古墳群の2次調査は、前年度の未調査範囲及び拡張部分を対象に、平成13年4月16日から開始した。調査は、調査員2名、作業員20数名の体制で、4月16日よりプレハブ・トイレ等の設置、17日より作業員の雇用を開始し、柴迫古墳群の2次調査を進めた。

4月17日から19日にかけて重機による表土剥ぎ作業を行った。調査区内のほとんどは斜面であるため、重機による作業が困難な急傾斜地については人力で掘り下げた。斜面部の調査における土砂



図5 柴迫A遺跡・柴迫古墳群調査範囲図

第3節 調査の方法

の移動は、斜面に2枚の足場板を「ハ」の字状に組み合わせた樋を設置し、この樋上に土砂を積んだ手箕を流す方法とした。斜面の高低差を利用して土砂を移動することにより、急斜面での作業の安全と効率化を図った。

連休明けの5月8日からは、隣接する本笑和田横穴墓群の調査を開始し、同時進行で調査を進展させることとなった。7月11日には、本笑和田横穴墓群とともに遺跡の全景写真撮影を行った。7月13日には検出遺構の精査と並行し地形測量を実施した。7月19日には、両遺跡の器材の片づけ・プレハブの撤去等を行い、遺跡内の調査を全て終了した。

以上のように柴迫古墳群の2次調査は、4月16日～7月19日の期間実施した。雨天日等の作業中止日を除く作業の延べ日数は58日である。調査の結果、本遺跡は弥生時代中期を主体とした集落跡と近世期の土坑墓群から成ることが判明した。今回検出した遺構は、塚1基、竪穴住居跡2棟、土坑12基、焼土遺構2基であり、この他、階段状遺構や道跡も確認された。

出土した遺物は、弥生土器片や石器が主であり、この他、陶磁器・銅銭も若干出土した。今回の調査区は、前回までの調査成果も含め、弥生時代中期の集落跡を主体とすることが再確認され、近世の土坑墓も確認された。

(山田・稲村)

第3節 調査の方法

一般国道6号相馬バイパス関連遺跡の調査においては、遺跡の位置関係を正確に把握するため、各遺跡に国土座標を基準にした4m四方の方眼を設定して調査を行った。この方眼をグリッドと呼称し、基点の座標値は $X = 201.100$ 、 $Y = 97.940$ で、これをA1グリッドの北西隅とした。平成12・13年度に調査した柴迫A遺跡・柴迫古墳群・本笑和田横穴墓群は上記の座標を基準として、グリッド名を付している。図6に柴迫A遺跡・柴迫古墳群のグリッド配置を示した。

グリッドの番号は、東西方向に西から東へA・B・C…というように付したアルファベット大文字と、南北方向に北から南へ1・2・3…というように付した算用数字との組み合わせでグリッド名を表示し、S14グリッド、Z21グリッドなど呼称した。なお、調査区のZグリッドの東側に広がる部分については、東へ順次ア・イ・ウ…というカタカナの五十音表記を用いグリッド名を付した。

実際の調査では、北西端部のグリッド番号を使用して、遺構の位置や遺物の出土場所を把握した。また、遺構の測量の際には、4mの方眼をさらに1m区画に分割し水系番号を設定した。水系番号は、各グリッドの北西端部を原点として、ここから東側と南側に行くごとにE1～3、S1～3とし、それぞれのグリッド番号と組み合わせで使用した。例えば、U14-E2・S1は、U14グリッドの杭の位置から東に2m、南に1m離れた場所を示している。

堆積土については、遺構外堆積土をLとローマ数字の組み合わせによりL I・L II等とし、遺構内をℓと算用数字の組み合わせによりℓ1・ℓ2等と表記した。堆積土がさらに細分される場合については、遺構内外とも小文字のアルファベットを付加して使用した。遺物は、基本的に遺構名あるいはグリッド層位を明記して取り上げた。

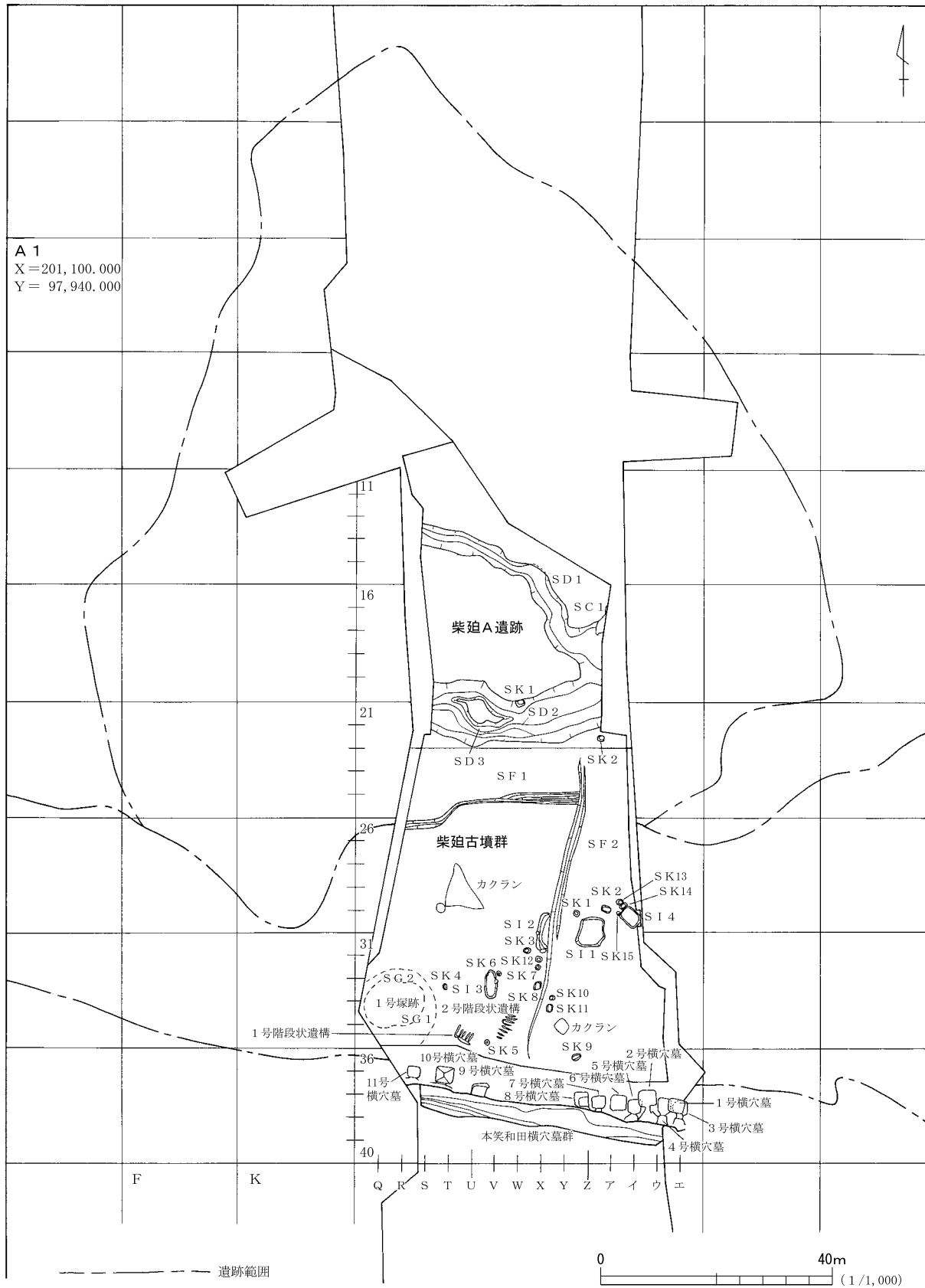


図6 柴迫A遺跡・柴迫古墳群グリッド配置図

第3節 調査の方法

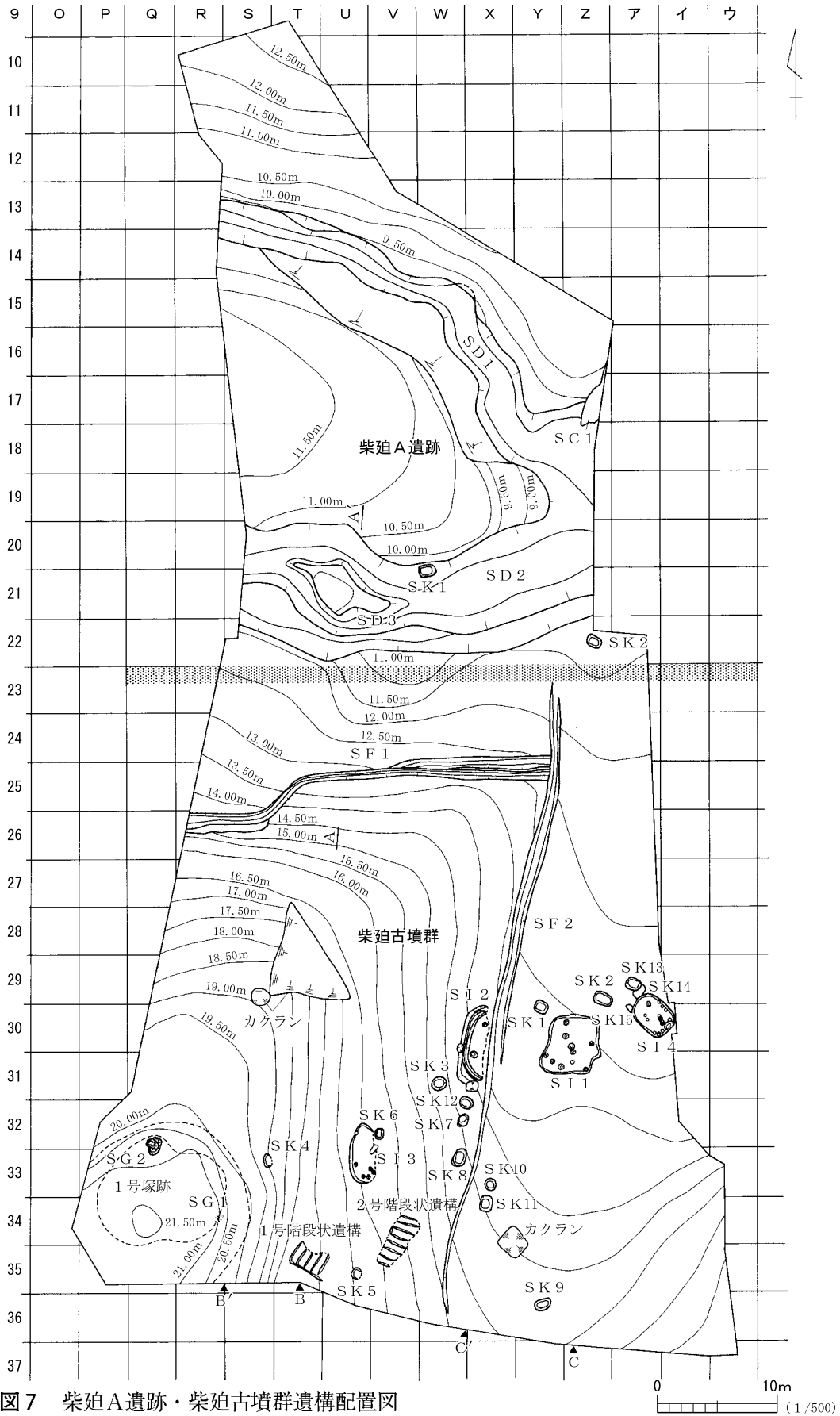


図7 柴迫A遺跡・柴迫古墳群遺構配置図

遺構の記録は、溝跡や土坑は1/20、遺物出土状況は1/10の縮尺で実測した。また、遺跡基底面の地形図は1/100の縮尺で測量した。この他、遺構検出時においても1/100の縮尺の簡易な地形図を作成し、遺構の位置と番号、遺構外堆積土範囲などを記録している。

記録写真は、検出状況・土層堆積状況・遺物出土状況・完掘全景等について、35mmモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを用い、同一被写体を同一方向・同一コマ数で撮影した。さらに、溝跡や遺物出土状況の全体写真や遺跡全景などには、必要に応じて6×4.5cmフィルムでの撮影も行っている。この他、平成12年度の調査では、セスナ機とラジコンヘリコプターによる遺跡全体の空中写真撮影も行っている。

(山 田)

第4節 基本土層

図8に示した柴迫A遺跡・柴迫古墳群の基本土層について記述する。柴迫A遺跡・柴迫古墳群は互いに隣接する遺跡であり、調査区も連続することから、柴迫A遺跡の2号溝跡南辺付近の23グリッドラインを境として区分することにした。柴迫A遺跡・柴迫古墳群では大きくL I～L Vまでの5層の基本土層が確認された。L Iについては、土質や色調の違いにより更に3細分され、アルファベットの小文字a・b・cを付けて表記した。以下、説明を加える。

L Iは大きく3層に分層した。L I aにはぶい黄褐色(10Y R4/3)を呈する盛土及び耕作土で、調査区内において普遍的に認められる。平均して20～50cmの厚さを有し、黄褐色土及び暗褐色土をブロック状に含む。やや堅く締まった砂質土である。L I bは灰黄褐色(10Y R4/2)を呈する盛土層で、平均して10～60cmの厚さを有し、暗褐色土をブロック状に含む。盛土時にL II層を削平している部分も見受けられる。L I cは暗褐色(10Y R3/3)を呈する盛土層で、調査区の標高の低い場所(溝跡付近)に部分的に堆積している。平均して12～30cmの厚さを有し、黄褐色土・炭化物を含む。L I bより明るく、土質も堅く締まっている。

L IIは黒褐色(10Y R3/2)を呈する盛土以前の旧表土層で、調査区内において普遍的に認められるが、柴迫古墳群の丘陵裾部において、一部後世の耕作及び盛土時に削平されている。層厚は15～30cmを測り、層中には礫を含まない。

L IIIは黒褐色(10Y R2/3)を呈し、調査区内において普遍的に堆積している。平均して10～50cmの厚さを有し、砂質であるが全体的に堅く締まっている。基盤層であるL IVの表層が流出し、再堆積したものと思われる。特に柴迫古墳群の丘陵裾付近においては、丘陵斜面よりも厚く堆積している。層中には直径3～5cm程度の礫が含まれる。

L IVは黄褐色(10Y R4/6)を呈し、柴迫A遺跡・柴迫古墳群の基盤層となる。粘性があり、堅く締まった黄褐色土層が調査区全体に広がっているが、柴迫古墳群の北側斜面の柴迫A遺跡との境界付近では一部欠層する。本遺跡で確認された遺構は、ほぼL IV上面で検出されている。

L Vは、柴迫A遺跡・柴迫古墳群の立地する丘陵の基底層に当たる青灰色のシルト質岩盤である。柴迫古墳群の丘陵部の一部においては、露出している箇所が見受けられる。

(稲 村)

第4節 基本土層

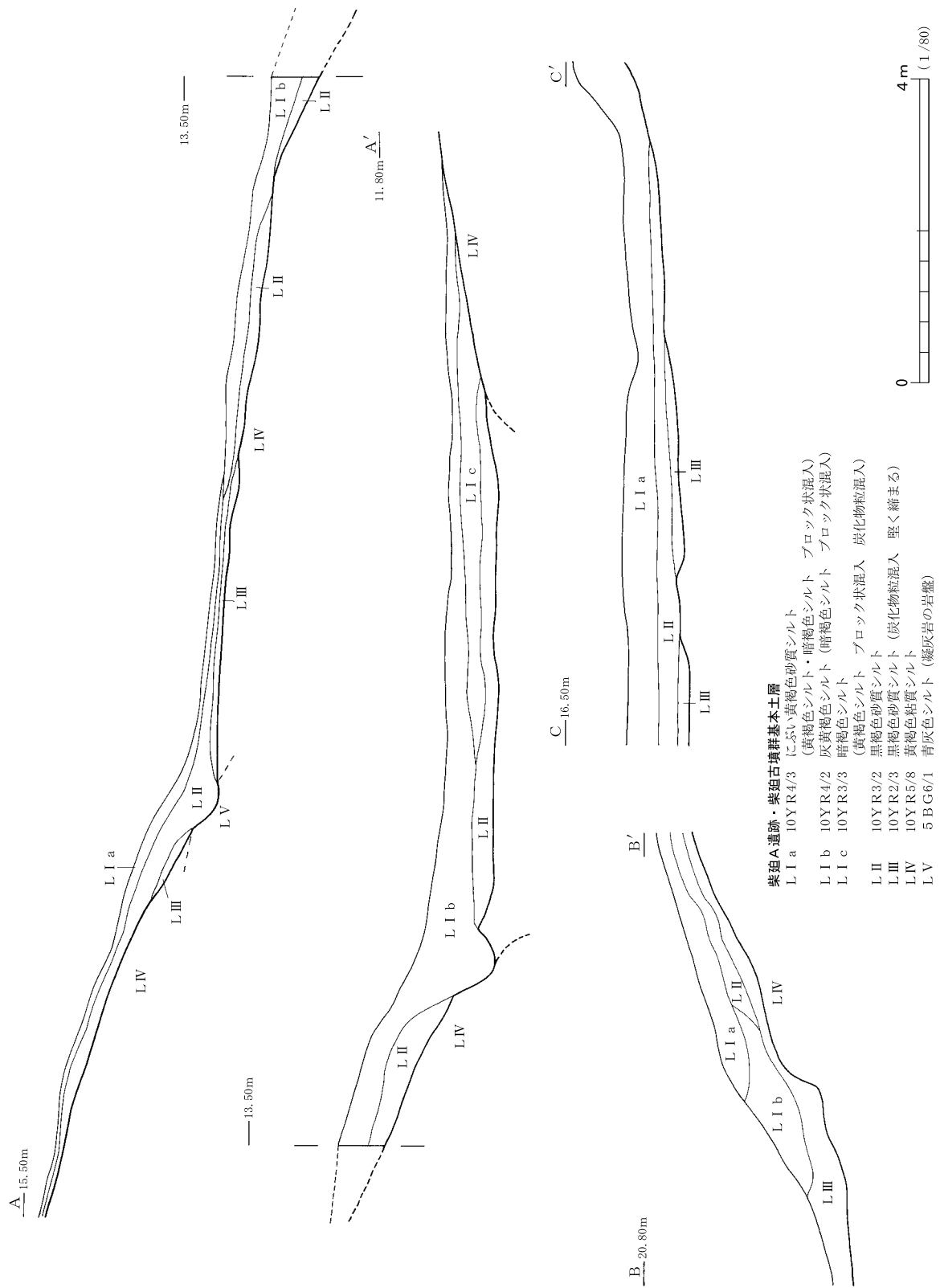


図8 基本土層図

第2章 柴迫A遺跡の遺構と遺物

柴迫A遺跡からは、溝跡3条・土坑2基・木炭窯1基が検出された。これらの遺構の分布を図7に示した。また、今回の調査において、南接する柴迫古墳群と調査区が連続することから、2号溝跡の南辺付近に当たる23グリッドラインを境にして、本遺跡と柴迫古墳群とを区分することにした。

1号溝跡と2号溝跡は、調査区を西から東に向けて横断し、東側においてその距離を徐々に縮めることから、調査区の東方で合流すると思われる。3号溝跡は2号溝跡と西側で分流するが中央付近で再び合流している。溝跡の幅は広く、合わせて調査区面積の1/3以上を占める。遺物は、1号溝跡において多く出土し、検出面から20～30cm下がったℓ4から7世紀代栗圀式期の土師器片が、90～130cm下がった最下層のℓ7から弥生時代中期の土器片・石器がまとまって出土した。2号溝跡では、古墳時代の遺物はほとんど出土せず、東端の1号溝跡との合流付近から弥生時代の土器片・石器が多数出土している。

1号土坑は2号溝跡内の中央部北側に位置し、溝跡上端からの落ち際付近で検出された。2号土坑は調査区南東付近から検出されている。ともに土坑から遺物は出土せず、検出面や遺構内堆積土、多量の炭化物粒・焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、古代のものと推測している。

木炭窯は調査区の北東隅付近に位置し、1号溝跡の堆積後に溝跡上場の落ち際斜面を利用して構築されている。木炭窯の全体形は焼成室と作業場からなる。精査ができたのは調査区内にかかる作業場の西側一部であり、その他は調査区外に延びることから路線工区内にかかる部分においては検出するに止まった。

(稲村)

第1節 溝跡

1号溝跡 SD1

遺構 (図9・10 写真3～6)

本遺構はR13・14, S13・14, T13・14, U13～15, V14・15, W15・16, X15～18, Y17～19, Z17～19グリッドに位置し、北西から南東に向かう緩やかな斜面上に立地する。遺構検出面はLIV上面である。後述する2号溝跡とはほぼ併行するが、東側になるにつれてその間隔を徐々に縮める様相を呈し、調査区東端付近で合流するものと思われる。本溝跡は、調査区東側において1号木炭窯跡と重複している。遺構の切り合い関係は本溝跡の方が古い。

遺構内堆積土は7層に分層される。ℓ1からℓ7まで炭化物を微量に含み、ℓ2からℓ5までFP(榛名二ツ岳伊香保テフラ)を含む。特にℓ4には軽石が多く含まれており、分析の結果、6世

第1節 溝跡

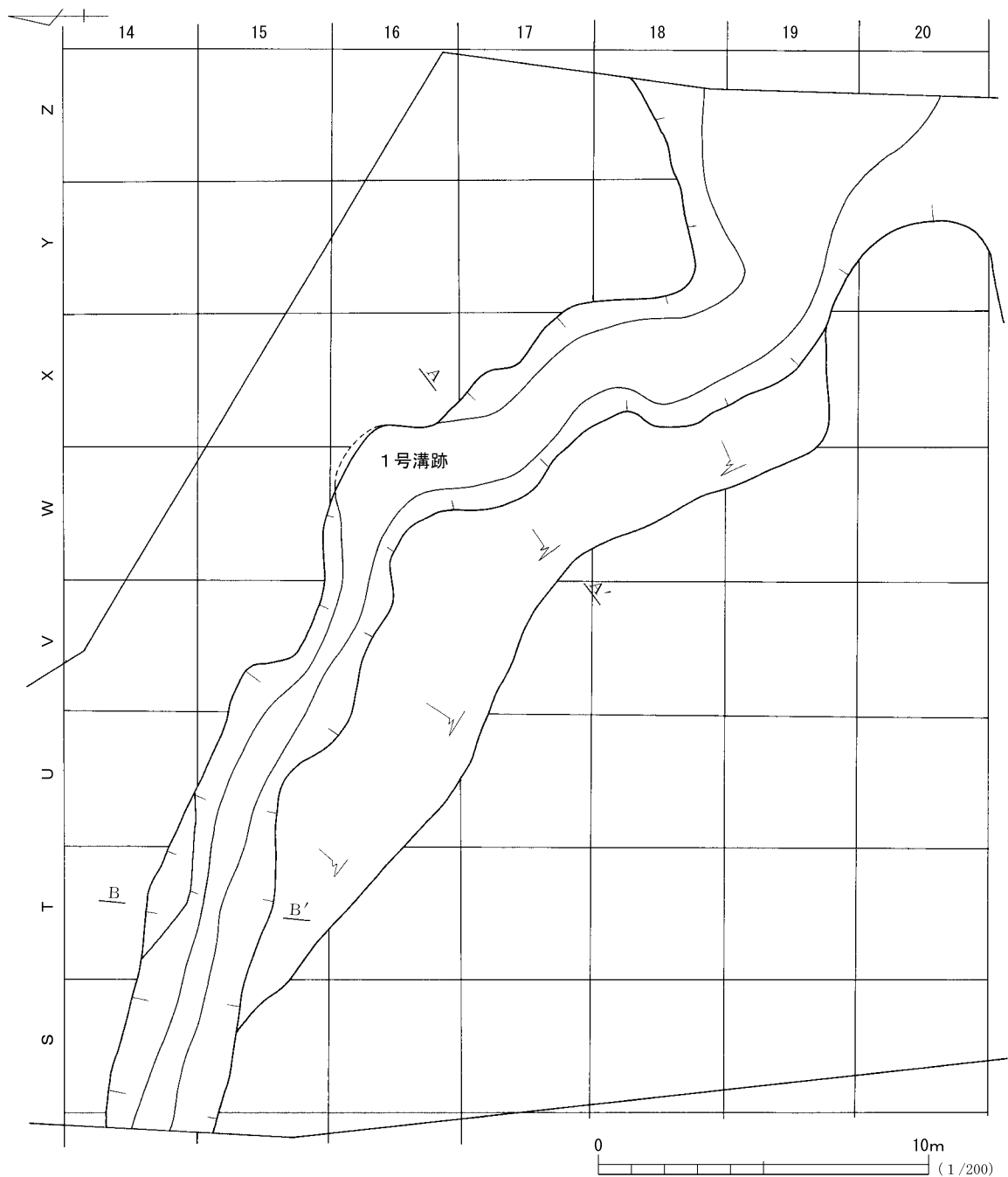


図9 1号溝跡

紀中葉にF P（榛名ニッ岳伊香保テフラ）が降下堆積したものがそのまま残ったものである可能性が高いとされる。よって、 $\ell 2 \cdot 3$ および $\ell 5$ には、降下堆積後にF P（榛名ニッ岳伊香保テフラ）が拡散あるいは再堆積したものが含まれると考えられる。溝跡堆積土は、粘質土と砂質土が交互に堆積し、流水による自然堆積と考えられる。しかし、 $\ell 5$ の堆積状況は異なり、炭化物を微量に混入する褐灰色砂質シルトであり、若干褐色シルトを混入する。また、 $\ell 6$ を掘り込んでいることから、性状より人為堆積の様相を呈す。遺物は $\ell 1 \sim 4$ から7世紀の土師器片が多数出土し、 $\ell 6 \cdot \ell 7$ から弥生土器中期の土器・石器がまとまって出土している。以上から、 $\ell 5$ は弥生時代から7世

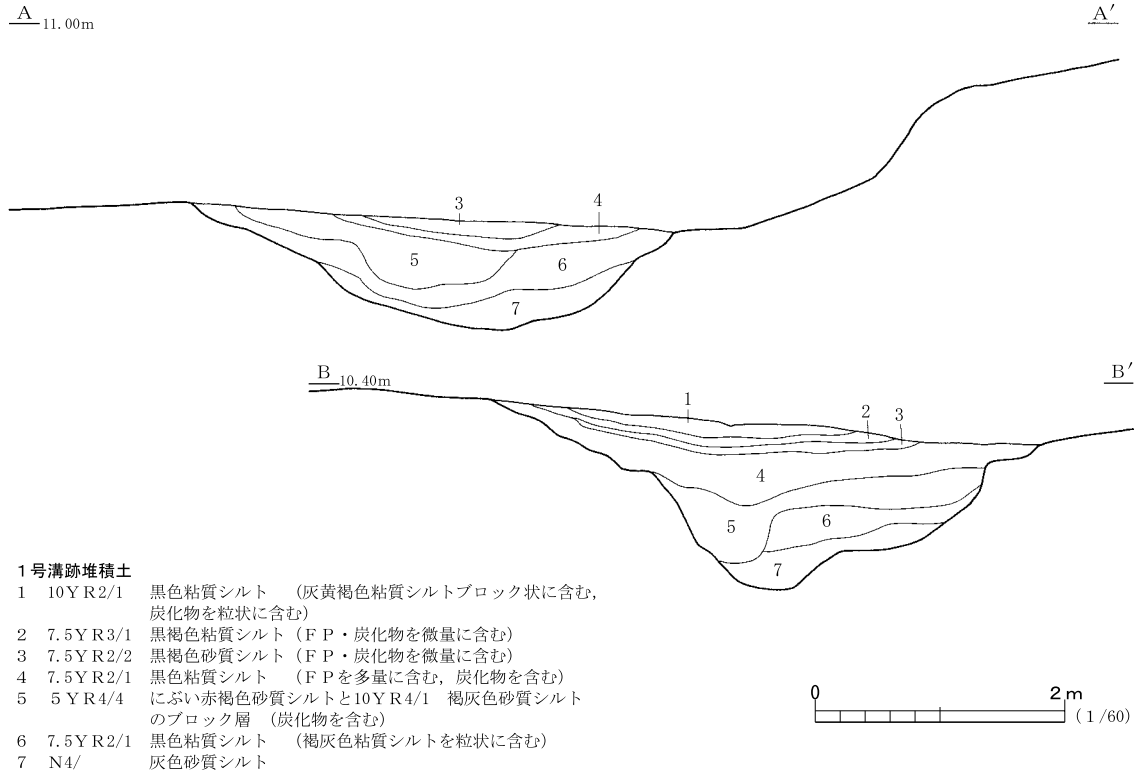


図10 1号溝跡断面図

紀の間に人為的に掘り込まれ、堆積したものと考えられる。

本遺構は、北西から南東へ地形に沿うように蛇行しながら走る。本遺構の東西両端はさらに調査区外に延びているため、全体の規模は不明である。調査区内では、全長40m、開口部幅1.8~4.0m、検出面からの深さは最大1.5mを測る。Z17・18グリッド付近が広がっているのは、2号溝跡と合流する地点で水の溜まり場になっていたためと推定される。底面はほぼ平坦で南東に向かって緩やかに傾斜しており、調査区内での底面の比高は1.4mである。側面は西側上流、東側下流とも緩やかに立ち上がるが、W15・X15付近の蛇行している箇所の上り上がりは比較的急であり、一部オーバーハングしている箇所も見られる。

遺物 (図11~19・24~27 写真11~23)

溝の堆積土中より、縄文土器片10点・弥生土器片2,423点・石器101点・土師器片2,008点・須恵器片4点・木製品1点が出土した。全体的に土器片は摩滅が激しい。以下、資料に沿って記述する。

縄文土器 (図11 写真11)

縄文土器は、本溝内堆積土より若干出土している。その内の3点について図示した。すべてℓ7からの出土である。土器は全体的に摩滅が激しい。これは、流れによって表面が摩滅した結果だと思われる。11図1・2は深鉢型土器の破片である。1は口縁部資料、2は胴部資料である。いずれも全面に縄文が施され、1には原体を横位回転、2には原体を斜位回転させ施文している。

同図3は、浅鉢型土器の口縁部から胴部にかけて破片から復元図示した。推定口径21.0cm・遺存高4.7cmである。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。

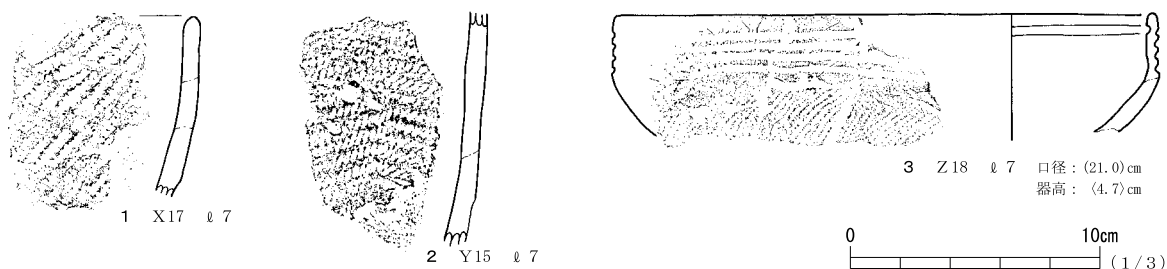


図11 1号溝跡出土縄文土器

弥生土器 (図12~19 写真12~16)

弥生土器は、本溝内堆積土から底面に至るまで、多量に出土している。その総数は2,423点である。この内249点について図示した。堆積土ごとの特徴をいえば、l7およびl6は弥生時代中期の堆積土であり、遺物は極めて一括性の高い出土状況を示している。l4~1においては土師器・須恵器の混在する出土であり、これは、後世の再堆積の結果であることから編年的な出土状況は見出せない。器種には、壺・甕・鉢等が確認された。ここでは各層位ごとに出土した弥生土器について、資料に沿って簡単に記述したい。

l7出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は1,245点である。弥生土器のほとんどは摩滅が激しく、図示できたものは171点にすぎない (図12~19)。土器は全体的に摩滅が激しい。これは、砂粒を含む水の流れの影響によるものと思われる。器種には、壺・甕・鉢等が確認された。

壺は、器形の全容の判別可能な遺物は出土しなかったが、各部の破片の組み合わせより短頸壺となるものが多い傾向が認められる。

12図1は大型の細口壺であり、口縁部は短頸である。頸部はほぼ直立し、口縁部は弱く外反する。口径15.8cm、遺存高8.5cmを測る。外面にはナデ調整が施される。同図2は中型の細口壺であり、口縁部は短頸である。頸部は内湾し、口縁部は強く外反する形態である。口径11.0cm、遺存高4.3cmを測る。外面にはナデ調整が観察されるが、口縁部上端及び口唇部には縄文が施されている。同図3は細口壺の頸部付近の資料である。頸部は内湾しているが、口縁部は徐々に外反すると思われる。外面にはナデ調整が施され、内面には粘土紐の積み上げ痕が観察される。

同図4~8は壺の頸部~口縁部にかけての資料である。口頸部形態は様々であり、口頸部がほぼ直立するもの(7)、頸部は直立し口縁部が弱く外反するもの(4・6・8)、頸部は直立し口縁部が強く外反するもの(5)が観察できる。8は口縁部の一部が欠損している。口頸部は全体的にナデ調整が施されている。6の口唇部には縄文が施され、6の頸部と胴部の境には1条の横走沈線が巡る。

同図9~15は壺の胴部資料である。9は外面が研磨されており、内面には粘土紐の積み上げ痕が観察される。10は横走沈線による区画が見られ、沈線間には縄文が施される。内面は黒色を呈し、丁寧に研磨されている。11は横走沈線が施されたものである。無文地に施した沈線下に、単節縄文が施されている。12は胴部全体に捩り糸文が施される胴上部の資料である。13・14・15は施文原体や胎土、色調が酷似していることから同一資料と判断した。胴上部には沈線手法による四角文が施

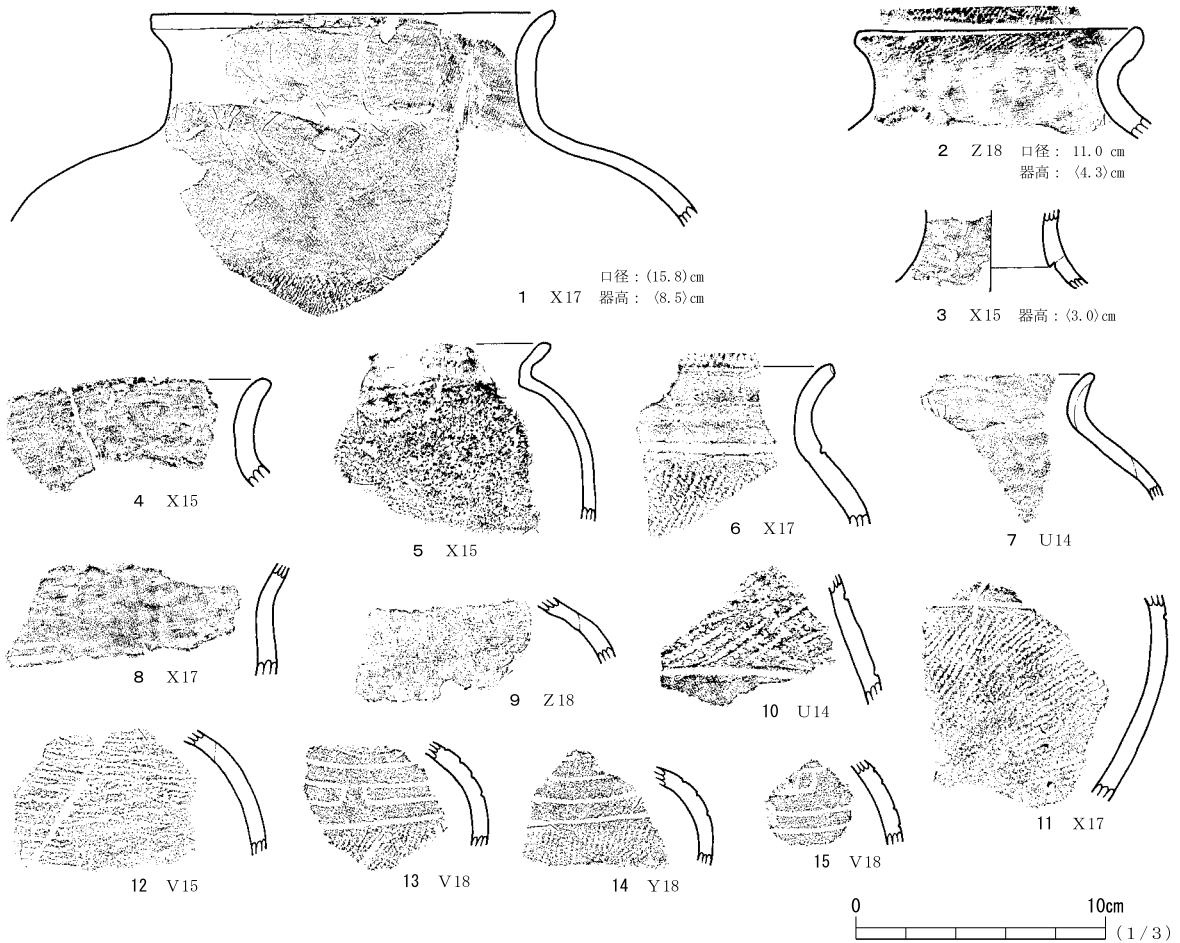


図12 1号溝跡の7出土弥生土器(1)

され、肩部が強く内湾する形態である。

13図1は胴部上位と口縁部が欠損している小型の甕である。底径10.0cm、遺存高14.9cmである。器形は底部から胴上部にかけて内湾気味に立ち上がる。胴部外面には単節縄文が施される。底面には木葉痕が観察できる。同図2は甕の胴部資料と判断した。外傾しながら直線的に立ち上がる器形であると推定される。遺存高15.9cmを測る。外面は摩滅が著しいが、横方向の単節縄文が所々で観察される。同図3は胴部上位と口縁部が欠損している大型の甕または壺の資料である。底径11.2cm、遺存高26.6cmを測る。器形は底部から胴下部にかけて外反気味に立ち上がり、最大径が胴上部にあると推定される。胴部は横方向の単節縄文が施され、底面には木葉痕が観察できる。色調は内面が灰白色、外面が黄灰色を呈す。非常に硬質で、焼成は良好である。

甕は最も出土量が多い。胴部最大径の位置は胴上部にある。以下、資料に沿って記述する。

14図1は、口径22.5cm、底径11.0cm、器高25.9cmを測り、全体の75%が遺存する良好な甕の資料である。器形は底部から胴部にかけてほぼ外傾気味に立ち上がり、最大径が胴上部にあり、胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短く、外反する形態である。口縁部は横方向にナデが施される。胴部は摩滅が著しいが、横方向の単節縄文が施される。色調は内面が浅黄色、外面がにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。同図2は甕の口縁部から胴上部にかけて、破片から復元図

第1節 溝跡

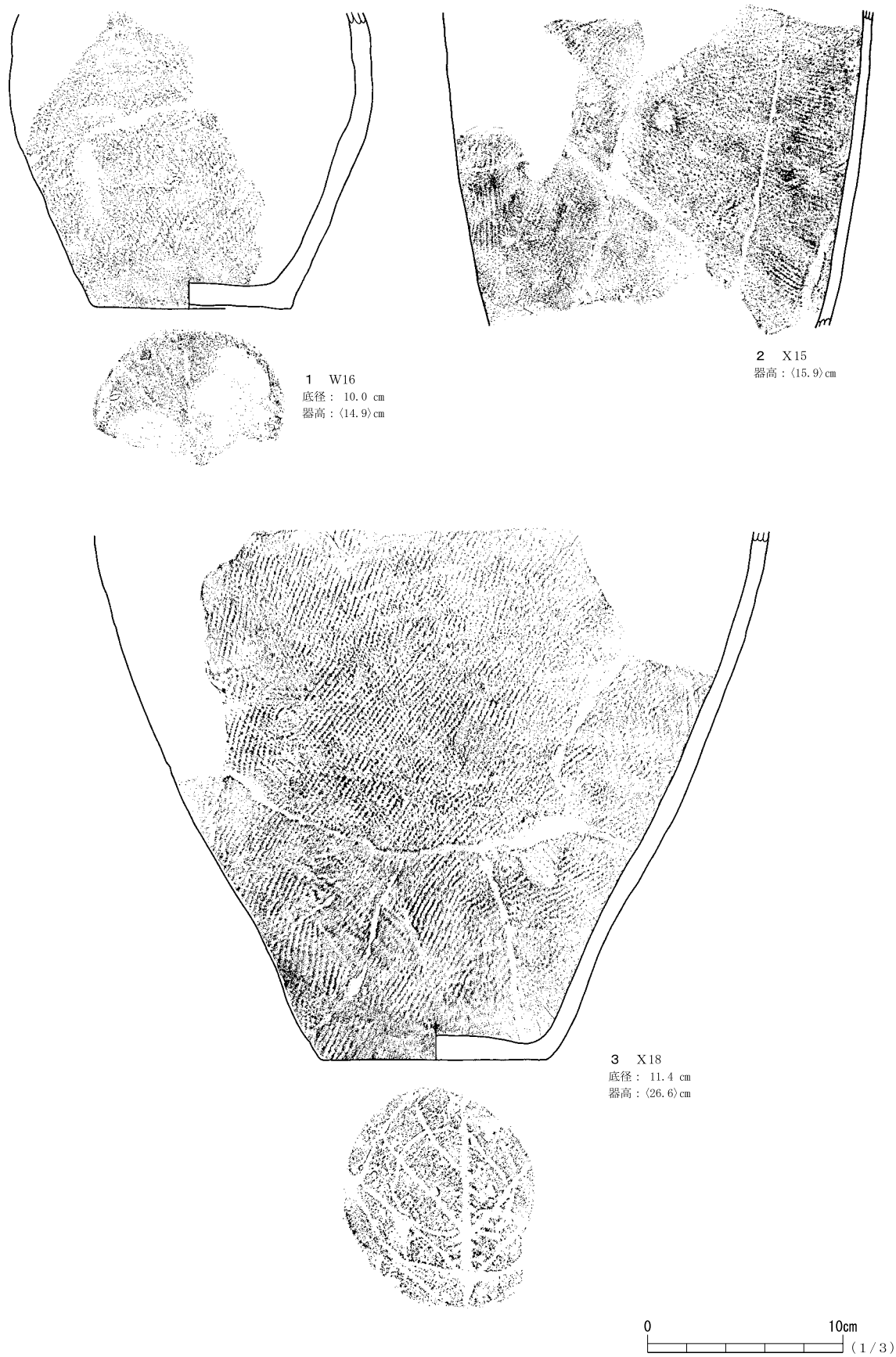


图13 1号沟迹 7 出土弥生土器(2)

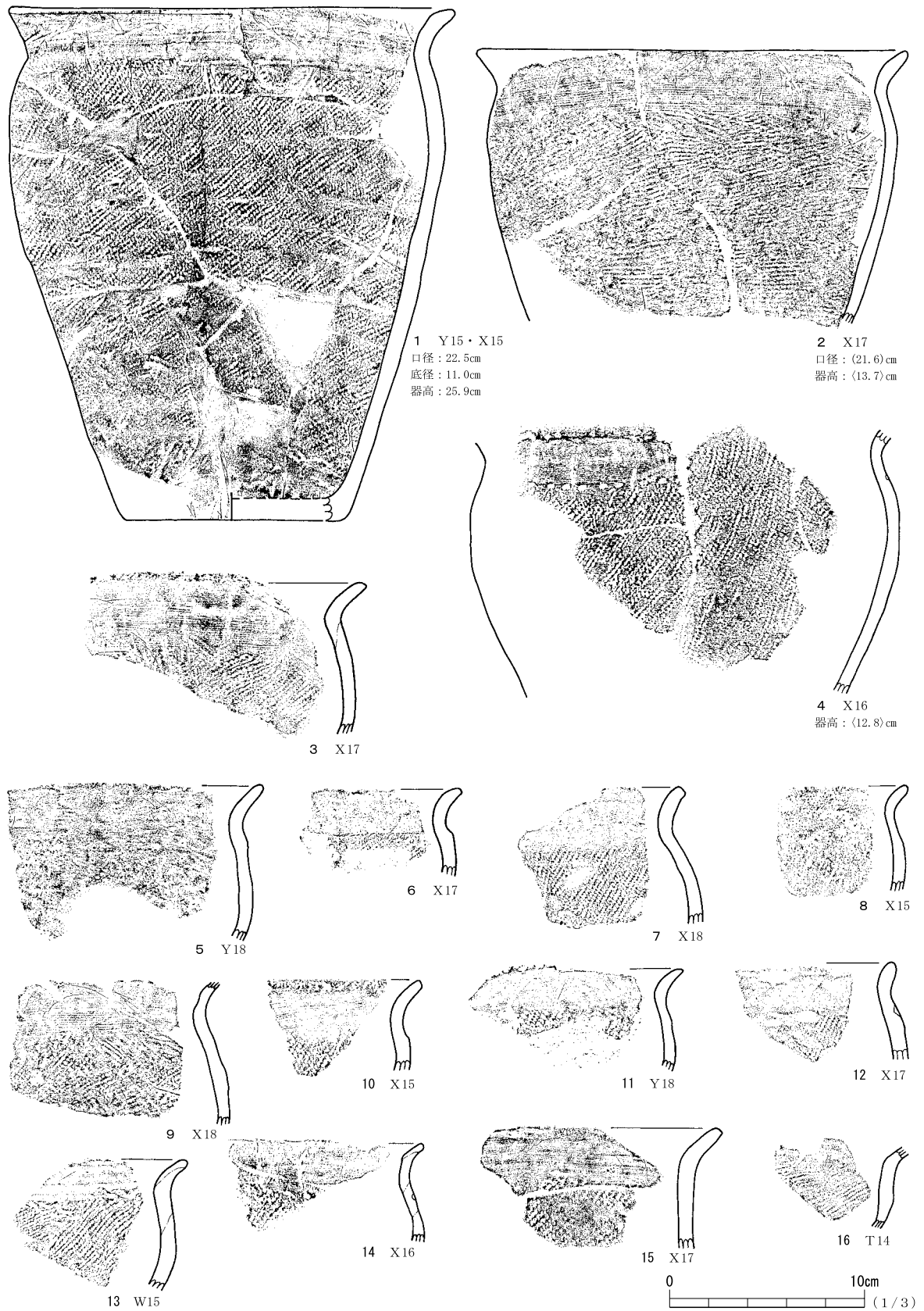


図14 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(3)

第1節 溝 跡

示した。推定口径21.6cm, 遺存高13.7cmを測る。胴上部が僅かに膨らみ, 胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し, 口縁部は短く, 外反する形態のものである。外反する口縁部に最大径を有する。口縁部はナデが施され, 胴部には単節縄文が観察される。同図4は甕の口縁部から胴上部にかけて復元図示した。遺存高12.8cmを測る。口唇部が欠損しているが, 胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し, 口縁部は短く, 外反する形態のものである。口縁部はナデが施され, 胴部には横方向の単節縄文が観察される。口縁部と胴部の境には刺突状の列点文が施される。

同図3・5～11は胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し, 口縁部は短く, 外反する甕の口縁部資料である。口縁部はすべてナデが施され, 胴部には, 3・7・9・10は単節縄文が施されるが, 他は摩滅が激しいため不明である。3・10の口唇部には縄文が施されている。

同図12～14は胴部と口縁部の境にくびれをもち, 口縁部はやや短く, 外反する。口縁部はすべてナデが施され, 胴部には, 12は単節縄文, 13には附加条縄文が施されるが, 他は摩滅が激しいため不明である。12・14の口縁部と胴部の境には刺突状の列点文が施される。

同図15・16および15図2～4は, 胴部と口縁部の境に明瞭なくびれをもたず, 口縁部は短く, 緩やかに外反する甕の口縁部資料である。口縁部はすべてナデが施され, 胴部には14図15および15図2は単節縄文, 14図16には附加条縄文が観察されるが, 他は摩滅が激しいため不明である。15図2の口縁部と胴部の境には刺突状の列点文が巡る。

15図1は, 甕の口縁部から胴上部にかけて破片から復元図示した。推定口径24.4cm, 遺存高20.0cmを測る。口縁部はやや短く外反し, 胴上部に最大径を有する。口縁部はナデが施され, 胴部には附加条縄文が観察される。3～6は甕の口縁部資料である。口縁部はすべて短頸で外反する形態である。口縁部はすべてナデが施され, 胴部には単節縄文が観察される。5の口縁部と胴部の境には刺突状の列点文が巡る。

同図5～8は甕の口縁部の破片資料であり, 全て短頸で外反する形態である。口縁部はナデ, 口唇部には縄文が施されている。

同図9～12は甕の胴上部資料である。胴部はすべて僅かに膨らむ形態である。外面には, 9・10は単節縄文, 11には撚り糸文が施される。10の口縁部と胴部の境には綾絡文, 12には刺突状の列点文が巡る。また, 12の器面には赤色塗彩が認められる。

15図13～17図4は壺または甕の胴部資料であり, 明確に器種判別できないのものである。施文される原体は, 15図13～16図32は単節縄文, 16図33～38および40・42は撚り糸文, 16図39・41・43は附加条縄文, 17図1～4は無文でミガキが観察される。また, 16図22には赤色塗彩が認められ, 15図20, 16図15・20・21の外面には煤状の付着物が認められる。

17図5～18図8は底部資料である。比較的遺存状態の良い33点について図示した。器形的には17図20などは底径5cm代で小型, 17図19・18図1などは底径11～13cmを測り大型に属し, 他は底径7～10cmの中型のものが多い傾向にある。形態的には底部側面が突出するもの(17図1), 突出しないで垂直気味に立ち上がるもの(17図12・21), 他は底部側縁から直線的に外傾するものがある。

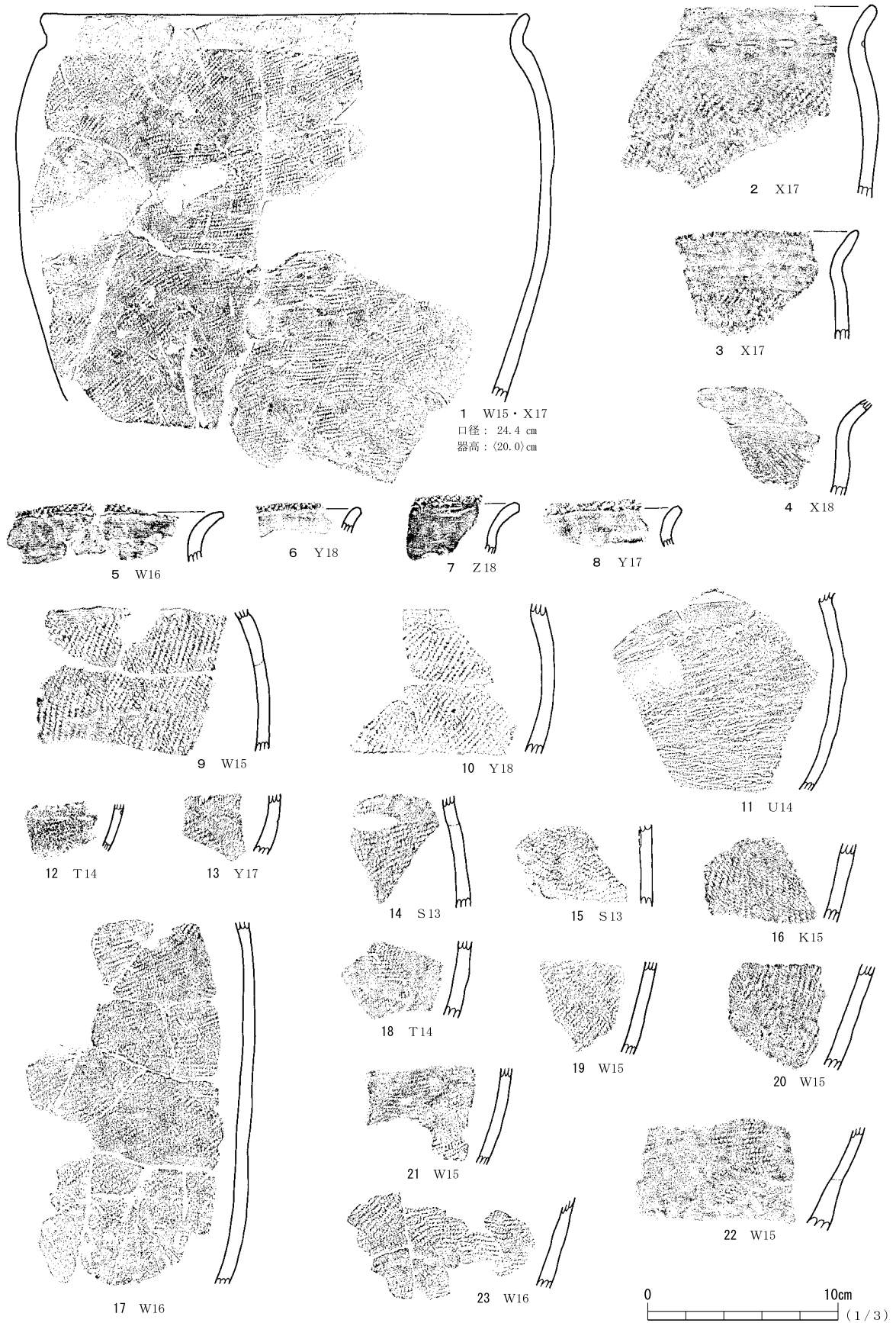


図15 1号溝跡 7出土弥生土器(4)

第1節 溝跡

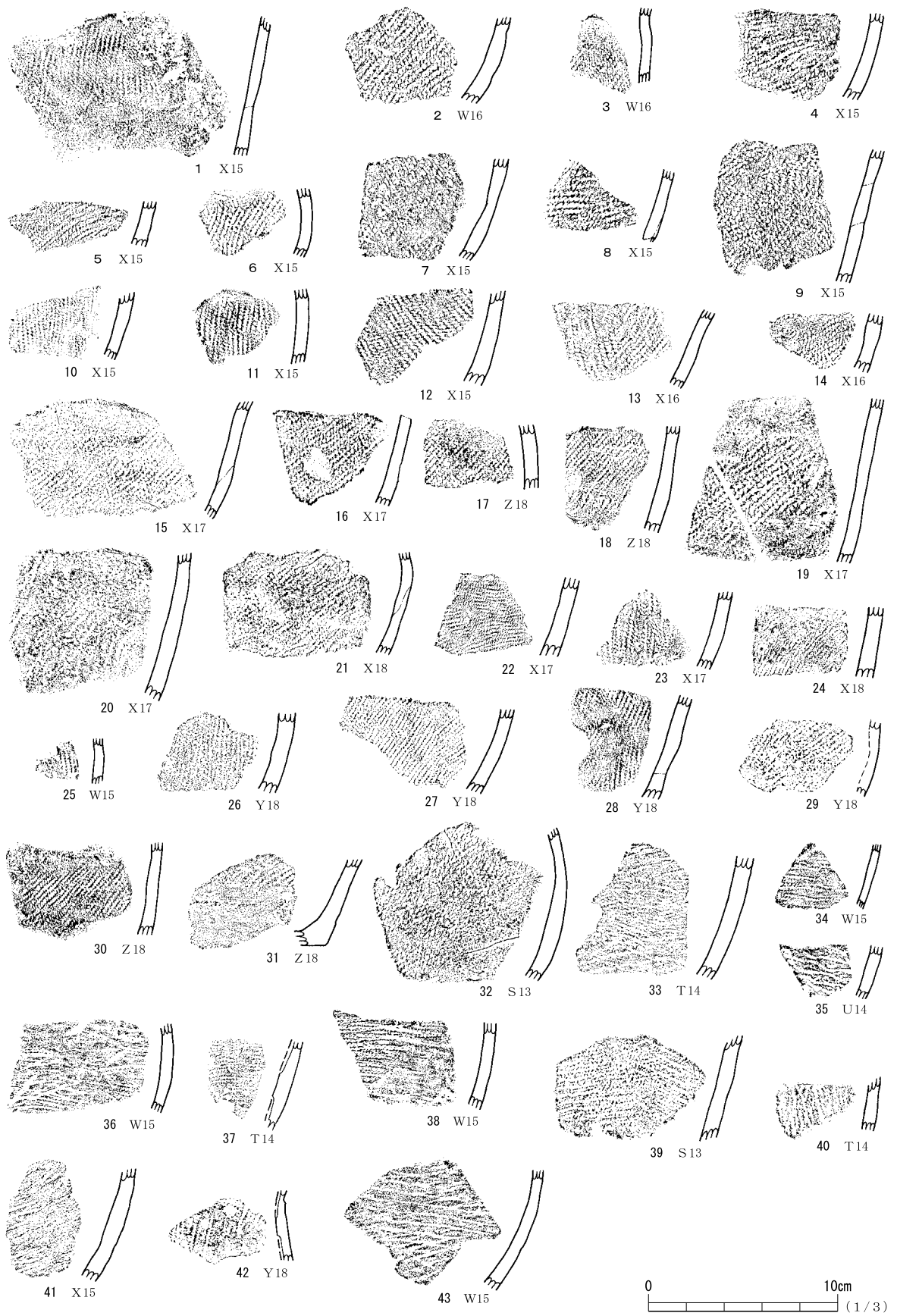


图16 1号沟迹 7出土弥生土器(5)

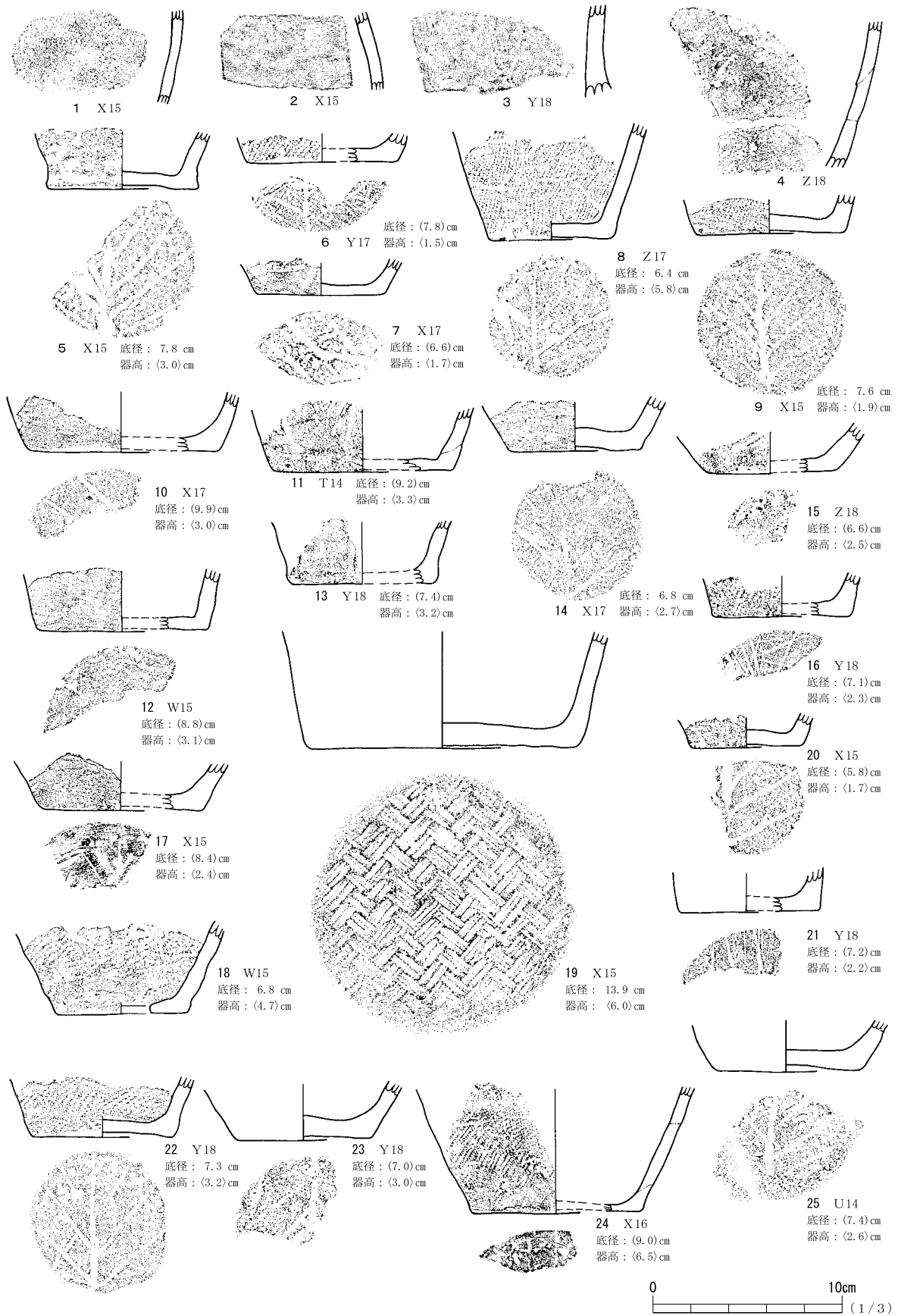


図17 1号溝跡ℓ7出土弥生土器(6)

第1節 溝跡

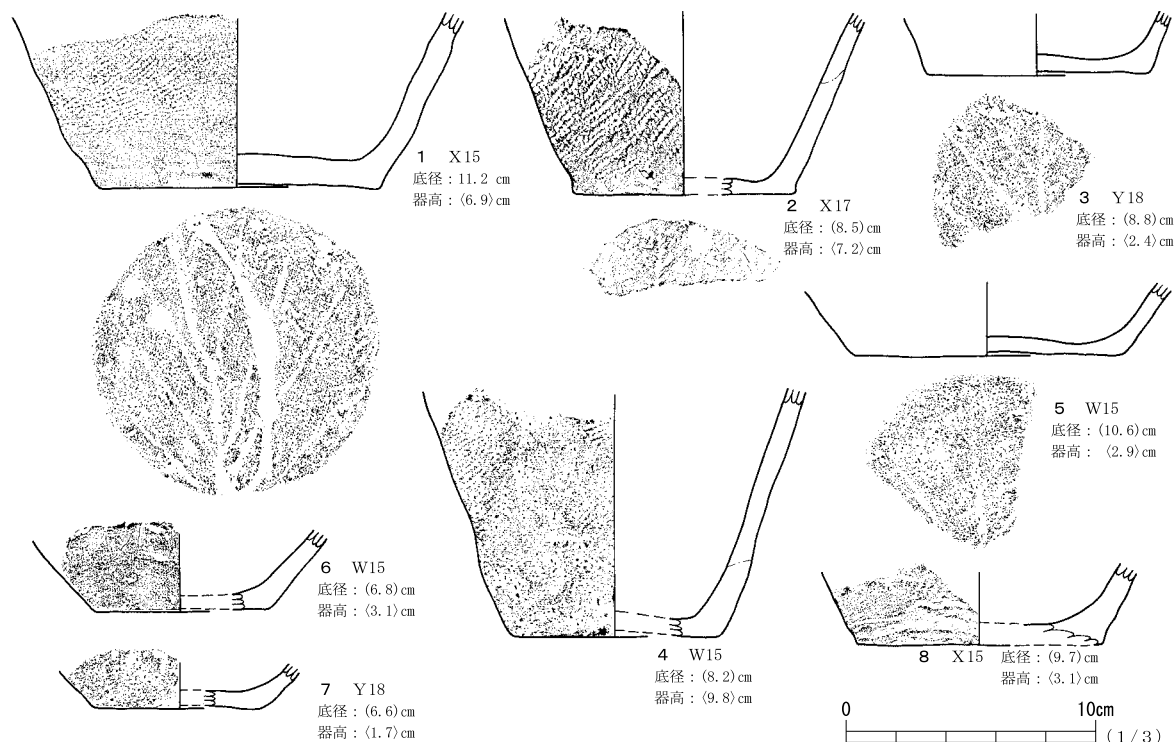


図18 1号溝跡の7出土弥生土器(7)

胴部の地文には、17図10・12・14・17がナデを施したもの、17図6・8・9・18・22・24および18図1・2が斜縄文を回転施文したものが観察される。他は摩滅が著しく不明瞭である。また、17図9の外面には赤色塗彩が認められる。

底面には、木葉痕が観察されるもの（17図5～10・14・20～23・25、18図1～3・5）、ケズリ状の調整が施されるもの（17図12・16・17・21）、網代痕が観察されるもの（17図19）がある。また、17図18は底部に径4.0cm程度の穿孔が認められる。

鉢は文様および器形に様々なバラエティーが認められるものであるが、本溝跡より出土した鉢のほとんどは僅かに文様を表出されている破片資料であり、その形態を知ることは困難である（19図1～38）。以下、資料に沿って記述する。

19図1は鉢の完形品である。口径8.1cm、底径5.2cm、器高6.0cmを測る。口縁部と胴部は直線的に外傾する器形である。胴部には横位帯状の沈線区画の磨消縄文を有する。底面にはケズリ痕が観察される。同図2は、鉢の口縁部から胴部にかけて約40%の破片から復元図示した。推定口径15.9cm、遺存高7.6cmを測る。口縁部は外傾し、胴部が屈曲する形態である。胴部には沈線区画の磨消縄文を有し、太沈線区画による三角連繫文が表出される。同図3は鉢の底部から胴部にかけての資料である。底径7.9cm、遺存高6.9cmを測る。胴部は僅かに外傾する。胴下部には横位帯縄文を表出し、底部には木葉痕が観察される。

同図4～9は鉢の口縁部資料である。すべて口縁部は内湾し、胴部が直線的な形態であると思われる。器面には、磨消縄文と太沈線により文様を描出している。4は太沈線区画による三角連繫文が連続するもの、5・8はヒトデ状の太い沈線区画の磨消縄文を表出するものと推定されるが、他

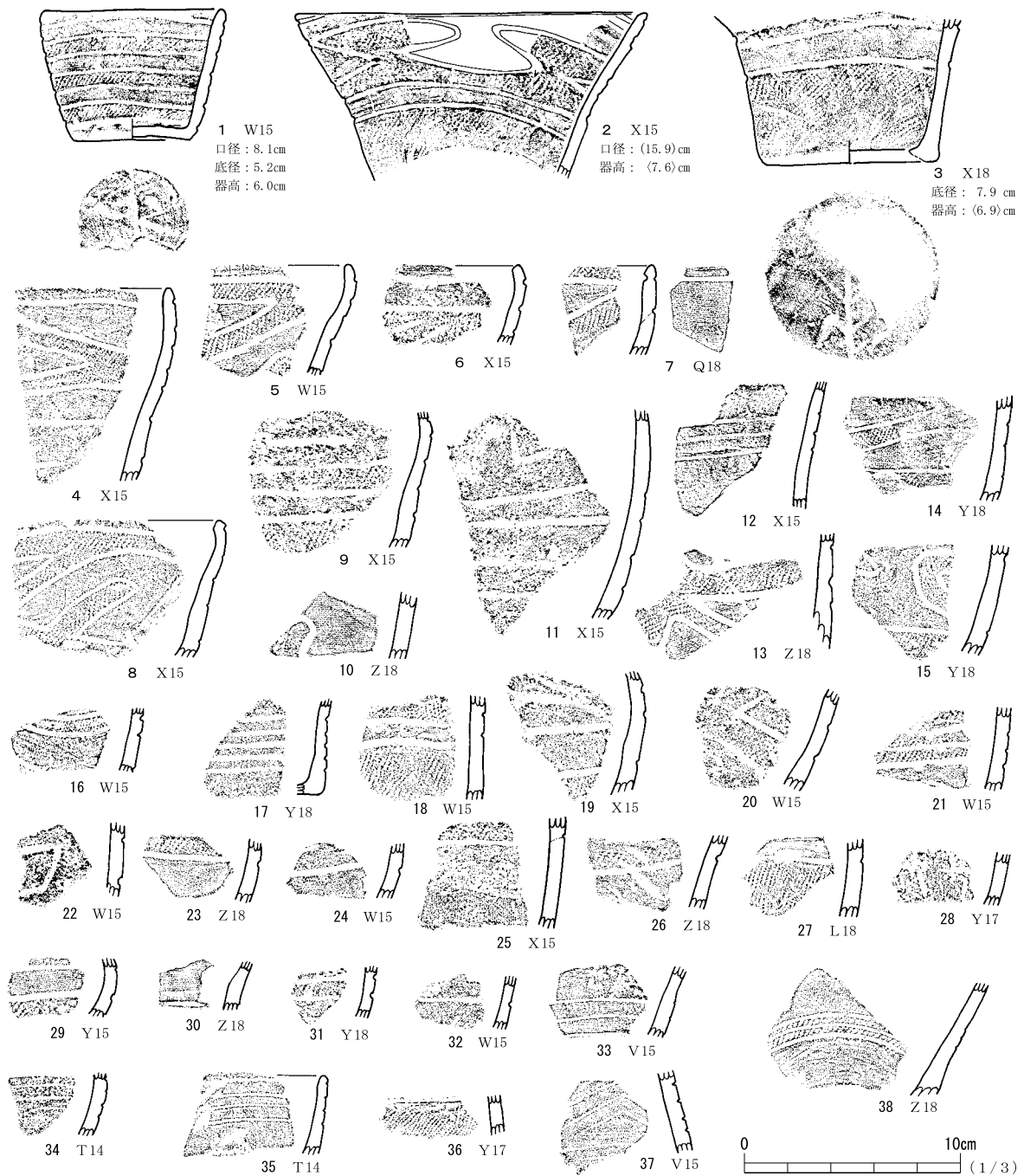


図19 1号溝跡の7出土弥生土器(8)

は小破片であるため文様形態は不明である。7の口縁部内面には、沈線文が認められる。

同図10～33は鉢の体部資料である。10・15は渦文あるいは弧文を表出するもの、13はヒトデ状の太沈線区画の磨消縄文を表出するもの、14は太沈線区画による三角連繫文が連続するものと思われる。12・17は数条の平行沈線が巡る。他の資料も磨消縄文と太い沈線で文様を表出しているが、いずれも小破片であるため文様形態は不明である。また、11の外面には赤色塗彩が認められる。

同図34～38は、磨消縄文と細い沈線により文様を描出している鉢の口縁部および胴部資料である。33・34はともに口縁部が外傾気味に立ち上がる形態である。35は口縁部に4条の平行沈線が施され

第1節 溝跡

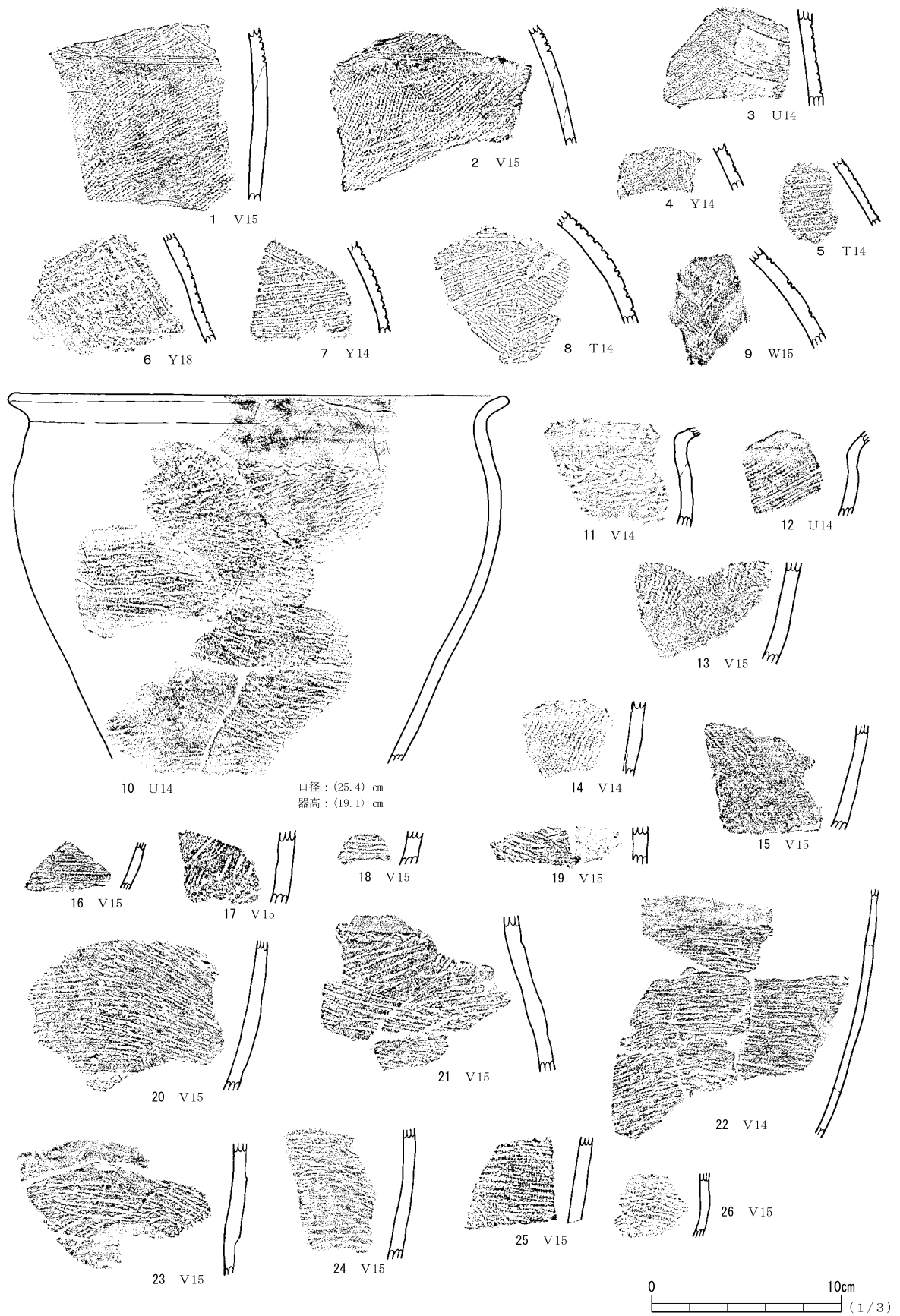


图20 1号沟迹 6 出土弥生土器(1)

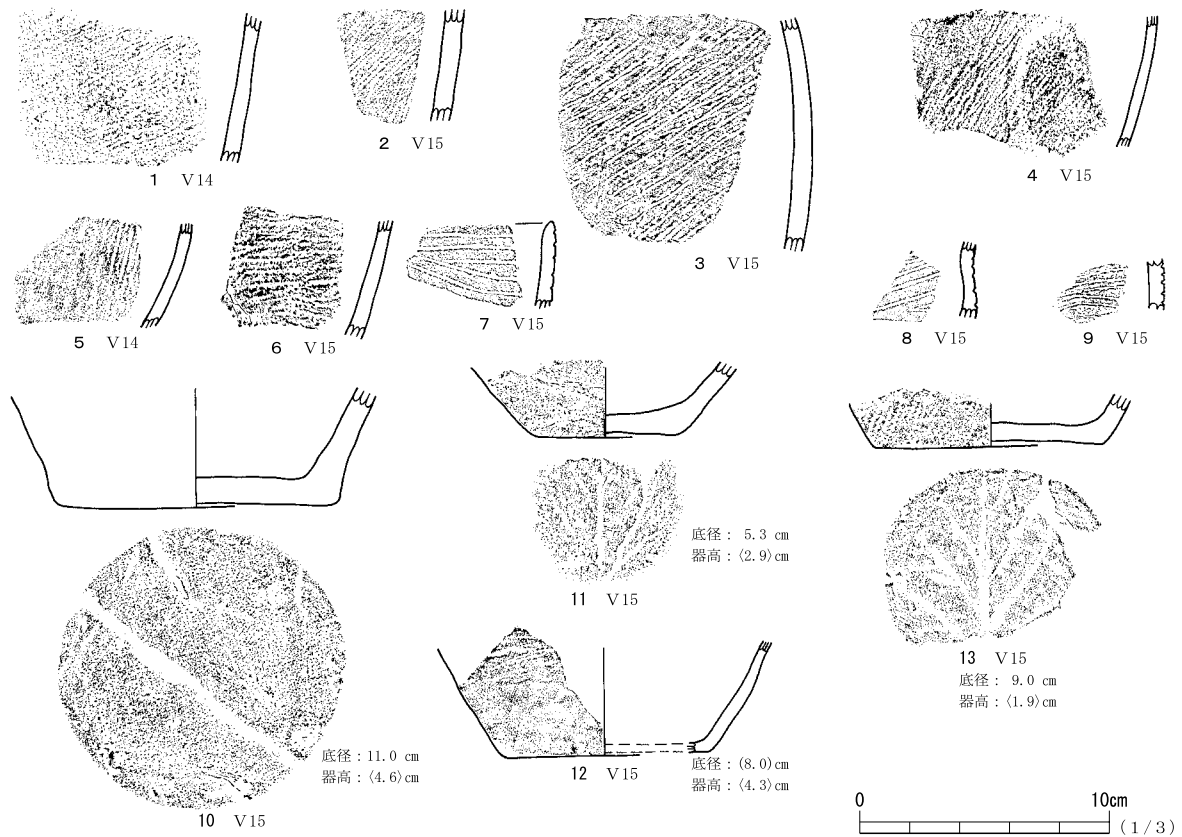


図21 1号溝跡 6 出土弥生土器(2)

ている。37は細い沈線と磨消縄文により三角形を基調とする区画文が施され、38には3本の平行沈線が巡り、沈線間には縄文が施されている。

6 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は814点である。弥生土器のほとんどは摩滅が激しく、図示できたものは39点にすぎない(図20・21)。土器は全体的に摩滅が激しい。これは、流れ込みによって表面が滑落された結果だと思われる。以下、資料に沿って記述する。

同図1・2は施文原体や胎土、色調が酷似していることから同一資料と判断した。壺形土器の胴部資料である。胴上部には沈線手法による重山形文が施される。重山形文の下端は、一帯の横走する直線によって明確に区切られ、胴下部には単節縄文が施される。

同図3～9は、壺の頸部から胴上部にかけての資料である。3は先端の鋭い工具を使用し重菱文もしくは山形文を描いている。4～9は、線間幅の狭い半截竹管状の工具により文様を描いている。施文される文様は、4は渦文もしくは円文、5～9が重菱文もしくは山形文であると思われる。施文具の線間幅は、6・8は4mm、5・7は3.5mm、4・9は1mmである。

同図10は甕の口縁部から胴上部にかかる破片から復元図示した。推定口径25.4cm、遺存高19.1cmを測る。胴上部が僅かに膨らみ、大きく外反する口縁部に最大径を有する。口縁部はナデが施され、胴部には撚糸文が観察される。口縁部と胴部の境には綾絡文が巡る。

同図11・12は甕の口縁部資料である。11は口縁部が短頸で外反する形態であり、口縁部にはナデ

第1節 溝 跡

調整が認められ、胴部には撚糸文が施される。12は胴部と口縁部に明瞭なくびれをもたず、口縁部は短く、緩やかに外反する形態である。胴部には附加条縄文が施され、外面には煤状の付着物が認められる。

20図13～26および21図1～6は壺または甕の胴部資料であり、明確に器種判別できないのものである。施文される原体は、20図13～15は単節縄文、16～26は撚糸文、21図1～6は附加条縄文が観察される。また、20図21には、撚糸縄端部の結束が観察される。器形からすると、甕の胴上部資料であろうか。

21図7～9は鉢の口縁部および胴部資料である。沈線と磨消縄文により三角形を基調とする区画文および連弧文が施されると思われる。

同図10～13は底部資料である。比較的遺存状態の良い4点について図示した。器形的には11は底径5cm代で小型、10は底径11～13cmを測り大型に属し、他は底径7～10cmの中型のものが多い。形態的には底部側縁から直線的に外傾する。胴部の地文には、12が撚糸文を施したものの、13が斜縄文を回転施文したものが観察される。他は摩滅が著しく不明瞭である。

底面には、木葉痕が観察されるもの(11・13)、平織り状の布圧痕が観察されるもの(10)がある。

④ 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は49点である。弥生土器のほとんどは摩滅が激しく、図示できたものは15点にすぎない(22図1～15)。本層も含めこれより上層から出土した弥生土器は、後世の流れ込みによって再堆積したものである。以下、資料に沿って記述する。

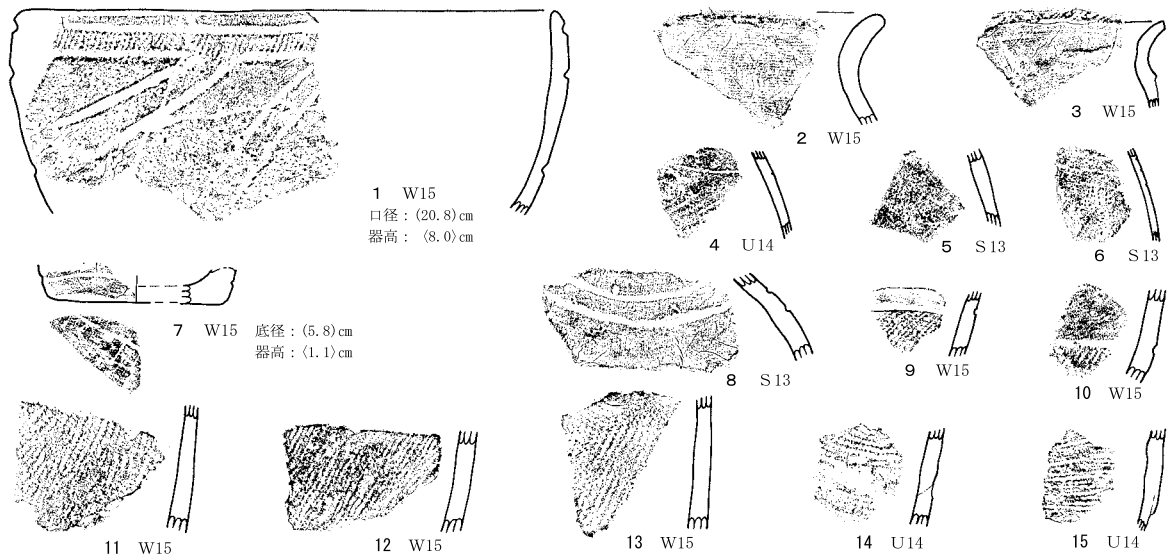
22図1は鉢の破片資料から復元図示したものである。推定口径20.8cm、遺存高8.0cmを測る。口縁には沈線区画の磨消縄文が巡り、胴部には斜位方向に2条1組の沈線が施される。口縁に向かって徐々に内湾する形態のものである。同図2は壺の口縁部資料である。頸部は内傾、口縁部は強く外傾する。器面にはナデ調整が施される。同図3は甕の口縁部資料である。口縁部は短く外反する。器面にはナデ調整が施され、口唇には縄文が施される。同図4は鉢の底部資料である。底部と胴部の境には1条の沈線が巡る。推定底径5.8cmを測り、底面にはケズリ痕が観察される。同図5～8は壺の胴上部資料と判断した。5は横方向に2条の平行沈線が巡り、内外面ともにミガキが施される。6～8は土器表面の摩滅が激しく拓本では文様を表出できなかったが、先端の鋭い工具を使用し重菱文が施されている。同図9・10は鉢の胴部資料である。横走沈線が施されており、沈線下には各々単節縄文が施されている。同図11～15は甕または壺の体部資料である。器面の調整には11～14は単節縄文、15は附加条縄文が施されている。

③ 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は70点である。弥生土器のほとんどは摩滅が激しく、図示できたものは8点にすぎない(22図16～23)。以下、資料に沿って記述する。

22図16・17は甕の口縁部資料である。ともに胴部と口縁部の境のくびれが弱い。胴部には、16は撚糸文、17は単節縄文が施される。同図18は鉢の口縁部資料である。口縁付近に3条の沈線が巡る

ℓ 4 出土弥生土器



ℓ 3 出土弥生土器

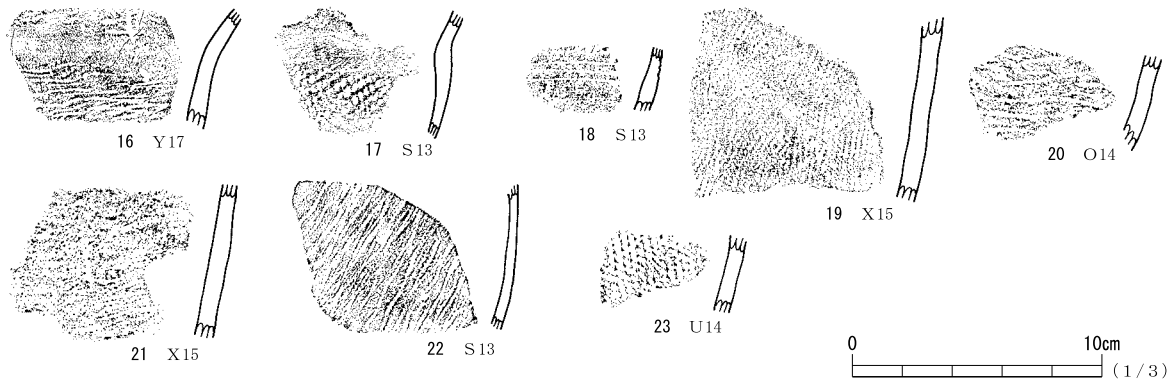


図22 1号溝跡ℓ 4・3 出土弥生土器

と思われる。同図19～23は、壺または甕の胴部資料である。19・23には単節縄文、20・21には撚糸文、22には附加条縄文が施される。

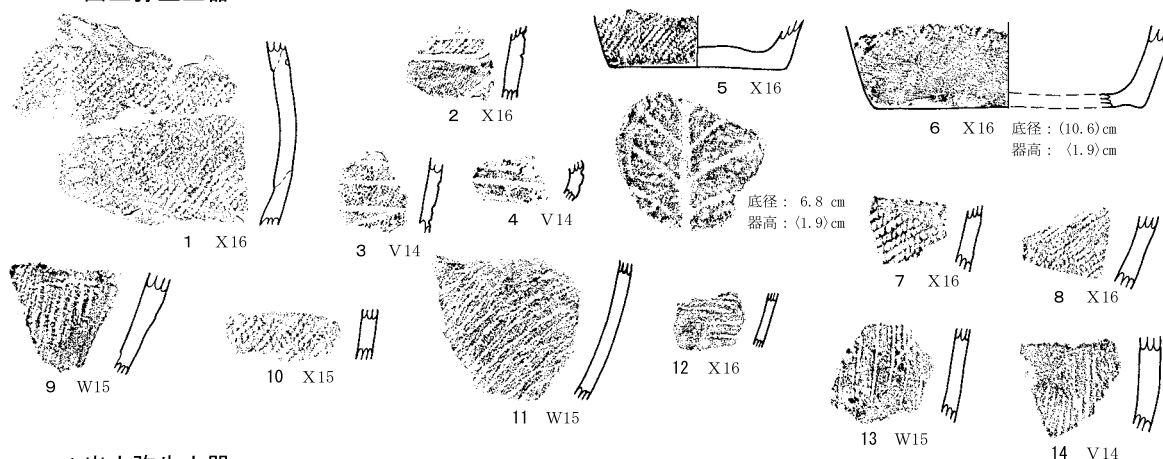
ℓ 2 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は35点である。弥生土器のほとんどは摩滅が激しく、図示できたものは14点にすぎない(23図1～14)。以下、資料に沿って記述する。

23図1は甕の胴上部資料である。胴部は僅かに膨らみ、器面には単節縄文が施される。口縁部と胴部の境には連続する刺突が観察される。同図2～4は鉢の胴部資料である。磨消縄文と太い沈線で文様を表出している。いずれも小破片であるため文様形態は不明である。同図5・6は底部資料であり、器形と外面の状態から、5は壺または鉢、6は甕と考えられる。底径は、5は6.8cm、6は10.6cmである。5の底面には木葉痕が観察される。同図7～14は壺または甕の胴部資料である。器面の調整は、7～10は単節縄文、11・12は撚糸文、13・14には附加条縄文が施される。また、11の内面には煤状の付着物が認められ、13の外面には赤色塗彩が認められる。

第1節 溝 跡

ℓ 2 出土弥生土器



ℓ 1 出土弥生土器



図23 1号溝跡 ℓ 2・1 出土弥生土器

ℓ 1 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は28点である。弥生土器のほとんどは摩滅が激しく、図示したものは1点にすぎない(23図15)。23図15は壺の口縁部資料である。頸部は内傾し、口縁部は強く外傾する。器面にはナデが施される。

石 器 (図24~32 写真19~23)

ℓ 7 出土石器

本層からは、石器50点が出土した。抽出した遺物を図24~27に示した。石種ごとに説明する。24図1は凹基無茎石鏃である。表裏面から比較的丁寧な剥離で調整している。最大長3.0cmを計る。同図2は石槍の基部と判断した。横断面形が紡錘形に近く表裏面から比較的粗い調整剥離を加えている。同図3~7は不定形石器とした。部分的に自然面が残る薄片を素材とし、主として側縁に微細剥離痕や細かな調整剥離痕が観察できる。特に、4・7の側縁には使用時に付いたと思われる微細剥離痕が顕著に認められる。

同図8・9は石庖丁である。8は未製品であり、表面には1次調整剥離後の細かな敲打痕が観察できる。9は使用品であり、両端部が欠損しているが、背部が直線で、刃部が外湾する半月形の形状を呈すると思われる。1次調整剥離後に敲打を行い研磨・穿孔を行っている。紐孔の周囲に僅かながら敲打痕が認められるため、穿孔は敲打後に行っているものと思われる。刃部と背部の一部にごく僅かながらコーングロスが認められるが、刃部では、大半が研磨痕により消えているため、刃部を研ぎ直したものと思われる。

24図10・11, 25図2・5・6はいずれも直縁刃石器である。24図10, 25図2・6は、丸みを持った亜角礫の端部から1回の剥離作業により取得した剥片を素材とし、この側縁部を刃部としてい

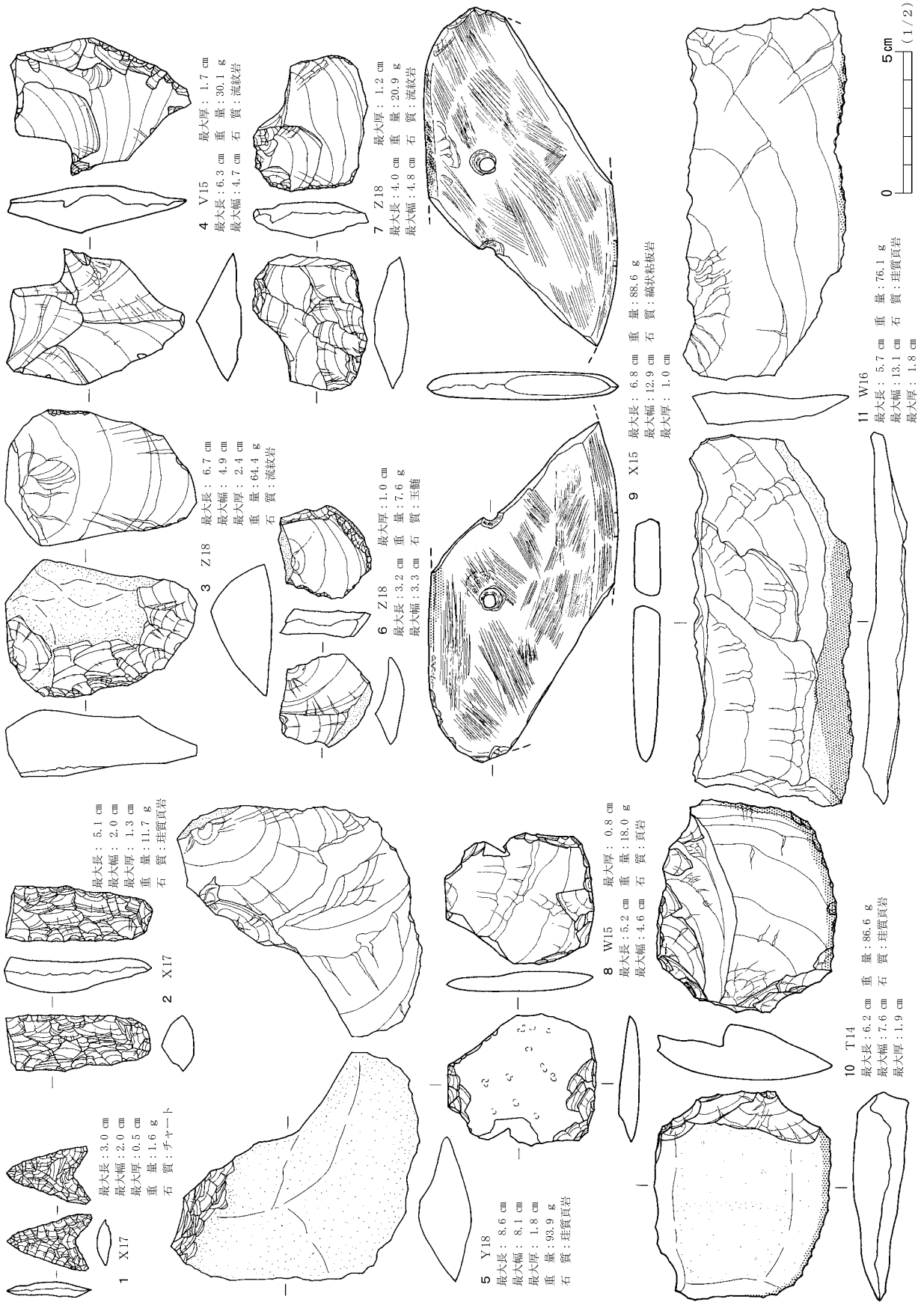


図24 1号溝跡 7出土石器(1)

第1節 溝跡

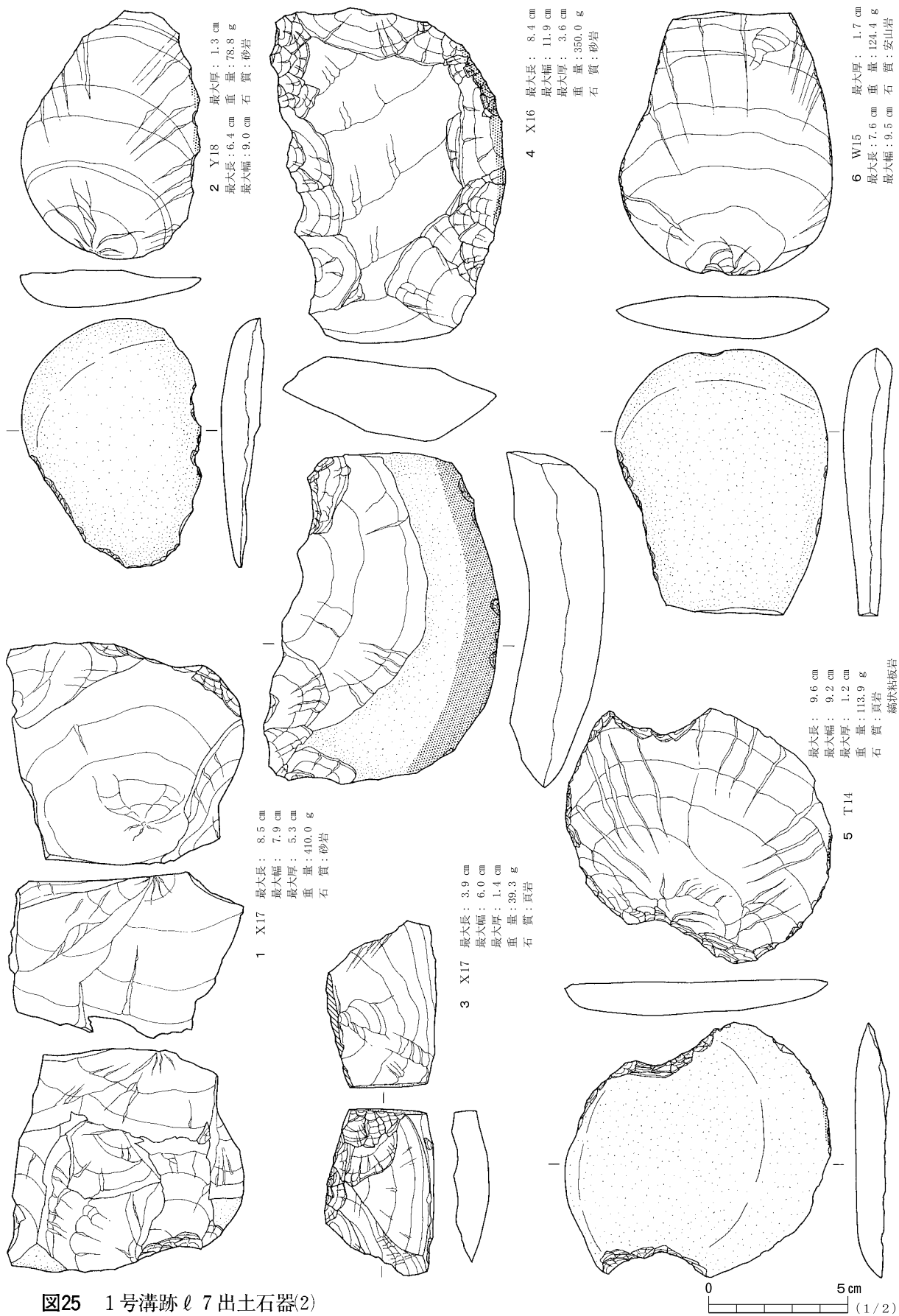


图25 1号沟迹 7 出土石器(2)

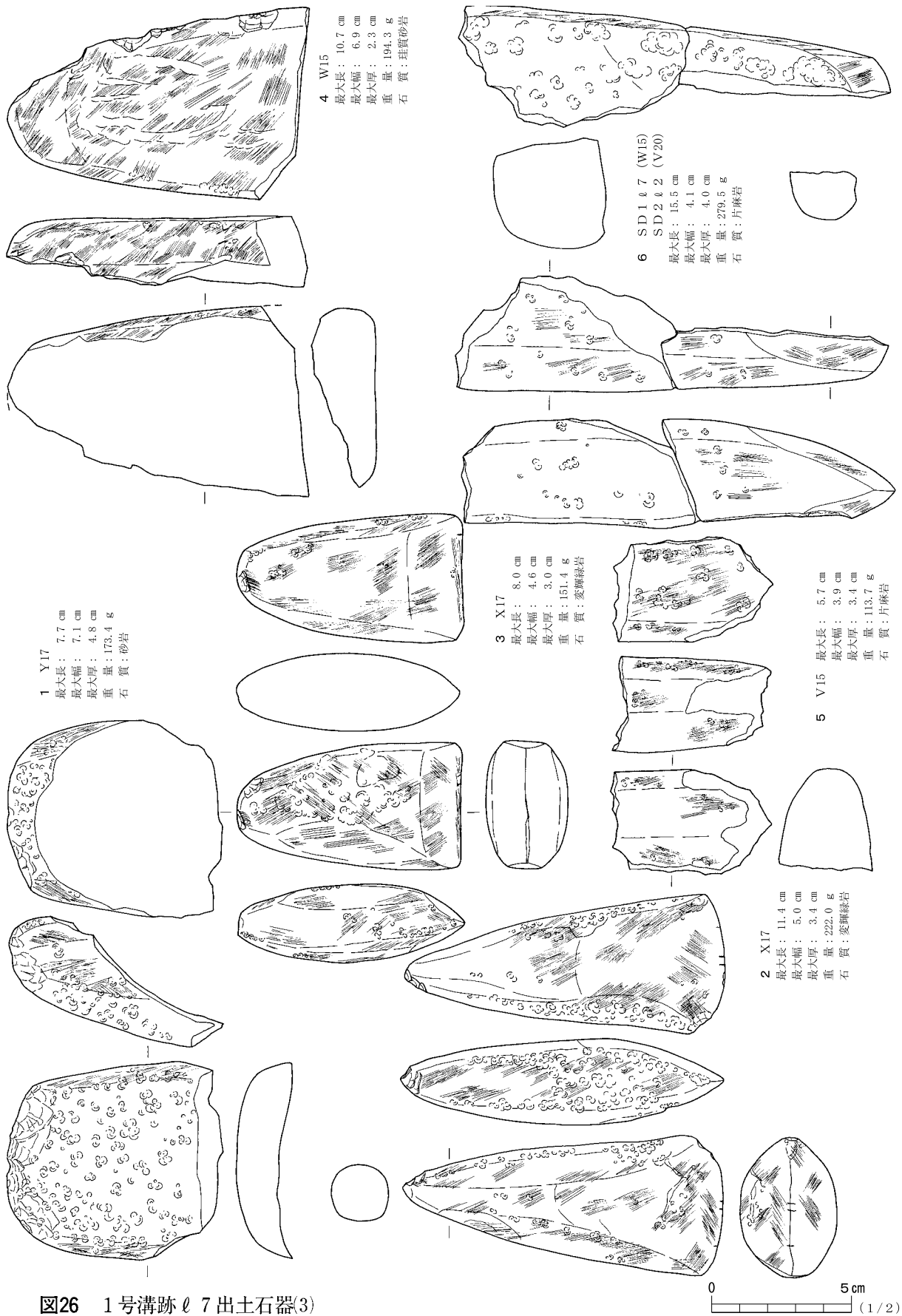


図26 1号溝跡 7出土石器(3)

第1節 溝跡

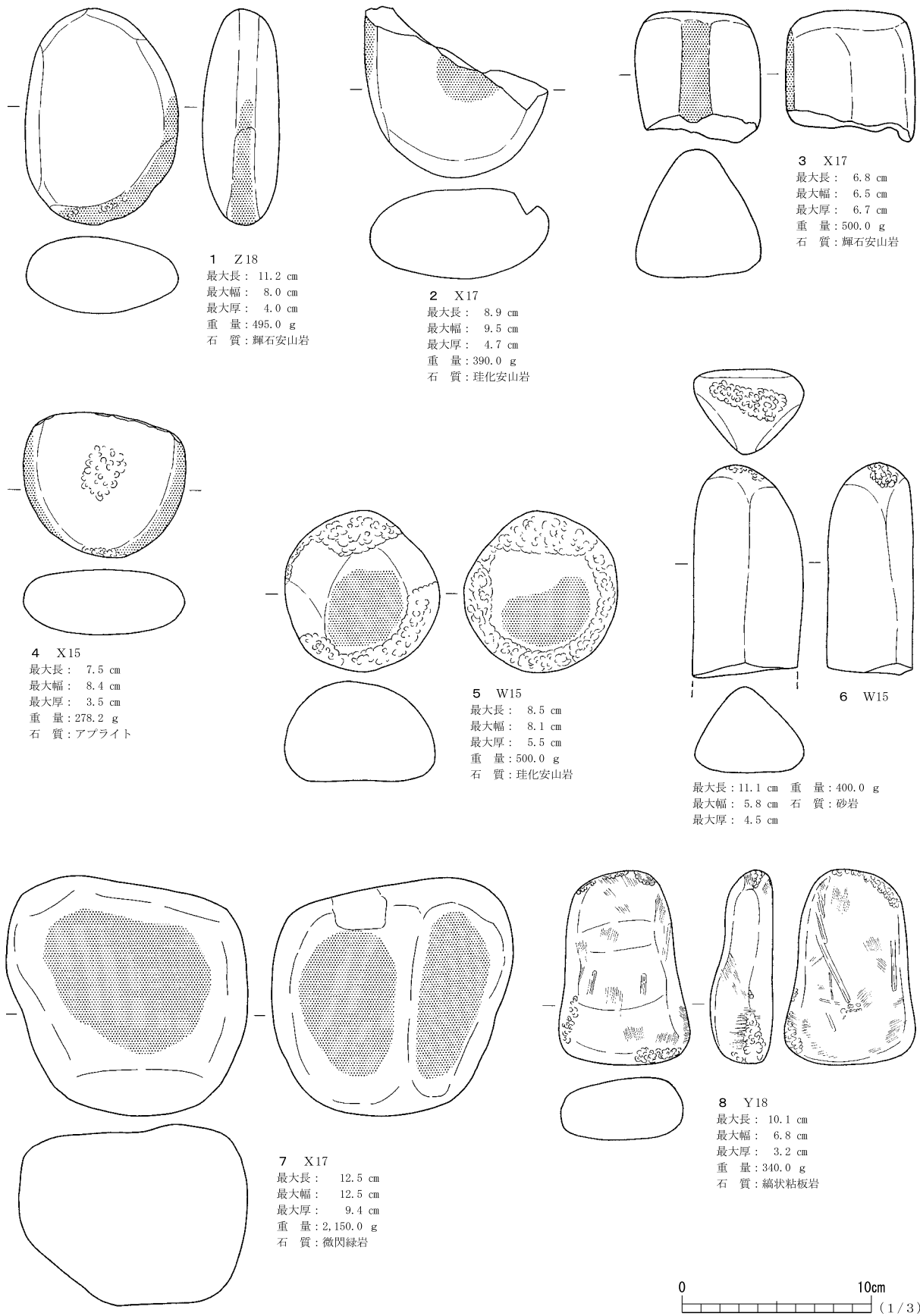


図27 1号溝跡の7出土石器(4)

る。刃部には、僅かながら使用により磨耗した痕跡が観察できる。25図5も同様な技法により得た剥片を素材としているが、両端には挟りが調整されている。刃部には磨耗痕跡が認められるが、両端の挟り周辺には確認できない。24図11は部分的に素材礫の自然面が観察できるが、横長の剥片を素材としている。刃部には比較的顕著な磨耗痕跡が観察できる。

25図1・3は、石核である。1は砂岩製であり、打面を不規則に90°転移して剥片を採取している。裏面中央左寄りに打点が認められるが、剥片を採取するための打撃痕跡とは考えられない。3は頁岩製であり、角礫の縁辺部より剥片を採取しようとしているが、剥離痕から見る限り、良好な剥片は採取できなかったものと思われる。

同図4は、礫器と判断した。自然面の残る肉厚な剥片を素材とし、上下端部より調整剥離を施し、整形している。刃部には僅かな磨耗痕跡が観察できる。

26図1は大型蛤刃石斧の未製品である。基部のみの資料であるが、1次整形後の敲打痕と僅かな研磨痕が観察できる。

同図2は、基部が極端に先細りになる形状の両刃石斧である。1次整形→敲打→研磨により、全体的な横断面形が丸味をおびた作りとなっている。特に基部のそれは円形であり、刃部も肉厚な楕円形を呈する。刃縁は弧状を呈し、刃縁に直行する短い線状痕が観察できる。

同図3は、刃部が比較的扁平な両刃石斧である。縦断面形は2のそれに近い形状であるが、刃部付近は扁平を意識している。1次整形→敲打→研磨により製作しているが、刃縁付近には研ぎ直しの痕跡が観察でき、刃縁に対し斜め方向の線状痕が僅かに確認できる。石質は変輝緑岩であり、前述の2も同様である。

同図4～6は、裏面（前主面側）が平坦な形状を有する両刃磨製石斧である。いずれも欠損資料であるが、4・5で基部周辺、6で刃部周辺の状況が確認できる。1次整形→敲打→研磨によって整形したものと思われ、4の裏面では1次整形時の放射状裂痕が残存している。また、6では比較的大きな敲打痕が観察できる。4の側縁部には研磨痕より新しい剥離痕が認められることから、欠損後、部分的に剥離を施したものと考えられる。

27図1～5は磨・凹・敲石類である。1～3は磨石であり、1・2では亜角礫を素材とし、側面や中央部に磨耗痕が観察できる。3は、横断面形が三角形を呈する角礫の一側面にのみ磨耗痕が認められる。4は、磨・凹石である。比較的扁平な円縁礫の側面部に磨耗痕、中央部に窪み痕が見られる。5は、磨・敲石である。拳大ほどの円礫の側面全周に敲打痕が認められ、素材礫の稜線が潰れている。表裏面中央には光沢を持つ磨耗面も観察できる。

同図7は石皿と判断した。やや小振りであるが、肉厚な亜角礫の表裏面には、僅かな痕跡であるが磨耗痕が観察できる。

同図6・8は敲打器とした。6は、三角柱状の礫の先端に敲打痕が認められる。8は扁平な楕円礫を素材とし、主として側面には敲打痕、表裏面には研磨痕が認められる。研磨痕の中には、幅2mm程と幅広で浅いU字状を呈する線状痕も観察できる。石質は頁岩（縞状粘板岩）である。

第1節 溝 跡

これらの石器の時期は出土した弥生土器の時期から、弥生時代中期前葉の磨消縄文系土器の時期、すなわち龍門寺式期に比定できる。

ℓ 6 出土石器

本層からは、石器15点が出土した。28図1は敲打器と判断した。拳大の亜角礫を素材とし、礫の先端部及び表裏面に、敲打による剥離痕と窪み痕が観察できる。敲打は、礫の稜線に沿って行われているものが多く見られる。本資料の時期は、出土した遺物が少ないため不詳であるが、弥生時代中期後葉の桜井式期と推測している。

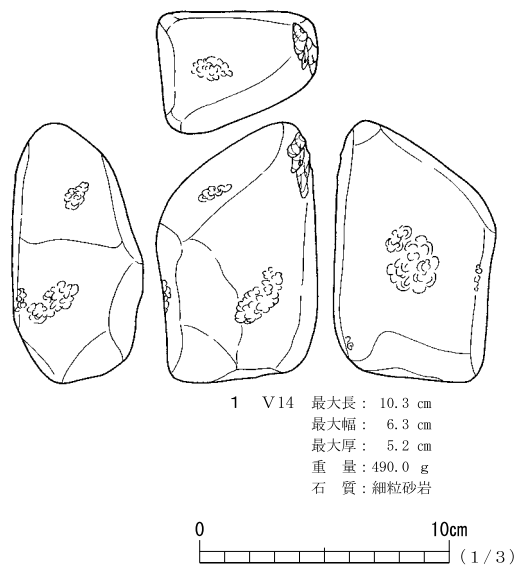


図28 1号溝跡 ℓ 6 出土石器

ℓ 5 出土石器

本層からは、石器6点が出土した。29図1は直縁刃石器である。扁平な横長剥片を素材とし、両側縁に僅かに抉りを施している。刃部には比較的細かな調整剥離が加えられている。刃部及び基部には使用による磨耗範囲が観察できる。同図2は珪化流紋岩製の石核である。裏面では、主として資料上端の節理面を打面とし剥片を採取しているが、表面では打面を任意に転移して採取している。剥離痕の大きさからは、非常に小さな剥片しか採取できなかったものと思われる。

これらの資料の時期は、出土した遺物から弥生時代中期後葉の桜井式期と思われる。

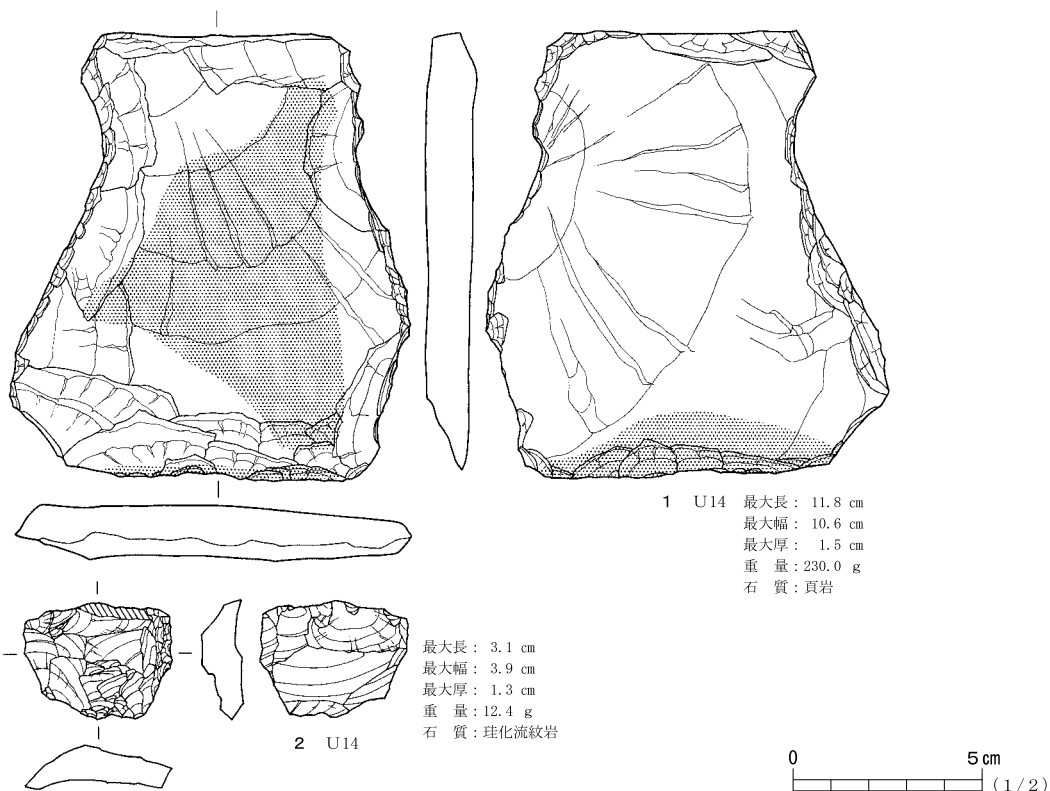


図29 1号溝跡 ℓ 5 出土石器

Ⅱ 4 出土石器

本層からは、石器10点が出土した(30図)。30図1は、Ⅱ7から出土した裏面(前主面側)が平坦になる特徴を有するものと同様の、両刃磨製石斧の基部資料と判断した。刃部と基部先端が欠損しているが、1次整形→敲打→研磨の工程により製作している。表面右側縁及び裏面に確認できる剥離は、資料上下が欠損した後に施されている。おそらく、欠損後に再加工するために調整が加えられたが、そのまま廃棄されたものと思われる。

同図2は磨石と判断した。垂角礫の表面に比較的広範な磨耗面が認められる。磨耗面の状態は石皿のそれに近く、石皿が欠損したものかも知れない。同図3は砥石である。長方形の角礫をそのまま素材とし、表裏面及び側面に研磨時の線状痕が多数観察できる。

これらの資料は、出土土器に古墳時代に属する土師器があるものの、その特徴や弥生土器の出土から弥生時代中期後葉に属するものと思われる。3の砥石も、自然礫を加工しないで現状のまま使用しているため、同時期に比定される可能性が高いものと判断している。

Ⅱ 3 出土石器

本層からは、石器18点が出土した(図31)。31図1は、半月形外湾刃の石庖丁である。半分ほど欠損しているが、1次整形後に敲打を加え研磨した工程が観察できる。紐孔は、敲打後に回転穿孔したものと思われ、孔周囲には敲打痕の残存が確認できる。刃部には使用による磨耗範囲が見られ、裏面右側では、刃部再調整のための剥離も施されている。

同図2・3は敲打器と思われる。2は扁平で楕円形を呈する自然礫を素材とし、主として資料上下側のやや右寄りの位置に敲打痕が観察できる。3は長さ5cm程の円礫を素材としているが、礫の表皮を研磨により剥がしている。資料上端には、敲打による剥離痕が観察できる。

これらの資料も、Ⅱ4出土石器と同様の時期に比定されるものと思われる。

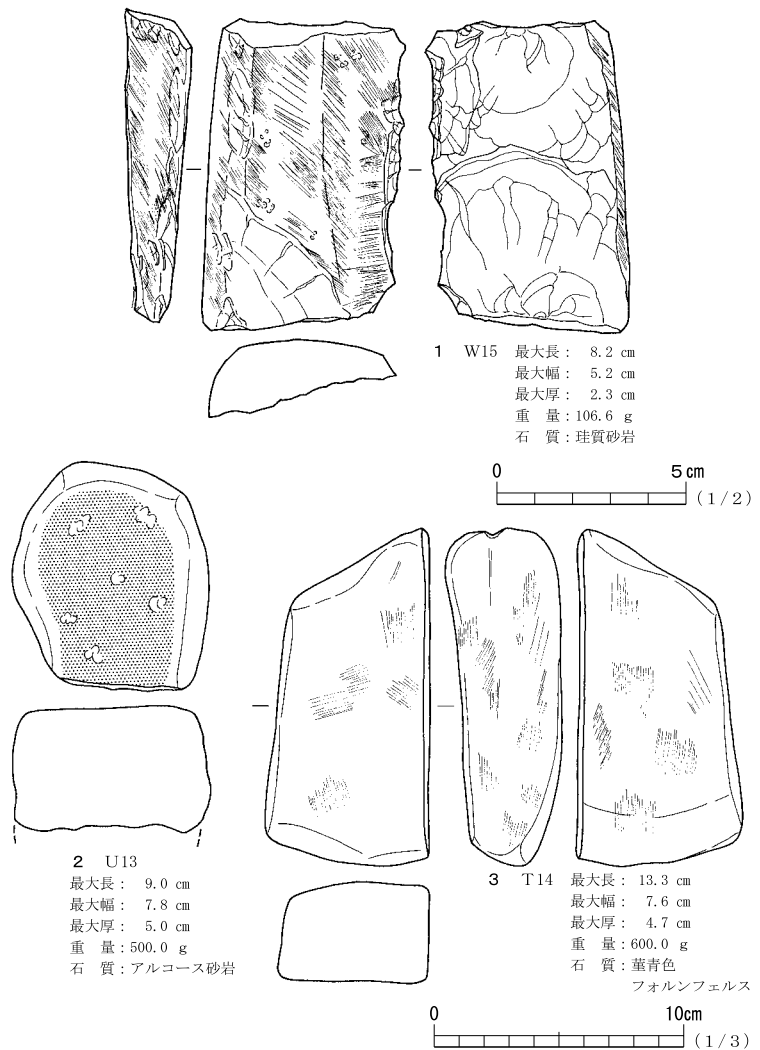


図30 1号溝跡Ⅱ4出土石器

第1節 溝跡

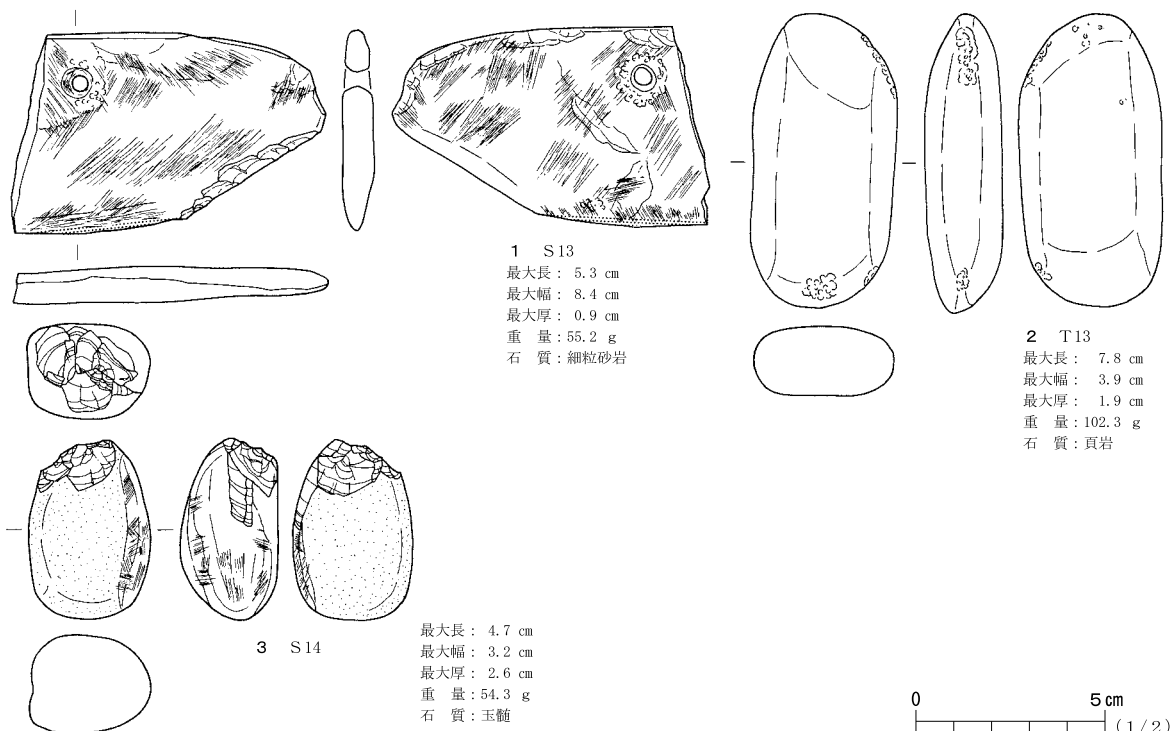


図31 1号溝跡の3出土石器

の1出土石器

本層からは、石器2点が出土した。図31は、石庖丁の未製品か失敗品と思われる。半分ほどが欠損しているが、背部では剥離痕を切って研磨痕が認められるのに対し、刃部では、逆に研磨痕を切って剥離が施されている。紐孔に相当する部分には、僅かに敲打痕や研磨痕が見られるのみである。おそらく、製作途中で折損したため、廃棄したものと推測している。

土師器・須恵器 (図33・34 写真27)

本溝跡から出土した土師器は2,008点、須恵器は4点である。の3～の4中の出土であるが、主にの4内のFP（榛名ニッ岳伊香保テフラ）堆積層の上位からの出土数が多い。以下、資料に沿って記述する。

図32は土師器杯である。非ロクロ成形の有段丸底杯で、底部の中央付近を欠損している。口径は13.5cmを測る。口縁部下に段差を有し、内面は黒色処理が施される。器面の調整は、外面にヨコナデ・ヘラケズリ、内面にはヘラミガキを施している。

同図2は、土師器甕類の口縁部から胴部にかけての資料である。口縁部が欠損しているが、口縁部と胴部の境には段を有する。器面の調整には、内外面ともにハケメが施される。同図3・

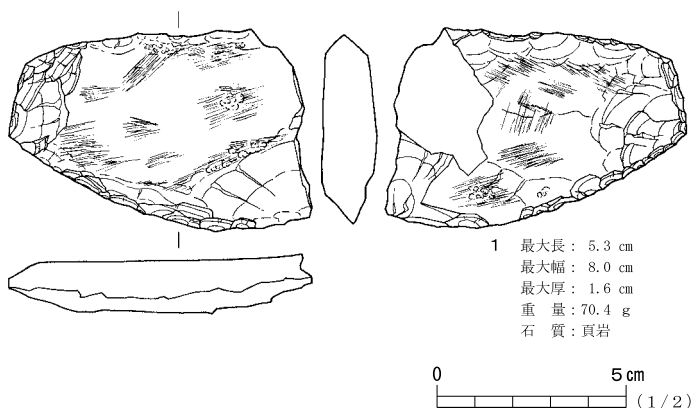


図32 1号溝跡の1出土石器

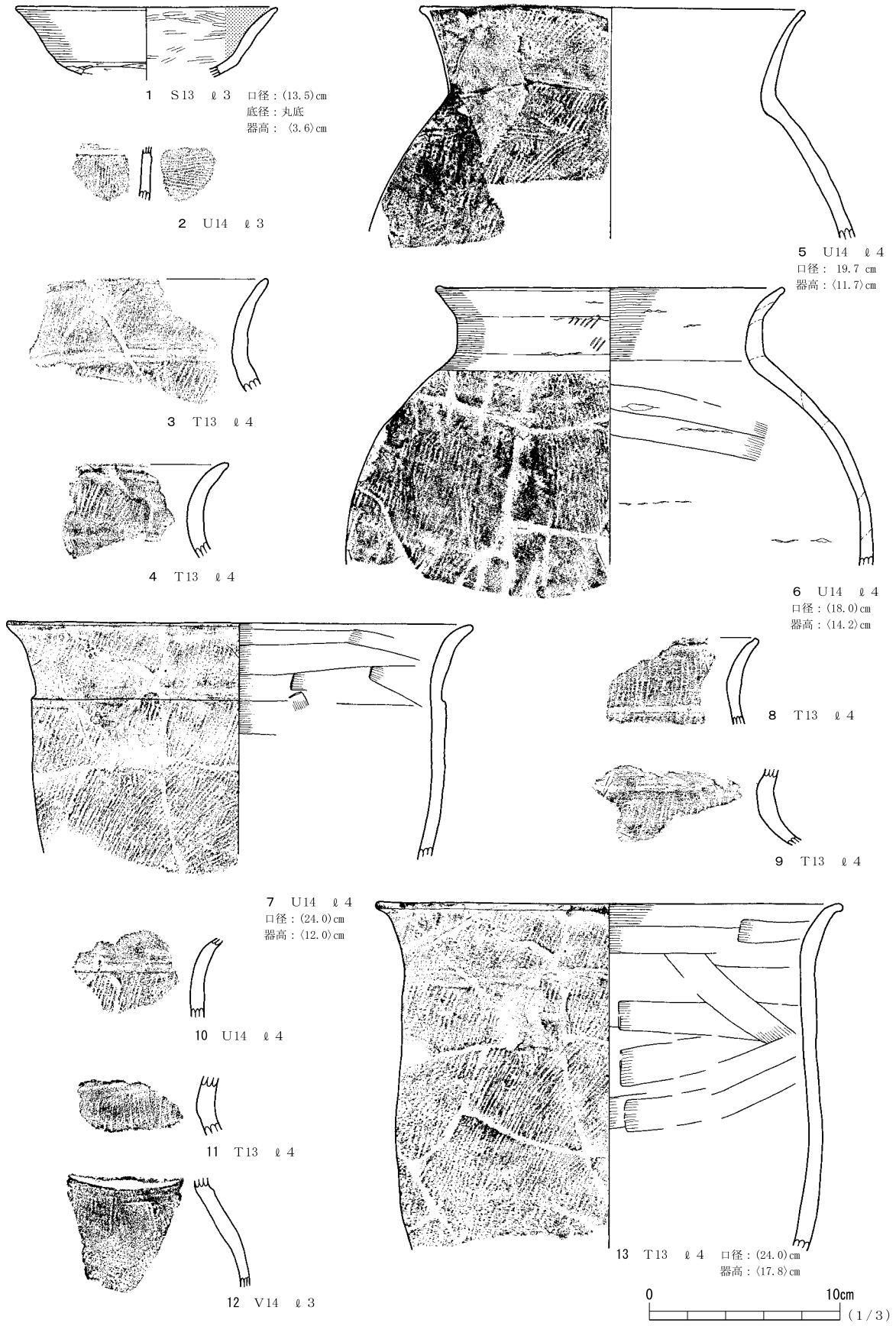


図33 1号溝跡出土土師器(1)

第1節 溝跡

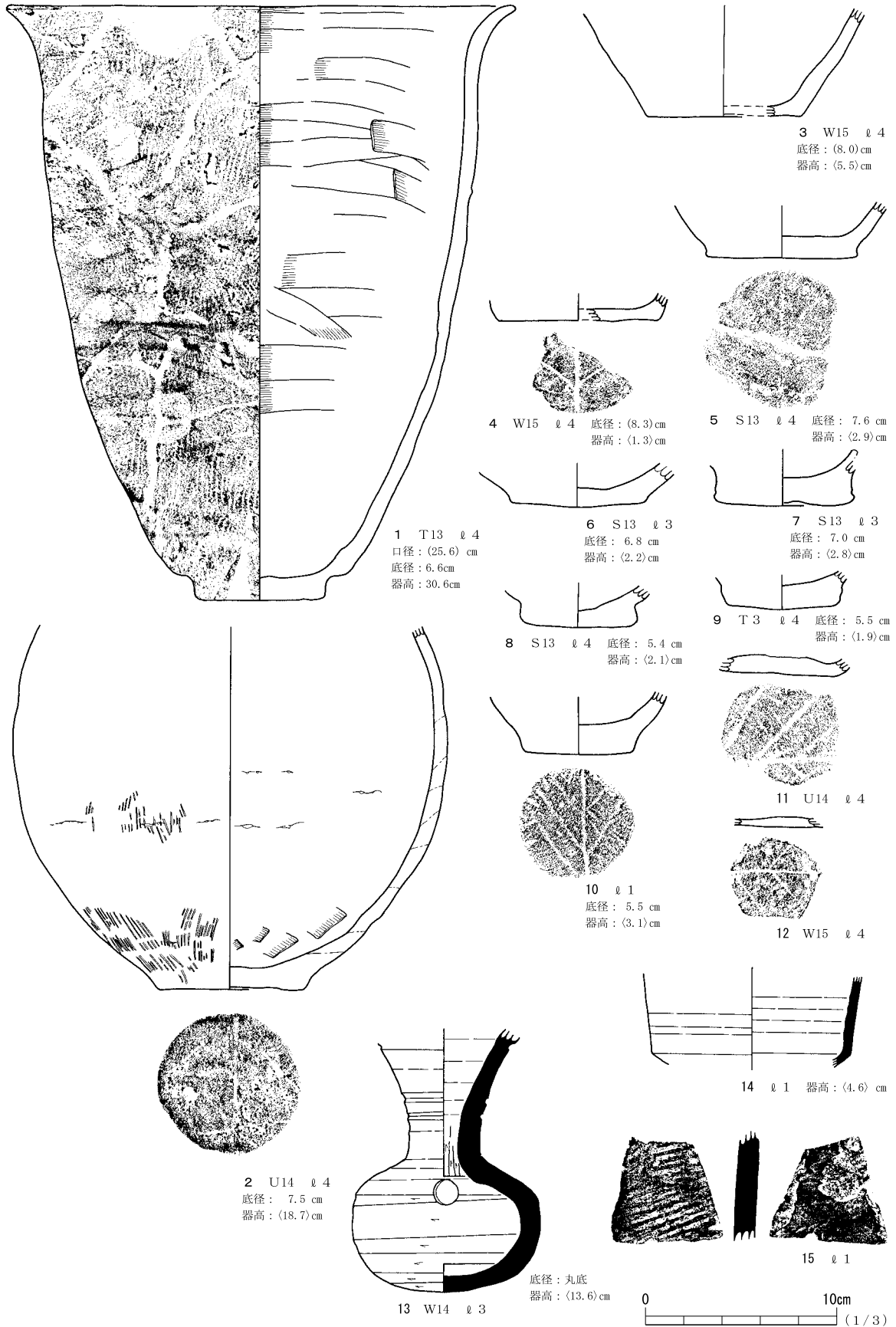


图34 1号沟迹出土土师器(2)·须惠器(1)

4は土師器甕類の口縁部資料である。いずれも口縁部が緩やかに外反する器形のものである。3の口縁部と胴部の境には緩やかな段を有する。器面の調整は、ともに口縁部において斜位のハケメが施される。

同図5・6は土師器甕で、いずれも胴部中位が膨らみ、口縁部は緩やかに外反する器形と推定される。口径は、5は19.7cm、6は18.0cmである。調整は、胴部外面はいずれもハケメが施されているが、口縁部では5は斜位のハケメが、6はヨコナデが施される。内面では、5は磨耗が激しいため観察できなかったが、6は口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。さらに、6の内面には粘土紐の接合痕が認められることから、成形は粘土紐の積み上げと考えられる。同図7は口縁部に最大径を有する土師器甕類であり、口縁部が緩く外反する。口径24.0cm、遺存高12.0cmを測る。口縁部と胴部の境には段を有する。外面の調整は、口縁部にハケメ調整後にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、口縁部から胴上部にかけてヘラケズリが施されている。

同図8～12は土師器甕類の口縁部または胴上部付近の資料である。口縁部と胴部の境に段を有するもの(9・10・12)が確認できる。胴部の外面調整はすべてハケメが施され、8の口縁部の調整は、ハケメが施される。13は体部中央に緩やかに膨らみをもち、口縁部は緩やかに外反する土師器甕類である。口径24.0cm、遺存高17.8cmを測る。外面の調整は、口縁部にハケメ調整後にヨコナデ、胴部にハケメが施される。内面は、口縁部から胴上部にヘラケズリが施される。

34図1は最大径を口縁部に有する大型の土師器甕である。平底から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は緩やかに外傾する器形を呈する。口径25.6cm、底径6.6cm、器高30.6cmを測る。外面の調整は、口縁部にハケメ調整後にヨコナデ、胴部にハケメが施されている。内面は、全体にヘラケズリが施されている。同図2は卵形の体部を有する大型の土師器球胴甕であると思われる。底径7.5cm、遺存高18.7cmを測る。底部には木葉痕が認められる。外面の調整はハケメが施され、内面はヘラケズリが施されている。さらに、内面には粘土紐の接合痕が認められることから、成形は粘土紐の積み上げと考えられる。

同図3～12は土師器甕類の底部の破片資料である。底部の形態には様々なものがみられる。底部外面には木葉痕が観察できるものもみられる(4・5・10・11・12)。全体的に摩滅が激しく、器面の調整は不明瞭である。

同図13は須恵器甕である。ロクロ成形であり、口縁部の一部は欠損しているが、全体の約90%が遺存する良好な資料である。丸底であり、遺存高は13.6cmを測る。外面は白灰色を呈し、表面は部分的に剥落しており、焼成は不良である。胴部は半球形を呈し、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる。頸部の上方に2条の沈線が巡り、口縁部付近にも1条の沈線が巡るのが観察できる。胴上部に径1.3cm程の小孔が一つあり、竹管等を挿入したと思われる。外面の調整はロクロナデが施され、内面もロクロナデであるが、頸部付近はヘラケズリによる調整が認められる。同図14は須恵器のロクロ成形であり、外面全体には鉄分の付着が認められる。胴部下半で大きく屈曲する。破片資料であるため器種は不明である。同図15は須恵器甕の胴部破片資料である。外面に

第1節 溝 跡

は平行タタキ目痕、内面にはアテ具痕が確認できる。

木製品 (図35 写真26)

35図1は、T13グリッドのℓ7から出土した木製品である。一方端に尖端加工が認められ、杭と判断される。加工の長さは先端から9.0cmほどを測り、5方向からの削りが認められる。樹種はクリである。全長51.7cmを測り、直径は7.5cm前後を呈する。下端から30.5cm程までは木肌が綺麗に観察できるが、これより上の部分では表面の風化が顕著である。木肌が綺麗に残っている部分が、土中に埋まっていた部分と推測している。

なお、本溝跡のℓ7から出土した自然木のいくつかについて、樹種同定の分析を行った。結果、自然木は全てマツ属複維管束亜属(ニヨウマツ類)であった。複維管束亜属は、陽地などに先駆的に生育する種類であることから、溝周辺の日当たりのよい場所に複維管束亜属が生育していたことが推定される。

ま と め

本遺構は立地状況と遺構形態、堆積状況から、自然流路跡と考えられる。しかし、堆積土ℓ5が示すように、一部人為的に掘り込んだ形跡もあり、後述する2号溝跡と同様に、排水溝か区画溝に使用されていた可能性もある。

本遺構の開口時期は、出土遺物より弥生時代中期には機能していたものと判断される。2号溝跡には確認できない土師器・須恵器の廃棄・投棄も認められることから、多期間にわたって機能していたことが窺われる。奈良・平安時代には、本遺構の上部に木炭窯が構築されていることから、この時期までは完全に埋没していたであろう。

なお、2・3号溝跡も合わせて、本遺構の経緯については、第3編の考察において詳述したい。

(吉田・稲村)

2号溝跡 SD2

遺 構 (図36 写真7・8)

本遺構はS20・21、T20～22、U20～22、V20～22、W20～22、X20～22、Y20・21、Z19～21グリッドに位置し、西から東に向かう緩やかな斜面に立地する。検出面はLIV上面である。1号溝跡とはほぼ併行するが、東側では、その間隔を徐々に縮める様相を呈し、調査区東端付近で1号溝



図35 1号溝跡出土杭

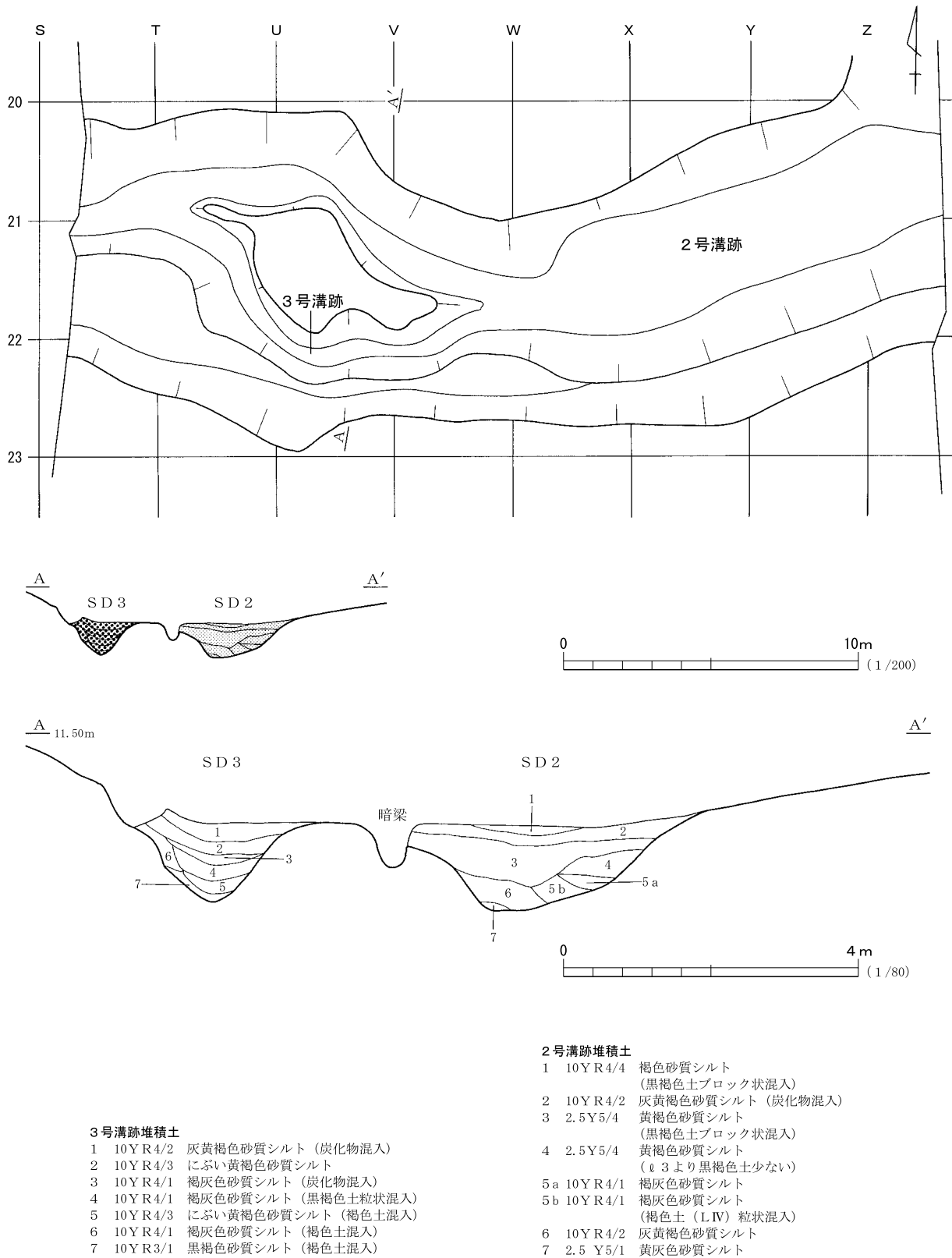


図36 2・3号溝跡

第1節 溝跡

跡と合流するものと思われる。後述する3号溝跡とはT21グリッド付近で分流し、V21グリッド付近で再合流する。遺物の出土状況から同時期の遺構と考えられる。また、本溝跡は1号土坑と重複し、遺構の切り合い関係より本溝跡の方が古い。

遺構内堆積土は7層に分層される。これらの層は全て流水による自然堆積と考えられる。全体的に砂質土を基調としており、比較的堅く締まっている。ℓ1・ℓ3・ℓ4は黒褐色土塊を含んでいるためくすんで見える。ℓ5は褐灰色の砂質土であるが、下層において基本土層LIVに相応する褐色土が粒状に混入することから、さらに2層に細分した。

本遺構は主軸方向N87°Eで、西から東へ地形に沿うように若干蛇行しながら走る。本遺構の全体の規模は東西両側が調査区外に延びているため不明である。調査区内では、全長29m、開口部最大幅4.5~7.0m、検出面からの深さは最大1.1mを測る。底面は西側で溝が二股に分かれ蛇行するためかなり凸凹が見られるが、東側は比較的平坦である。調査区内での底面の比高は最大で2mを測る。側面は北辺では緩やかに立ち上がるが、南壁の立ち上がりは比較的急である。遺構の断面形は、ほぼ逆台形状を呈する。

遺物 (図37~44 写真11・17・18・24・25)

溝の堆積土中より縄文土器片5点、弥生土器片503点、石器35点が出土した。全体的に土器片は摩滅が激しい。以下、特徴的なものだけを図示し、報告する。

縄文土器 (図37 写真11)

縄文土器は、5点ともℓ6から出土した。その内の3点について図示した。37図1~3は、羽状縄文が施される粗製深鉢の胴部資料である。土器は全体的に摩滅が激しくもろい。

弥生土器 (図38~40 写真17・18)

弥生土器は、本溝内堆積土より、破片総数は503点が出土した。そのうち47点について図示した。土器は全体的に摩滅が激しい。器種には、甕・壺・鉢等が確認された。以下、各出土層位ごとに記述する。

ℓ6出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は104点である。ほとんどの破片は摩滅が激しい。図示したものは4点である(38図1~4)。以下、資料に沿って記述する。

38図1は甕の口縁部資料である。口縁部は短く外反する形態であると思われる。外面はナデ調整が施され、口唇部には縄文が施される。同図2は器面に縄文が施されており、壺または甕の胴部と思われる。同図3・4は底部資料である。3は鉢または壺、4は甕と思われる。

3は底部と胴部の境には数条の平行沈線が巡り、ほぼ円筒形に立ち上がる器形である。4は底部側縁

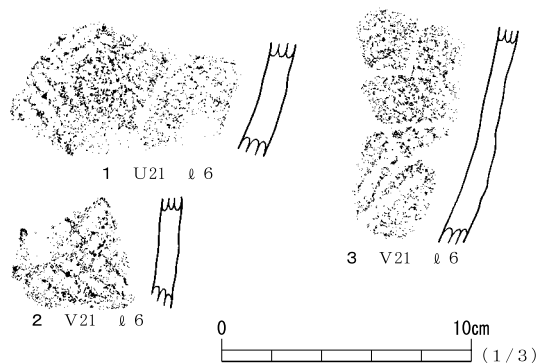
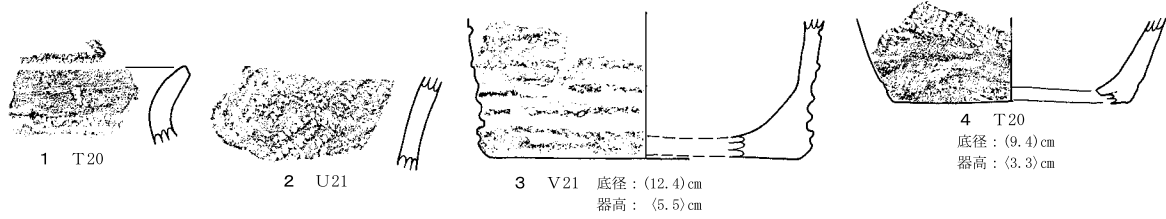
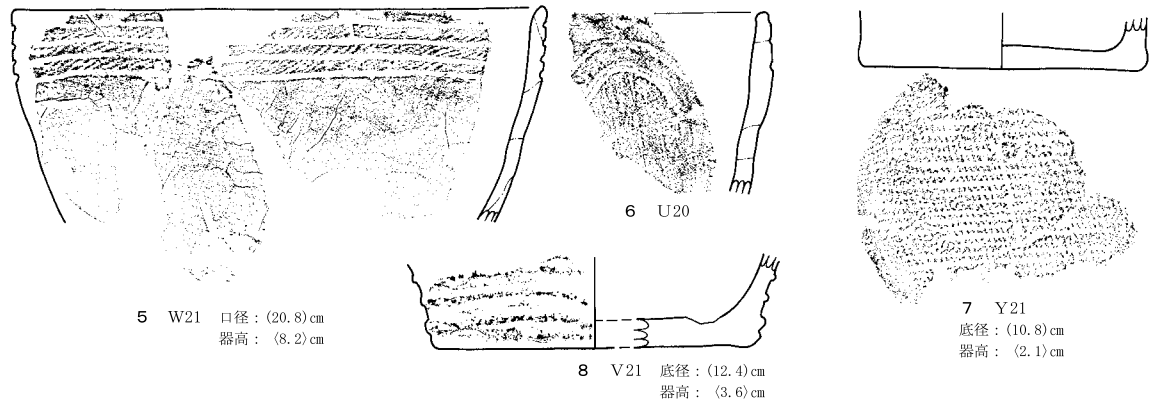


図37 2号溝跡出土縄文土器

ℓ 6 出土弥生土器



ℓ 5 出土弥生土器



ℓ 4 出土弥生土器

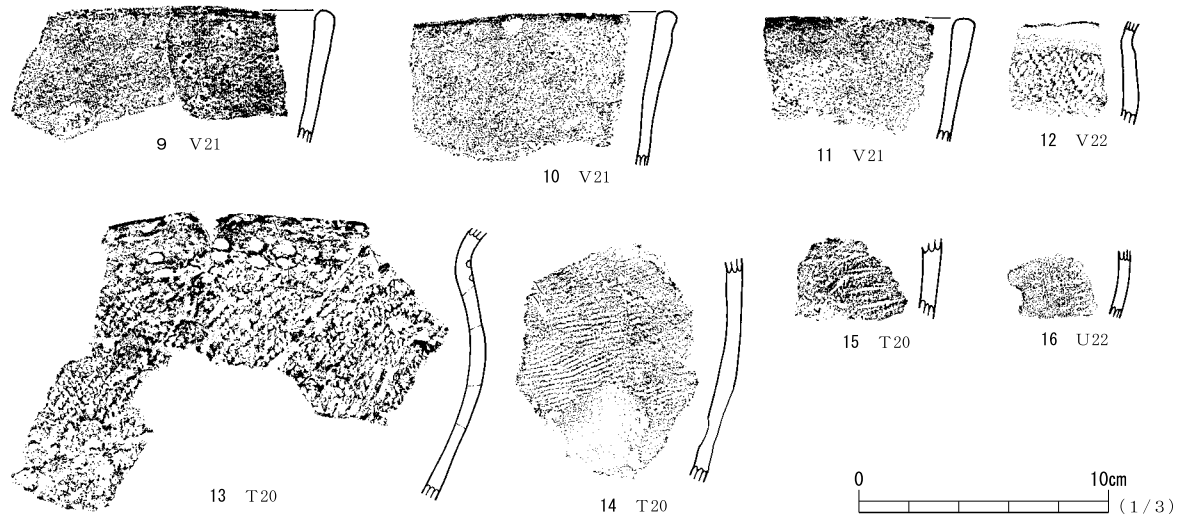


図38 2号溝跡 ℓ 6・5・4 出土弥生土器

から直線的に外傾する器形である。底径は、3は12.4cm、4は9.4cmである。

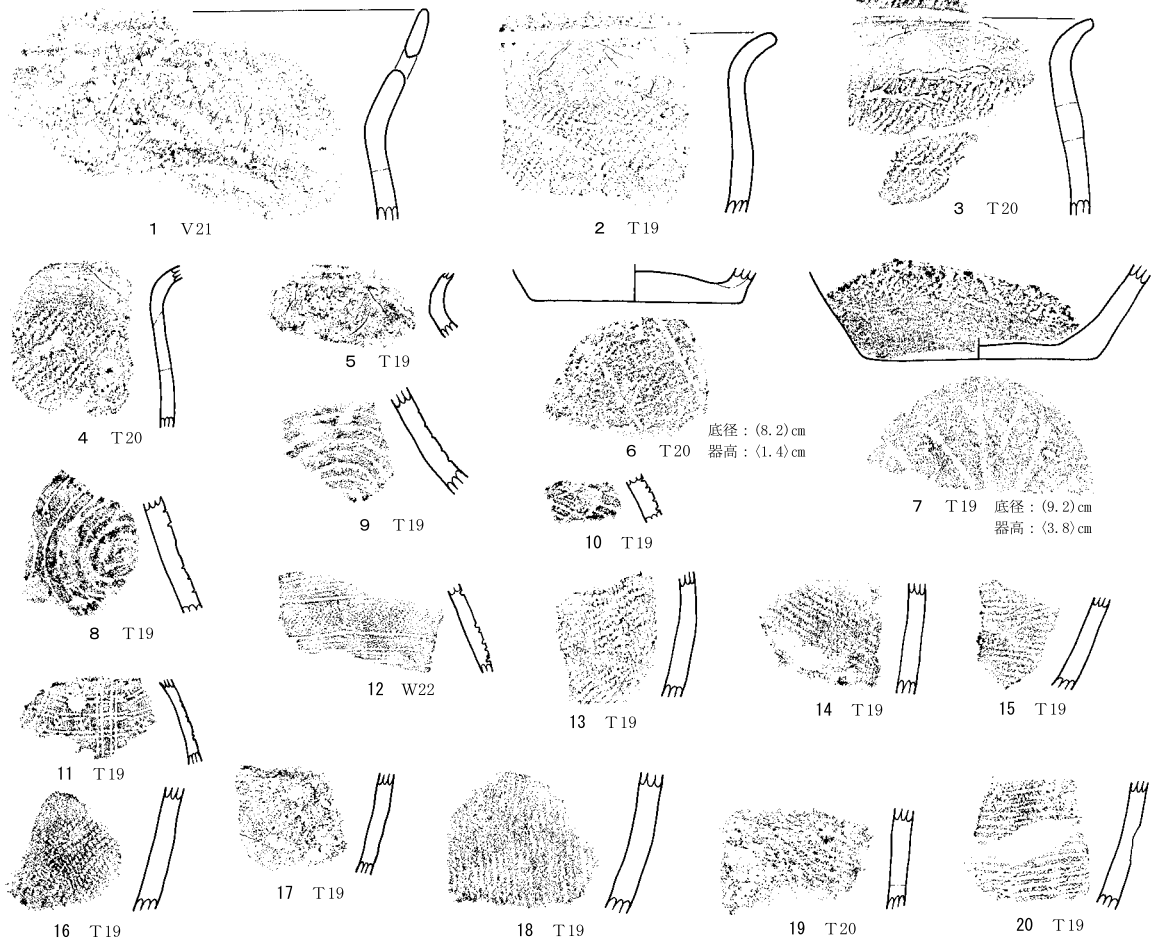
ℓ 5 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は120点である。これらのほとんどは摩滅が激しい。図示したものは4点である(38図5～8)。以下、資料に沿って記述する。

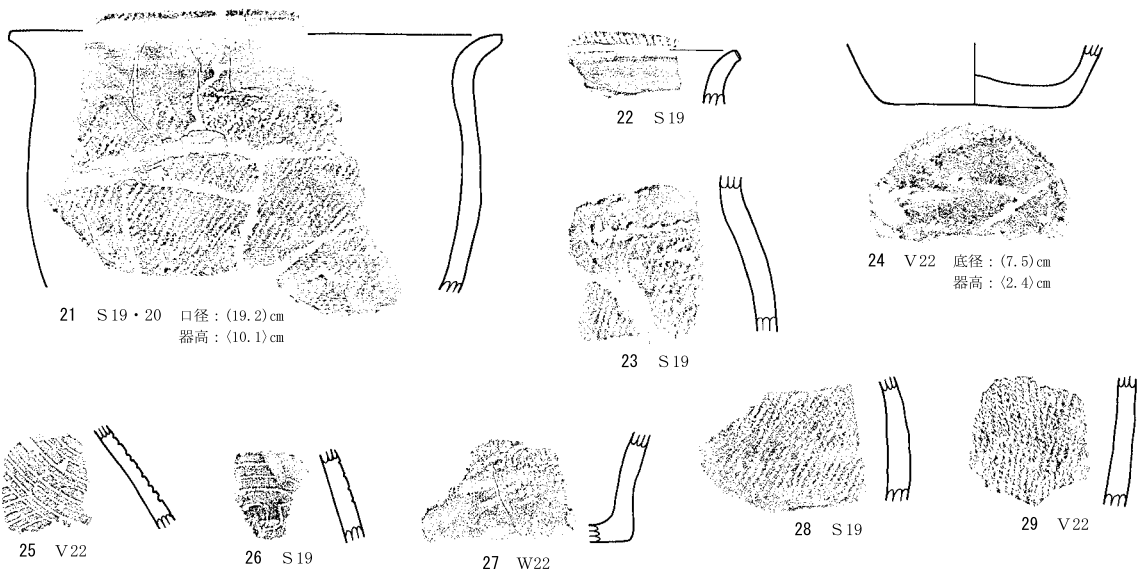
38図5・6は鉢の口縁部である。5は、口縁部から胴部にかけて破片から復元図示した。推定口径20.8cm、遺存高8.2cmを測る。口縁部がわずかに内湾し、胴部は直線的である。口縁部には4条の沈線が巡り、沈線間には縄文が施されている。6は胴部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に立ち上がる形態である。胴部には、細い沈線で文様を表出しているが、小破片であるため文様形態は不

第1節 溝跡

ℓ 3 出土弥生土器



ℓ 2 出土弥生土器



0 10cm (1/3)

图39 2号沟迹 ℓ 3・2 出土弥生土器

明である。

同図7・8は底部資料である。7は甕、8は鉢または壺と思われる。7の底面には平織り状の布圧痕が確認できる。8は底部と胴部の境に数条の沈線が巡り、胴部はほぼ垂直に立ち上がる。底径は、7は10.8cm、8は12.4cmを測る。

④ 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は76点である。ほとんどの破片は摩滅が激しい。図示したものは8点である(38図9～16)。以下、資料に沿って記述する。

38図9～11は甕の口縁部資料である。いずれも長頸で、口唇部ほど肥厚である。内外面ともにミガキが施される。同図12・13は甕の胴上部の資料である。ともに胴部と口縁部の境にくびれをもち、口縁部は短く外反すると思われる。器面にはともに単節縄文が施される。13の胴部と口縁部の境には、二列の連続する刺突状の列点文が観察される。同図14～16は壺または甕の胴部資料である。14には単節縄文、15・16には撚糸文が施される。

③ 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は148点である。ほとんどの破片は摩滅が激しい。図示したものは20点である(39図1～20)。以下、資料に沿って記述する。

39図1～5は甕の口縁部資料である。1は頸部が長く「く」の字状を呈し、口縁部は長く、やや受け口状になる形態である。口縁部に径0.8cm程度の穿孔が確認される。2～5は胴部と口縁部の境にくびれをもち、口縁部は短く外反する。2と3の口唇部には縄文が施される。また、5の外表面には赤色塗彩が認められる。同図6・7は底部資料である。ともに壺または甕の底部と思われる。7は底部側縁から直線的に外傾する形態である。底面には6・7ともに木葉痕が観察される。6の胴部外面には煤状の付着物が認められる。底径は、6は8.2cm、7は9.2cmである。同図8～12は壺の胴上部資料である。いずれも頸部から胴上部にかけての土器片であり、8～11は線間幅の狭い半截竹管状の工具により文様を描出している。施文文様は、8・9は渦文もしくは円文であり、10が重菱文もしくは山形文、11は格子文であると思われる。12は平行沈線が施され、沈線の単位間に縄文が施されている。同図13～20は、壺または甕の胴部資料である。13～16には単節縄文、19には撚糸文、20には附加条縄文が施されるが、他は摩滅が激しいため特定は困難である。また、17の外表面には赤色塗彩が認められる。

② 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は48点である。弥生土器のほとんどは摩滅が激しく、図示したものは9点である(39図21～29)。以下、資料に沿って記述する。

39図21は、甕の口縁部から胴上部にかけて破片から復元図示した。推定口径19.2cm、遺存高10.1cmである。胴上部が僅かに膨らみ、胴部と口縁部の境にくびれをもち、口縁部は短く外反する。口縁部にはナデが施され、胴部には単節縄文が施される。口唇部にも縄文が施される。

同図22は甕の口縁部資料である。口縁部は短く外反する。外面はナデが施され、口唇部には縄文

第1節 溝 跡

が押捺される。同図23は甕の胴上部資料である。口縁部と胴部の境には綾絡文が観察される。同図24は甕の底部資料である。底径7.5cmを測る。胴部は底部側縁から直線的に外傾する形態である。外面には煤状の付着物が認められ、全体的に二次加熱を受け赤変している。底面には木葉痕が観察される。

同図25・26は壺の胴上部の資料である。沈線のみで文様が表出されている。ともに渦文もしくは円文と思われる。同図27は壺の底部から胴下部にかけての資料である。器面全体に赤色塗彩が認められ、捺糸文が施される。同図28・29は器面に単節縄文が施される壺または甕の胴部資料である。

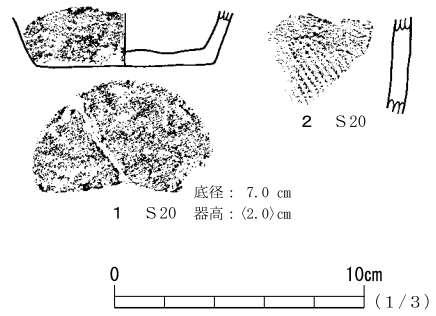


図40 2号溝跡 1 出土弥生土器

① 1 出土弥生土器

本層から出土した弥生土器は7点である。ほとんどの破片は摩滅が激しい。図示したものは2点である(図40)。以下、資料に沿って記述する。

40図1は壺または鉢の底部資料である。底径7.0cmを測る。胴部は底部側縁から直線的に外傾する。底面には平織り状の布圧痕とナデ状の調整が観察される。同図2は器面に単節縄文が施される壺または甕の胴部資料である。

石 器 (図41~44 写真24・25)

① 6 出土石器

本層からは、石器3点が出土した(図41)。41図1は石錐と思われる。全体的に稚拙な作りで、先端部は錐状をなしていない。使用痕跡がほとんど認められないため、製作失敗品・未製品かも知れない。同図2は、石庖丁の欠損品である。残存部が僅かであるが、背部と刃部が湾曲する杏仁状を呈するものと思われる。1次調整剥離→敲打→研磨により製作され、裏面では1次調整の際の放射状裂痕が残存している。紐孔は敲打後に回転穿孔されている。刃部には使用による磨耗痕跡が観察される。

これらの石器の時期は、弥生時代中期前葉に比定されると推測している。

① 4 出土石器

本層からは、石器8点が出土した(42図)。42図1は剥片である。垂角礫の端部に打撃を加え、自然面を残した状態の縦長剥片を採取している。同図2は上下側が欠損しているが、両刃磨製石斧の基部資料と判断した。前主面側が平坦となる特徴を有している。1次整形→敲打→研磨により整形している。表面には1次整形時の剥離痕が残存している。

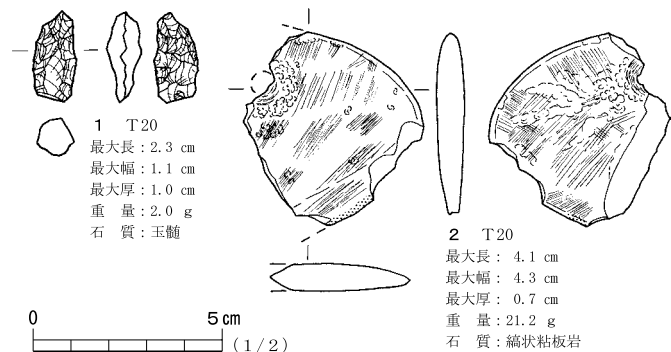


図41 2号溝跡 ① 6 出土石器

同図3は資料全体が磨滅しているが、

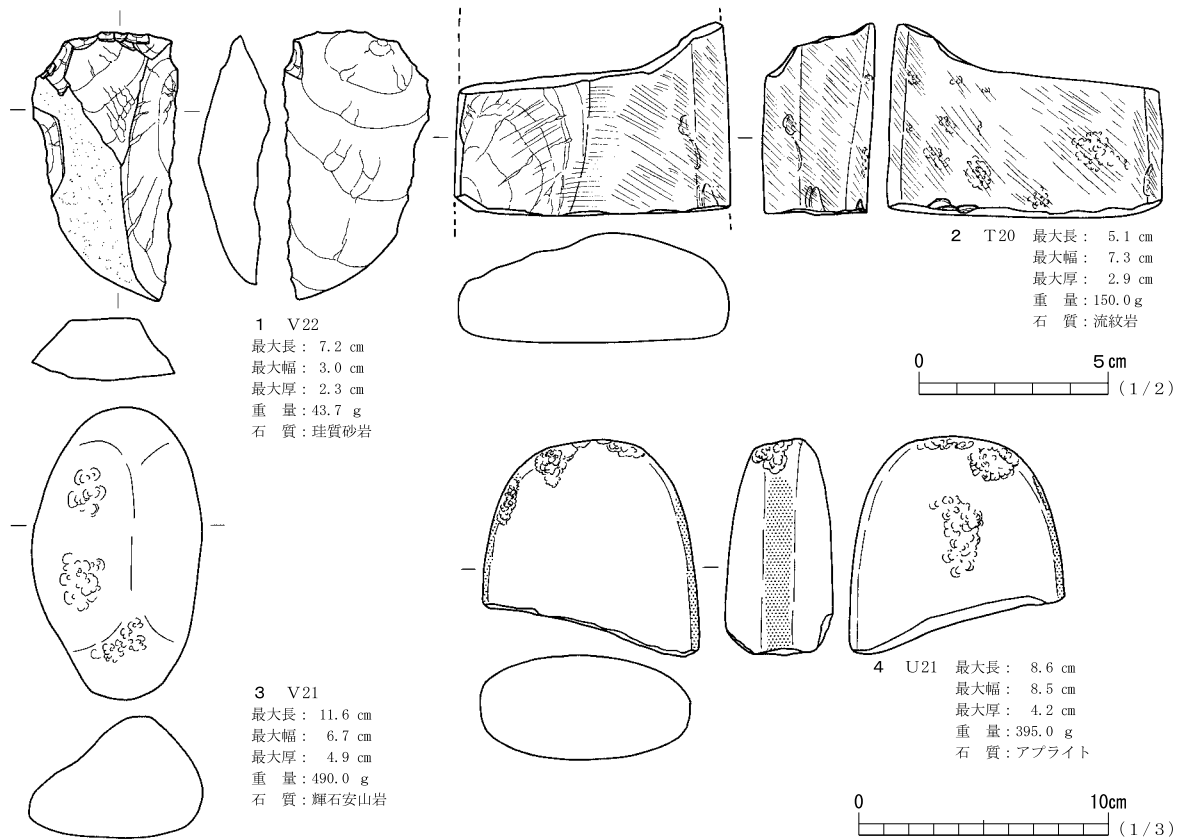


図42 2号溝跡の4出土石器

敲石と判断した。横断面形が不整三角形を呈する楕円礫の片面と端部に比較的粗い敲打痕が観察できる。

同図4は磨・敲石である。比較的扁平な楕円礫の側面に磨耗痕、先端部と裏面中央付近には敲打痕が認められる。

これらの石器の時期は、共伴した弥生土器が少ないものの、弥生時代中期前葉龍門寺式期に比定できるものと思われる。

③ 出土石器

本層からは、石器17点が出土した。抽出した遺物を図43に示した。43図1は柱状片刃石斧の基部資料である。刃部側が欠損しているが、横断形は隅丸正方形に近く、両側面がほぼ平坦となっている。資料全体に丁寧な研磨痕が観察でき、1次整形時の剥離痕や敲打痕が残存していない。先端部や欠損部付近に見られる剥離痕は研磨痕より新しいため、基部再調整あるいは、欠損後の剥離痕と思われる。同図2は、太型蛤刃石斧である。基部が大きく欠損しているが、1次整形→敲打→研磨により整形されている。研磨は刃部周辺が非常に丁寧であるが、基部周辺では比較的粗く、敲打痕が顕著に残存している。刃縁には使用による斜め方向の線状痕が観察できる。

同図3～5は磨製石斧の欠損品あるいは製作失敗品である。3は、本遺跡で顕著に見られる前主面側が平坦となる両刃石斧の欠損品と思われる。敲打痕と研磨痕が観察できる。4は、欠損後に不定形石器として転用したものであり、側縁に微細剥離痕が認められる。遺存している状態から、3

第1節 溝跡

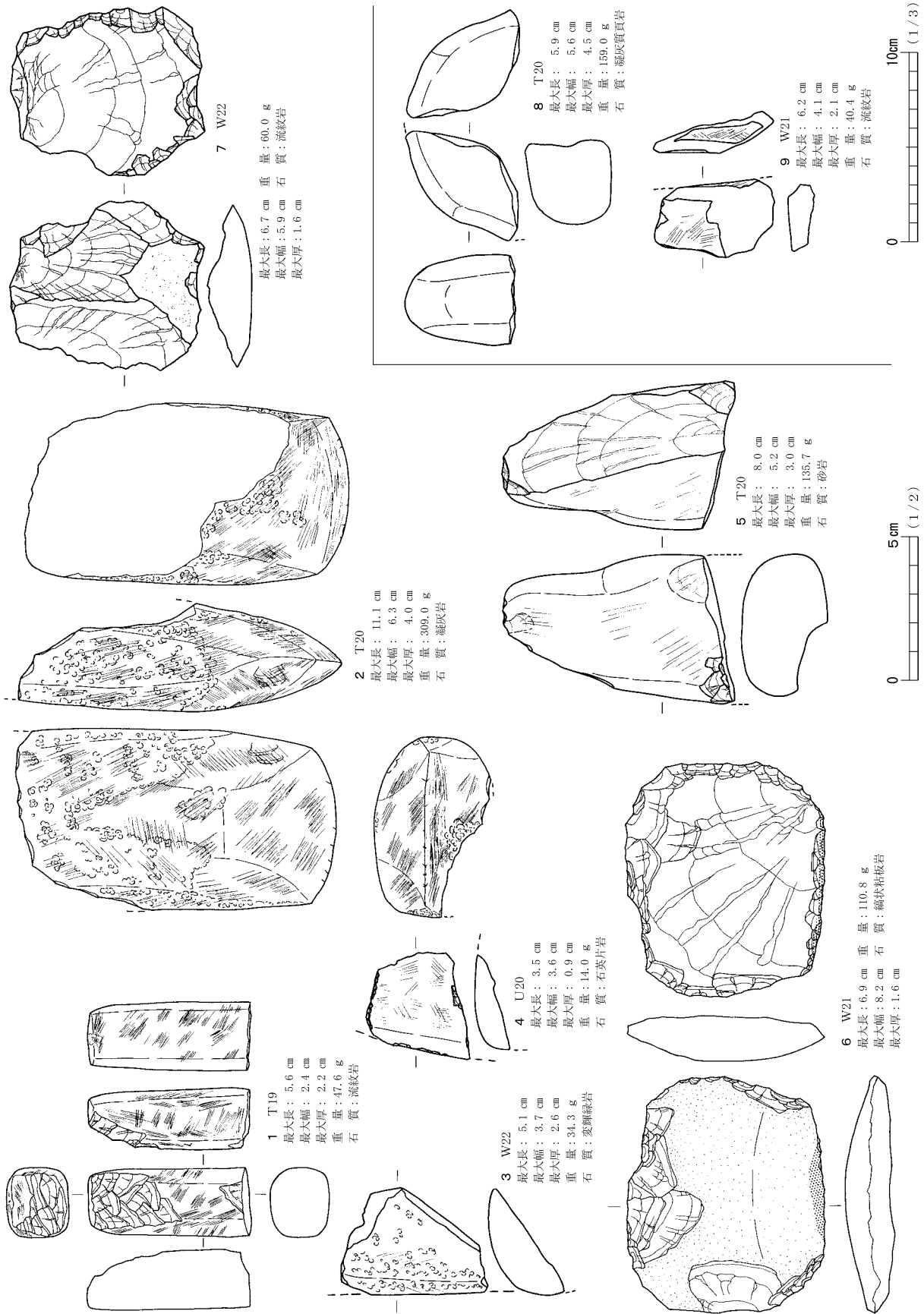


圖43 2号溝跡 l 3 出土石器

とは異なる石斧の可能性が高い。5は、自然礫の形状をそのまま利用して石斧を製作しようとしたが、製作途中で失敗した資料と思われる。部分的に剥離痕と敲打痕・研磨痕が認められる。欠損後、表面左下に小さな剥離、裏面に大きな剥離を加えている。

同図6は自然面の残る横長剥片を素材とした直縁刃石器である。表面両側縁と裏面縁辺部にのみ比較的細かな調整剥離を加えている。刃部には使用による磨耗痕が観察できる。同図7は、不定形石器と判断した。自然面が残る縦長剥片を素材とし、裏面側縁に細かな剥離を施している。

同図8は、全面が磨滅し大きく欠損しているが、垂角礫を素材とした磨石と思われる。同図9は砥石である。表面と側面のみが遺存しているが、いずれの面にも研磨作業による線状痕が観察できる。

これらの資料の時期は、出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期後葉桜井式期に比定されるものと思われる。

ℓ 2 出土石器

本層からは、石器7点が出土した。44図1は有孔石製品と思われる。比較的平坦な面を持つ石板状の礫に、回転作用による孔が穿たれている。用途不明な資料であり、その時期も供伴した弥生土器からは弥生時代中期後葉桜井式期と推測されるが判然としない。

まとめ

本遺構は立地状況と遺構形態、堆積状況から、自然流路と考えられ、調査区内をほぼ東西に貫流する。1号溝跡と同様に、排水溝か区画溝に使用されていた可能性が指摘できる。

本遺構の開口時期は、出土遺物より弥生時代中期には機能していたものと判断される。しかし、1号溝跡で確認されたようなFP（榛名ニッ岳伊香保テフラ）および土師器・須恵器の出土は確認されず、七世紀以前には完全に埋没していたと推測される。

なお、1・3号溝跡も合わせて、本遺構の経緯については、第3編の考察において詳述したい。

(吉田・稲村)

3号溝跡 SD3

遺構 (図36 写真7・8)

本遺構はS21・22, T21・22, U22, V22, W22グリッドに位置し、西から東に向かう緩やかな斜面に立地する。検出面はLIV上面である。2号溝跡とT21グリッド付近で分流し、南側に向かって弧状に走りながら、V21グリッド付近で合流する。遺物の出土状況から同時期と考えられる。

遺構内堆積土は7層に分層される。全体的に砂質土を基調とし、ℓ1～5はレンズ状堆積であることから流れ込みによる自然堆積と判断した。ℓ6・7は、堆積土中に基本土層LIVに相応する褐

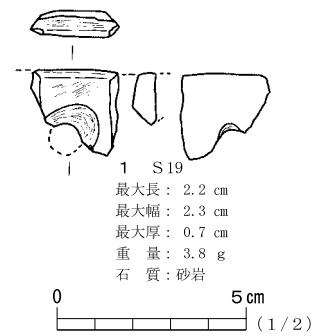


図44 2号溝跡ℓ2出土石器

第2節 木炭窯

色土が粒状に混入することから、本溝跡堆積以前の斜面からの流入土と判断した。

本遺構は西から東へ、南方へ向かって弧状に走る。本遺構は、V21グリッド付近で2号溝跡に結合される形で合流している。確認できた規模は、全長15m、開口部最大幅4.4m、検出面からの深さは最大1mを測る。底面は東に向かい緩やかに傾斜しており、調査区内における底面の比高は0.9mである。側面は全体的に緩やかに立ち上がり、断面形はU字状を呈す。

遺物 (図45)

本溝跡からは、堆積土中より弥生土器2点が出土している。これらは、 $\ell 4$ からの出土であり、これを図45に示した。以下、資料に沿って記述する。45図1は、壺または甕の胴部破片資料と考えられるが、明確には器種判別できないものである。器面には斜縄文が施される。同図2は壺または甕の底部資料である。底部側面が僅かに突出し、胴部は直線的に外傾する形態である。底径7.2cm、遺存高5.8cmである。器面には撚糸文が施される。底面には布目痕が観察される。

まとめ

本遺構は立地状況や遺構形態・堆積状況から、自然流路と考えられる。2号溝跡と分流・再合流し、その消長も2号溝跡と密接に関連している。

(山田・稲村)

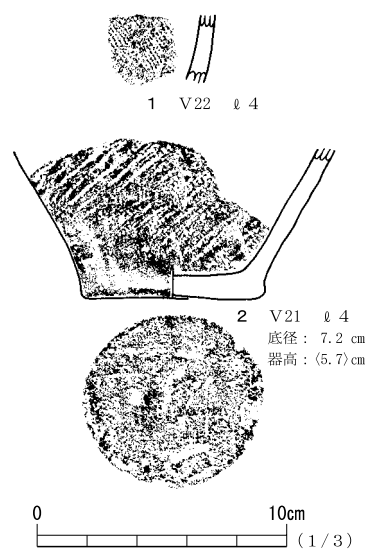


図45 3号溝跡出土弥生土器

第2節 木炭窯

1号木炭窯 SC1 (図46 写真9)

本木炭窯跡は、調査区の北東側、Z16~18およびA16・17グリッドに位置する。地形的には、本遺構の南側に位置する1号溝跡の、落ち込み状の緩斜面にほぼ直行するように作られている。遺構検出面は焼成室付近がLIV上面、作業場付近はSD1に堆積する $\ell 1$ 上面である。

遺構検出作業の際、調査区東際において炭化物が集中する楕円形状の広がりを確認し、その形状により木炭窯と判断したが、調査区外へ延びることから、路線工区内までの全体形を検出した後、記録等の処置をとって調査区外になる部分は再び埋め戻すことになった。木炭窯の全体形は焼成室と作業場からなる。精査ができたのは、調査区内にかかる作業場の西側一部である。よって本遺構の全容は不明である。

長方形を呈する木炭窯の焼成室は、等高線にほぼ直交するように造られ、その長軸方向はN26°Eを示す。検出面の規模は、奥壁から焚口までが約3.7m、最大幅は約1.7mである。奥壁の中央付近には直径約15cm程のピットが検出され、焼土が認められることから燃焼室の煙道であると判断した。壁面には、被熱による厚さ3~5cmの酸化面が観察された。

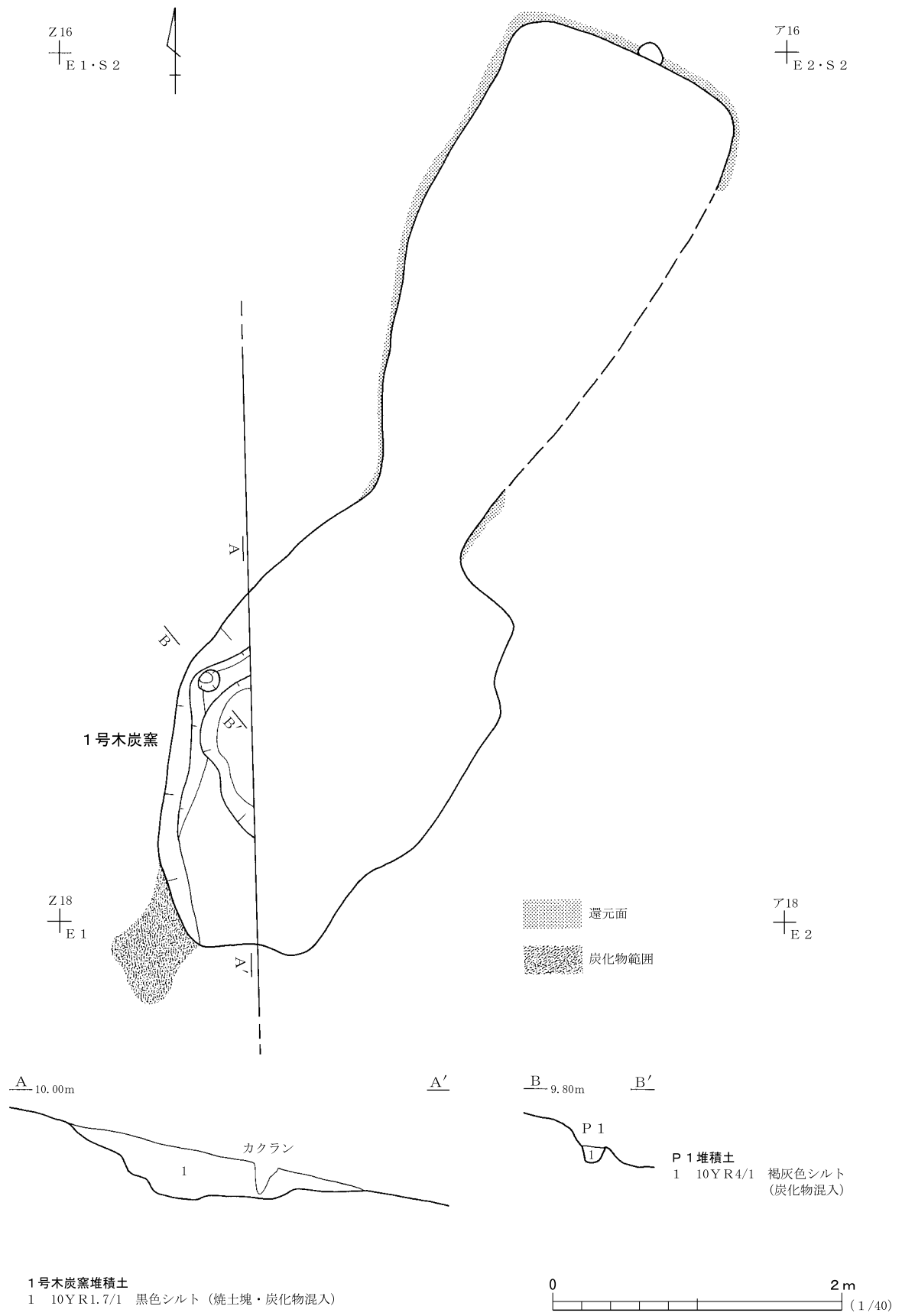


図46 1号木炭窯

第3節 土 坑

木炭窯の作業場は、焼成室同様、等高線にほぼ直交するように造られている。その形状は不整な楕円形であり、その長軸方向はN29°Eであり、焼成室の長軸より3°ほど東側にずれている。作業場の規模は、検出面で南北幅3.2m、最大幅は1.9mである。

作業場においては、調査区内にかかる遺構内西側一部において精査を行うことができた。周壁の立ち上がりは段状を呈するが、南側付近では段差は認められなくなる。底面は若干凹凸が認められ、検出面からの最大深は35cmを測る。作業場内堆積土は焼土塊や炭化物を混入する黒色土1層である。性状より、木炭窯操業後の燃焼室の廃土と判断した。

作業場内には西壁中央付近の壁際に小穴（P1）を検出した。直径約25cm、深さ12cmである。堆積土は炭化物を混入する褐灰色土1層である。性状により人為堆積と判断した。

出土遺物は作業場堆積土より、土師器片が1点出土したが、細片であり図示しなかった。内外面にケズリ調整が施される。器種は不明である。

本遺構は、検出面や出土した遺物などから、古代のものと推測している。 (山田・稲村)

第3節 土 坑

1号土坑 SK1 (図47 写真10)

本土坑は調査区南側の中央部、W20・21グリッドに位置する。重複する遺構は2号溝跡で、北側の落ち際堆積土内から検出され、土層状況より本土坑の方が新しい。検出面は基本土層LIV上面および溝跡堆積土ℓ1上面で、焼土・炭化物を含む黒色土の不整な楕円形のプランを検出した。

遺構内堆積土は2層に分層された。ℓ1は黒色シルトであり、斜面上位からの流れ込みが確認されることより、自然堆積と判断した。ℓ2は木炭粒・焼土粒が含まれていた。その性状により、土坑使用時に堆積したものと思われる。

平面形は長方形を呈し、その長軸方向はN73°Eである。規模は上端で長軸1.2m、短軸0.8mである。深さは、検出面から最深28cmを測る。周壁は底面から緩かに外傾しながら立ち上がる。西壁と南壁及び北壁の一部には被熱による厚さ1～3cmの酸化面が観察された。遺物は出土しなかった。

本遺構は、壁面が焼土化していることと、底面上には焼土・炭化物層が堆積していたことから判断して、木炭焼成土坑の可能性が考えられる。なお、出土遺物がないため使用時期を限定し得ないが、検出面や遺構内堆積土、多量の炭化物粒や焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、古代のものと推測している。 (山 田)

2号土坑 SK2 (図47 写真10)

本遺構は、調査区東側南寄りのZ22グリッドに位置する土坑である。2号溝跡南辺の落ち際に立地する。遺構検出面は基本土層LIV上面であり、焼土・炭化物を含む黒褐色土の不整な楕円形のプランを検出した。本遺構と重複する遺構はない。

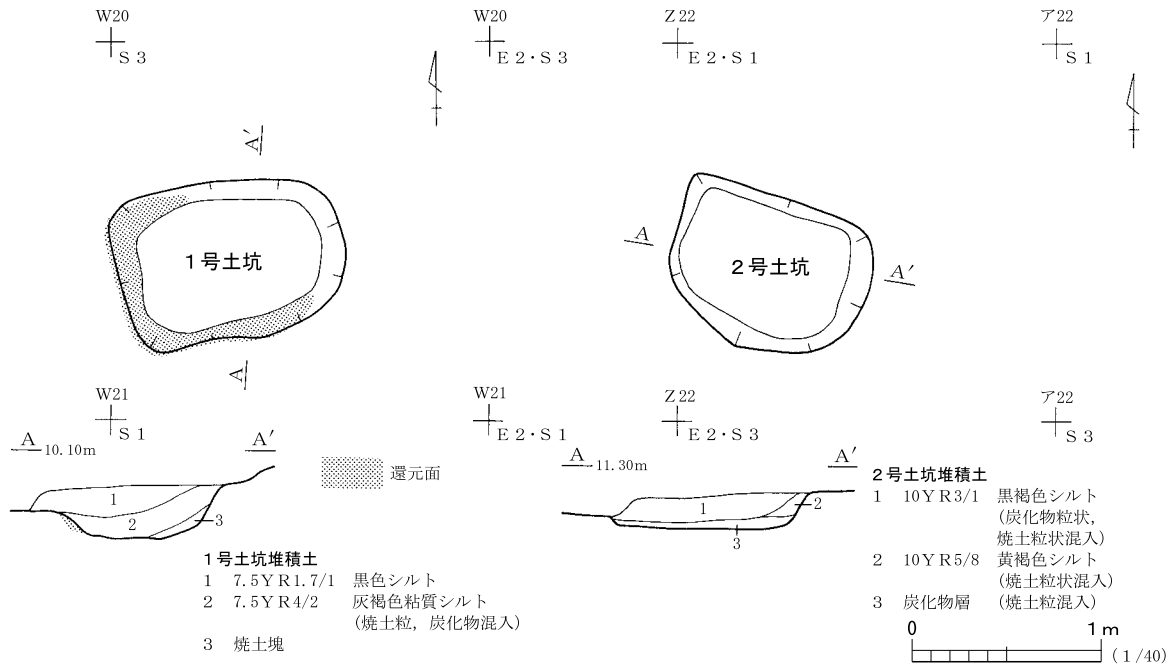


図47 1・2号土坑

遺構内の堆積土は3層に分層した。ℓ1は炭化物粒・焼土粒を含む、黒褐色土である。ℓ2は基本土層LIVに相当すると思われる黄褐色土であり、焼土粒を含む。その性状により壁の崩落土の様相を呈する。ℓ3は焼土粒を若干含む炭化物層である。堆積土の性状により土坑使用時の堆積土であると思われる。

本遺構の平面形は、東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、その長軸方向はW18°Nである。現況で確認できた壁上端での規模は、東西方向の長軸長1.05m、それに直交する短軸長0.8mを測る。

検出面からの深さは、最大で20cmを測る。底面は基本土層LIV上に形成され、ほぼ平坦である。壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。なお、本遺構からの出土遺物はない。

本遺構は、壁面が焼土化していることと、底面上には焼土・炭化物層が堆積していたことから判断して、木炭焼成土坑の可能性が考えられる。なお、出土遺物がないため使用時期を限定し得ないが、遺構内堆積土中に多量の炭化物粒や焼土粒の集積がみられることから古代の木炭焼成土坑に極めて類似すると考えられる。(稲村)

第4節 遺構外出土遺物

(図48 写真26)

本遺跡の遺構外からは石器1点が出土した。48図1は、扁平な楕円礫の表裏面及び側面に敲打痕と研磨痕が認められる。砥石であろうか、石種が不明な資料である。(吉田)

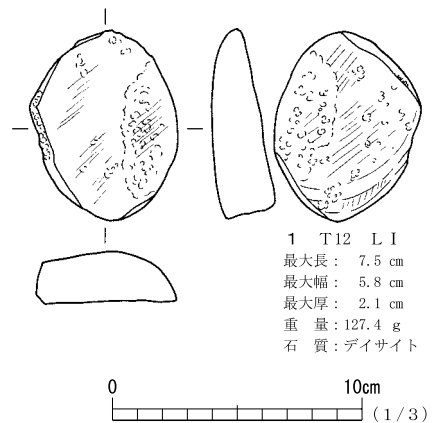


図48 遺構外出土遺物

第3章 柴迫古墳群の遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑15基、焼土遺構2基、塚跡1基、道跡2条、階段状遺構2か所である。出土した遺物は、主に弥生時代中期に比定できる弥生土器片約1,009点、当該期の石器片65点であり、この他、陶器片7点、粘土塊12点、銅銭9点などがある。遺構の時期は、主として弥生時代中期のものであり、この他、古代に比定できる焼成土坑、近世に比定できる土坑墓群、道跡、階段状遺構、時期不明の塚跡、焼土遺構などがある。

今回の1次・2次調査で確認できた遺構の分布を図7に示した。また、今回の調査において、北接する柴迫A遺跡と調査区が連続することから、柴迫A遺跡2号溝跡の南辺付近に当たる23グリッドラインを境にして、本遺跡と柴迫A遺跡とを区分することにした。以下、今回検出した遺構の時期と、その分布について概述する。

弥生時代に比定できる遺構は、4軒の竪穴住居跡（1～4号竪穴住居跡）と4基の土坑（3・9・14・15号土坑）である。ともに東向き丘陵斜面が比較的緩やかになった緩斜面上及びその下方に位置する平坦面上に構築される。竪穴住居跡は、出土遺物により更に2時期に細分でき、中期中頃に比定できる2軒の竪穴住居跡（1・4号竪穴住居跡）は、丘陵裾部の平坦面に位置するのに対し、中期後半に比定できる2軒の竪穴住居跡（2・3号竪穴住居跡）は、丘陵の緩斜面上に形成されている。

古代に比定できる遺構は、6基の土坑（1・2・4～6・13号土坑）である。これらは東向きの丘陵斜面上及びその裾部に位置する平坦面上に構築されている。時期を特定付ける資料がないため不明であるが、検出面や遺構内堆積土、多量の炭化物粒や焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、おおよそこの時期に相当するものと判断している。

近世に比定できる遺構は、5基の土坑（7・8・10～12号土坑）と、道跡及び階段状遺構がある。5基の土坑は全て丘陵裾部に集中して構築されており、堆積土中に骨片を含むことと、出土遺物よりこれらの土坑は、近世の土坑墓と判断している。道跡及び階段状遺構は、前述した基本土層LⅡ除去段階に検出され、今回検出した遺構の中で最も新しいものである。丘陵北側の緩斜面上及び東側斜面裾部を沿うように道跡が巡り、道に付随するような位置に階段状遺構が構築されることから、これらは一連の関連性をもって築かれたものであると判断している。

この他、丘陵頂部で確認された塚跡は、明確な時期は不明であるが、前述した道跡や階段状遺構と密接に関連していたと思われ、おおよそこの時期に相当するものと判断している。しかし、塚の位置する崖面には、本笑和田横穴墓群が存在することから（2002『相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ』）、これら横穴群との関連を考慮する必要性もある。また、塚の盛土を除去した後に検出された2基の焼土遺構は、出土遺物は認められなかったため、時期は不明である。（稲村）

第1節 竪穴住居跡

1号住居跡 S I 1

遺構 (図49 写真5・6)

本遺構は、調査区南東側のY30・31, Z30・31グリッドに位置し、西側丘陵の斜面がやや緩やかになる平坦面上に立地する。基本土層LIV上面で、遺物が集中する褐色土の隅丸形状の範囲を確認した。本住居跡と重複する遺構はない。西側5.0mには2号住居跡が位置し、東方向に約4.0mの位置には、4号住居跡が存在する。

遺構内堆積土は褐灰色土を粒状に含みや粘性のある褐色土1層である。その性状により、西方斜面からの流れ込みによる自然堆積土と判断している。

本住居跡の平面形は、南北方向に長軸をもつ不整な隅丸長方形であり、その長軸方向はN5°Eである。東辺中央付近では、東側へ若干突出しており、南西隅付近では、若干西へ膨らむ。現況の壁上端での規模は、南北長4.8m、東西長4.2mを測る。床面は基本土層LIV上に形成され、ほぼ平坦である。明確な床面の踏み締まりは確認できなかった。壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。壁高は最大10cmで、全体的に掘り込みは浅い。

本住居跡内の壁際や床面中央付近でピットを10個検出した。全て半截し、内部の堆積状況と断面の状態を確認した。ピットの平面形はほぼ円形を基調とする。直径は、P3・5・7・9が約30cm程と大きい、他は20cm前後である。床面からの深さは、P8では25cmを測るが、他は15~20cm前後のものがほとんどである。断面の形状は全てU字状を呈する。ピット内堆積土は、P3・5・9が暗褐色土であるが、他は全て黒褐色土である。P3・5・9には、層中に基本土層LIVに相応すると思われる黄褐色土が粒状に含んでおり、堆積土も同じであることから、これらのピットは同時に埋没した可能性が高い。P7・10には、炭化物を含む。以上のように、これら10個のピットは、形状は類似するものの、その埋没状態には相違が見られる。堆積土の状況によりいくつかの変遷が考えられる。また、これらのピットの配置は不規則であり、明らかに柱穴と断定できるものは確認されなかった。

なお、本住居跡内には、ピットの他に、炉跡などの住居内施設は確認されなかった。

遺物 (図50 写真20・42)

本遺構からは、弥生土器47点、石器4点が出土した。全て遺構内堆積土 ℓ 1からの出土である。全体的に弥生土器は摩滅が激しい。そのうちの残りのよい9点を図示した。以下、資料に沿って記述する。

50図1は鉢の口縁部である。3条の平行直線文が巡り、内外面ともに研磨されている。2は壺の胴上部資料である。沈線手法による四角文が施され、地文には附加条縄文が施される。3~5は弥生土器の胴部の破片資料である。破片であるため器種の特定は困難である。地文には撚糸文を用いたもの(4)や、単節縄文のもの(3・5)が認められる。6は小型鉢の底部資料である。胴部は底部側縁から直線的に外傾する。底径5.0cm、遺存高2.0cmである。底部には木葉痕が認められ、内

第1節 堅穴住居跡

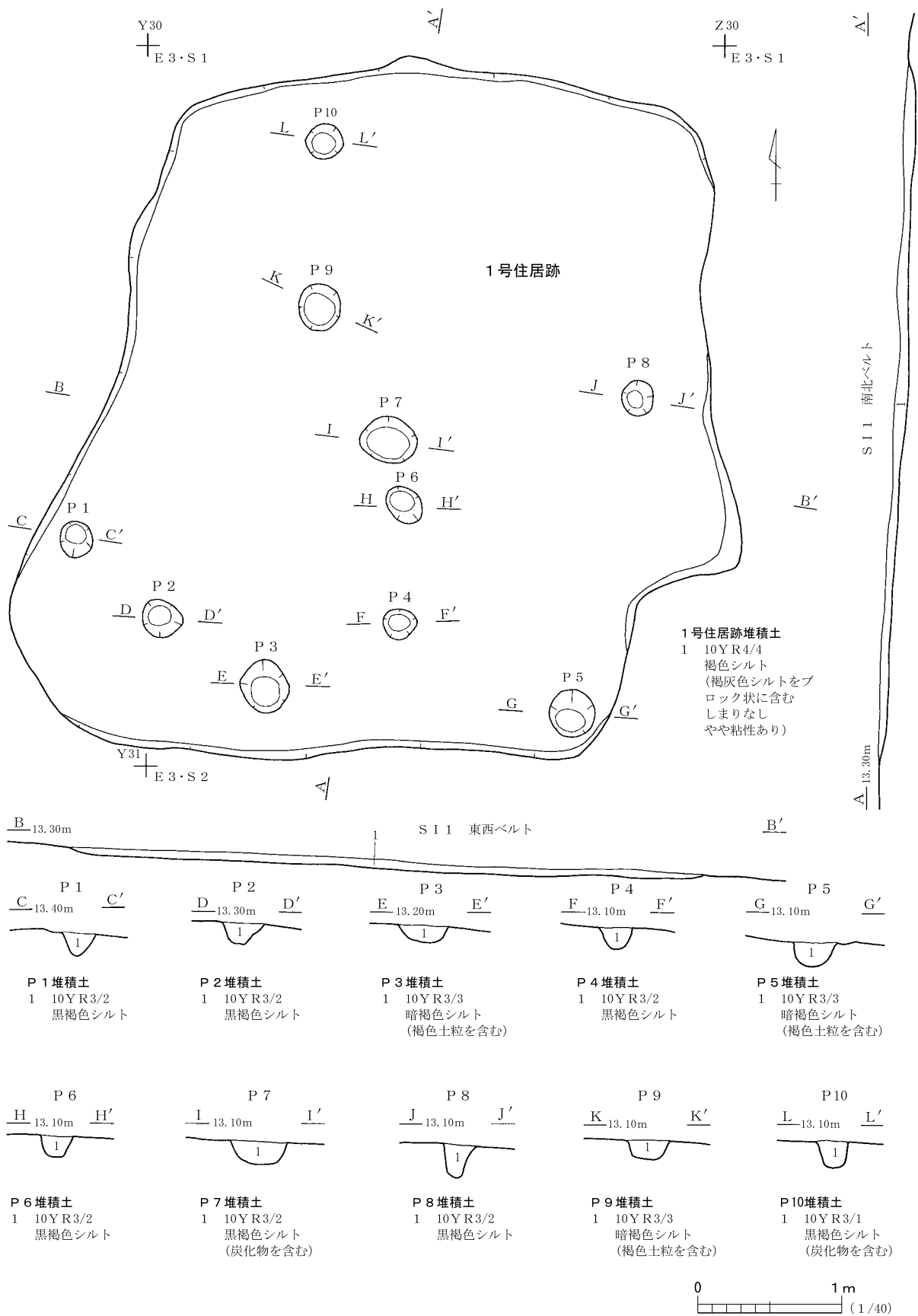


図49 1号住居跡

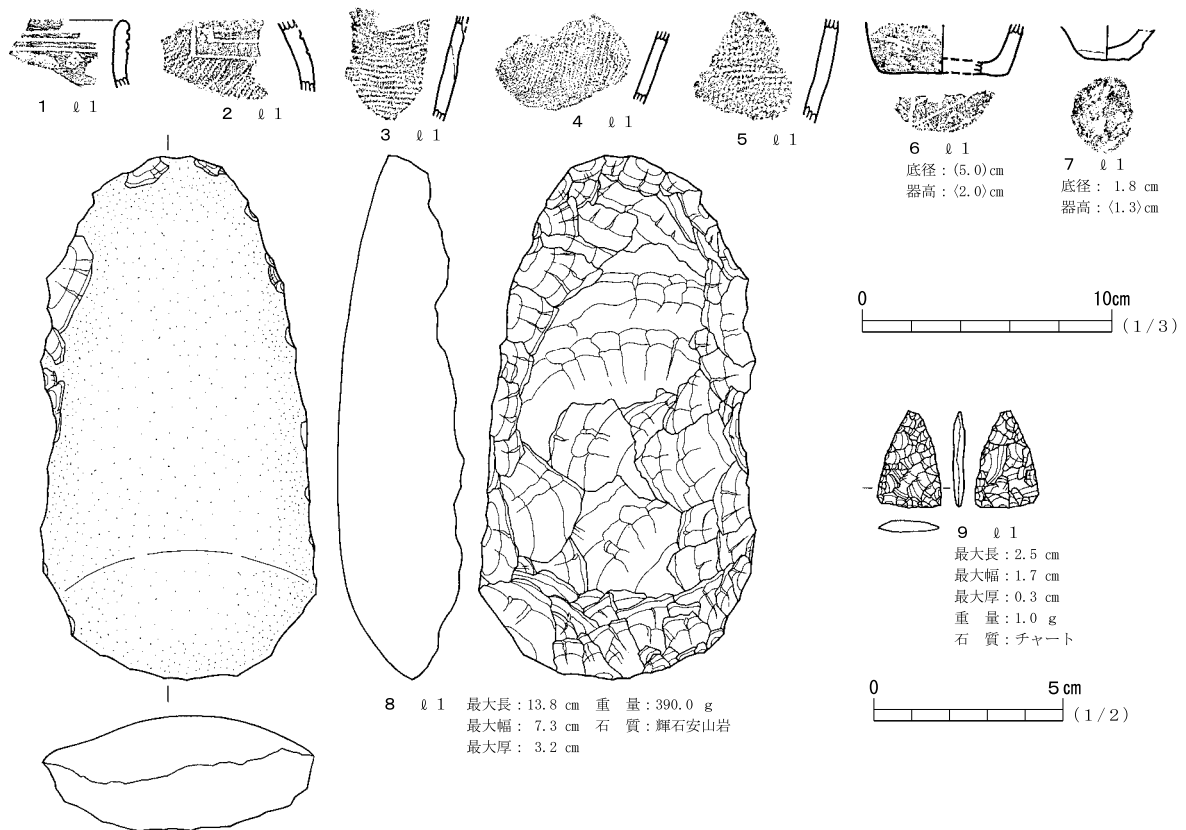


図50 1号住居跡出土遺物

外面ともに研磨されている。

7は粗製土器の底部資料である。底径1.8cm、遺存高1.3cmを測る。器面全体にナデ状の調整が認められる。

8は打製石斧である。自然面が残る肉厚な剥片を素材とし、主として裏面に調整剥離が施されている。刃部に使用痕跡が認められないため、未製品かも知れない。9は平基無茎石鏃である。表裏面から比較的丁寧な調整剥離が施されている。

まとめ

本遺構は、隅丸方形型を基調とする竪穴住居跡である。炉跡や貼床や硬化した面は確認されず、長時期の間使用した住居とは考えられなかった。住居内には10個のピットが検出されたが、堆積土の状況によりいくつかの変遷が考えられる。本遺構の所属時期であるが、堆積土中より出土した土器片より弥生時代中期前葉であると判断した。(稲村)

2号住居跡 S I 2

遺構 (図51 写真7・8)

本遺構は、調査区南東側のW30・31、X30・31グリッドに位置し、西側丘陵の緩斜面上に立地する。基本土層LⅣ上面で、遺物が集中する黒褐色土の楕円形状の範囲を確認した。遺構東半は大きく流失しており、全体的に遺構の遺存状態は悪い。東側5.0mには1号住居跡が位置し、西方向に

第1節 堅穴住居跡

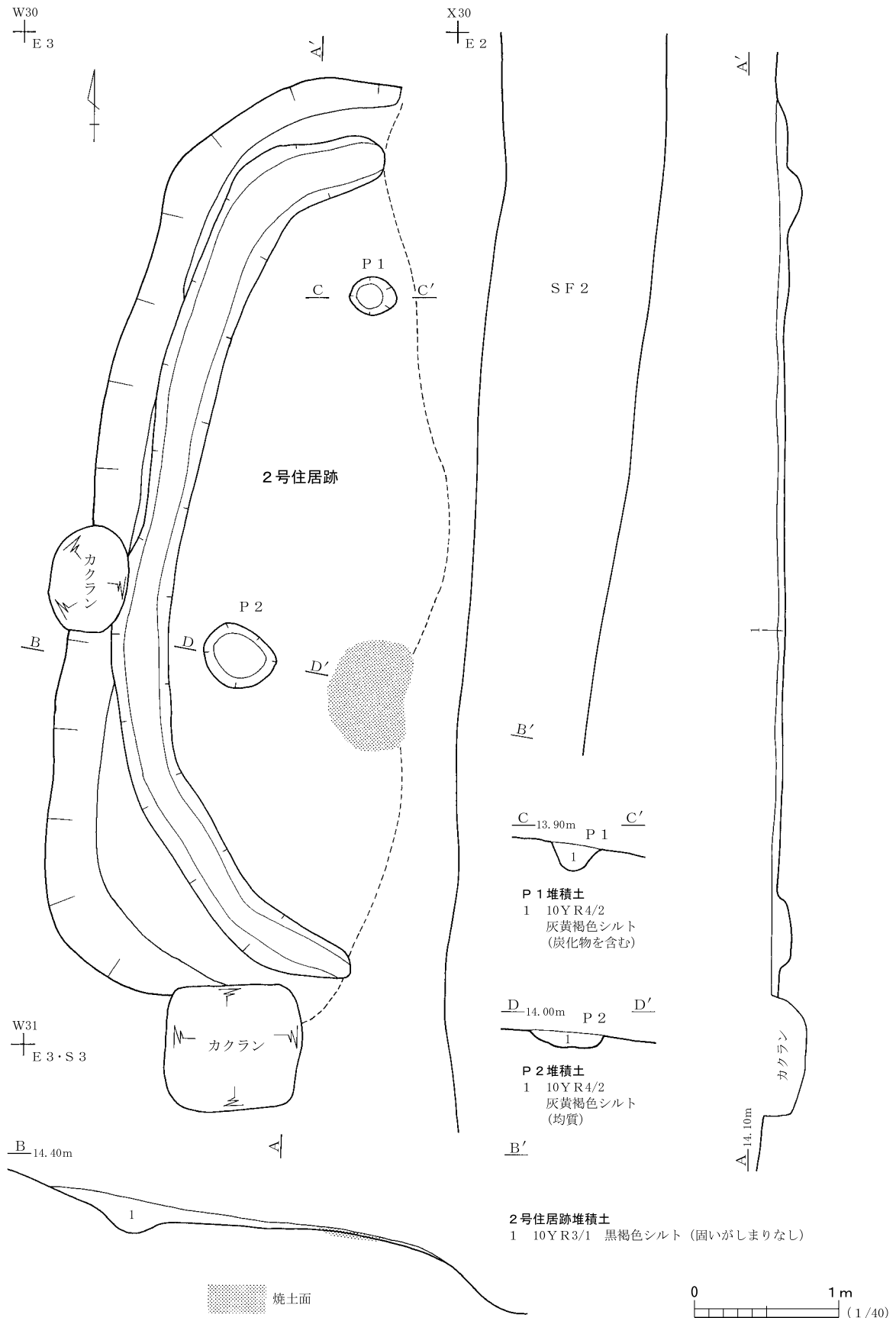


図51 2号住居跡

約1.5mの位置には3号土坑が存在する。

遺構内堆積土は堅いが締まりのない黒褐色土1層である。斜面上位から流れ込んできた様相を呈する。その性状により、遺構廃絶後の自然流入土と判断している。

本住居跡の平面形は、遺構東半が流出しているため不明であるが、残存部の形状から南北方向に長軸をもつ楕円形を呈していたと推測される。その長軸方向はN 5°Eである。現況で確認できた壁上端での規模は、南北遺存長6.5m、東西遺存長2.5mを測る。床面は基本土層L IV上に形成され、ほぼ平坦である。明確な床面の踏み締まりは確認できなかった。壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。床面から検出面までの壁高は、西壁付近で最大22cmを測るが、東へ向かうほど低くなる。

住居内の施設として、周溝と小穴および地床炉と思われる焼土の広がりを確認した。周溝は、残存部の壁に沿って弧状に巡る。住居北半では、ほぼ壁際に沿って巡るが、南半では、壁際よりも若干内側に寄っている。本住居跡の東半の流失と共に、この溝跡も流失し途切れているが、本来は住居内全域を巡っていた可能性は高い。規模は、上端幅が30～50cmであり、床面からの深さは5～15cmを測る。溝の底面は、平坦または中央が緩やかに窪んで、皿状の断面形を呈している。壁は緩やかに立ち上がる。周溝内堆積土は、住居内堆積土ℓ1と同様である。

小穴は、床面から2個（P1・P2）検出した。全て半截し、内部の堆積状況と断面の状態を確認した。P1は北壁付近に位置し、その平面形は円形を呈する。現況での規模は、直径30cm、床面からの深さは20cmを測る。P2は住居内ほぼ中央の西側に検出され、平面形はほぼ円形を呈する。現況での規模は、直径45cm、床面からの深さは10cmを測る。いずれも、断面の形状はU字状を呈する。ピット内堆積土は、ともにやや粘性のある灰黄褐色土であるが、P1堆積土中には炭化物が含まれている。明らかに柱穴と断定できるものは確認されなかった。

焼土の広がり、住居内中央付近やや南寄りの位置において、半円形で炭化物を含む暗赤褐色の焼土化範囲として確認された。東側は流失しており遺存しない。現況で確認できた焼土化の範囲は、南北長0.8m、東西遺存長0.6mを測る。上面の状態は、若干硬化している程度に過ぎない。焼土化が及んだ厚さは床面より1～2cm程度である。床面の掘り込みは確認できなかったため断定はできないが、地床炉である可能性が高い。

遺物 (図52 写真21・42)

本遺構からは、弥生土器49点、石器10点が出土した。全て遺構内堆積土ℓ1からの出土である。全体的に弥生土器は摩滅が激しい。そのうちの残りのよい11点を図示した。以下、資料に沿って記述する。

52図1は甕の口縁部資料である。口縁部は短く、外反する形態のものである。外面にはナデ調整が施される。2は鉢の胴部資料である。沈線と磨消縄文により三角形を基調とする区画文が施されられると思われる。3～5は壺の体部資料である。いずれも胴上部の土器片であり、線間幅の狭い半截竹管状の工具により文様を描いている。施文文様は、3は渦文もしくは円文であり、4・5が重菱文もしくは山形文であると思われる。施文具の線間幅は、ともに2mmを測る。6は胴部と口縁部の境にくびれをもち、口縁部が外反する形態の甕の口縁部資料である。口縁部と体部の境には刺突状の列点文が巡る。胴部には条痕が認められる。7は弥生土器の胴部の破片である。破片であるため

第1節 堅穴住居跡

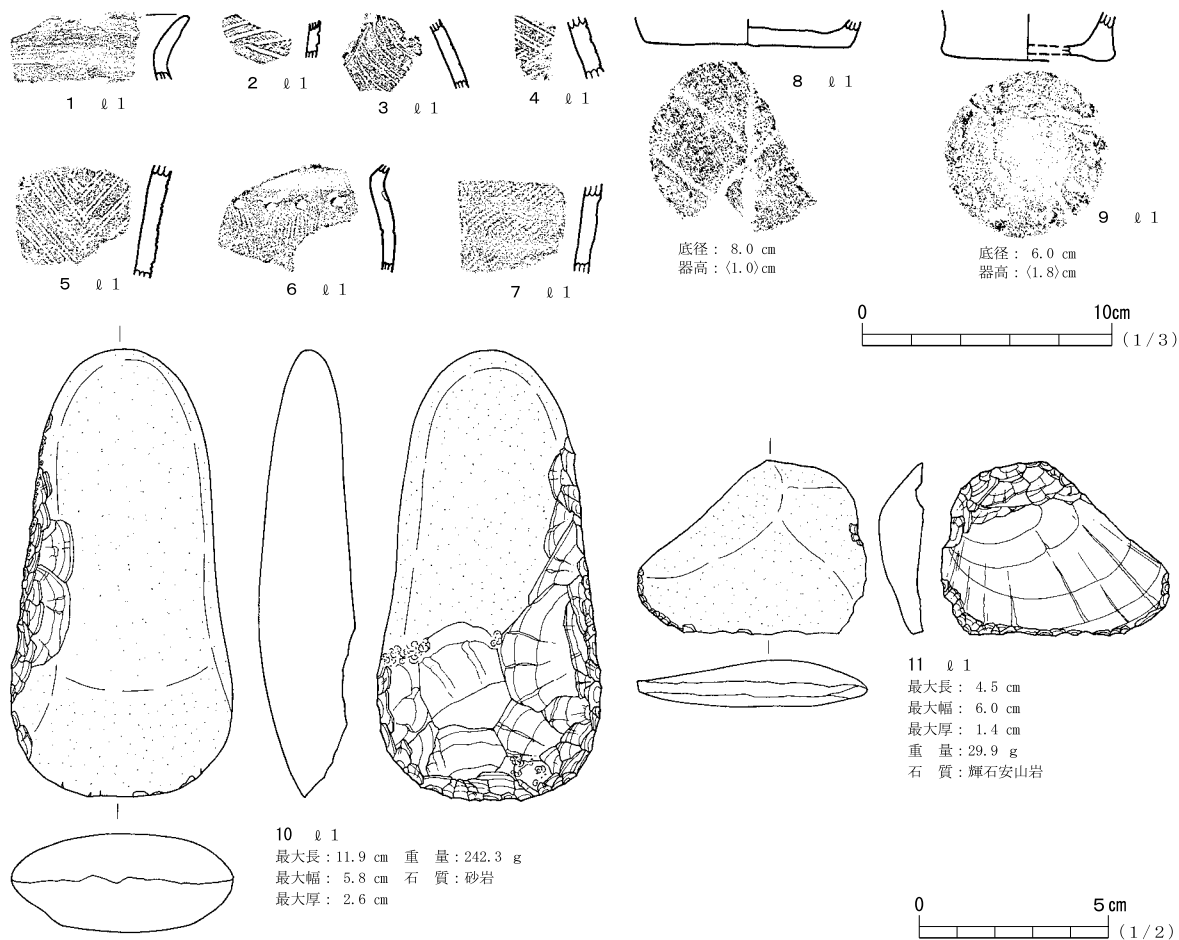


図52 2号住居跡出土遺物

器種の特定は困難である。地文には単節縄文が施される。8・9は底部資料である。8の器種は不明である。底径8.0cmを測る。底部には木葉痕が観察される。9は小型の鉢で上げ底であり、底部側面が僅かに突出し、胴部は外傾する形態である。底径6.0cm、遺存高1.8cmを測る。底面には指頭痕による調整が認められる。

10は打製石斧である。扁平で楕円形の自然礫をそのまま利用し、側縁部と刃部にのみ剥離調整を施している。側縁や裏面には部分的に敲打も加えている。刃縁には使用による線状痕が観察できる。11は不定形石器と判断した。自然面が残る横長剥片を素材とし、主として裏面上端に調整剥離が施されている。刃部には微細剥離痕も認められる。

まとめ

本遺構は、壁溝が巡る堅穴住居跡である。遺構東半が大きく流失しているため平面形は不明であるが、壁遺存部の形状から円形、あるいは楕円形を呈していたと推測する。その長軸は遺存長でも6.5mを測ることから、比較的大きな住居跡であると推定される。本遺構の所属時期であるが、床面から出土した遺物が少ないため正確な年代は不明であるが、堆積土中より出土した土器片より弥生時代中期後葉桜井式期であると判断した。(稲村)

3号住居跡 S I 3

遺 構 (図53 写真9・10)

本遺構は、調査区中央南寄りのU32・33、V32・33グリッドに位置し、西側丘陵の緩斜面上に立地する。LIV上面で遺物が集中する黒褐色土の楕円形状の範囲を確認した。遺構東半は大きく流出し、遺構の遺存状態は悪い。本住居跡と重複する遺構はない。北東約10.0mには2号住居跡が存在する。

遺構内堆積土は3層(ℓ1～ℓ3)に分層した。ℓ1は堅いが締まりのない黒褐色砂質土であり、黄褐色土と炭化物をブロック状に少量混入する。ℓ2は基本土層LIVに相応すると思われる黄褐色土であり、黒褐色土をブロック状に混入する。その性状により、壁の崩落土およびその流入土と判断している。ℓ3は締まりのある褐灰色砂質土であり、焼土塊と炭化物をブロック状に多量に混入する。これは部分的に堆積するので、その性状により人為堆積と判断している。

本住居跡の平面形は、東半が大きく流失しているため不明であるが、残存部の形状から南北方向に長軸をもつ楕円形を呈していたと思われる。その長軸方向はN4°Wである。現況で確認できた壁上端での規模は、南北長4.7m、東西遺存長2.2mを測る。床面は基本土層LIV上に形成され、ほぼ平坦であり、斜面の向きと同じく東へ向かって僅かに傾斜している。明確な床面の踏み締まりは確認できなかった。壁はいずれも緩やかに立ち上がる。壁高は、西壁付近で最大20cmを測るが、東へ行くほど流失され低くなる。

住居内の施設として、小穴および焼土の広がりを確認した。小穴は、床面から5基検出した。平面形はほぼ円形を基調とし、断面の形状は全てU字状を呈する。直径は全て15～20cmを測る。床面からの深さは、P1は28cmを測るが、他はほぼ10cm前後を測る。小穴内堆積土は、全て黒褐色土を混入する褐色土であるが、色調の若干の相違によりいくつかに分けられる。これら5個の小穴(P1～P5)は、形状は類似するものの、その埋没状態には相違が見られ、いくつかの変遷が考えられる。また、これらの小穴の配置は不規則であり、明らかに柱穴と断定できるものは確認されなかった。焼土の広がり、住居内北半の西寄りの位置において、焼土塊と炭化物を含む褐灰色の焼土化範囲として確認された。住居内堆積土のℓ3である。現況で確認できた焼土の範囲は、南北長45cm、東西長55cmを測り、形状は不整形である。上面は堅く硬化している。また、それに付随するかのよう、炭化物の広がりも確認できた。焼土化が及んだ厚さは最大14cmである。地床炉の可能性も考えられるが、床面の掘り込みはなく、また壁面と接するため、断定することはできない。

遺 物 (図54 写真22～24)

本遺構からは、弥生土器112点、石器3点が出土した。全て遺構内堆積土中からの出土である。全体的に弥生土器は摩滅が激しい。そのうちの残りのよい32点を図示した。以下、資料に沿って記述する。

54図1～3は甕の口縁部資料である。全て胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外反する。外面にはナデ調整が施される。3の口唇部には縄文が押捺される。4は深鉢の口縁部資料である。胴部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部が若干内湾する器形である。甕のよ

第1節 堅穴住居跡

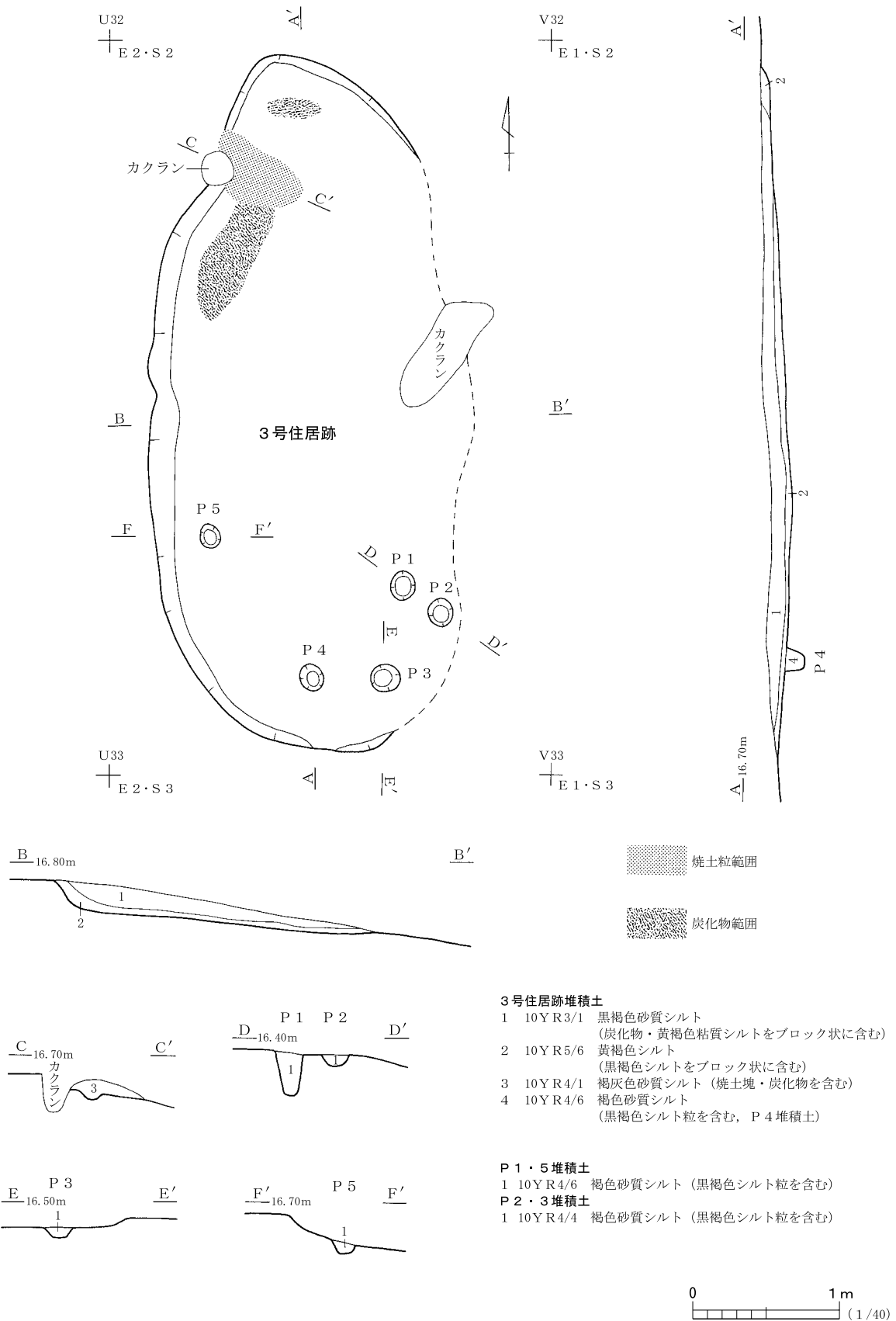


図53 3号住居跡

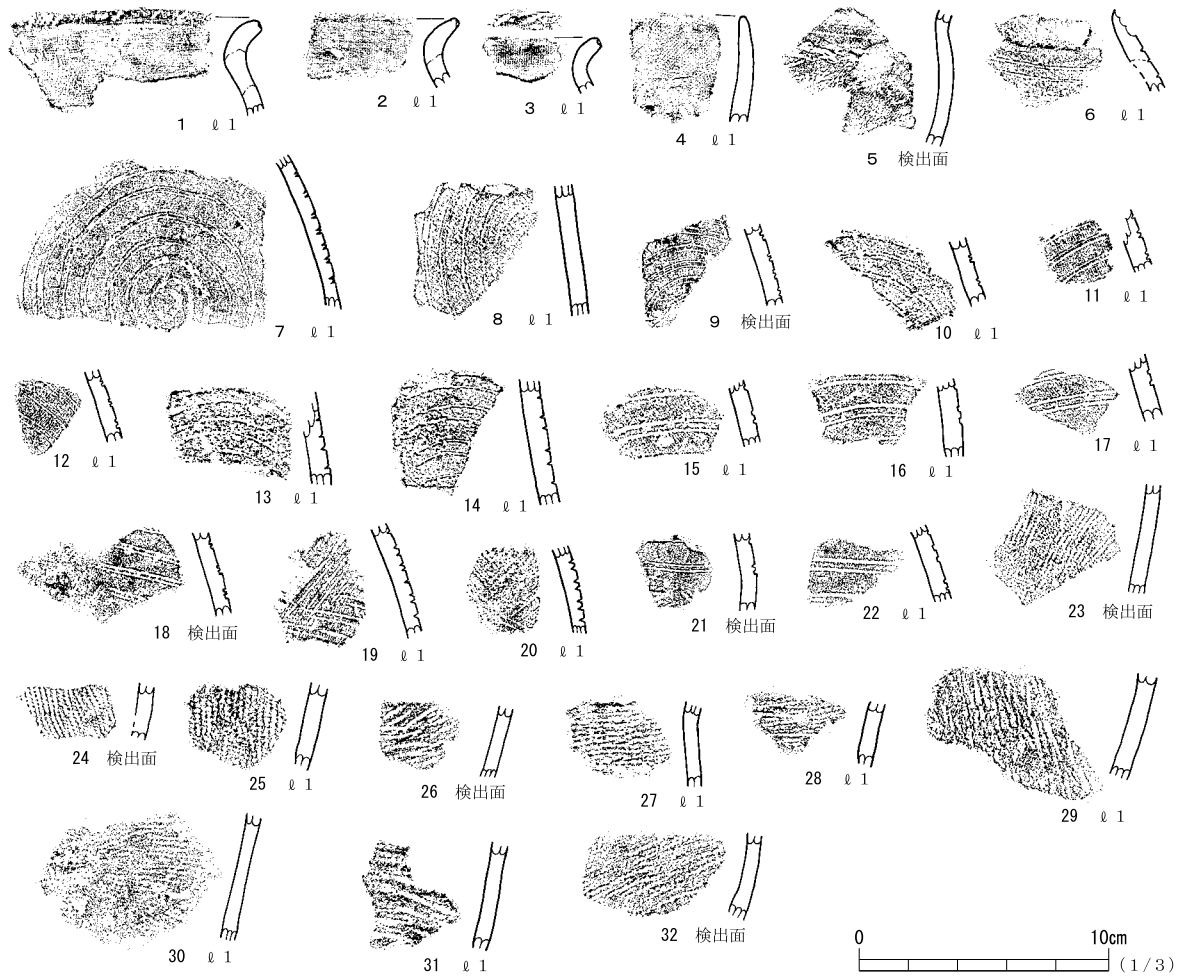


図54 3号住居跡出土遺物

うに胴部と口縁部の境にくびれを持たない。外面には植物茎の回転による擬縄文が施される。5は甕の胴上部資料で、胴部と口縁部の境にはくびれを持つ。胴部外面には撚り糸文が施され、施文上端には結節回転が観察される。6は壺の胴上部の資料で、胴部と頸部の境は、粘土紐の積上げ接合部分で剥落している。胴部には数条の平行直線文が巡るものと思われる。7～22は壺の胴上部資料である。全て線間幅の狭い半截竹管状の工具により文様を描いている。施文文様は、7～17は渦文もしくは円文であり、18～20は重菱文もしくは山形文であると思われる。他は、小破片であるため判別できない。線間幅は、7～12・18は1.5mm、19～21は2.5mm、13～17・22は5.0mmである。23～32は壺または甕の胴部資料であり、明確に器種判別できないのものである。地文には、23～25は単節縄文、26～32は撚糸文が観察される。

まとめ

本遺構は、堅穴住居跡である。後世の削平が著しいため、本遺構の平面形は不明であるが、壁遺存部の形状から楕円形を呈していたと推測する。その長軸は4.7mを測り、比較的大きな住居跡であることが判明した。本遺構の所属時期であるが、堆積土中より出土した土器片より弥生時代中期後葉桜井式期であると判断した。

(稲村)

4号住居跡 S I 4

遺構 (図55・56 写真11・12)

本遺構は、調査区東側のア29・30、イ29・30グリッドに位置する竪穴住居跡である。西側丘陵の斜面がやや緩やかになる平坦面上に立地する。遺構検出面は基本土層L IV上面であり、遺物が集中する黒褐色土の隅丸長形状の範囲を確認した。本住居跡は15号土坑と重複し、遺構の切り合い関係から本住居跡の方が新しい。また、本遺構の北西隅付近において、14号土坑と境を接する。本遺構の西側5.0mには1号住居跡が位置する。

遺構内堆積土は黄褐色土・炭化物を粒状に少量だけ含む黒褐色土1層である。その性状により本遺構廃絶後の自然流入土と判断している。

本住居跡の平面形は、北西－南東方向に長軸をもつ隅丸の長方形であり、その長軸方向はW 40°Nである。現況の壁上端での規模は、南北長2.6m、東西長3.5mを測る。床面は基本土層L IV上に形成され、ほぼ平坦である。明確な床面の踏み締めは確認できなかった。壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。壁高は、最大で16cmを測り、全体的に掘り込みは浅い。

住居内の施設として、14個の小穴（P 1～P 14）および炭化物の集中する範囲を確認した。ピットは全て半截し、内部の堆積状況と断面の状態を確認した。

P 1は住居跡内の東壁付近に位置し、長軸約0.7mの南北に長い不整形な楕円形を呈する。床面からの深さは最大で15cmを測る。壁はいずれも緩やかに立ち上がり、底面にはやや凹凸が見られ、小穴状に窪む部分も見られた。遺構内堆積土は1層であり、炭化物粒を含む暗褐色土である。堆積土中より多数の遺物が出土している。その性状により、人為的に廃絶したものと判断した。P 1は、その形状から貯蔵穴と考えられる。

P 1以外の小穴の平面形は、P 2・5・12は楕円形を呈するが、他はほぼ円形を基調とする。直径は、P 7が28cm、P 3・6が25cm程と比較的大きいが、他は20cm前後である。床面からの深さは、10～20cmのものがほとんどであり、P 7は22cmを測る。小穴内堆積土は、P 8・11・13・14が暗褐色土であるが、他は全て黒褐色土である。堆積土には、全て炭化物を含んでいるが、なかには基本土層L IVに相応する黄褐色土を含むもの（P 2・4・10・11・14）、焼土粒を含むもの（P 6・13）等、堆積状況には様々なパターンが認められる。

以上のように、P 1を除いたこれら13基のピットは、形状は類似するものの、その埋没状態には相違が見られる。堆積土の状況によりいくつかの変遷が考えられる。また、これらの小穴の配置は不規則であり、明らかに柱穴と断定できるものは確認されなかった。

炭化物の集中する広がり、住居内中央やや東寄りのP 3・4・13・14に囲まれた位置において確認された。現況で確認できた炭化物の集中範囲は、直径約50cm程度であり、形状は不整形な円形である。厚さは1cmにも満たない程度である。地床炉の可能性も考えられるが、床面の掘り込みはなく、また床面の焼土化が認められなかったため断定することはできない。その用途は不明である。

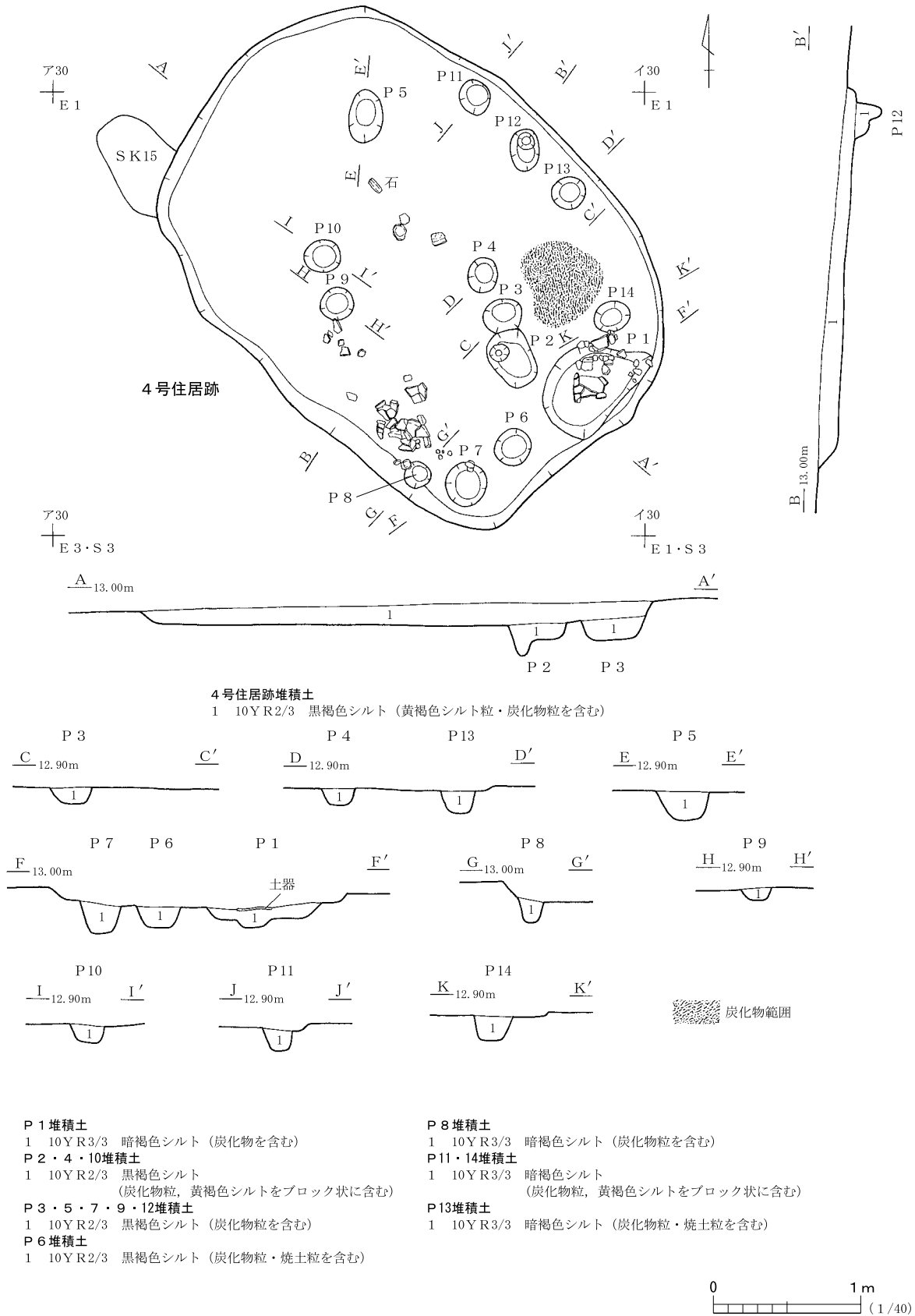


図55 4号住居跡

第1節 堅穴住居跡

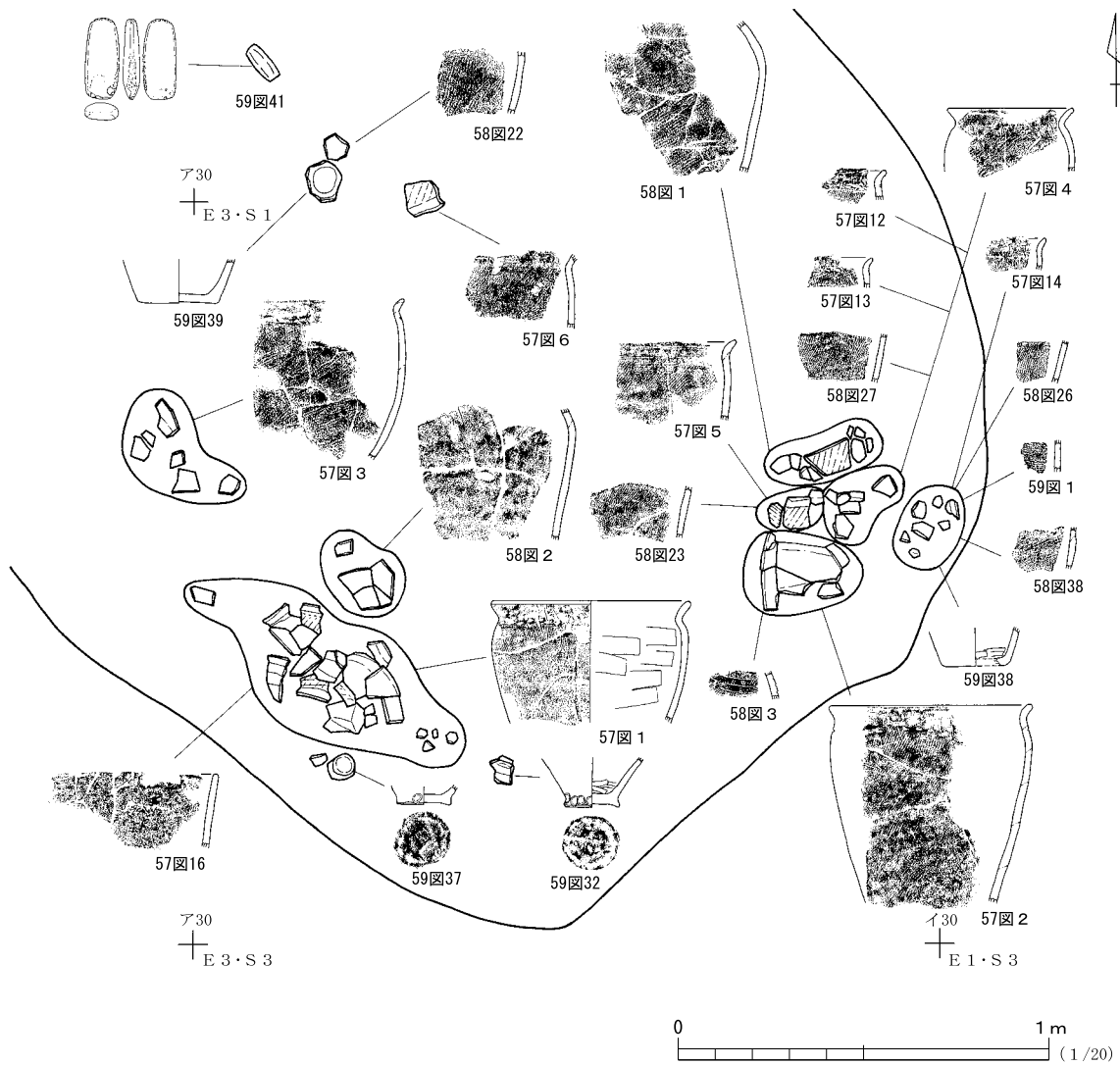


図56 4号住居跡内遺物出土状況

遺物 (図57～59 写真26～33・43)

遺物は堆積土中より、弥生土器477点、石器23点が出土した。出土遺物の多くは遺構内堆積土中からの出土で、床面から出土したものも僅かにみられる。全体的に弥生土器は摩滅が激しい。その内の残りのよい106点を図示した。以下、資料に沿って記述する。

57図1・2は本遺構の床面より出土した甕である。口縁部から胴上部にかけて破片から復元図示した。1は、胴上部が僅かに膨らみ、胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外反する。口径19.8cm、遺存高12.3cmである。口縁部にはナデ調整が施され、胴部には条の細い単節縄文が施される。また、口縁部と胴部の境には、横位の連続する刺突文が施される。2は胴上部が僅かに膨らみ、胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短頸で外反する。推定口径20.6cm、遺存高20.0cmである。口縁部はナデ調整が施され、胴部には単節縄文が施される。口縁部と胴部の境には、横位の連続する刺突文が施される。

同図4もまた床面より出土した甕である。口縁部から胴上部にかけて破片から復元図示した。胴上部が僅かに膨らみ、胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外反する。推定口径

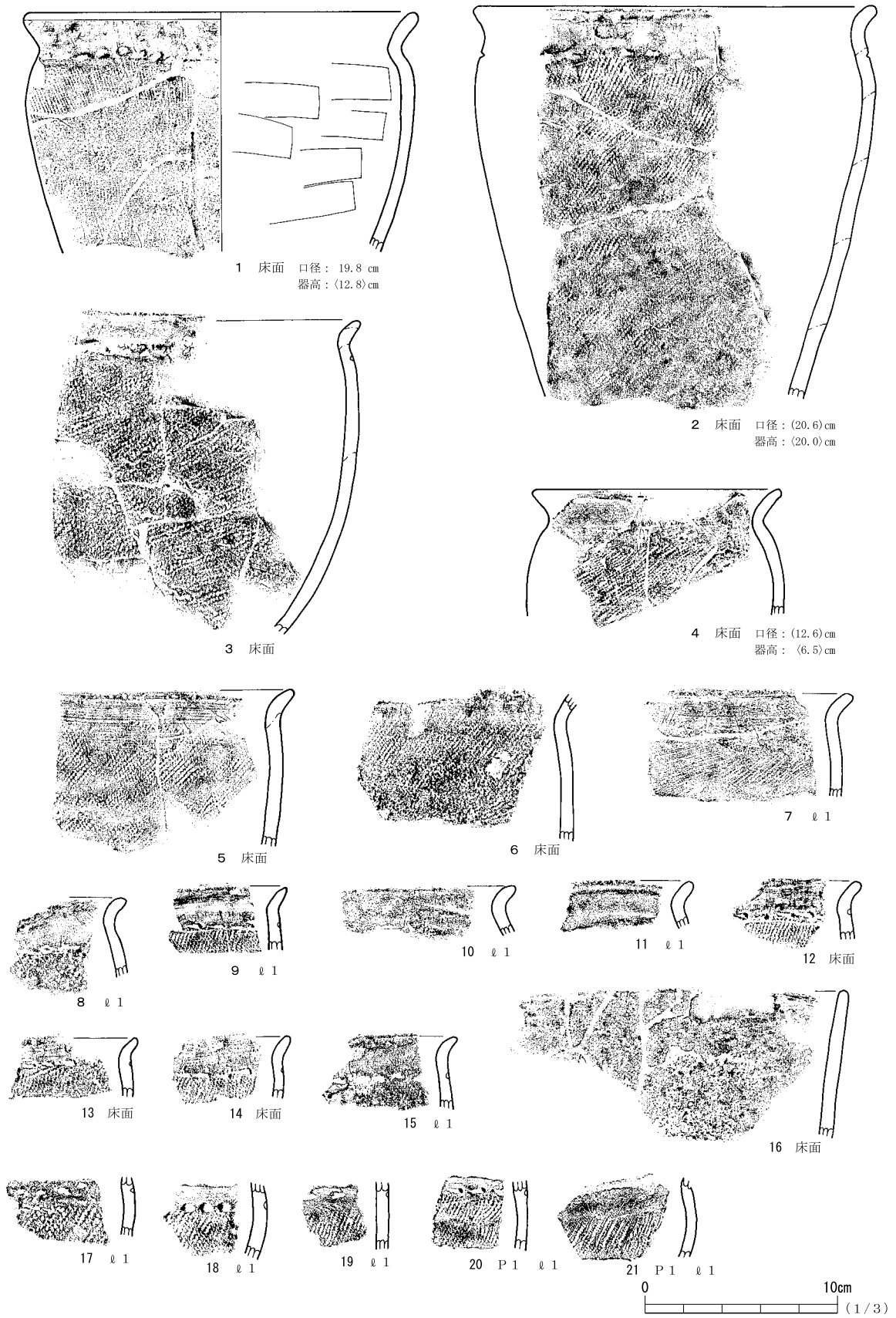


图57 4号住居跡出土遺物(1)

第1節 堅穴住居跡

12.6cm、遺存高6.5cmである。ともに口縁部はナデ調整が施され、胴部には附加条縄文が施される。

同図3・7～12は胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短頸で外反または外傾する甕の口縁部資料である。口縁部は全てナデ調整が施され、胴部には、3・8・9・12は単節縄文、7には附加条縄文が施される。8・9・12の口縁部と胴部の境には、横位の連続する刺突文が施される。また、7の胴部外面には煤状の付着物が認められる。

同図5・6・13～15は、胴部から口縁部にかけて緩やかに屈曲し、口縁部は短頸で外反または外傾する形態の甕の口縁部資料である。口縁部には全てナデ調整が施され、胴部には、5・6・13・14は単節縄文が施される。13～15の口縁部と胴部の境には、横位の連続する刺突文が施される。また、6の胴部外面には煤状の付着物が認められる。

同図16は長頸甕の口縁部資料である。長頸であり、直線的に外傾する形態である。外面は無文であり、全体に赤色塗彩が認められる。同図17～21は甕の胴上部資料である。19は直線的に立ち上がるが、他は、胴部が僅かに膨らむ形態である。外面には、17～20は単節縄文、21には附加条縄文が施される。また、17～20には、横位の連続する刺突文が認められる。58図1・2もまた、甕の胴部資料である。ともに胴上部が膨らむ。外面には、1は単節縄文が施されるが、2は摩滅が激しいため判別できない。

同図3～18は壺の胴部資料である。3～5は、細い沈線と磨消縄文を組み合わせた文様が施されているもので、3は四角文、4は錨形文、5は円文または渦文が表出されている。また、文様に用いられる地文については、縄文の他に植物茎の回転による擬縄文が施されたもの(4・5)も認められる。7～10・16は、施文原体や胎土、色調が酷似していることから同一資料と判断した。平行沈線と磨消縄文を組み合わせた区画文が施されたもの(7・8)以外は、数条単位の平行沈線が施されている。11・12もまた、施文原体や胎土、色調が酷似していることから同一資料と思われる。外面にはミガキ調整が施され、沈線手法により文様が描出されていると思われるが、小破片であるため判別できない。13・14もまた沈線手法により文様が描出されているが、小破片であるため判別できない。6・15・17は、数条の横走沈線が施されたものである。無文地に施した沈線下に、6・15は植物茎の回転による擬縄文、17は単節縄文が施されている。18は沈線手法による重山形文が施される。重山形文の下端は、一帯の横走する直線によって明確に区切られ、胴下部には単節縄文が施される。内面には粘土紐の積み上げ痕が観察される。

58図19～43および59図1～9は壺または甕の胴部資料であり、明確に器種判別できないものである。施文される原体は、58図19～21は無文でミガキ調整、22～35は単節縄文、37は撚糸文、36・39～43は附加条縄文、59図1～5は条痕文、6～9は植物茎の回転による擬縄文が観察される。また、58図22・32・35の外面には煤状の付着物が認められる。

59図10～15は、沈線と磨消縄文による三角形を基調とする区画文および連弧文が施される鉢の口縁部資料である。器形的には、口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がるもの(11・13)、ほぼ直線的に外傾するもの(10・14・15)、外反気味に立ち上がるもの(12)が認められる。同図16～18は口縁部に数条の平行直線文が巡る鉢の口縁部資料である。器形的には、全て緩やかに内湾しながら立ち上がるものと思われる。

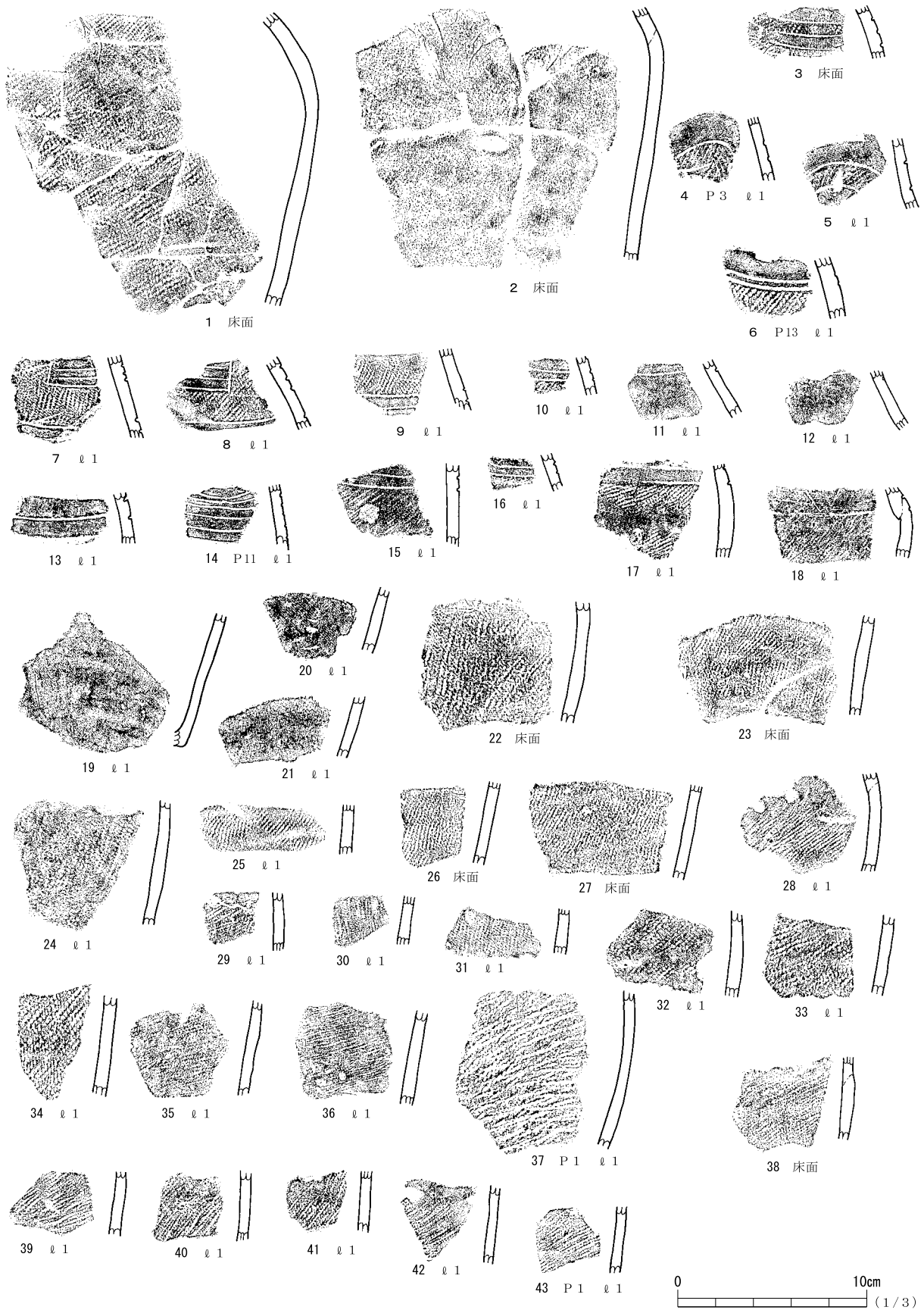


図58 4号住居跡出土遺物(2)

第1節 堅穴住居跡

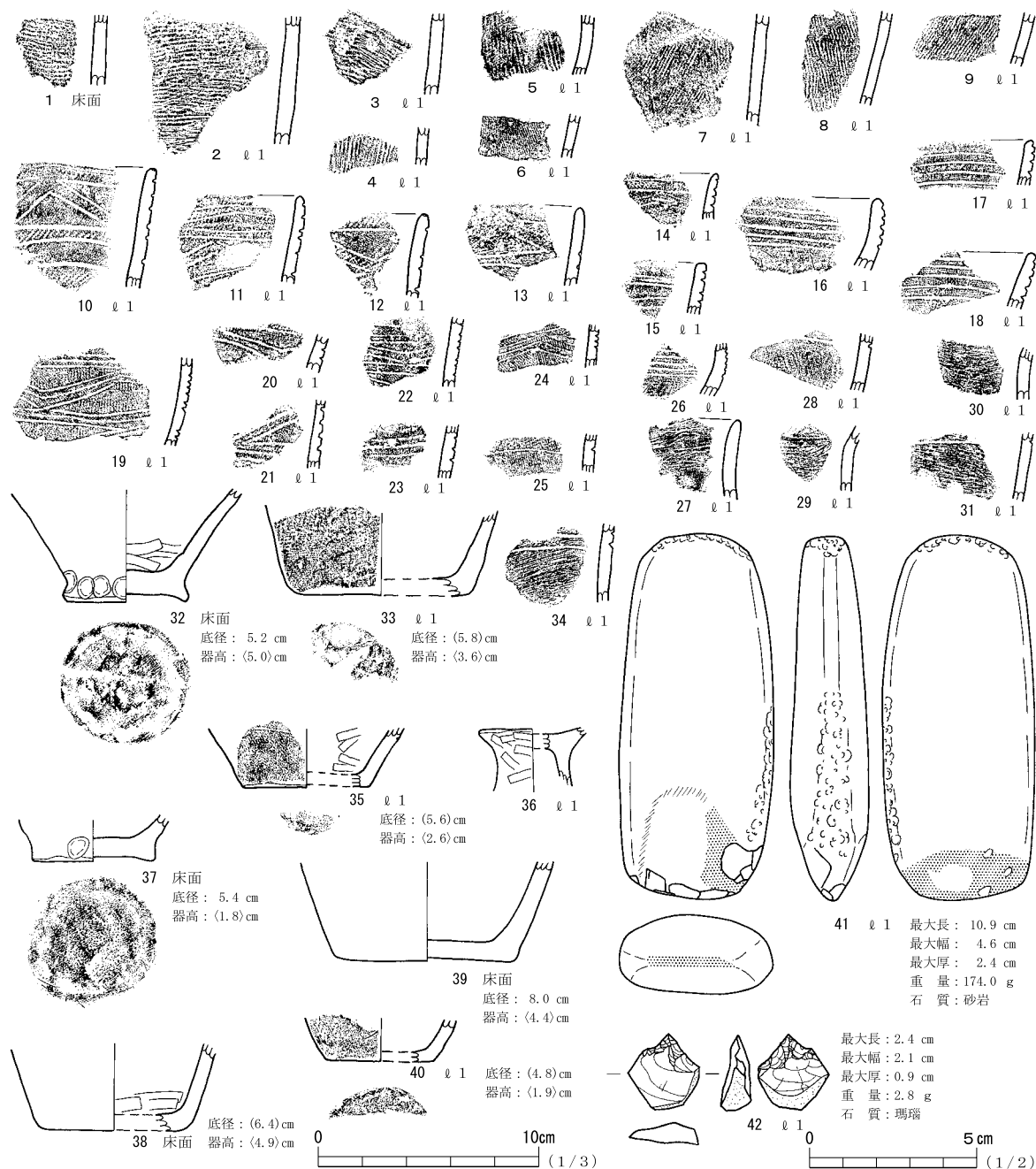


図59 4号住居跡出土遺物(3)

同図19～26は鉢の胴部資料である。19は3本単位の沈線からなる下向き連弧文が巡り、その上下には3本単位の平行沈線文が施されている。各文様間には、植物莖の回転による擬縄文が充填されている。20～22は、沈線と磨消縄文による三角形を基調とする区画文および連弧文が施される。23・26は、横走沈線を施し、文様帯が区画されている。24・25は沈線手法により文様が描出されていると思われるが、小破片であるため判別できない。同図27～31・34・35は、施文原体や胎土、色調が酷似していることから、小型鉢の同一資料と推定される。胴部は底部側縁から直線的に外傾し、口縁部は緩やかに外反する形態であろうか。推定底径5.6cmを測る。胴部には数条の横走沈線が認められ、外面全体には、植物莖の回転による擬縄文が施されている。同図36は蓋の天井部付近の資

料である。つまみ部をもたず、天井部側縁が横に張り出す形態である。推定天井部径4.6cm、遺存高2.8cmを測る。外面には、ケズリ調整が施される。

同図32・33・37～40は底部資料である。器形的には、40は底径4.8cm代で小型のもの、33と39は各々推定底径7.8cm・底径8.0cmを測り比較的大型のものに属す。他は32が底径5.2cm、37は底径5.4cm、38は推定底径6.4cmを測り、中型のものとなろうか。形態的には底部側面が突出するもの(32・37)、底部側縁から直線的に外傾するもの(33・38・39)がある。胴部の地文は、33に単節縄文が観察されるが、他は摩滅が著しく不明瞭である。また、32・37の底部側面には指頭痕が認められる。底面には、木葉痕が観察されるもの(33)、ナデ調整の後に指圧による調整が施されるもの(32・37)が認められる。

同図41は磨製石斧である。砂岩を素材とし、基部および片側縁には密な叩き整形が加えられている。刃部の一部は欠損している。同図42は不定形石器である。瑪瑙を素材とし、剥片の鋭利な部分に調整剥離が施されている。

まとめ

本遺構は、隅丸方形型を基調とする竪穴住居跡である。住居跡内には14個のピットが検出されたが、堆積土の状況によりいくつかの変遷が考えられる。本遺構の所属時期であるが、床面から出土した土器片より弥生時代中期前葉と判断した。(稲村)

第2節 土坑

1号土坑 SK1 (図60 写真13)

本遺構は、調査区南東側のY30グリッドに位置し、西側丘陵裾部の平坦面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。重複する遺構はない。本遺構の南東側約1.0mには1号住居跡が位置し、東方向約4.0mの位置には、2号住居跡が存在する。

遺構内の堆積土は黒褐色土1層である。堆積土中には基本土層LⅣに相応すると思われる黄褐色土ブロック状や、焼土粒・炭化物粒が含まれている。

平面形は、東西方向に長軸をもつ隅丸長方形であり、その長軸方向はW23°Nである。現況の壁上端での規模は、東西方向の長軸長1.0m、それに直交する短軸長0.8mを測る。底面は基本土層LⅣ上に形成され、中央部が若干窪んでいるが、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、いずれも緩やかである。検出面からの深さは、最大で20cmを測る。

本土坑からの出土遺物は、弥生土器片が7点出土している。これは全て堆積土中からの出土である。これらは、周囲に所在する弥生時代の遺構からの流れ込みと推測される。各遺物とも摩滅が激しく、小破片なので図化していない。

本遺構は、焼土・炭化物層が堆積していたことから判断して、木炭焼成土坑の可能性が考えられる。なお、出土遺物がないため使用時期を限定し得ないが、検出面や遺構内堆積土、多量の炭化物粒や焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、古代のものと推測している。

(稲村)

第2節 土坑

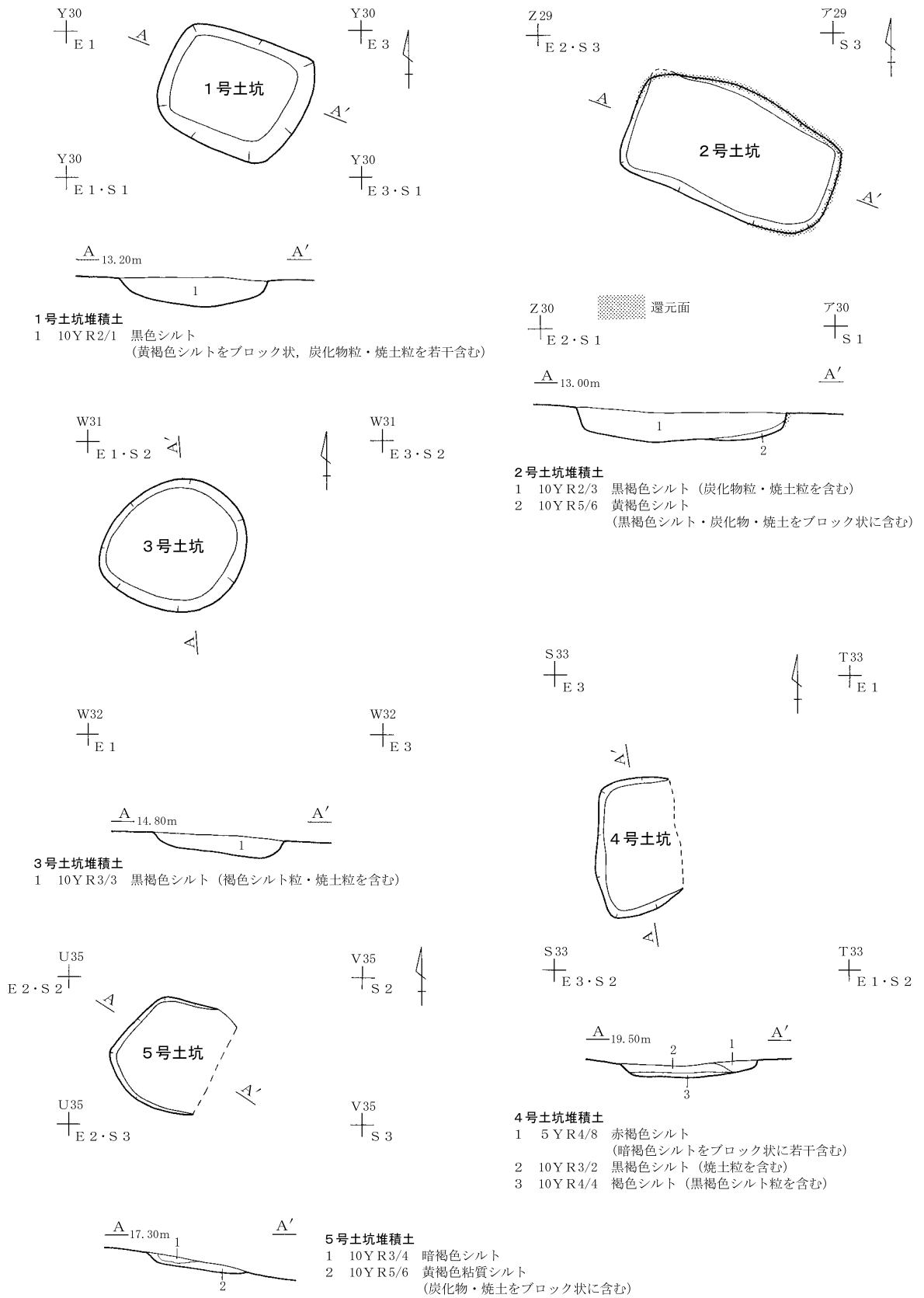


図60 1～5号土坑

2号土坑 SK2 (図60・63・64 写真13・34・43)

本遺構は、調査区南東側のY29・30グリッドに位置し、西側丘陵裾部の平坦面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。重複する遺構はない。本遺構の南側約1.8mには1号住居跡が位置し、西方向約4.0mの位置には1号土坑が存在する。

遺構内の堆積土は2層に分層した。ℓ1は、黒褐色土であり焼土と炭化物を各々粒状に含んでいる。性状により、人為堆積と判断している。ℓ2は、黒褐色土をブロック状に含む基本土層LⅣに相応すると思われる黄褐色土であり、焼土と炭化物をブロック状に含むことから、その性状により土坑使用時に堆積した人為堆積土と判断した。

平面形は、東西方向に長軸をもつ隅丸の長方形であり、その長軸方向はW20°Nである。現況の壁上端での規模は、東西方向の長軸長1.45m、それに直交する短軸長0.8mを測る。底面は、基本土層LⅣ上に形成され、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、いずれも急であり、北西隅ではオーバーハングして立ち上がる。検出面からの深さは、最大で25cmを測る。また、北壁および東壁と南壁および西壁の一部には、被熱による厚さ1～3cmの焼土化状況が認められた。

本遺構からの出土遺物は、弥生土器片が45点、石器が4点出土している。全て遺構内堆積土中からの出土であり、これらは本遺構の周囲に存在する弥生時代の遺構からの流れ込みと考えられる。各遺物とも摩滅が激しいが、これらのうち残りのよい6点を図示した。以下、資料に沿って記述する。

63図1は深鉢型土器の口縁～胴部にかけての資料である。胴部と口縁部の境にくびれを持たず、口縁部が若干内湾する形態である。外面には全体に附加縄文が施される。2は鉢の口縁部資料である。沈線文系の波形文が施されるものと判断した。3は弥生土器の胴部資料であり、器面には単節縄文が施される。

64図1は両側縁に抉りを有する直縁刃石器である。円礫の湾曲部を意識して剥片を採取し、これを素材として両側縁に簡単な調整剥離を施している。刃部には使用による磨耗痕が認められる。同図2・3は不定形石器とした。2は自然面が残る剥片の縁辺に調整剥離が施されている。3は、縦長剥片の下端に微細剥離痕が認められる。これらの資料の時期は、石器も含め弥生時代中期後葉に比定できるものと思われる。

本遺構は、壁面が一部焼土化していることと、底面上には焼土・炭化物層が堆積していたことから判断して、木炭焼成土坑の可能性が最も高いと考えられる。本遺構の使用時期は流れ込みとみられる弥生時代中期後葉の遺物より新しい時期の遺物の出土はなく限定し得ないが、検出面や遺構内堆積土及び多量の炭化物粒や焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、古代のものと同推測している。

(吉田・稲村)

3号土坑 SK3 (図60・63 写真13・34)

本遺構は、調査区南東側のW31グリッドに位置し、西側丘陵の緩斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。本遺構と重複する遺構はない。本遺構の東側1.5mには2号住居跡が

第2節 土 坑

位置する。

遺構内の堆積土は1層である。基本土層LⅣに相当すると思われる黄褐色土と焼土粒を若干含む暗褐色土である。斜面上位からの流入土は認められず、層中に焼土粒を含むことから、堆積土の性状は人為堆積の様相を示す。

平面形は、東西方向に長軸をもつ楕円形であり、その長軸方向はW18°Nである。現況の壁上端での規模は、東西方向の長軸長1.0m、それに直交する短軸長0.9mを測る。底面は基本土層LⅣ上に形成され、ほぼ平坦で、東側にやや傾斜している。壁の立ち上がりはいずれも急である。検出面からの深さは、最大で15cmを測る。

本遺構からの出土遺物は、弥生土器片が3点、石器が1点出土している。全て遺構内堆積土中からの出土である。各遺物とも摩滅が激しい。そのうちの残りのよい1点を図示した。63図4は鉢または壺の底部資料である。底部側縁から直線的に外傾する形態である。底径4.2cm、遺存高1.6cmを測る。内外面ともに研磨されている。底面はケズリ状の調整が施される。

本遺構の所属時期は、出土遺物の状況から弥生中期の遺構である可能性が高い。また、検出面や立地状況、位置関係から、隣接する2号住居跡との関連性が高いものと思われる。(稲 村)

4号土坑 SK4 (図60 写真13)

本遺構は、調査区南東側のS33グリッドに位置し、丘陵の東側斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。遺構東辺は大きく流出し遺構状態は悪い。重複する遺構はない。本遺構の東側約8.0mには3号住居跡が位置する。

遺構内の堆積土は3層に分層した。ℓ1は、暗褐色土を含む赤褐色の焼土層である。ℓ2は、焼土粒を含む黒褐色土である。ℓ3は、黒褐色土粒を含む褐色土であり、ほぼ水平な堆積で、その性状は土坑使用時に堆積した様相を呈している。

本遺構の平面形は、東辺が流失しているため不明であるが、残存部の形状より、南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈していたと思われる。その長軸方向はN5°Wである。現況で確認できた壁上端での規模は、南北長0.95m、東西遺存長0.55mを測る。検出面からの深さは最大で10cmを測る。底面は基本土層LⅣ上に形成され、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、東壁は不明であるが、いずれも急である。本遺構からの出土遺物はない。

本遺構の所属時期は、時期を特定付ける資料がないため不明であるが、検出面や遺構内堆積土、多量の焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、古代のものと推測している。

(稲 村)

5号土坑 SK5 (図60 写真13)

本遺構は、調査区南辺のほぼ中央付近U35グリッドに位置し、西側丘陵の斜面がやや緩やかになる緩斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。遺構東側は大きく流出し、遺存状態は悪い。重複する遺構はない。本遺構の西側3.0mの位置には1号階段状遺構が、北東側2.0mの位置には2号階段状遺構が存在する。

遺構内堆積土は2層に分層した。ℓ1は暗褐色土である。その性状より自然流入土と判断している。ℓ2は焼土・炭化物を含む黄褐色の粘質土であり、堆積土の性状により土坑使用時に堆積した人為堆積であると判断している。

本遺構の平面形は、東側が流失しているため不明であるが、残存部の形状から南北方向に長軸をもつ隅丸の長方形を呈していたと思われる。長軸方向はN30°Eである。現況で確認できた壁上端での規模は、南北長0.80m、東西遺存長0.65mを測る。検出面からの深さは最大で6cmを測る。底面は基本土層LⅣ上に形成され、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、東壁は不明であるが、いずれも緩やかである。本遺構からの出土遺物はない。

本遺構の所属時期は、時期を特定付ける資料がないため不明であるが、検出面や遺構内堆積土、多量の焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、古代のものと推測している。

(稲村)

6号土坑 SK6 (図61 写真13)

本遺構は、調査区中央やや南寄りのV32グリッドに位置し、西側丘陵の斜面がやや緩やかになる緩斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。重複する遺構はない。本遺構のすぐ西側には3号住居跡が存在する。

遺構内の堆積土は5層に分層した。ℓ1は炭化物粒・焼土粒を含む、黒褐色の砂質土である。ℓ2・3は壁の崩落土の様相を呈する。ともに炭化物・焼土を各々粒状に含んでいる。ℓ4は炭化物粒・焼土粒および、基本土層LⅣに相応すると思われる黄褐色土を粒状に含む黒色土であり、性状により土坑使用時に堆積した人為堆積であると思われる。ℓ5は炭化物を含む暗赤褐色の焼土であり、ℓ4と同様に土坑使用時の堆積土と判断した。

本遺構の平面形は、南北方向に長軸をもつ隅丸の長方形を呈し、その長軸方向はN6°Eである。現況で確認できた壁上端での規模は、南北方向の長軸長0.8m、それに直交する短軸長0.6mを測る。検出面からの深さは、最大で25cmを測る。底面は基本土層LⅣ上に形成され、ほぼ平坦である。

壁は、いずれも垂直気味に立ち上がる。また、北壁及び東壁と南壁の一部には、被熱による厚さ1～3cmの焼土化状況が認められた。なお、本遺構からの出土遺物はない。

本遺構は、壁面が一部焼土化していることと、底面上には焼土・炭化物層が堆積していたことから判断して、木炭焼成土坑の可能性が考えられる。なお、出土遺物がないため使用時期を限定し得ないが、検出面や遺構内堆積土、多量の炭化物粒や焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、古代のものと推測している。

(稲村)

7号土坑 SK7 (図61 写真13)

本遺構は、調査区中央やや南寄りのW32グリッドに位置する土坑である。丘陵の東側裾部付近に位置し、丘陵斜面がやや緩やかになる緩斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。重複する遺構はない。本遺構の北側約1.0mの位置には12号土坑が、南側約3.0mの位置には8号土坑が存在する。

第2節 土坑

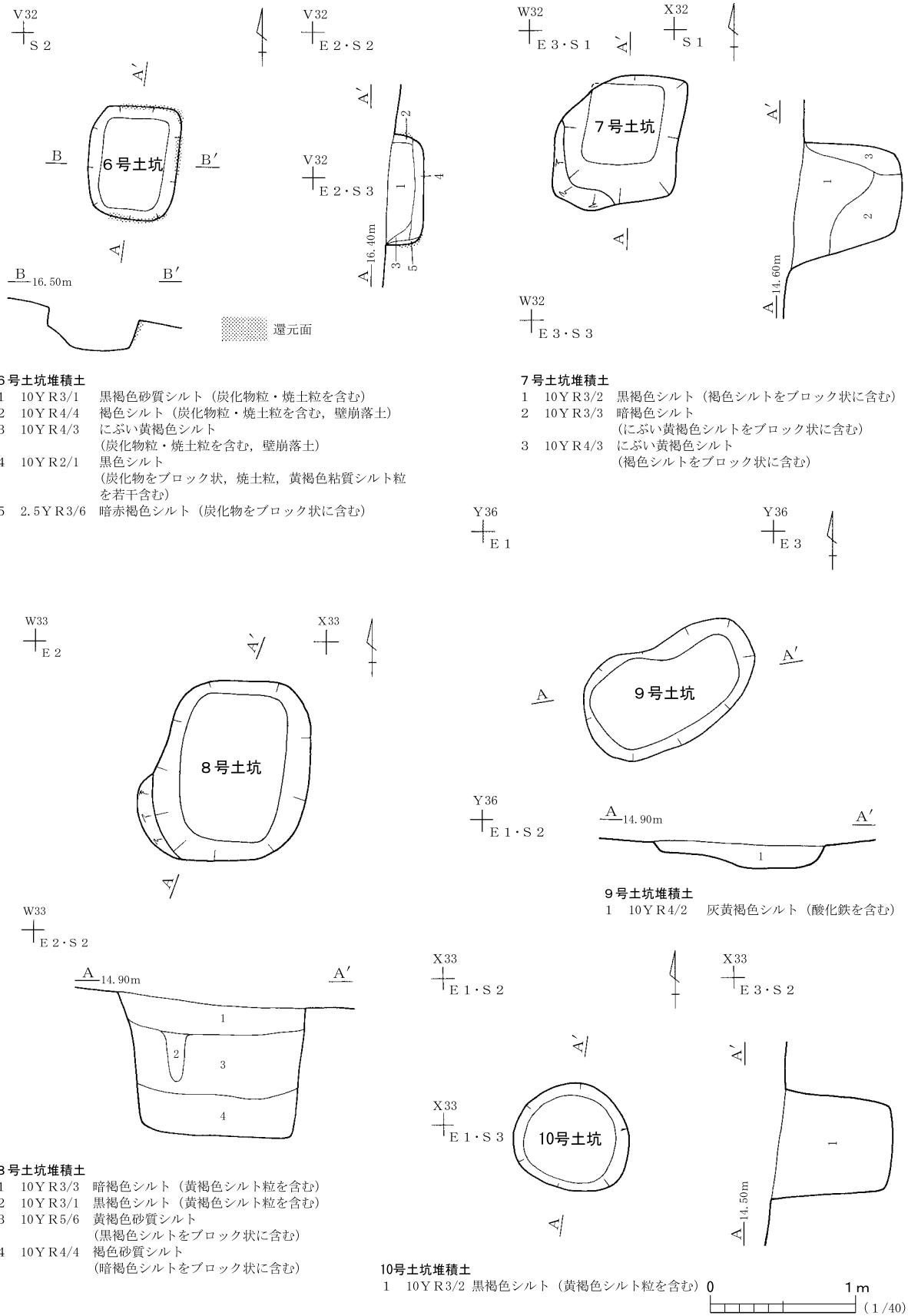


図61 6～10号土坑

遺構内の堆積土は3層に分層した。全体的に締まりがない。その性状から、全て人為堆積土と判断される。なかでもℓ2には、骨片が集中して認められる。また、本遺構内堆積土には、自然堆積土が全く確認されないことから、土坑掘削後、すぐに埋められたものと推測している。

平面形は、南北方向に長軸を持つ不整な隅丸長方形を呈する。その長軸方向はN6°Eである。現況で確認できた壁上端での規模は、南北方向の長軸長0.9m、これに直交する短軸長0.85mを測る。検出面からの深さは、最大で70cmを測る。底面は、基本土層LⅣ上に形成され、ほぼ平坦であり、一辺約0.5m程度の方形を呈する。壁の立ち上がりは、北壁はほぼ垂直に立ち上がり、他はいずれも急である。北西隅ではオーバーハングして立ち上がる。また、南西隅の上端付近のみ若干緩やかな段状を呈する。

本遺構の所属時期は、時期を特定付ける出土資料がないため不明であるが、堆積土中より骨片が出土し、また遺構形態や立地状況が、周囲に所在する近世の土坑墓と類似する点などから、本遺構もまた近世の土坑墓であると判断している。(稲村)

8号土坑 SK8 (図61 写真14)

本遺構は、調査区中央南寄りのW33グリッドに位置し、丘陵の東側裾部付近の緩斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。重複する遺構はない。本遺構の北側約3.0mの位置には7号土坑、南東約3.0mの位置には10号土坑が存在する。

遺構内の堆積土は4層に分層される。全体的に締まりがない。その性状から、全て人為堆積土と判断される。なかでもℓ4には、骨片が集中して認められる。また、本遺構内堆積土には、自然堆積土が全く確認されないことから、土坑掘削後、すぐに埋められたものと推測している。

平面形は、南北方向に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。その長軸方向はN5°Eである。現況で確認できた壁上端での規模は、南北方向の長軸長1.25m、これに直交する短軸長1.05mを測る。検出面からの深さは、最大で90cmを測る。底面は、基本土層LⅣ上に形成され、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、いずれも急であり、南西隅の上端付近のみ若干緩やかな段状を呈する。

本遺構の所属時期は、時期を特定付ける出土資料がないため不明であるが、堆積土中より骨片が出土し、また遺構形態や立地状況が、周囲に所在する近世土坑墓と類似する点などから、本遺構もまた近世の土坑墓であると判断している。(稲村)

9号土坑 SK9 (図61・63 写真14・34)

本遺構は、調査区南側のY36グリッドに位置し、西側丘陵の緩斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。本遺構と重複する遺構はない。

遺構内の堆積土は酸化鉄を若干含む灰黄褐色土1層である。堆積土は、性状により本遺構廃絶後の自然流入土と判断している。

平面形は、東西方向に長軸をもつ不整な楕円形である。その長軸方向はE24°Nである。確認できた現況の壁上端での規模は、東西方向の長軸長1.25m、それに直交する短軸長0.75mを測る。検出面からの深さは、最深部で20cmを測る。底面は基本土層LⅣ上に形成され、若干の凹凸を呈する。

第2節 土坑

壁の立ち上がりは、西壁の一部は急であるが、他はいずれも緩やかに立ち上がる。

本土坑からの出土遺物は、堆積土中より弥生土器片が2点出土している。各遺物とも摩滅が激しい。そのうちの残りのよい1点を図示した。63図5は甕または壺の胴部資料と思われる。地文は、条の細かい単節縄文が施されている。

本遺構の性格は不明であるが、その所属時期は、堆積土中より出土した遺物より弥生時代中期に比定するものと判断している。(稲村)

10号土坑 SK10 (図61・64 写真14・35)

本遺構は、調査区中央南寄りのX33グリッドに位置し、丘陵の東側裾部の緩斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層LIV上面である。重複する遺構はない。本遺構の南側約1.0mには11号土坑が位置し、北西方向に約3.0mの位置には、8号土坑が存在する。

遺構内の堆積土は、基本土層LIVに相応すると思われる黄褐色土をブロック状に含む締まりのない黒褐色土1層である。下層には骨片が集中して認められる。堆積土は、性状から人為堆積土と判断され、自然堆積土が全く確認されないことから、土坑掘削後すぐに埋められたものと推測している。

平面形は、直径約0.75mの円形を呈する。底面は基本土層LIV上に形成され、平坦かつ水平である。壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは、最大で80cmを測る。

本土坑からの出土遺物は、堆積土中より銅銭が六枚重なり合った状態で出土している(64図4)。この出土した銭貨は死者への副葬品として供えられたものと思われる。

本遺構は、堆積土中より骨片および六文銭が出土していることから、近世の土坑墓と判断している。(稲村)

11号土坑 SK11 (図62・64 写真14・35)

本遺構は、調査区中央南寄りのX34グリッドに位置し、丘陵の東側裾部の緩斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層LIV上面である。重複する遺構はない。本遺構の北側約1.0mには10号土坑が位置する。

遺構内の堆積土は2層に分層した。ℓ1・2ともに、基本土層LIVに相応すると思われる黄褐色土を含む締まりのない黒褐色土である。特に、ℓ2には骨片が集中して認められる。堆積土の性状から、いずれも人為堆積土と判断され、自然堆積土が全く確認されないことから、土坑掘削後、すぐに埋められたものと推測している。

平面形は、南北方向に長軸を持つ隅丸の長方形を呈する。その長軸方向はN8°Eである。現況で確認できた壁上端での規模は、南北方向の長軸長1.25m、これに直交する短軸長1.00mを測る。検出面からの深さは、最大で55cmを測る。底面は、基本土層LIV上に形成され、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、いずれも急である。

本遺構からの出土遺物は、堆積土中より煙管の雁首が1点出土している(64図5)。青銅製であり、遺存長8.1cmを測る。火皿部分は欠損し、煙を通した管(胴)部分には細身の竹管が残存している。

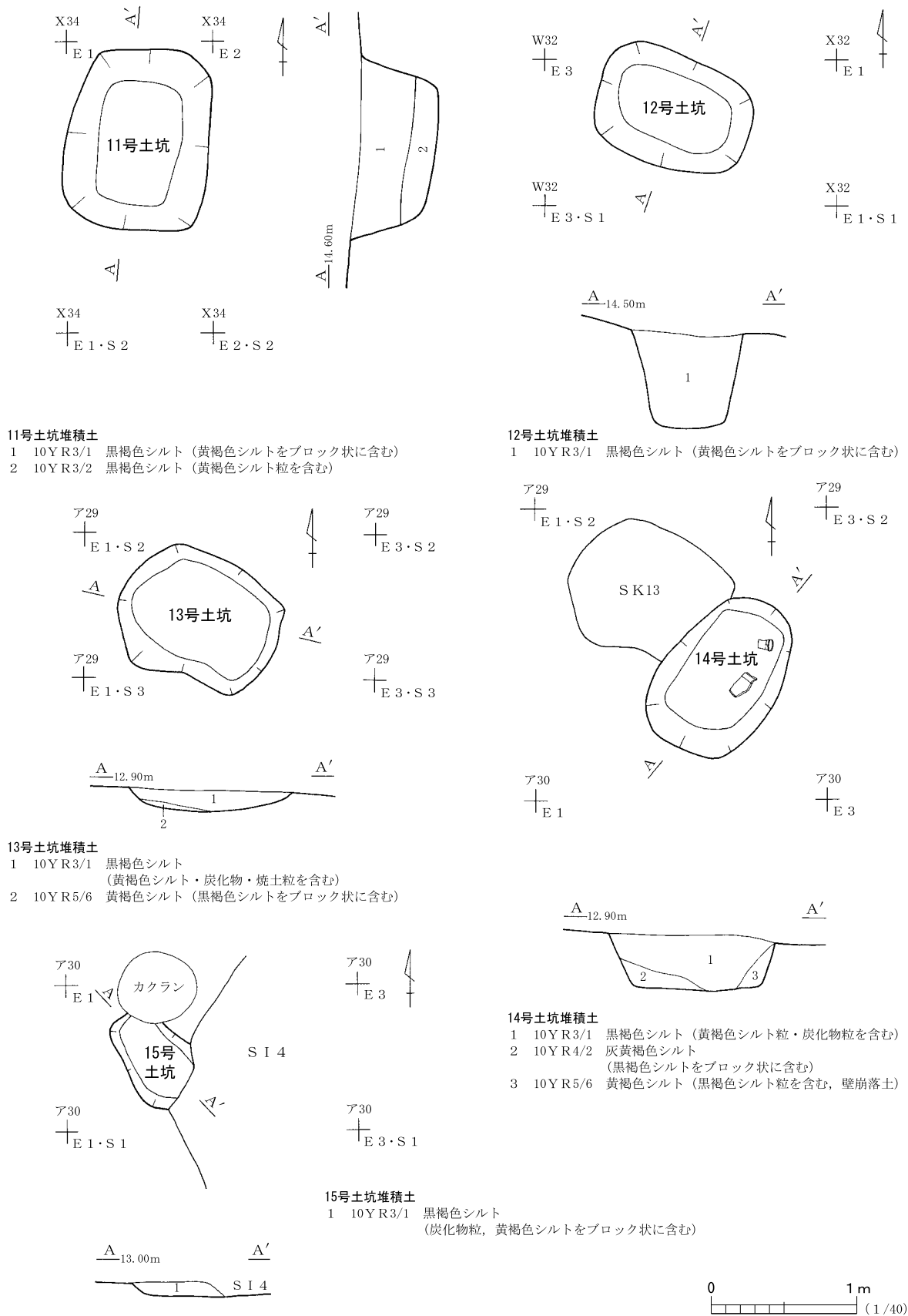


図62 11～15号土坑

第2節 土 坑

堆積土が人為堆積であること、骨片・煙管が出土していることから本遺構は、近世の土坑墓と判断している。 (稲 村)

12号土坑 SK12 (図62 写真14)

本遺構は、調査区中央やや南寄りのW31・32, X31・32グリッドに位置し、丘陵の東側裾部付近の緩斜面上に立地する。遺構検出面は基本土層L IV上面である。重複する遺構はない。本遺構の北側約3.0mの位置には2号住居跡が、南側約1.0mの位置には7号土坑が存在する。

遺構内の堆積土は、基本土層L IVに相応すると思われる黄褐色土を含む締まりのない黒褐色土1層である。下層には骨片が集中して認められる。堆積土の性状から、人為堆積土と判断され、自然堆積土が全く確認されないことから、土坑掘削後、すぐに埋められたものと推測している。

平面形は、東西方向に長軸を持つ隅丸の長方形を呈する。その長軸方向はW20°Nである。現況で確認できた壁上端での規模は、東西方向の長軸長1.1m、これに直交する短軸長0.8mを測る。検出面からの深さは、最大で65cmを測る。底面は、基本土層L IV上に形成され、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、いずれも急である。本遺構からの出土遺物はない。

本遺構の所属時期は、時期を特定付ける出土資料がないため不明であるが、堆積土中より骨片が出土し、また遺構形態や立地状況が、周囲に所在する近世土坑墓と類似する点などから、本遺構もまた近世の土坑墓であると判断している。 (稲 村)

13号土坑 SK13 (図62・63 写真15・34)

本遺構は、調査区東側のA29グリッドに位置し、西側丘陵裾部の平坦面上に立地する。遺構検出面は基本土層L IV上面である。本遺構は14号土坑と重複し、遺構の切り合い関係より本遺構の方が新しい。また、本遺構の南西約1.0mの位置には4号住居跡が存在する。

遺構内堆積土は2層に分層した。ℓ1は基本土層L IVに相当すると思われる黄褐色土粒と炭化物粒・焼土粒を若干含む黒褐色土である。堆積土の性状から、土坑使用時に堆積した人為堆積土と判断した。ℓ2は、黒褐色土をブロック状に含む基本土層L IVに相応すると思われる黄褐色土であり、その性状から壁の崩落土と判断している。

平面形は、東西方向に長軸をもつ不整な長方形を呈する。その長軸方向はW20°Nである。現況で確認できた壁上端での規模は、東西方向の長軸長1.1m、これに直交する短軸長0.85mを測る。検出面からの深さは最大で15cmを測る。底面は、基本土層L IV上および14号土坑内堆積土のℓ1上に形成され、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、いずれも緩やかである。

本遺構からの出土遺物は、堆積土中より弥生土器片が3点出土している。これは、重複する14号土坑からの流れ込みであると思われる。各遺物とも摩滅が激しい。そのうちの残りのよい1点を図示した。63図6は鉢の胴部資料と判断した。横走の沈線を施し、文様帯を区画している。胴部の地文には、単節縄文が施される。

本遺構の所属時期は、時期を特定付ける資料がないため不明であるが、検出面や遺構内堆積土、多量の炭化物粒や焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、古代のものと推測している。(稲村)

14号土坑 SK14 (図62・63 写真15・36～38)

本遺構は、調査区東側のア29グリッドに位置し、西側丘陵裾部の平坦面上に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。本遺構は13号土坑と重複し、遺構の切り合い関係から本遺構の方が古い。また、本遺構の南東隅付近において4号住居跡と境を接する。

遺構内堆積土は3層に分層した。ℓ1は、基本土層LⅣに相当すると思われる黄褐色土粒と炭化物粒を若干含む黒褐色土である。堆積土の性状から人為堆積と判断した。ℓ2は、黒褐色土をブロック状に含む黄褐色土であり、その性状から人為堆積と判断した。ℓ3は、黒褐色土を粒状に含む基本土層LⅣに相当すると思われる黄褐色土であり、その性状から壁の崩落土と思われる。

平面形は、北東から南西方向に長軸をもつ楕円形を呈する。その長軸方向はN32°Eである。現況で確認できた壁上端での規模は、北東から南西方向の長軸長1.15m、これに直交する短軸長0.8mを測る。検出面からの深さは、最深部で40cmを測る。底面は、基本土層LⅣ上に形成され、ほぼ平坦であり、堅く締まっている。壁は、いずれも急に立ち上がる。

出土遺物は底面および堆積土中より、弥生土器103点、石器1点が出土した。出土遺物の多くは遺構内堆積土中からの出土で、床面から出土したのも僅かにみられる。全体的に弥生土器は摩滅が激しい。そのうちの残りのよい27点を図示した(63図7～33)。以下、資料に沿って記述する。

63図7は底面より出土した甕である。口縁部から胴上部にかけて破片から復元図示した。推定口径21.8cm、遺存高13.0cmを測る。胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外反する。僅かに膨らむ胴上部に最大径を有する。口縁部はナデ調整が施され、胴部には単節縄文が観察される。口縁部と胴部の境には、横位の連続する刺突文が施される。

同図8～11は甕の口縁部資料である。胴部から口縁部にかけて緩やかに屈曲し、口縁部は全て短く、外反または外傾する。口縁部には全てナデ調整が施され、胴部は、11が単節縄文、8には植物茎の回転による擬縄文が施されるが、他は摩滅が激しいため不明である。11の口唇部には縄文が押捺される。

同図16は壺の頸部資料である。口縁部は欠損している。細口で長頸であり、頸部はほぼ直立し、口縁部は弱く外傾する。遺存高9.8cmを測る。頸部は無文でケズリ調整が観察されるが、口縁部と頸部の境には2条の平行沈線が横位に施され、頸部と胴部の境には条痕と沈線を組み合わせて文様を描出している。同図12～15・17・18は壺の胴部資料である。これらは全て、施文原体や胎土、色調が酷似していることから同一資料と思われる。平行沈線と磨消縄文を組み合わせた区画文が施されたもの(12～14)以外は、平行沈線が施されている。20は、沈線手法により文様を描出されているが、小破片であるため判別できない。

同図19は、鉢の口縁部から胴部にかけて破片から復元図示した。推定口径16.6cm、遺存高7.3cmを測る。全体的に、緩やかに内湾しながら立ち上がる形態である。口縁上端に2個1対の山形突起

第2節 土坑

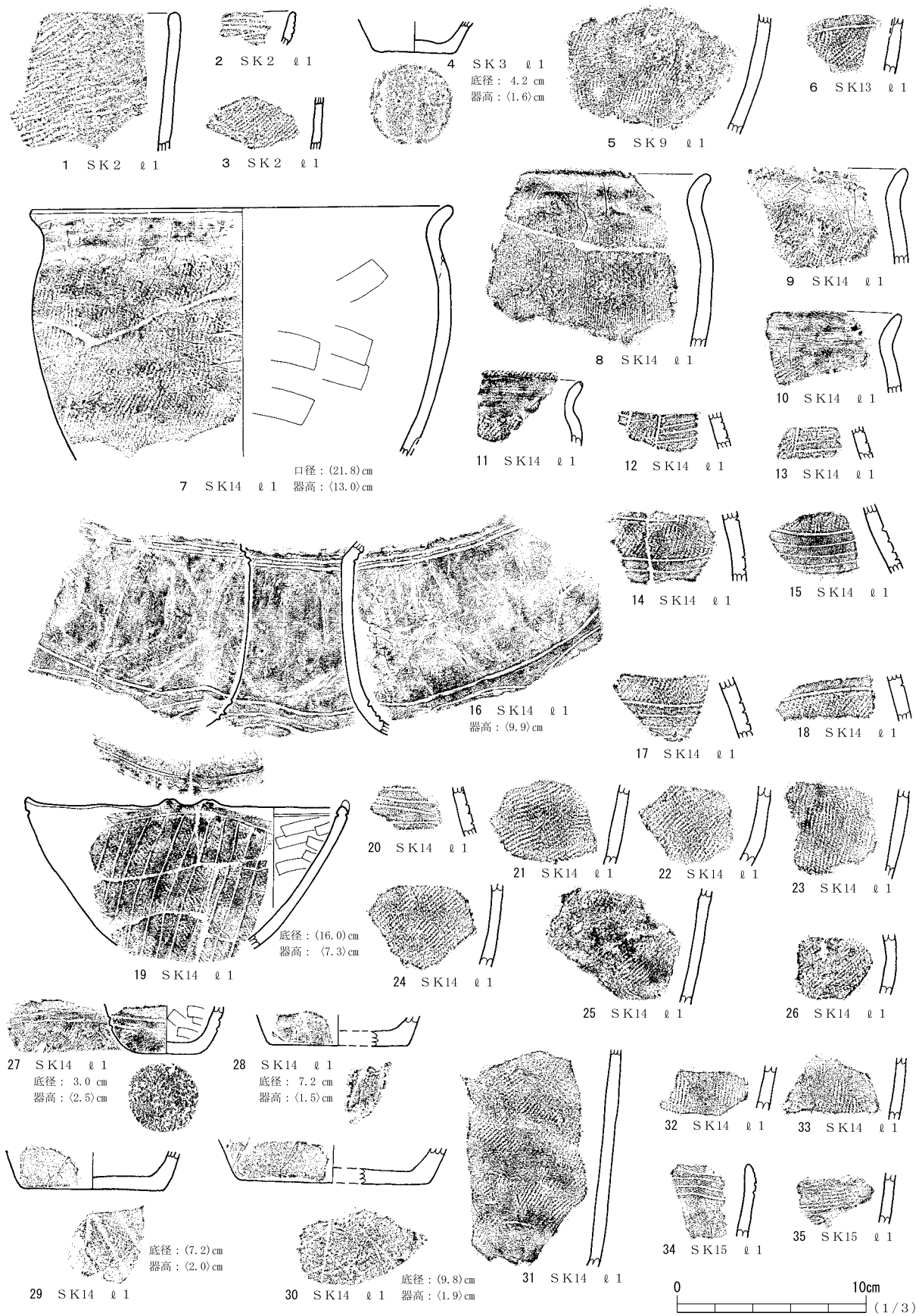


图63 土坑出土遺物(1)

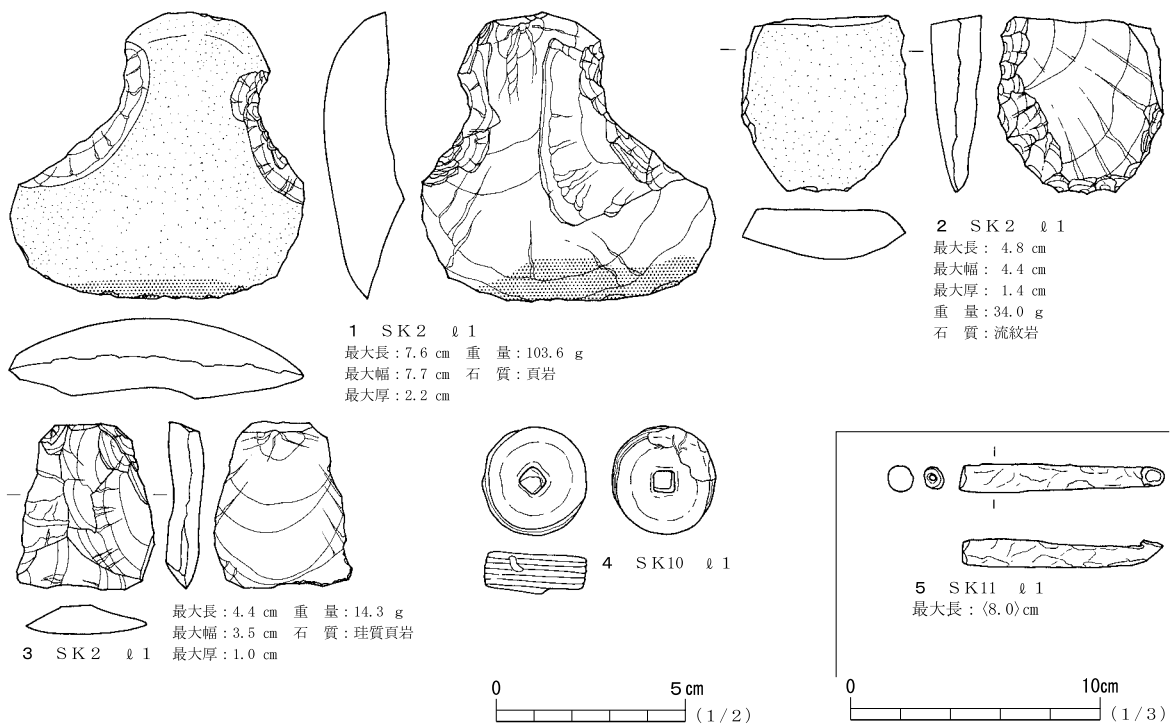


図64 土坑出土遺物(2)

を有する波状口縁で、突起の先端には縦に沈線状の刻みが入れている。口縁部には内外面ともに、1条の沈線が横位に施され、それを境にして、胴部外面には縄文帯と無文帯を交互に配し、重山形文が施されていると思われる。沈線については、先端の鋭い1条引きの工具を用いて施文している。

同図21～26・31～33は壺または甕の胴部資料であり、明確に器種判別できないものである。21～23, 31～33は施文原体や胎土、色調が酷似していることから同一資料と思われる。原体は、26は附加条縄文、他は単節縄文である。

同図29は小型鉢の底部資料である。底径3.0cm、遺存高2.5cmを測る。胴部は、底部側面から緩やかに内湾しながら開く形態であると思われる。胴部には粗雑な2条の平行沈線が巡り、胴下部には条痕が施される。底面にはケズリ状の調整が観察される。同図28・29は壺または鉢の底部資料であり、施文原体や胎土・色調が酷似していることから同一資料と思われる。推定底径7.2cmを測る。底部側縁から直線的に外傾する形態であり、内外面ともに丁寧に研磨されている。底面には木葉痕が観察される。

同図30は壺または甕の底部資料である。推定底径9.8cmを測る。底部側縁から直線的に外傾する形態であり、胴部外面にはナデ調整が施される。底面には木葉痕が観察される。

本遺構の性格は不明であるが、出土遺物によりその所属時期は弥生時代中期前葉の柵形罎式期に比定される。また、4号住居跡内の出土遺物と本遺構の出土遺物の数点が接合していることから、本遺構は4号住居跡との関連性が高いものと思われる。(稲村)

15号土坑 SK15 (図62・63 写真15・34)

本遺構は、調査区東側のA30グリッドに位置し、西側丘陵の平坦面上に立地する。遺構検出面は

第3節 焼土遺構

基本土層LⅣ上面である。本遺構は4号住居跡と重複し、遺構の切り合い関係より本遺構の方が古い。北側2.0mには13号土坑が位置し、西側2.0mには2号土坑が位置する。

遺構内堆積土は、基本土層LⅣに相当すると思われる黄褐色土と炭化物粒を若干含む黒褐色土1層である。斜面上位からの流入土は認められず、層中に炭化物粒を含むことから、堆積土の性状により、人為堆積と判断している。

平面形は、遺構の北隅部分および南東部分は削平されているが、残存部の形状から北西から南東方向に長軸をもつ形崩れした長方形を呈するものと思われる。長軸方向はN40°Wである。現況で確認できた壁上端での規模は、北西から南東方向の長軸遺存長0.65m、これに直交する短軸長0.4mを測る。検出面からの深さは、最深部で12cmを測る。底面は、基本土層LⅣ上に形成され、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、いずれも緩やかである。

本土坑からの出土遺物は、堆積土中より弥生土器片が6点出土している。各遺物とも摩滅が激しい。そのうちの残りのよい2点を図示した。63図34は鉢の口縁部資料である。口縁部は若干内湾し、上端付近には4条の横走る沈線が巡る。35は外面に撚糸文が施される甕または壺の胴部資料である。

本遺構の性格は不明である。所属時期は、堆積土中より出土した遺物から弥生時代中期に比定されるが、4号住居跡との重複関係により、4号住居跡よりは若干先行するものと考えられる。

(稲村)

第3節 焼土遺構

1号焼土遺構 SG1 (図65 写真15)

本遺構は、調査区西側のR34グリッドに位置し、1号塚墳頂平坦面の東端に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。遺構東半は大きく流失し、遺存状態は悪い。

酸化面の範囲の平面形は、遺存長で南北80cm、東西15cmを測る。残存部の形状から南北に長い楕円形を呈していたと思われる。本遺構は、掘形をもたず検出面から最大20cmの深さで被熱酸化している。焼土化した部分は、強い火熱を受けたため、基本土層LⅣが赤褐色に色調変化し硬化した状態であった。

出土遺物は、検出面より剥片1点が出土しているが、本遺構に直接伴うものか不明である。

本遺構の正確な時期を特定することはできない。また、本遺構が塚の盛土除去段階での検出であるが、塚盛土下の平坦面東端での検出であるため、塚の施設として伴うものなのか、それとも塚の構築以前に機能していたものなのかは不明である。

(稲村)

2号焼土遺構 SG2 (図65 写真15)

本遺構は、調査区西側のQ32・33グリッドに位置し、1号塚盛土下の平坦面北端に立地する。遺構検出面は基本土層LⅣ上面である。

本遺構は掘形を有し、その遺構内の堆積土は、炭化物粒を含む赤褐色の焼土層である。その性状から、人為堆積土と判断している。

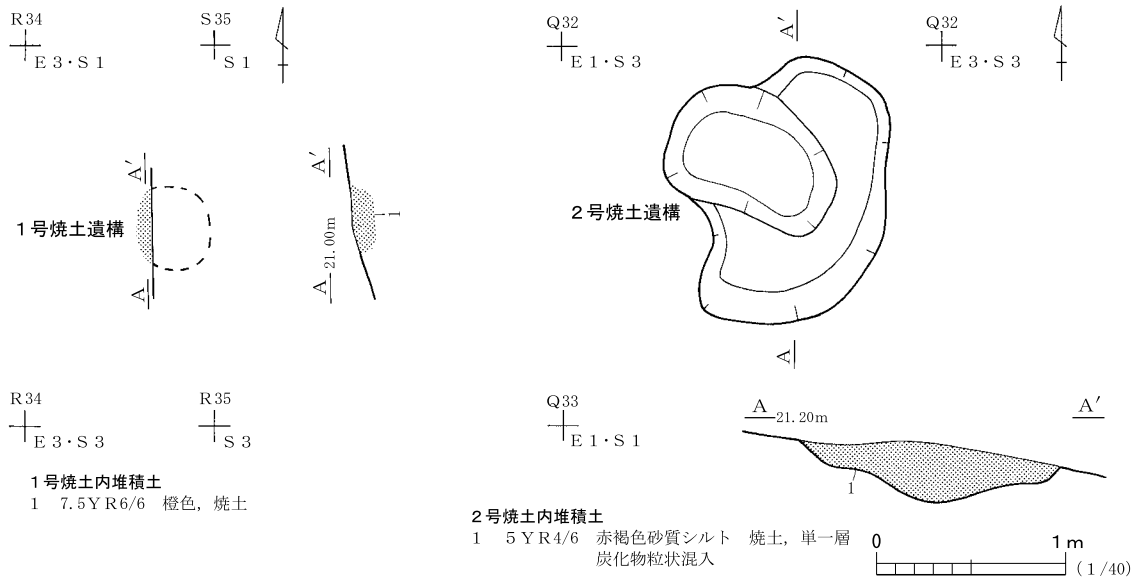


図65 1・2号焼土遺構

平面形は、南北方向に長軸をもつ不整な楕円形であり、西壁中央付近で若干西へ膨らむ。その長軸方向はN20°Eである。現況の壁上端での規模は、南北方向の長軸長1.47m、それに直交する短軸長1.25mを測る。底面は基本土層LIV上に形成され、ほぼ平坦で堅く締まっている。西へ突出する部分及び遺構の中央付近は若干窪んでおり、その形状は段状を呈する。壁の立ち上がりはいずれも緩やかである。検出面からの深さは最深部で30cmを測る。

本遺構は出土遺物が認められなかった為、正確な時期を特定することはできない。また、本遺構は塚の盛土除去段階での検出であるが、塚盛土下の平坦面北端に位置するため、塚の施設として伴うものなのか、それとも塚の構築以前に機能していたものなのかは不明である。(稲村)

第4節 塚跡

1号塚 (図66～68 写真16・17)

本遺構は調査区P32～35・Q32～35・R32～35・S33～35グリッドに位置し、調査区西側丘陵の頂部平坦部の山林中に立地する。本塚跡東半は、平成11年度の試掘調査の段階でも、既に削平され畑地となっており、調査前の現状ではほぼ半円形のプランを呈していた。また、西側の裾部は調査区外になるため全体の概要を捉えることができなかった。なお、頂上部には木が生えていたため、伐採後の根が残っていた。

遺構の掘り下げは、試掘調査時に掘り下げた断面を利用し、2分法を採用して、南北方向に分割して記録等の調査を行い、最終的には盛土を完全に除去するという順序で調査した。その結果、南北径9.3m、東西径10.2mの楕円形の盛土範囲を確認した。旧表土面上に最大厚95cm程度の盛土をしていることが判明し、断面は土饅頭形を呈している。盛土は全体的に黄褐色から明褐色を呈し、堅く締まっているため、人工的な盛土であることが確認できる。

第4節 塚跡

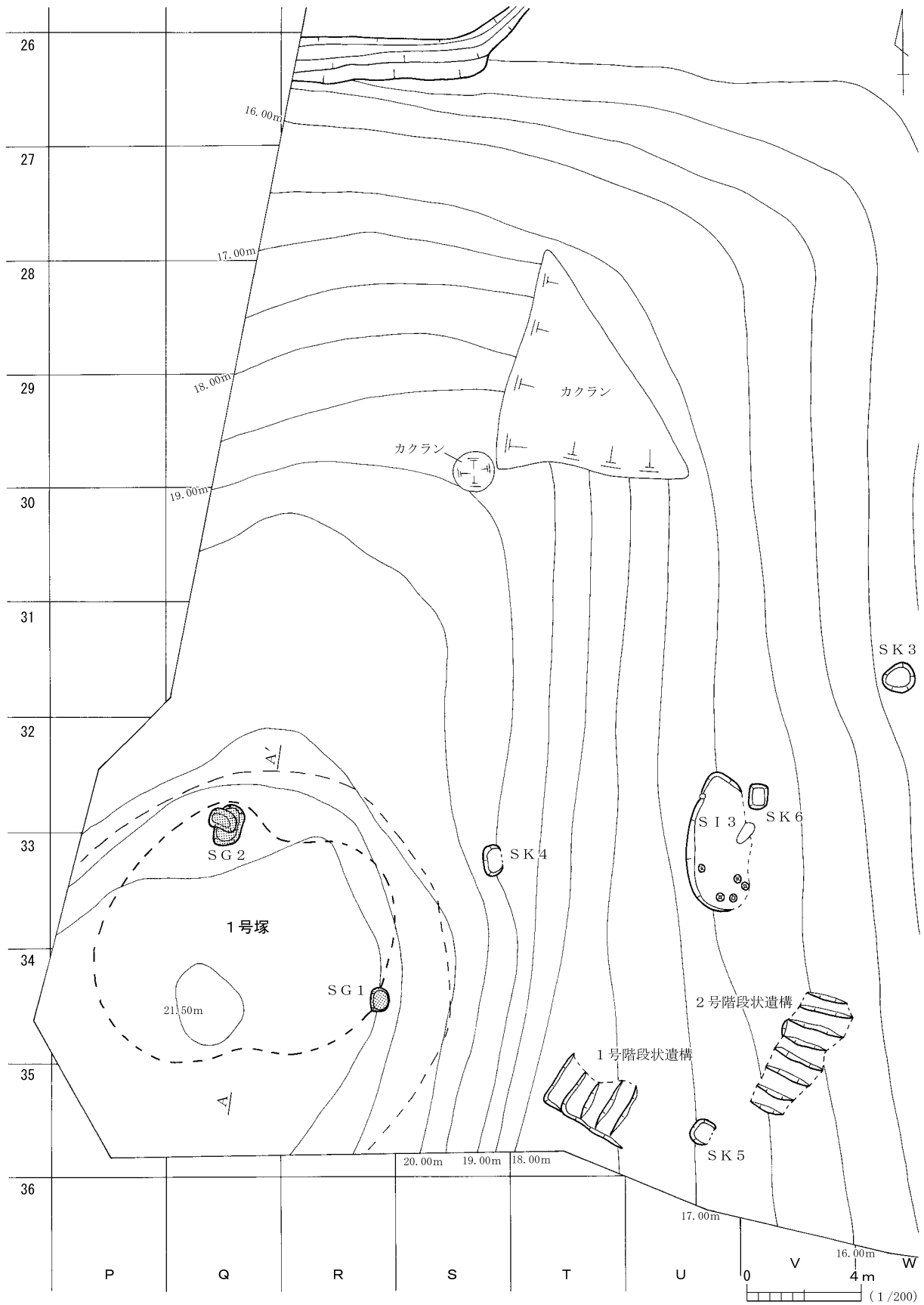


図66 1号塚周辺遺構配置図

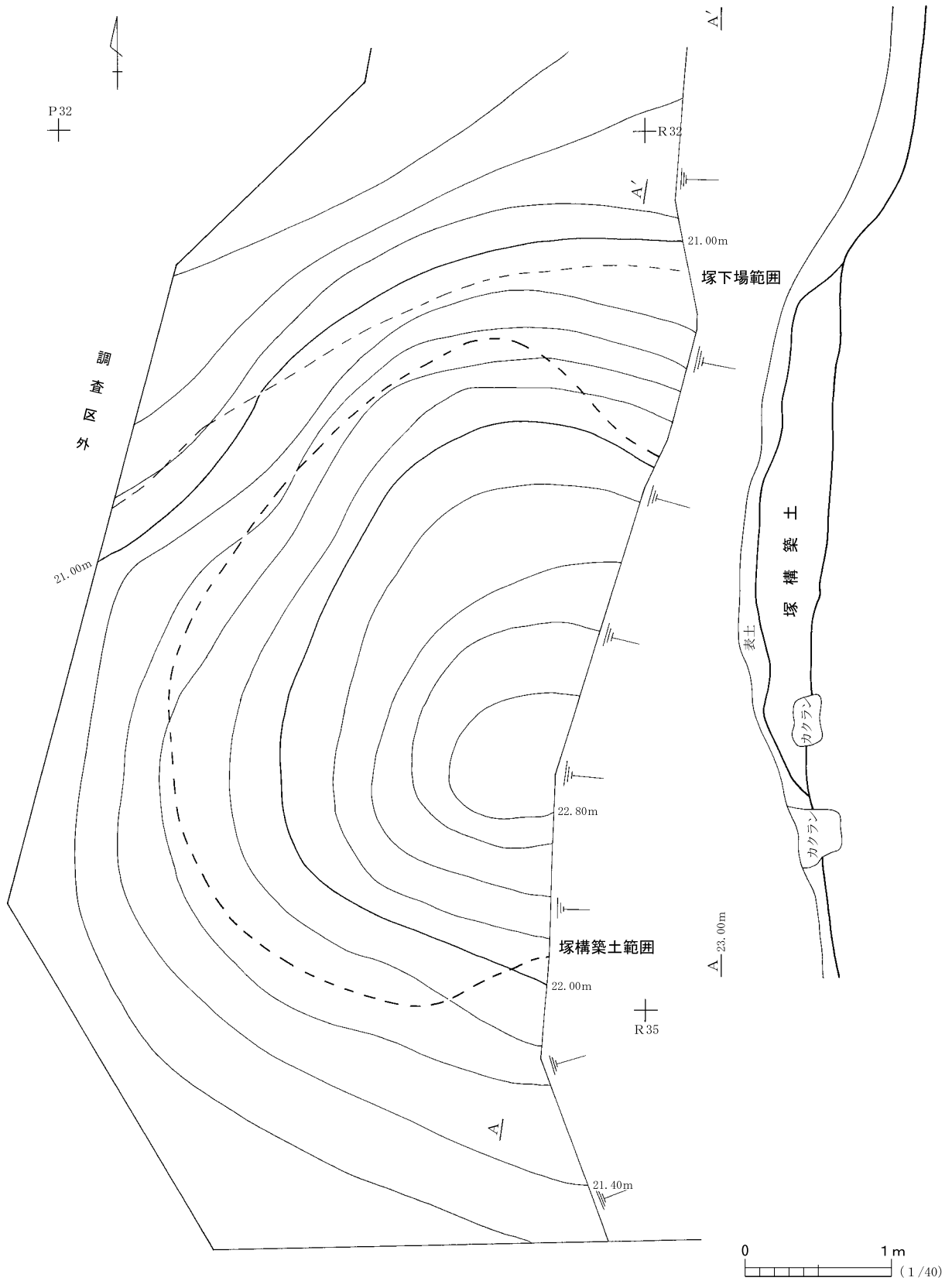


図67 1号塚

第4節 塚跡

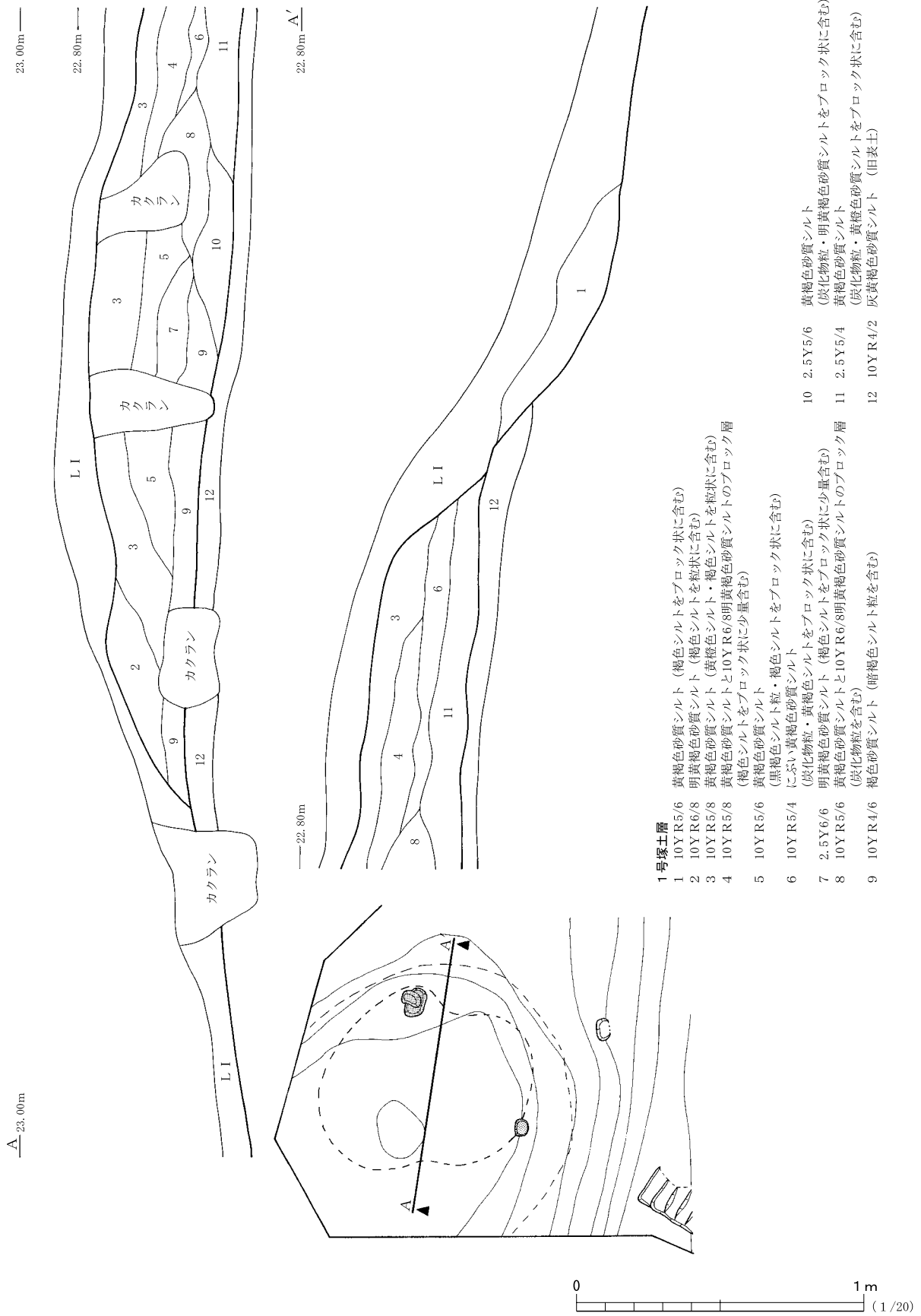


図68 1号塚断面図

頂部は根による攪乱を受けてはいるが、特に主体部などの付属施設は確認できず、また周囲に周溝の巡る形跡も認められなかった。

盛土下に2基の焼土遺構（SG1・2）を検出した。しかし、これらの遺構は、各々盛土基底面の北端および東端に位置し、また旧表土面下での検出であるため、直接本塚の施設として伴うとはいい難い。なお、出土遺物は認められなかった。

旧表土面は盛土下には認められるが、その周囲には認められず、また周囲の地山面も削り出している形跡が認められることから、本塚の構築の際には周囲の地山を掘削し、本来の地形を改変して塚を構築している。地山の掘削した下端で計測する塚の直径は約14.0mを測り、西側裾部は未調査であるが、ほぼ正円に近い形を呈すると思われる。盛土の断面から推測できる塚の構築方法として、まず周囲の旧表土及び地山を若干削り出し、盛土を基底面である旧表土面から20～25cmの高さまで積み上げる（ℓ9～11）、その後塚の中心部に60cmの高さまで盛土し（ℓ4～8）、最後に周囲に盛土（ℓ2～3）して形を整えるという手順が考えられる。

遺物に関しては、盛土中より若干の弥生土器・土師器の細片が出土しているが、摩滅が非常に激しく、両者が混在しての出土であるため、本塚に直接伴うものではないと判断した。

塚の性格・所属時期であるが、直接的に塚に伴う遺物の出土が認められないため、構築時期は不明である。本遺構は、以前から古墳とされてきた。また、塚のすぐ南の崖面一帯には本笑和田横穴墓群が所在し、本塚直下の崖面にも多数の横穴墓が認められる（2002『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告書Ⅲ』）。よって、本塚の性格を丘陵の斜面に造られた横穴墓群を象徴するための後背施設としての可能性も指摘できる。

また、塚の立地する丘陵一帯には、今回調査した1号塚の周辺にも、同規模のマウンド状の高まりが多数散在していることから、これらとの関連性も考慮しなければならない。

しかし、塚の立地している小丘陵の東側斜面には近世墓群（SK7・8・10・11・12）が位置し、後述する1・2号道跡が塚の周囲を巡るように検出された。この1・2号道跡は、後述する階段状遺構が塚へと向かう役割を果たしていると推測されることから、近世・近代においては信仰対象の場となっていたとも推定できる。 (稲村)

第5節 道跡

1号道跡 SF1 (図69 写真19)

本遺構は、調査区北側を東西方向にかけて延びる道跡である。傾斜が急な丘陵斜面が、若干緩やかになる斜面との境に立地し、斜面の傾斜に対してほぼ直交して延びる。本遺構と重複する遺構はない。

本道路跡は、遺構検出段階において、基本土層LⅡの掘り下げ後に確認された。当初は溝跡かと思われたが、遺構とその周囲は固く踏み締められていたことから道跡と判断した。調査前は、下草や雑木が繁茂し、道路の機能をほとんど果たしておらず、半ば廃道化した状態であった。

第5節 道跡

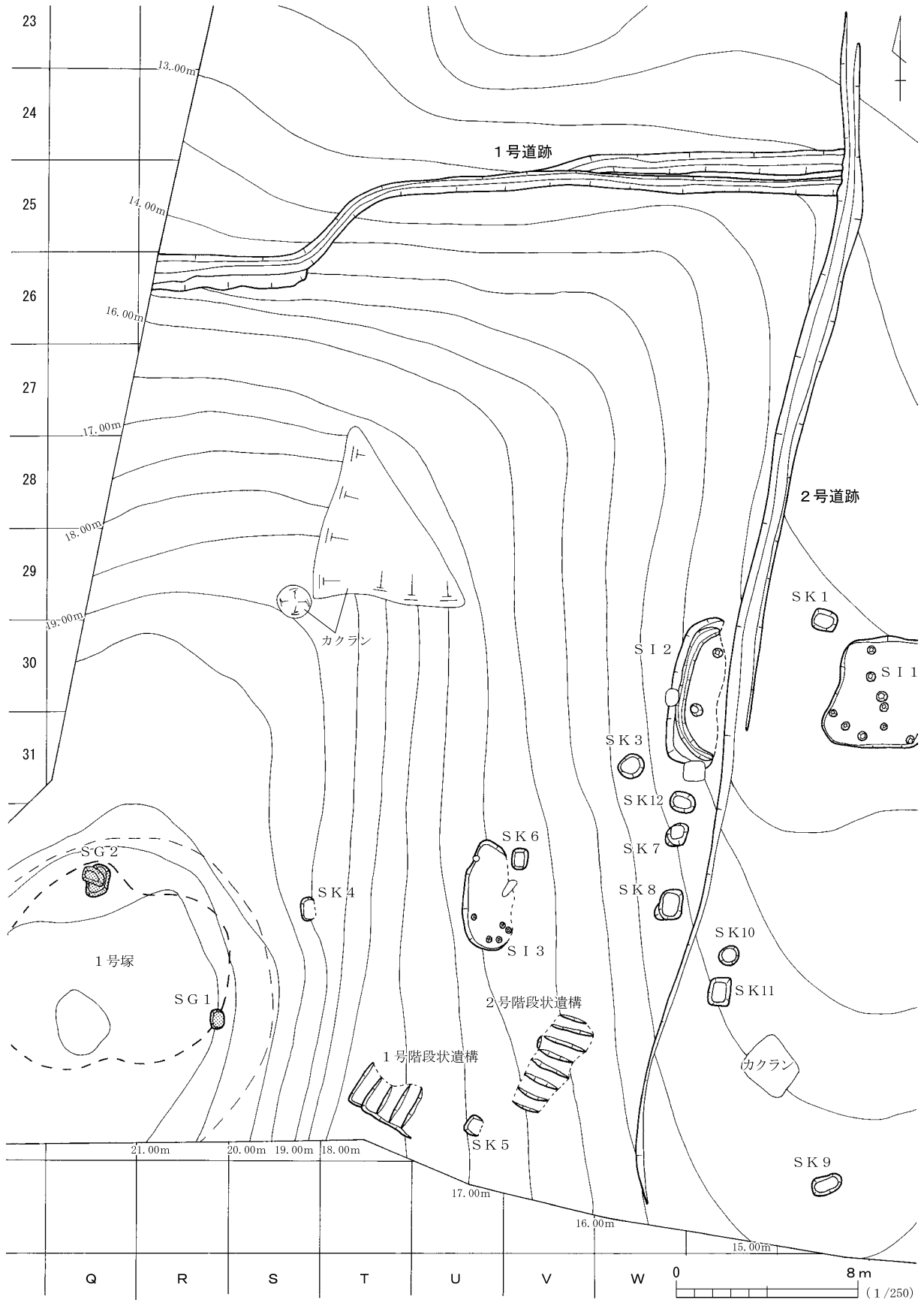


図69 1・2号道跡

調査区内で確認された道跡は、全長約32.0mである。北側斜面のR26グリッド付近から東に6.5m程直進した後、北方に緩くカーブして更に東へ直進する。V25グリッド付近で道は二股に分かれるが、これら両者は平行に東へ直進しながらY24・25グリッド付近で後述する2号道跡と、ほぼT字状に接続する。

また、丘陵側の道跡の片端は、全体的に低い切り通しになっている。遺構西側の上端付近のみ若干緩やかな段状を呈する。道跡の勾配は、S24・25、T25グリッド付近の北方に緩くカーブする付近で約15°と比較的傾斜がきついが、他はほとんど斜面の傾斜に直交しているため勾配は認められない。路面の幅は0.5～1.2m前後である。路面上は基本土層LⅣ上またはLⅤ上に形成され、一部基盤層であるLⅤを削り貫いて構築されている。底面は、平坦または中央が緩やかに窪んで、皿状の断面形を呈している。

本道跡からの出土遺物はない。道の経緯は不明であるが、2号道跡と密接に関係していたことは確かである。(稲村)

2号道跡 SF2 (図69 写真19)

本遺構は、調査区東側を南北方向にかけて延びる道跡である。調査区西半の急な丘陵斜面がやや緩やかになる斜面との境に立地し、斜面の傾斜に対してほぼ直交して延びる。本遺構と2号竪穴住居跡が重複する。遺構の切り合い関係より、本遺構の方が新しい。

本道跡は、遺構検出段階において、基本土層LⅡの掘り下げ後に確認された。当初は溝跡かと思われたが、遺構とその周囲は固く踏み締められていたことから道跡と判断した。調査前は、下草や雑木が繁茂し、道路の機能をほとんど果たしておらず、半ば廃道化した状態であった。調査区内で確認された道跡は、全長約53.5mである。調査区北側のY23グリッド付近から南側のW36グリッド付近にかけて、ほぼ南北方向に直進する。また本道跡は、東西方向に直進する1号道跡と、Y24・25グリッド付近でほぼT字状に接続している。

また、丘陵側の道跡の片端は、全体的に低い切り通しになっている。道跡の勾配は、全体的に約7°前後と比較的傾斜は緩やかである。路面の幅は0.7～1.2m前後である。路面上は基本土層LⅣ上またはLⅤ上に形成され、一部基盤層であるLⅤを削り貫いて構築されている。底面は、平坦または中央が緩やかに窪んで、皿状の断面形を呈している。

本道跡の経緯や担ってきた役割まで知る由もないが、道の地理的位置及び堆積土の状況から、1号塚及び1・2号階段状遺構と密接に関係する可能性が高い。もしそうならば、塚に対する民間信仰の場への参道としての役割を担っていたのかもしれない。(稲村)

第6節 階段状遺構

1号階段状遺構 (図70 写真19)

本遺構は、調査区南端やや西より付近を北西方向に向かって延びる階段状遺構である。T35・U35グリッドに位置する。調査区西半の丘陵斜面上に立地し、斜面の傾斜に対してほぼ直行する状態

第6節 階段状遺構

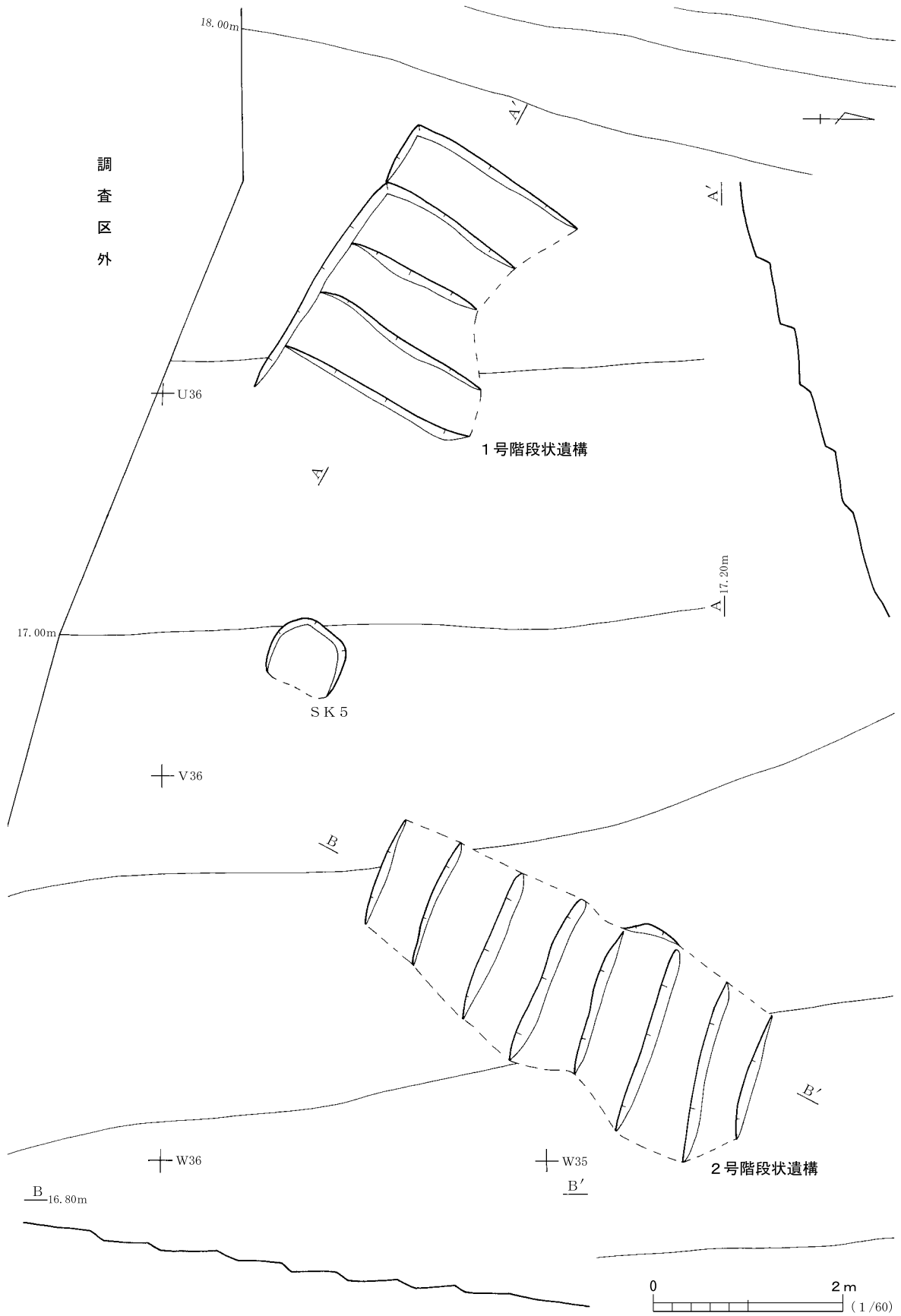


図70 1・2号階段状遺構

で延びる。本遺構と重複する遺構はない。調査前は、下草や雑木が繁茂し、階段の機能をほとんど果たしておらず、半ば廃道化した状態であった。

本遺構は基本土層LⅡの掘り下げ後に確認された。全長は約4.7mを測り、その主軸方向はW60°Nである。底面は基本土層LⅤを掘削し整形しており、その段数は5段ある。段差は10～18cmと各々であり、立ち上がりも各々緩やかである。幅は遺存長1.5～2.2mと各々異なるが、それらはほぼ平行に築かれる。本遺構の北辺は削平により確認できなかったが、南辺の側面は基本土層LⅤをほぼ直線状に削り出しており、立ち上がりは急である。

本遺構の経緯や担ってきた役割までは知る由もないが、地理的位置及び堆積土の状況から、1号塚および後述する2号階段状遺構と密接に関連する可能性が高い。(稲村)

2号階段状遺構 (図70 写真19)

本遺構は、調査区中央南寄り付近を南西方向に向かって延びる階段状遺構である。V34・35グリッドに位置する。調査区西半の丘陵斜面上に立地し、斜面の傾斜に対してやや斜め向きに延びている。本遺構と重複する遺構はない。調査前は、下草や雑木が繁茂し、階段の機能をほとんど果たしておらず、半ば廃道化した状態であった。

本遺構は基本土層LⅡの掘り下げ後に確認できた。検出面は基本土層LⅣ上面である。長さは約4.7mを測り、その主軸方向はN63°Eである。底面は基本土層LⅣを掘削し整形しており、その段数は8段ある。底面での明確な踏み締まりは確認できなかった。段差は3～11cmと各々であり、立ち上がりも各々緩やかである。幅は遺存長1.2～2.1mと各々異なるが、それらはほぼ平行に築かれる。本遺構の東西側の側面は削平により確認できなかった。

本遺構の経緯や担ってきた役割まで知る由もないが、地理的位置及び堆積土の状況から、1号階段状遺構及び2号道跡と密接に関連する可能性が高い。(稲村)

第7節 遺構外出土遺物 (図71・72 写真39～41・44)

遺構外より出土した遺物は、弥生土器171点、陶磁器7点、銅銭3点、石器24点である。全体的に弥生土器は摩滅が激しい。抽出した遺物を図71・72に示した。以下、資料に沿って記述する。

71図1～4は甕の口縁部資料である。胴部と口縁部との境の屈曲の度合によって、いくつかの形態がみられる。胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し口縁部は短く外反する形態のもの(1・3)、胴部から口縁部にかけて緩やかに屈曲し口縁部は短く外反する形態のもの(2)、胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する形態のもの(4)がみられる。口縁部には全てナデ調整が認められる。胴部外面には、4は単節縄文が施されるが、他は摩滅が激しいため不明瞭である。2は、胴部と口縁部の境に横位の連続する刺突文が施される。

同図5～12は壺の胴部資料である。5は沈線手法による四角文が施される。6～11は線間幅の狭

第7節 遺構外出土遺物

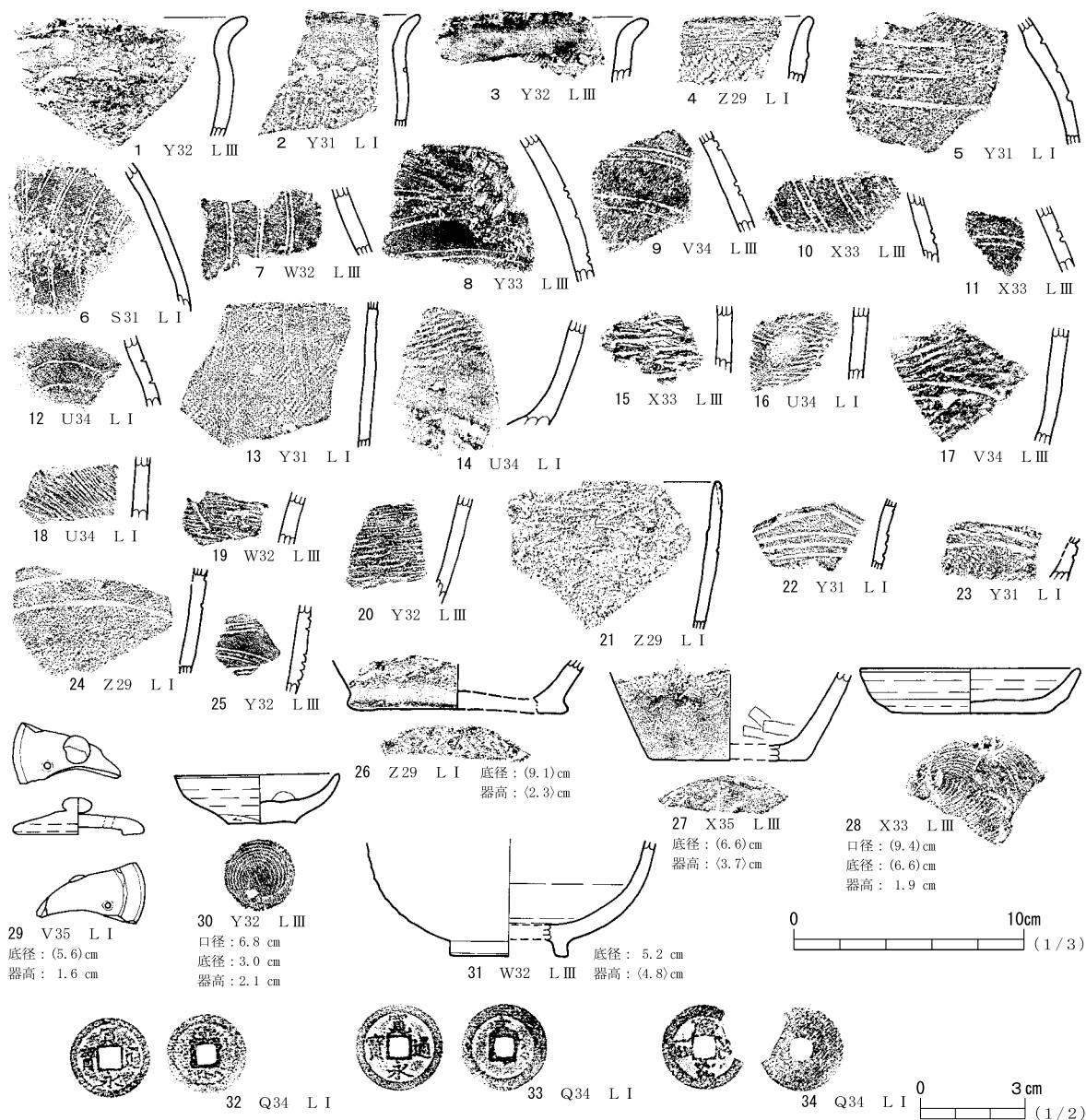


図71 遺構外出土遺物(1)

い半截竹管状の工具により文様を描いている。施文文様は、6～10は渦文もしくは円文であると思われる。他は、小破片であるため判別できない。線間幅は、6・7は1.5mm、8は3mm、9～11は5mmを測る。12は先端の鋭い工具を使用し、渦文もしくは円文を描いている。

同図13～20は壺または甕の胴部資料であり、明確に器種判別できないのものである。地文には、13は単節縄文、14～17は撚糸文、18～20は条痕文が施されている。

同図21～25は鉢の口縁部または胴部資料と判断した。21は胴部から口縁部にかけて直線的に外傾する形態で、表面は摩滅が激しいが、僅かに細い沈線と磨消縄文により三角形を基調とする区画文が施されている。22は沈線手法により三角形を基調とする区画文、23・24は胴部に数条の横走沈線が施されている。25も沈線と磨消縄文により文様が出されているが、小破片であるため判別できなかった。同図26・27は底部資料である。形態的には26は底部側面が突出し、27は底部側縁から直

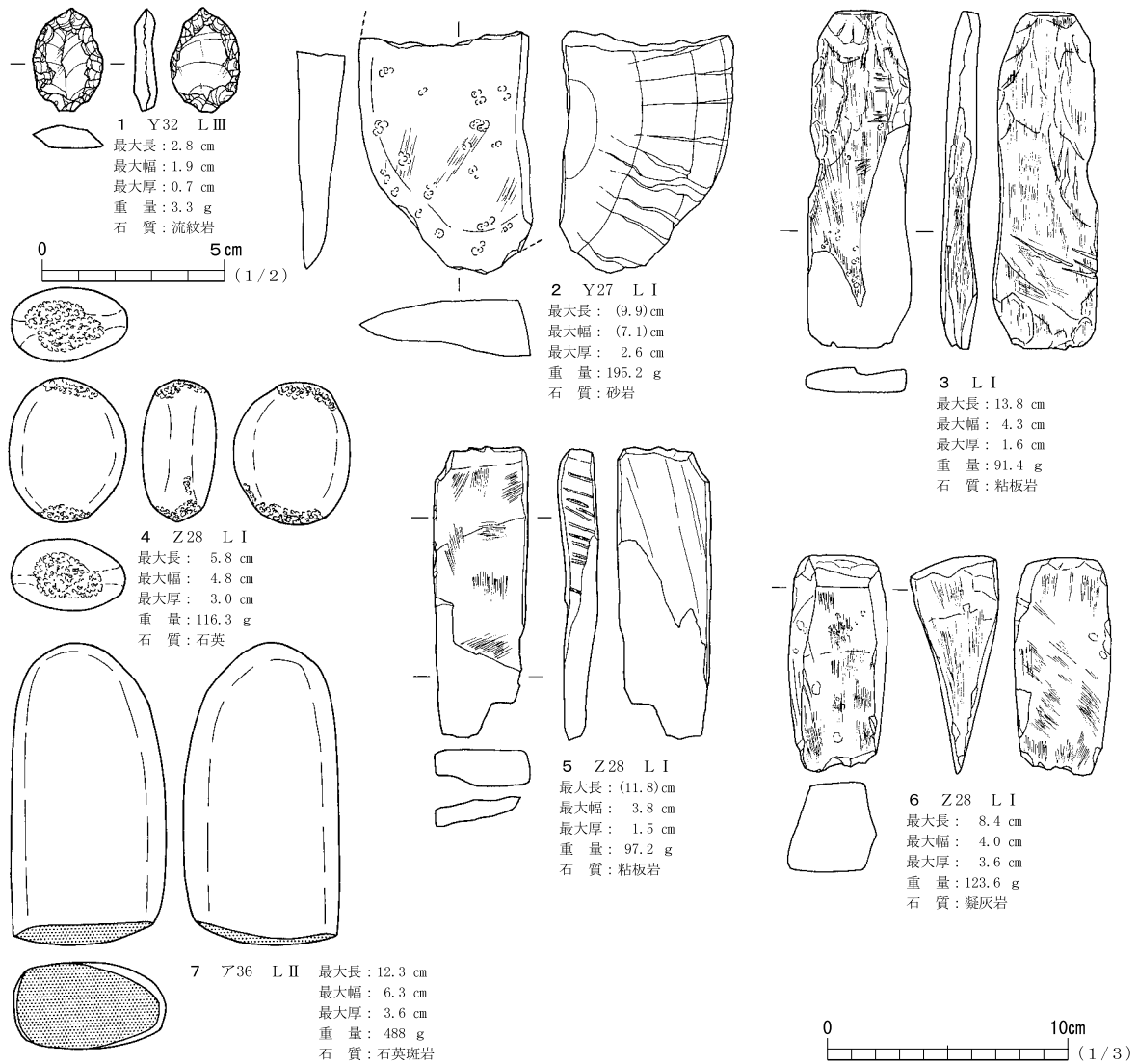


図72 遺構外出土遺物(2)

線的に外傾する。胴部の地文は摩滅が著しく不明瞭である。

同図28はかわらけの皿であり、ロクロ成形後の底部切り離しは回転糸切りである。同図29は陶器蓋である。つまみ部をもち、体部には貫孔が認められる。同図30は乗燭であると判断した。外面の上半部および内面に施釉している。内面の一部には二次的に火を受けて煤の付着が認められる。底面切り離しは回転糸切りである。同図31は陶器碗である。灰釉が施され、高台は無釉である。

同図32～34は銭貨である。すべてL Iからの出土である。32・33は寛永通宝、34は乾元通宝である。

72図1は、凸基有茎石鏃である。基部が欠損しているが、縦長の剥片を素材とし、表裏面とも側縁から調整剥離を浅く施している。このため、表裏面とも中央には剥片採取時の剥離痕が確認できる。同図2は、環状石斧の未製品であろうか。縁辺が弧状を呈し、側縁にかけて薄くなる横断面形を有する。表面には敲打痕後の研磨痕が観察でき、裏面には、資料欠損後に加えられた比較的大きな剥離面が認められる。同図3・4は敲打器と判断した。3は粘板岩製の薄い剥片を素材とし、1

第7節 遺構外出土遺物

次調整剥離により長方形に形を整えてから使用している。このため、この調整剥離痕の稜線が、研磨痕や部分的に見られる敲打痕により潰されている。石斧等の製品の可能性も考えられるが、明確な刃部は形成していない。裏面中央には幅1～2mm前後の比較的大きな沈線状の溝が認められる。4は円礫の上下端部に敲打痕が顕著に認められる。敲打痕は、多くの打撃により潰れた状態を呈している。

同図5・6は、砥石である。いずれも砂岩製で、直方体状に面取りして使用している。使用により表面が凹状を呈している。同図7は磨石である。楕円形の礫の下端部に磨耗痕が認められる。

これらの石器の時期は明確には不明であるが、1～4は弥生時代、他は古墳時代の可能性が高いものと推測している。

(吉田・稲村)

第4章 考 察

第1節 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で弥生時代の所産の可能性が高い遺構および遺物は丘陵頂部の縁辺やそれよりも一段下がった平坦面にかけて検出されている。第2章・第3章で述べてきたように、該期に属する遺構は竪穴住居跡4軒（S I 1～4）、土坑4基（S K 3・9・14・15）、溝跡3条（S D 1～3）である。弥生時代の遺物は遺構内外から総数3,950点出土し、その大半が柴迫A遺跡の1～3号溝跡出土のものである。遺構内で出土した弥生土器のほとんどが弥生時代中期前葉と同期後葉に比定されるため、出土した石器も該期の所産と判断している。ここでは、柴迫A遺跡・柴迫古墳群における弥生時代中期前葉・後葉の特徴をまとめ、若干の考察を試みたい。

1 弥生時代の遺物について

遺構内外から出土した遺物は、弥生土器3,950点、石器202点で、柴迫A遺跡の溝跡からの出土数が約65.7%を占めている。これらの遺物の大部分は、弥生時代中期前葉と後葉に属するものであり、若干の時期差はあるが、石器類を含め非常にまとまった資料であると考えられる。ここでは、大半を占める溝跡出土の遺物を中心に、特に器種組成に主眼を置きながら、柴迫A遺跡・柴迫古墳群における弥生土器・石器について記述する。

弥 生 土 器

柴迫A遺跡・柴迫古墳群から出土した弥生土器は、第2章および第3章の冒頭で述べた通り、大きく3期に大別することができる。第I～III期土器の器種組成では、壺（1類）、甕（2類）、鉢（3類）、蓋（4類）等が認められ、胴部（5類）や底部（6類）資料を除けば、壺・甕が圧倒的に多い傾向にある。また、柴迫古墳群で確認された当該期の住居跡や土坑等の遺構における遺物の出土状況は、ある程度のまとまりを保ってはいるものの、柴迫A遺跡の溝跡においては1号溝跡のℓ6～7を除いては、全て混在して出土したもので、再拡散・再堆積しているものであると判断した。以下、各期の土器の概要を述べる。

[第I期土器]

太い沈線と磨消縄文により文様を描出されているもので、弥生時代中期前葉龍門寺式に比定される。主に柴迫A遺跡の1号溝跡のℓ7からまとまって出土している。器種では、壺（1類）、甕（2類）、鉢（3類）が確認され、代表的なものを図73～76に示した。

1類 壺形土器は全て口縁部から胴部上半にかけての破片資料のみである。

第1節 弥生時代の遺構と遺物

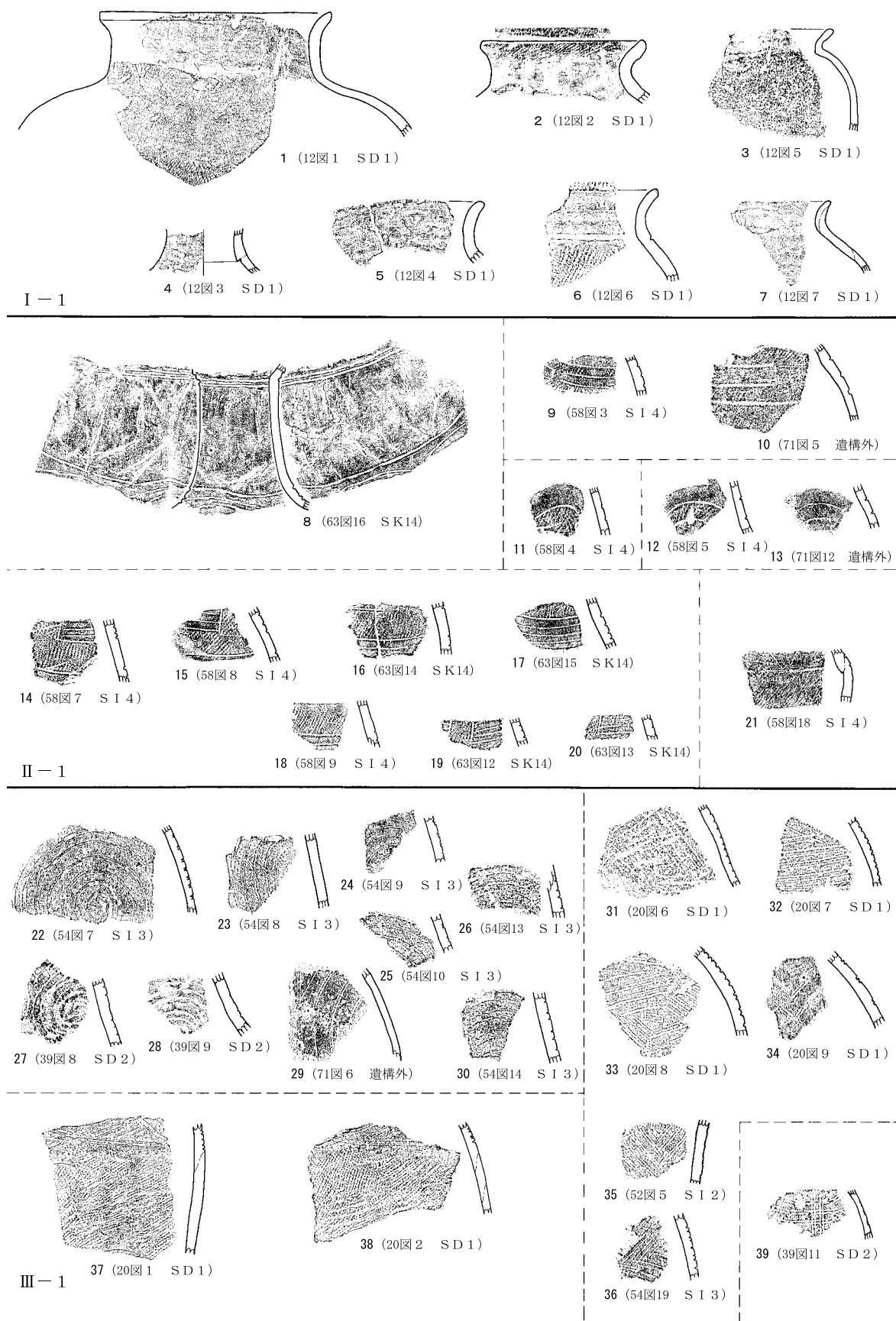


図73 壺形土器

(縮尺不同)

口縁部はすべて短頸である。①頸部はほぼ直立し、口縁部は弱く外反する形態（73図1）、②頸部は内湾し、口縁部は強く外反する形態（73図2）、③頸部は直立し口縁部が弱く外反するもの（73図5・6）、④頸部は直立し口縁部が強く外反するもの（73図3）、⑤口頸部がほぼ直立するもの（73図7）が認められた。

口縁部はナデが施されるが、若干縄文が施されるものも見受けられる。胴部文様は地文に縄文・撚糸文・附加条縄文などを施しており、撚糸文が多い傾向にある。

2類 甕形土器は、出土したものの殆どが破片資料であるが、形態的には中型のものが多く、小型のもの、大型のものは少ない傾向にあると思われる。口縁部はほとんどのものが平縁で、ナデが施されるものである。口縁部形態は①短頸で胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、外反するもの（74図1～6）、②短頸で胴部と口縁部の境にくびれをもち、口縁部はやや短く、外反するもの（74図7・8）、③短頸で胴部と口縁部の境に明瞭なくびれをもたず、緩やかに外反するもの（74図9・10）、④口縁部はやや短く外反し、胴上部に最大径を有するもの（74図11）に大別できる。胴部文様は地文に縄文・撚糸文・附加条縄文等を施しており、単節縄文が多い傾向にある。また、口縁部と胴部の境には刺突状の列点文が巡るもの（74図4・9）も認められる。

3類 鉢形土器は、そのほとんどが胴部上半から口縁部にかけての破片資料である。出土量が少なく、器形的に不明な点も多いが、全体の形状がわかるものに76図1の小型の鉢がある。口縁部と胴部は直線的に外傾する器形であり、胴部には横位帯状の沈線区画の磨消縄文を有する。また、76図2は口縁部は外傾し、胴部が屈曲する形態である。胴部には沈線区画の磨消縄文を有し、太沈線区画による文様を表出される。他は文様を表出されている破片資料のみであり、太沈線区画による三角連繫文が連続するもの（76図3～5）、渦文または弧文を表出するもの（76図6・7）、ヒトデ状の太沈線区画の磨消縄文を表出するもの（76図8～10）が認められる。

[第Ⅱ期土器]

細い沈線と磨消縄文または植物茎による擬縄文により文様を描出しているもので、弥生時代中期前葉楯形罎式に比定される。主に柴迫古墳群の4号住居跡および14号土坑から良好な資料が出土している。器種では壺（1類）、甕（2類）、鉢（3類）、蓋（4類）が確認でき、代表的なものを図73～76に示した。

1類 壺形土器はそのほとんどが胴部上半の破片資料である。器形的に不明な点も多いが、比較的良好な頸部資料として73図8の細口で長頸の壺がある。頸部はほぼ直立し、口縁部は弱く外傾する形態である。頸部は無文でケズリ調整が観察されるが、口縁部と頸部の境には2条の平行沈線が横位に施され、頸部と胴部の境には条痕と沈線を組み合わせて文様を描出している。

他は文様を表出されている破片資料のみである。細い沈線と磨消縄文を組み合わせた区画文が施されているもので、四角文（73図9・10）、錨形文（73図11）、円文または渦文（73図12・13）が表出されている。また、数条単位の平行沈線が施されており、平行沈線と磨消縄文を組み合わせた区画文が施されたもの（73図14～20）、沈線手法による重山形文が施され、重山形文の下端は一帶の

第1節 弥生時代の遺構と遺物



図74 甕形土器(1)

(縮尺不同)

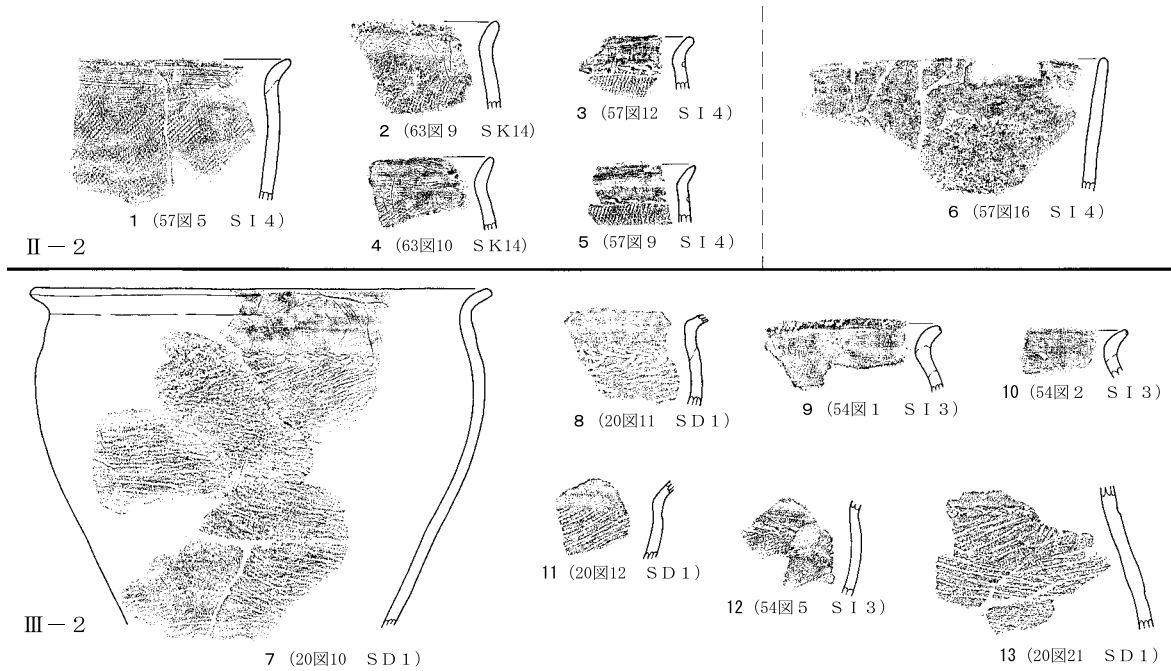


図75 甕形土器(2)

(縮尺不同)

横走る直線によって明確に区切られるもの(73図21)が認められる。

2類 甕形土器は、出土したものの殆どが破片資料であるが、形態的には中型のものが多く、小型のもの(74図14)、大型のものは少ない傾向にあると思われる。口縁部はほとんどのものが平縁で、外面にはナデが施されるものである。口縁部形態は①胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外反するもの(74図12~14)、②胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短頸で外反するもの(74図15~17, 75図4・5)、③胴部から口縁部にかけて緩やかに屈曲し、口縁部は短頸で外反または外傾するもの(74図18, 75図1~3)、④長頸であり、口縁部は直線的に外傾するもの(75図6)が認められた。

胴部文様は地文に縄文・撚糸文・附加条縄文等を施しており、単節縄文が多い傾向にある。また、口縁部と胴部の境には刺突状の列点文が巡るものも認められる。

3類 鉢形土器は、そのほとんどが胴部上半から口縁部にかけての破片資料である。出土量は少なく、器形的に不明な点も多い。口縁部はほとんどのものが平縁であるが、波状口縁を呈するものとして76図11がある。緩やかに内湾しながら立ち上がる形態である。口縁上端に2個1対の山形突起を有する波状口縁で、突起の先端には縦に沈線状の刻みが入れている。口縁部には内外面ともに、1条の沈線が横位に施され、それを境にして、胴部外面には縄文帯と無文帯を交互に配し、重山形文が施されていると思われる。沈線については、先端の鋭い1条引きの工具を用いて施文されている。

他は破片資料である。文様構成は、沈線と磨消縄文による三角形を基調とする区画文および連弧文が施されるもの(76図12~16)、口縁部に数条の平行直線文が巡るもの(76図17~19)が主に認められた。76図20は3本単位の沈線からなる下向きの連弧文が巡り、その上下には3本単位の平行

第1節 弥生時代の遺構と遺物

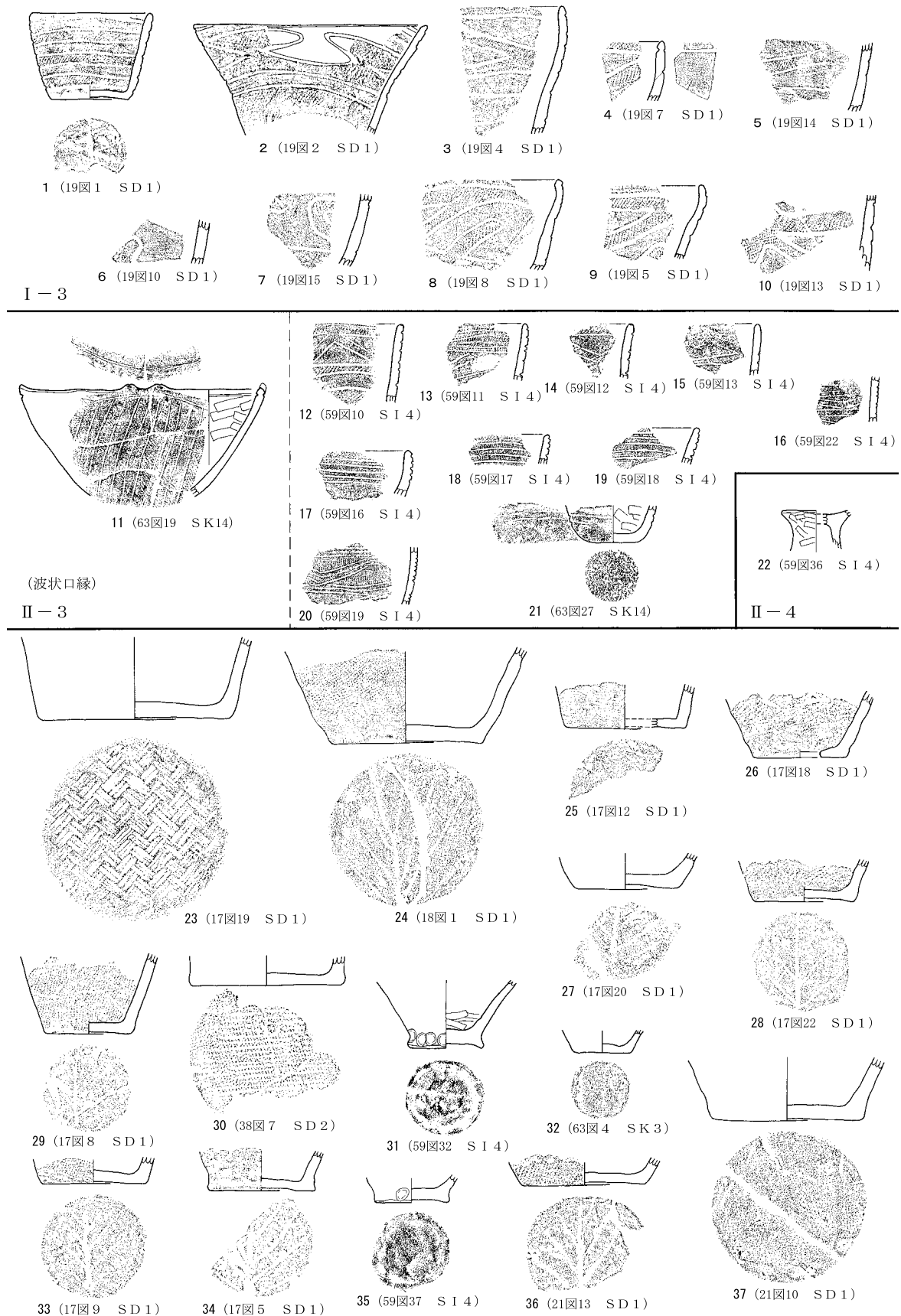


図76 鉢形土器・底部資料

(縮尺不同)

沈線文が施されている。各文様間には、植物莖の回転による擬縄文が充填されている。6類（底部）の中には胴部下位に沈線が巡る資料（76図21）も認められることから、これらについては本類の可能性も推測される。

4類 蓋と判断できたのは僅か1点である（76図22）。天井部付近の資料であり、つまみ部をもたず、天井部側縁が横に張り出す形態である。

[第Ⅲ期土器]

二本同時施文により、平行沈線文を描画するもので、中期後葉桜井式に比定されるものである。特に、柴迫A遺跡1号溝跡ℓ6、および柴迫古墳群3号竪穴住居跡から良好な資料が出土している。全て破片資料のため壺（1類）、甕（2類）のみ判断でき、代表的なものを図73～76に示した。

1類 壺形土器の頸部資料が大半を占め、比較的先細の工具によって二本同時施文が施されている。文様構成は円文・渦文（73図22～30）、重菱文・三角形文（73図31～36）、重山形文（73図37～38）、格子文（73図39）等が認められ、円文・渦文が多く、重菱文・三角形文がこれに次ぎ、他は僅かである。線間幅からみれば、大半の資料は沈線間2mm内外であるが、73図26・30のように線間幅が6mm前後とやや広いものもある。

2類 甕形土器は、そのほとんどが胴部上半から口縁部にかけての破片資料である。出土量は少なく、器形的に不明な点も多い。

口縁部形態はすべて短頸で①胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部が大きく外反するもの（75図7・8）、胴部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外反するもの（75図9・10）、③胴部と口縁部に明瞭なくびれをもたず、口縁部は短く、緩やかに外反するもの（75図11）が認められた。

口縁部はすべてナデが施され、胴部文様は地文に縄文・撚糸文・附加条縄文などを施しており、撚糸文が多い傾向にある。また、口縁部と胴部の境には綾絡文が巡るもの（75図7・12）も認められる。

（稲村）

弥生石器

石器類は柴迫A遺跡1～3号溝跡および柴迫古墳群も含めた遺構内外から202点出土し、そのうち比較的遺存状態の良い74点について図示した。

今回の調査区において、柴迫A遺跡と柴迫古墳群は同一の北向き緩斜面にあり、遺跡名称が異なるものの、同一の遺跡と捉えることができる。南端の斜面上方には柴迫古墳群1～4号住居跡があり、斜面下方には柴迫A遺跡1～3号溝跡が確認・調査された。これらより出土した遺物から、柴迫A遺跡と柴迫古墳群の弥生時代は、大きく中期前葉と同後葉の2時期に分かれることが判明した。本項では、両遺跡から出土した弥生時代の石器について総括する。

図77に両遺跡から出土した石器をまとめた。77図1～19は弥生時代中期前葉に比定される資料であり、同図20～28は同中期後葉の資料である。以下、古い時期から概観する。

第1節 弥生時代の遺構と遺物

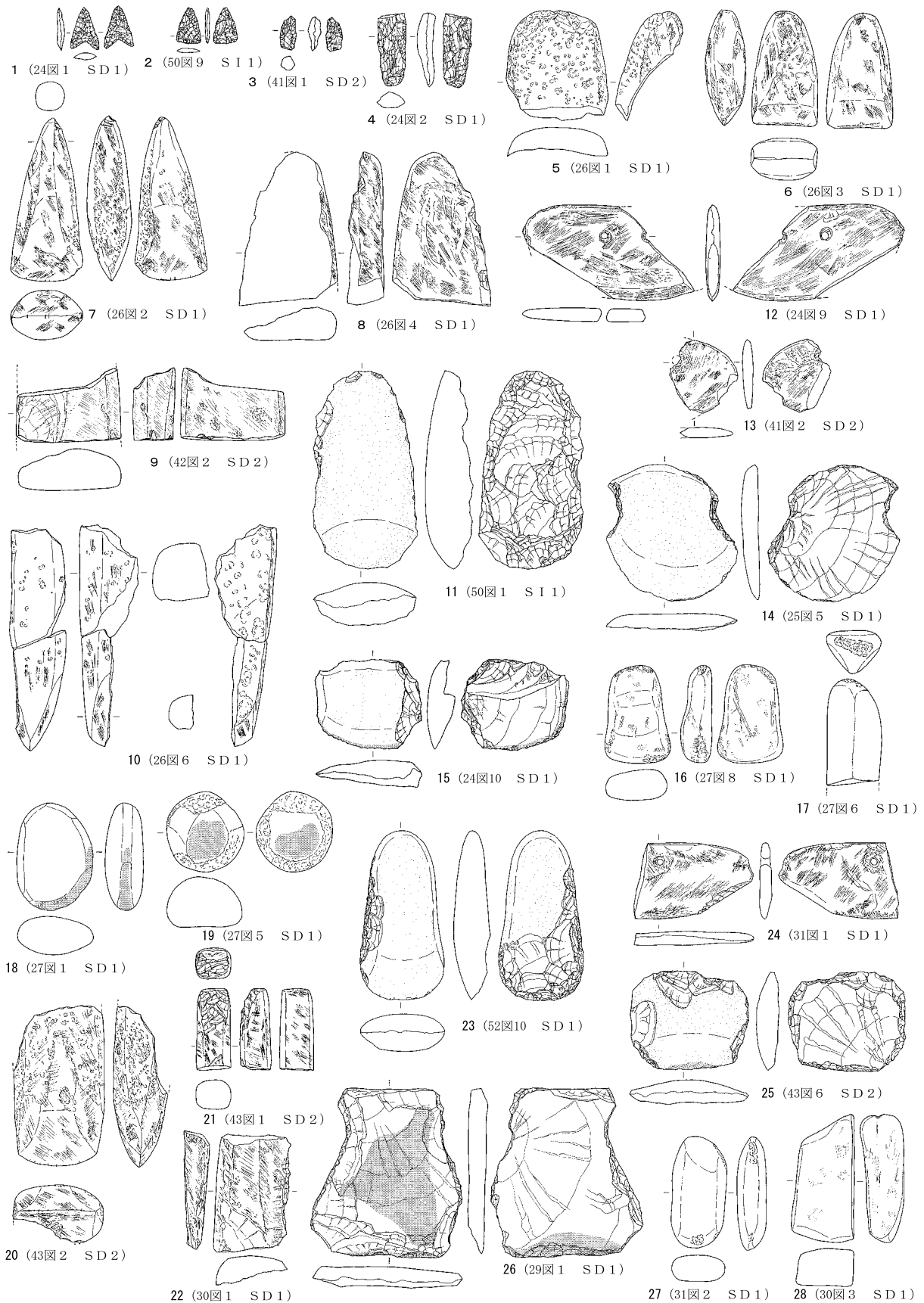


図77 弥生時代中期前葉（1～19）と同後葉の石器（20～28）

（縮尺不同）

1・2は石鏃である。1は凹基無茎，2は平基無茎である。今回の調査では，有茎石鏃は遺構外からの1点が確認できたにすぎず，石鏃の形状や大きさでは縄文時代の石鏃と変わりはない。3は石錐である。稚拙な作りであり，錐部が非常に短い。

4は打製石槍の基部である。県内では出土例が非常に少ない石種であり，鹿島町天神沢遺跡で，石匙の摘み状の基部を有する石槍と，側縁に抉りを施し基部とした磨製石剣が確認されている（竹島1983）。天神沢遺跡は中期前葉の柘形囲式や同後葉の天王山式の資料も確認されているが，主体をなすのは中期後葉桜井式期であるため，これらの資料は，桜井式期に比定されるものと思われる。したがって，当該期においては，本例が県内での初例となる。

5～11は石斧類を示した。5は大型蛤刃石斧の未製品の基部資料，11は表面に自然面が残る剥片を素材とした打製石斧である。これら2例は，当該期の県内遺跡において，これまでも知られていた資料であり，特に大型蛤刃石斧のような所謂大陸系磨製石器の存在は，福島県の太平洋沿岸地域では，弥生時代特有の石器が，中期前葉期には成立していたことを追認する好資料と思われる。

これに対し，6～10の石斧は，県内においてこれまであまり知られていなかった形状を有する資料である。6・7の2例は，特にその観が強い。6は，刃部の形状や平面形態では扁平片刃石斧のそれに近いものの，両刃である点や縦断面形では，小型の大型蛤刃石斧に近い。また，7も刃部付近の形状が大型蛤刃石斧に類似するものの，横断面形が円形で極端にすぼまった基部は，これまで県内では類例がない。このような扁平両刃石斧や基部が極端にすぼまった両刃石斧は，東北地方北部では散見でき，青森県砂沢遺跡・垂柳遺跡・伊沢遺跡等（岡田1992）や，秋田県諏訪台C遺跡・大倉遺跡等（児玉1992）がある。時期的には，垂柳遺跡を除きいずれも前期末から中期前葉に比定できる。各遺跡出土の現資料を実見していないので言及はさけるが，東北北部のほぼ同時期に存在する石斧が，本遺跡例に非常に類似したものであることは指摘しておきたいと思う。

8～10の各資料も，県内では類例が見られない資料である。いずれも欠損品であるが，10の残存状況から，完成品は長さ20cmを有に超える大型の両刃石斧になると思われる。最大の特徴は，前主面側がほぼ平坦となることであり，このため，前主面側の調整剥離は，基部あるいは刃部先端から比較的大きな剥離痕により整形している。8では，この調整剥離時の放射状裂痕が研磨により除去できないで遺存している。このような特長を有する両刃石斧が，当該期の石器組成の中に一定量確認できることを本例は示唆している。今後留意していきたい。

12～15は，石庖丁と直縁刃石器である。いずれの刃部にも使用によるコーングロスあるいは磨耗痕が見られ，収穫具・残株処理具として使用していたことが理解できる。

16・17は敲打器であり，18・19は磨・敲石である。いずれも自然礫を素材とし，礫の端部や稜線沿いに，敲打痕や磨耗痕が認められる。各痕跡は，縄文時代の同種石器にはあまり認められなかった位置に形成され，弥生時代前期を主体とする須賀川市松ヶ作A遺跡出土の同種石器（吉田2001）との類似が指摘できる。

以上の各石器の時期は，前述したように弥生時代中期前葉龍門寺式期である。いわき市龍門寺遺

第1節 弥生時代の遺構と遺物

跡出土の当該期の石器（猪狩他1985）と比較すると、大陸系磨製石器のうち、加工具である扁平片刃石斧や柱状石斧（ノミ形石斧）が本遺跡では欠落している。代わりに、6・7のような磨製の両刃石斧が認められる点が異なっている。また、石鏃では、有茎石鏃が見られず、無茎のみである点も相違点として提示できる。これらの差異は、同じ福島県浜通り地方の北側と南側の地域性として捉えたいと考えているが、今後の課題の一つとして結論は保留しておきたい。ただ、前述の松ヶ作A遺跡では、北方の極東アジアの沿海州やアムール川流域を中心とした初期鉄器文化に類似した鉄製品が出土し、磨製石斧にも金属器を模倣したような特異形状をもつものが認められる（吉田2001）。本遺跡の両刃の磨製石斧も東北地方北部との類似性が見られることから、松ヶ作A遺跡出土石器の延長線上にこれらの石器の存在があるのではないかと推測している。したがって、本遺跡の弥生時代中期前葉の石器は、一方で西からの大陸系磨製石器類を取り入れながら、もう一方で北からの影響を受けた石器も取り入れて形成されたものではないかと愚考している。

20～28は、弥生時代中期後葉桜井式期の石器である。20は大型蛤刃石斧の刃部資料、21は柱状石斧の基部資料である。21の柱状石斧は県内の当該期では初例であり、両側面を意識的に平坦にしている点は、古い様相を残している。

22は、前主面を平坦にする特長を有する両刃石斧の基部資料で、本例により前述の中期前葉で見られた石器が桜井式期まで残存していることが判明したことになる。23は礫素材の打製石斧である。これも、11に示した資料との類似が指摘できる。

24～26は、石庖丁・直縁刃石器である。製作技法や形態からは、これらも前述の中期前葉の石器と類似性が認められる。27は敲打器、28は自然礫をそのまま利用した砥石である。

これらのことから、本遺跡の桜井式期の石器は、基本的に中期前葉に成立した石器および組成を踏襲していることが理解できる。異なる点は、前述の磨製両刃石斧の欠落であり、これは同時期の周辺遺跡の石器を見ても同種石器は確認できていない（吉田1989；飯村1991；井1994）。このことは、弥生時代でも古い時期では北からの様相が垣間見られるが、新しくなると認められないことを示唆している。

最後に、本遺跡では、両時期を通して石器の未製品や製作途中時に派生する多くの剥片類などは、あまり確認できていない。これは、出土した石器が主に溝跡からであったことや、調査区が狭かったことに起因していると思われる。石材からは、在地性のものが認められるものの、非在地性のものもあり（付編参照）、石器製作と石材入手に関しては今後に期待したい。（吉田）

2 弥生時代の遺構について

今回の調査で検出された遺構数は、柴迫A遺跡・柴迫古墳群合わせて32遺構に上る。これらのうち、弥生時代の所産の可能性が高いことを示唆した遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑4基、溝跡3条などである。ここでは、僅かに生活域として痕跡を残す住居跡や溝跡等について、当該期の遺構の

立地状況や在り方についてまとめていきたい。

柴迫A遺跡・柴迫古墳群において遺構が形成されるのは、縄文時代晩期の出土遺物が僅かに認められたが、本格的に生活が営まれるようになるのは、弥生時代中期前葉の龍門寺式期からである。図78に示した遺構の分布状況を見ると、①丘陵頂部から一段下降した狭小の平坦地（柴迫古墳群：S I 2・3, S K 3）、②丘陵裾部の平坦地（柴迫古墳群：S I 1・4, S K 9・14・15）に住居跡・土坑等の居住域を形成している。遺跡全体では散在的ではあるが、基本的にはこの2つの在り方が認められ、柴迫A遺跡の1～3号溝跡はこれら遺構が構築されていた北側斜面下位の緩斜面上に認められる。今回の調査区において、柴迫A遺跡と柴迫古墳群は同一の北向き緩斜面にあり、遺跡名称が異なるものの、同一の遺跡と捉えることができる。

検出された弥生時代の住居跡は、柴迫古墳群の丘陵頂部から一段下降した狭小な平坦地から2軒（S I 2・3）、丘陵裾部の平坦地から2軒（S I 1・4）である。平面形は大きく2つに大別できる。丘陵裾部の平坦面に立地する1・4号住居跡は隅丸長方形を基調とし、丘陵頂部から一段下降した狭小な平坦地に立地する2・3号住居跡はその大半は消失しているが、遺存している形状から円形、もしくは楕円形を基調としている。住居内の床面および堆積土から出土した遺物の検討より、1・4号住居跡は中期前葉、2・3号住居跡は中期後葉に比定される。

福島県内で弥生時代中期の遺構を伴った遺跡の調査例は比較的少なく、竪穴住居跡が検出された遺跡としては、会津地方では、会津若松市一ノ堰B遺跡、中通りでは、須賀川市土取場B遺跡・矢吹町文京町遺跡・同町八幡町B遺跡、浜通りでは、新地町向田E遺跡・同町武井D遺跡・原町市鳥打沢B遺跡・同市長瀬遺跡・双葉町塚ノ腰遺跡・楢葉町美シ森B遺跡・いわき市上ノ内遺跡・同市伊勢林遺跡・同市龍門寺遺跡・同市朝日長者遺跡・同市白岩堀ノ内遺跡がある。この時期の竪穴住居跡の形態は、方形・楕円形・隅丸方形等、平面プランにバラエティーがあるのが特徴であり、炉を持つものは地床炉となっている。

今回検出された柴迫古墳群の4棟の竪穴住居跡の中には、2号住居跡のように周溝が巡り、地床炉が認められ、住居跡の要件を備え、確実に住居跡であると認定できたものもあるが、一方で3号住居跡のように、柱穴や炉跡が明確ではなく、曖昧な要素しかもたないものも見受けられる。また、1・4号竪穴住居跡は、住居内には多数の小穴は見受けられるが、柱穴と断定できるものは確認されず、地床炉らしき痕跡も確認できなかったが、土器や石器類を多く出土している。規模的には4号住居跡が3.5m程とやや小規模であるが、他は5m前後でほぼ近似しており、なかには2号住居跡のように長軸遺存長で6.5mを測り、比較的大型の住居跡も見受けられた。

検出された土坑では、柴迫古墳群から、該期に属する3・9・14・15号土坑を4基確認している。そのほとんどが住居跡と隣接・重複している。これらの土坑は、住居跡とほぼセットになって存在したようにも窺え、4号住居跡に隣接している14号土坑からは、4号住居跡内出土土器と接合する土器片が多く確認され、住居跡に隣接して作られた貯蔵的かまたは廃棄坑的要因が強いものと推測される。

第1節 弥生時代の遺構と遺物

柴迫A遺跡・柴迫古墳群の調査区では、遺構の稀有・集中部分はあるが、住居跡等の遺構がある程度集中する分布域はやはり丘陵頂部から一段降下した狭小な平坦地や、丘陵裾部の平坦地である。丘陵地を中心とするこのような遺跡の在り方は、相双地方では、本遺跡第Ⅲ期土器（桜井式）を伴う遺構が検出された相馬市武井地区遺跡群や原町市金沢地区遺跡群の成果を基にして、詳細に論じられているように（能登谷1991：小暮1995）、沖積部での遺跡が発見されにくい事も起因しているであろうが、本例のような遺跡・遺構の在り方が一般的な傾向として普遍的に存在するようである。本遺跡の当該期遺構群を考えるにあたり、上記遺跡の調査成果は非常に参考になるものである。時期別の遺跡数の変化を概観してみると、相双地区では桜井式期に遺跡数のピークを迎え、かつ先述したようなほぼ共通した立地形態をとることがわかる。しかし、本遺跡第Ⅰ～Ⅱ期土器を伴う遺構については、相双地区ではほぼ未確認の状態であり、集落域の立地形態をそのまま桜井

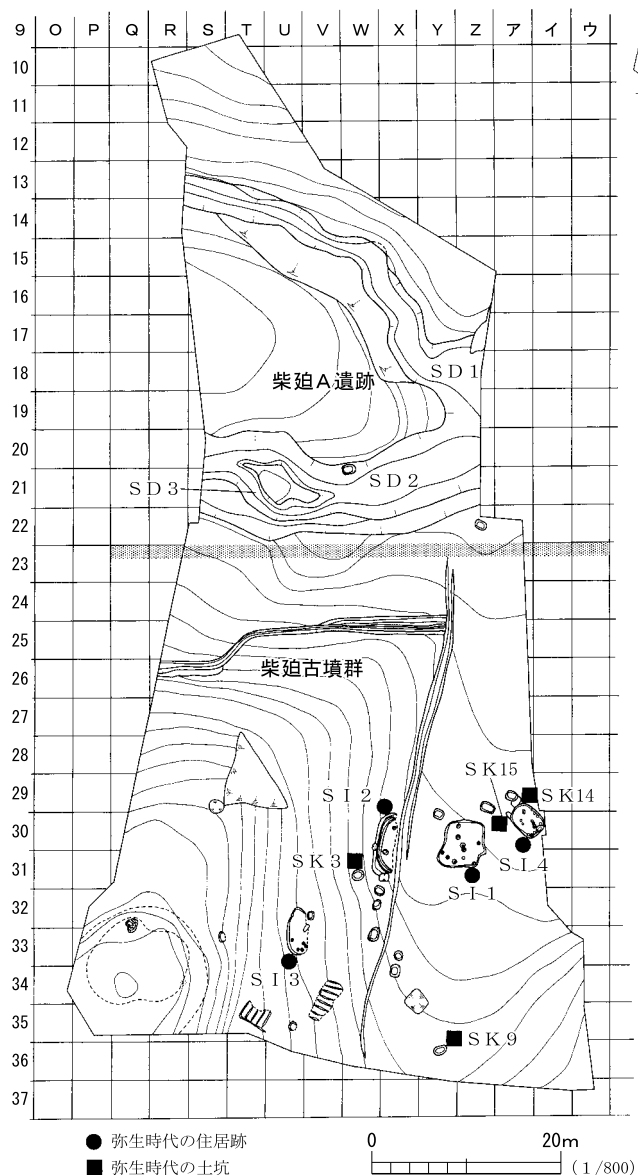


図78 弥生時代の遺構配置図

式期の事由と当てはめる事ができるのか、今後の検討課題の一つであり、これからの当該期の資料の増加を待ち、結論は保留しておきたい。

柴迫A遺跡・柴迫古墳群においては、遺構の検出状況や立地条件、調査区外を含めてもまだ若干の平坦地の存在が認められるが、継続的且つ大規模な集落構成は想定できない。しかし、柴迫A遺跡の溝跡から出土した多量の遺物を見る限り、生活域として良好な環境が整っていたので、ある程度好んで営まれていたと推測できる。

以上のように、柴迫A遺跡・柴迫古墳群では、丘陵頂部から一段降下した狭小な平坦地や、丘陵裾部の平坦地に弥生時代の居住域が確認され、その丘陵の北側からは、多量の弥生土器・石器を包含する1～3号溝跡が確認された。出土遺物は既に述べたように第Ⅰ～Ⅲ期土器に大別しているが、ほぼ弥生時代中期前葉と後葉に集約され、生活遺跡としての様相を示している。特に石器組成を重

視すれば、コーングロスの認められる石包丁や直縁刃石器、大陸系磨製石斧等の出土をみる限り、小規模ながらも安定した稲作農耕社会を営んでいたと推測する。

柴迫A遺跡・柴迫古墳群の特徴としては遺跡全体が丘陵地であるため、地形・地質等の自然的要因に起因する部分が大きく、限られた狭小な平坦地を選定して2～4軒程度の集落が散在し、1～3号溝跡の存在する付近の湿地において小規模な稲作農耕などを営みながら、山・海に関わる生業を主とした弥生時代の様相が想定できよう。弥生時代中期は約2,000年前で、当時と現在とで地形に大きな変化が考えられており、水田遺構の検出と沖積地の調査が進めばさらに福島県浜通り地方の弥生文化の様相が推察されてこよう。(稲 村)

第2節 柴迫A遺跡の溝跡について

柴迫A遺跡の大きな特徴は、二つの大きな溝跡(SD1・2)の存在であると思われる。この1・2号溝跡は、立地状況・遺構形態・堆積土状況からすると、人が直接的に構築したというよりは、既存の小河川をある程度、改変・改築したものであると推測される。底面、及び堆積土中からは、多量の遺物の廃棄・投棄が認められることから、排水溝または区画溝に使用されていた可能性も指摘され、当時の生活の場に密接に関連している。

これら1～3号溝跡の経緯は堆積土より出土した遺物により、その消長は、大きく4時期に区分することが可能である。それを図79に示した。本項では、それらの時期における溝跡の変遷について概観し、簡単なまとめをしたい。

1 期

1～3号溝跡に確実に生活の痕跡が認められるのは、弥生時代中期前葉からである。この時期には、南接する柴迫古墳群においても、当該期の集落跡が確認され、本遺跡との密接な関連性が指摘できる。1号溝跡からは、底面及び堆積土 ℓ 7より当該期の多量の土器・石器が出土している。また、2号溝跡においても、当該期に相応する遺物の出土が最下層である ℓ 6からも出土していることを考慮すれば、1～3号溝跡は、当該期には排水溝または区画溝としての重要な役割を果たしていたことが推測される。

2 期

弥生時代中期後葉の時期に当たる。この時期においても、柴迫古墳群では当該期の集落跡が確認され、本溝跡との密接な関連性が指摘できる。しかし、前段階の遺物の出土量と比して、若干少なくなる傾向が認められる。1号溝跡では、1期の遺物が出土した ℓ 7からは、当該期の遺物の出土は認められず、むしろ、その上層にあたる ℓ 5・6が当該期の堆積層である。また、2・3号溝跡においても上層より出土する傾向が認められる。1～3号溝跡は、前段階と比べて若干埋没傾向ではあるが、その機能は前段階と変わらず、1号溝跡に限れば、新たに改築を行っている等、その機能を十分に果たしていたといえる。また、2・3号溝跡については、完全に埋没してはならず、湿

第2節 柴迫A遺跡の溝跡について

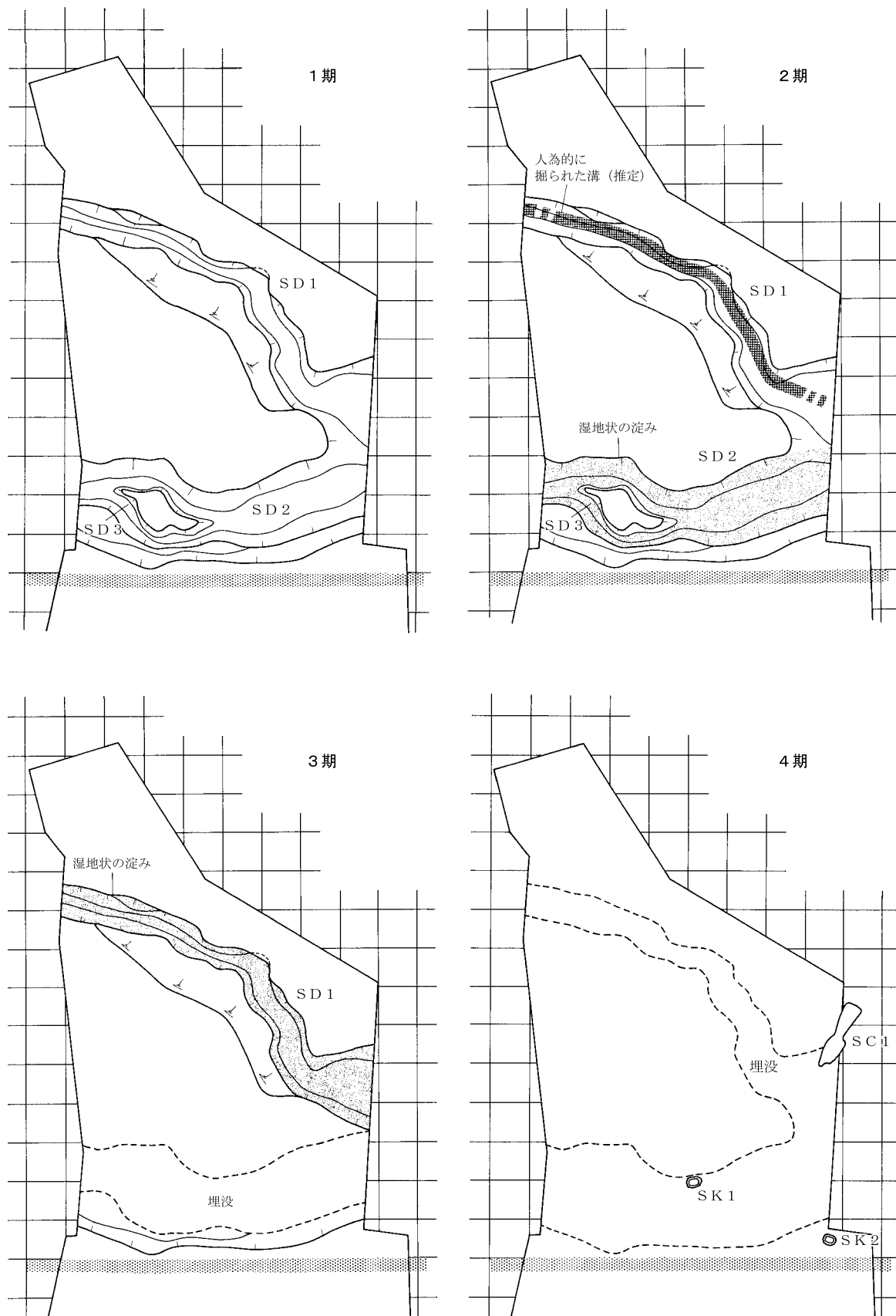


図79 1～3号溝跡変遷図

地状の淀みとして存続していたと推測する。

3 期

1号溝跡には、古墳時代終末期・栗圀式期の土師器・須恵器を含む堆積土層（ ℓ 1～4）が認められる。しかも、この時期に相当する遺物の包含は、2・3号溝跡の堆積土中には認められないため、7世紀段階では、2・3号溝跡は完全に埋没していたと推測できる。さらに、1号溝跡堆積土の ℓ 2～5にかけて確認されたFP（榛名二ツ岳伊香保テフラ）が、2・3号溝跡から検出されなかったことからすると、6世紀中葉以前にはすでに埋没していたと考えざるをえない。当該期の1号溝跡は、完全には埋まりきっておらず、湿地状の淀みとして残存していた様相を呈す。また、これらの遺物は、上流より流れ込んで堆積したよりは、その場に廃棄・投棄した様相を示している。なお、今回はこの時期に相応する遺構の確認はできなかったが、本遺跡の近隣には確実に当該期の集落跡が存在し、本遺跡が立地する丘陵の南端付近一帯に存在する本笑和田横穴墓群を形成する母体を担っていた可能性が高いといえる。

4 期

1号溝跡の廃絶の時期に当たる。明確な時期については不明であるが、溝跡北側の斜面を利用して1号木炭窯が構築されており、それに付随する廃滓層が溝跡堆積土 ℓ 1上に堆積していることを考慮すれば、木炭窯の構築時には、1号溝跡は既に機能を失って完全に埋没していたと考えられる。1号木炭窯は、作業場から出土した遺物より、奈良・平安時代のものに比定されることから、当該期以前を1号溝跡の埋没の時期と考えたい。

以上、柴迫A遺跡内での1～3号溝跡の変遷より、弥生時代中期前葉に生活の痕跡が認められるところから、その時期に溝としての機能が開始し、その後古墳時代終末期の栗圀式期までには、2・3号溝跡は完全に埋没していたと推測される。更に奈良・平安時代には、1号溝跡も完全に埋没しており、それ以後、これら溝跡の堆積土上にも生活の痕跡が認められるという様相を呈している。

（稲 村）

第3節 ま と め

柴迫A遺跡では、溝跡3条、土坑2基、木炭窯1基が、2か年におよぶ柴迫古墳群の調査では、竪穴住居跡4棟、土坑15基、焼土遺構2基、塚1基、道跡2か所、階段状遺構2か所が検出された。両遺跡合わせて出土した遺物は、弥生時代の中期前葉・同後葉に比定される土器や石器、古墳時代栗圀式期の土師器・須恵器などがあり、その他に陶磁器・銅銭・煙管等を若干含む。柴迫A遺跡・柴迫古墳群の詳細は既述の通りであるが、ここでは両遺跡の変遷について簡単に触れたい。

縄文時代晩期の出土遺物が僅かに認められたが、調査区内に遺構を形成するのは、弥生時代中期からである。この時期には、柴迫古墳群の丘陵裾部の北向き緩斜面、または丘陵頂部から一段下降した狭小の平坦地に竪穴住居跡・土坑などで構成される居住域を形成し、緩斜面下方には柴迫A遺

第3節 まとめ

跡1～3号溝跡が確認され、これらは密接な関連性が指摘できる。狭小な平坦地を選定して2～4軒程度の集落が散在し、柴迫A遺跡の1～3号溝跡が存在する付近の後背湿地において小規模な稲作農耕などを営みながら、山・海に関わる生業を主とした弥生時代の様相が想定できよう。

弥生時代中期以後、両遺跡での人間活動の痕跡は若干途絶える。その後、柴迫A遺跡1号溝跡には、古墳時代終末期、栗圀式期の土師器・須恵器を含む堆積土層（ ℓ 3～4）が認められる。しかも、栗圀式期の遺物の包含層は、2・3号溝跡の堆積土中では認められないため、この時期には、2・3号溝跡は完全に埋没していたと推測できる。1号溝跡より出土したこれらの遺物は、上流より流れ込んで堆積している様相を示すよりは、その場に廃棄・投棄した状態での出土である。この時期の1号溝跡は、完全に埋まりきっておらず、湿地状の窪地として存在していたと思われる。今回は、この時期に相応する遺構の確認はできなかったが、調査区の近隣には確実に当該期の集落跡が存在し、本遺跡が立地する丘陵の南端付近一帯に存在する本笑和田横穴墓群を形成する母体を担っていた可能性が高いといえるであろう。

次に確認できるのは奈良・平安時代の時期である。柴迫A遺跡1・2号土坑、1号木炭窯、柴迫古墳群1・2・4～6・13号土坑が当該期の遺構である。これらは丘陵斜面や裾部の平坦面、または柴迫A遺跡の埋没した溝跡の堆積土の上に散発的に築かれる。土師器等の具体的な時期を示す遺物の出土は認められなかったが、これらの遺構は全て検出面や遺構内堆積土、多量の炭化物粒や焼土粒の集積が古代の木炭焼成土坑に類似する点などから、古代の所産のものとして判断した。なお、調査区の北方約300mには、古代の製鉄関連遺跡である北迫A遺跡（2002『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅱ』）が所在することから、もしかしたら彼地へ供給していたという想定も可能かもしれない。

奈良・平安時代以後、両遺跡での人間活動の痕跡は途絶える。次に確認できるのは、近世である。柴迫古墳群7・8・10・11・12号土坑が当該期の遺構である。これらの土坑には、全て骨片が出土しており、煙管・六文銭等の出土遺物から判断して、近世の土坑墓であると思われる。丘陵裾部の緩斜面上に集中して築かれている。当該期に調査区内の一部には、墓域としての役割を担っていたのであろう。

また、時期不明の遺構として、柴迫古墳群の1号塚があげられる。1号塚の性格や年代に関しては、それを直接的に示す物的証拠が皆無である。本県の中通り南部においては、これまで多くの塚が調査・報告されている。それによると塚の性格としては、民間信仰に関係するもの、及び政治的な目的に関するものに大別されるようである。

1号塚の立地している小丘陵の東側斜面には近世墓群（SK 7・8・10・11・12）が位置し、1・2号道跡が塚の周囲を巡るように検出され、1・2号階段状遺構が塚へと向かう役割を果たしていると推測されることから、近世・近代の信仰の対象の場となっていた可能性は高いと思われる。しかし、1号塚が立地する丘陵直下の崖面一帯には本笑和田横穴墓群が所在し（2002『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ』）、1号塚直下の崖面にも多数の横穴墓が認められる。近年、東

北地方において横穴墓群の後背施設として、主体部のない古墳状の塚の存在する例が認められ、本遺跡においても、1号塚の立地条件等から考慮すると同じ事がいえるかもしれない。しかし、主体部がなく、斜面に横穴が存在するというだけで、後背施設を伴う横穴群として認めることは難しく、調査前における認識とそれに応じた調査が必要となってくるであろう。よって、現段階では不明と言わざるを得ない。

これ以後、今回の調査区内での人間活動の痕跡は確認できない。現在に至り、畑作が営まれるのどかな風景が広がっていたが、今回、一般国道6号線の相馬バイパス線として、その役割を変えることとなる。

(稲村)

参 考 文 献

- 馬目順一他 1972『伊勢林前遺跡』 福島県いわき市教育委員会
- 中村五郎 1976「東北地方南部の弥生土器編年」『東北考古学の諸問題』
- 鈴木重美他 1981『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』 福島県いわき市教育委員会
- 馬目順一他 1982『楢葉天神原弥生遺蹟の研究』 楢葉町教育委員会
- 長島雄一他 1982「土取場塚群・土取場B遺跡」『阿武隈中部地区遺跡分布調査(Ⅱ)』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 馬目順一 1983「東北南部」『弥生土器Ⅱ』 ニューサイエンス社
- 竹島国基編 1983『天神沢』 竹島コレクション考古図録第1集
- 猪狩忠雄他 1985『龍門寺遺跡』 福島県いわき市建設事務所・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき教育文化事業団
- 馬目順一 1987「榊形式と南御山式土器」『弥生文化の研究4』
- 長島雄一・吉田秀享・藤谷誠・鈴木功 1987「東北地方の弥生式土器の編年について 福島県」『第2回縄文文化検討会シンポジウム』 縄文文化検討会
- 芳賀英一他 1988「一ノ堰B遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 吉田秀享他 1989『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・地域振興整備公団
- 須藤 隆 1990「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論攷』 伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 飯村 均他 1991「長瀨遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅱ』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・東北電力株式会社
- 岡田康博 1992「青森県」『第31回埋蔵文化財研究集會弥生時代の石器—その始まりと終わり—』 埋蔵文化財研究会 関西世話人会

- 児玉 準 1992「秋田県」『第31回埋蔵文化財研究集会弥生時代の石器－その始まりと終わり－』
埋蔵文化財研究会 関西世話人会
- 吉田秀享 1992「福島県」『第31回埋蔵文化財研究集会弥生時代の石器－その始まりと終わり－』
埋蔵文化財研究会 関西世話人会
- 能登谷宣康他 1992「長瀨遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』 福島県教育委員会・財団
法人福島県文化センター・東北電力株式会社
- 能登谷宣康他 1992「鳥井沢B遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』 福島県教育委員会・
財団法人福島県文化センター・東北電力株式会社
- 菊地芳郎 1993『企画展 東北からの弥生文化』 福島県立博物館
- 井 憲治他 1994「南入A・長瀨遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅵ』 福島県教育委員
会・財団法人福島県文化センター・東北電力株式会社
- 檜村友延他 1994『上ノ内遺跡』 福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団
- 能登谷宣康他 1995『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅰ』 福島県教育委員会・財団
法人福島県文化センター・建設省磐城国道工事事務所
- 荒井 格 1995「仙台市高田B遺跡の調査」『考古学ジャーナル』 第384号
- 鈴木 源 1995「桜井式土器論序説－いわゆる天神原式土器との関連をめぐって－」『みちのく発
掘』 菅原文也先生還暦記念論集刊行会
- 吉田秀享 1996「弥生時代の主体的土器と客体的土器について」『論集しのぶ考古』 論集しのぶ考
古刊行会
- 工藤哲司他 1996『中在家南遺跡他』 仙台市教育委員会
- 吉田秀享 1997「福島県の石器」『農耕開始期の石器組成3 北海道・東北・関東』 国立歴史民俗
博物館資料調査報告書7
- 井 憲治他 1997『常磐自動車道調査報告10』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化セン
ター・日本道路公団
- 高橋信一他 1997「美シ森B遺跡」『N T C 遺跡発掘調査報告』 福島県教育委員会・財団法人福島
県文化センター・東北電力株式会社
- 斎野裕彦 1998「北海道・東北の柱状片刃石斧」『北方の考古学』 野村先生還暦記念論集
- 藤谷 誠他 1999『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告7』 福島県教育委員会・財団法
人福島県文化センター
- 須藤 隆 2000「弥生時代の東北地方」『宮城考古学第2号』 宮城県考古学会
- 石川日出志 2000「南御山Ⅱ式土器の成立と小松式土器との接触」『北越考古学 第11号』 北越考
古学研究会
- 福島県教育委員会編 2000『福島県内遺跡分布調査報告6』 福島県文化財調査報告書第362集
- 福島県教育委員会編 2001『福島県内遺跡分布調査報告7』 福島県文化財調査報告書第374集

- 吉田秀享 2001 「松ヶ作A遺跡」『県道古殿須賀川線（うつくしま未来博関連）遺跡発掘調査報告』
福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・福島県土木部
- 稲村圭一他 2002 『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅱ』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団・国土交通省磐城国道工事事務所
- 稲村圭一他 2002 『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団・国土交通省磐城国道工事事務所

写 真 图 版

柴 迨 A 遺 跡



1 柴迫A遺跡全景

(南東から)



2 調査前現況

(西から)



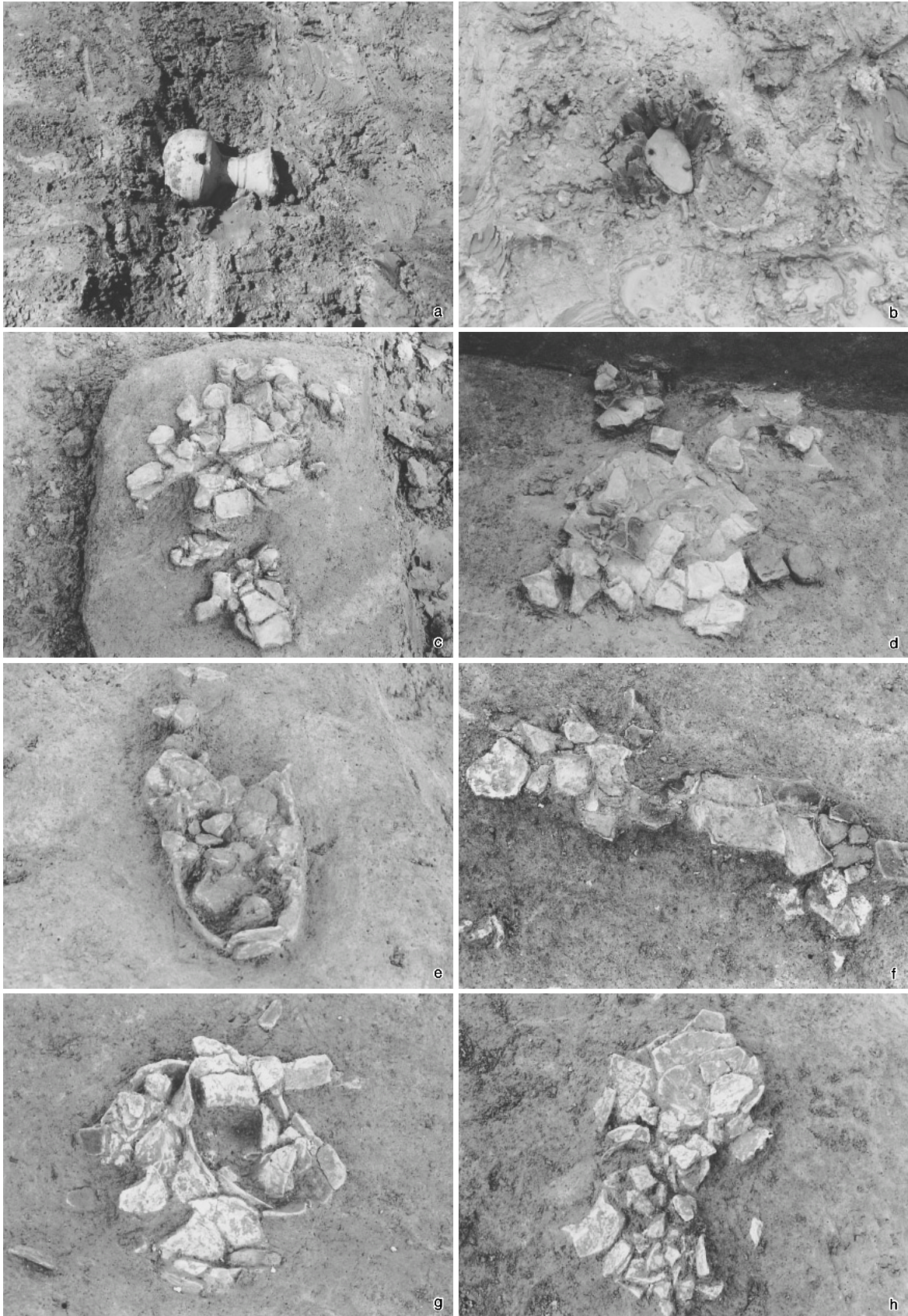
3 1号溝跡全景

(東から)



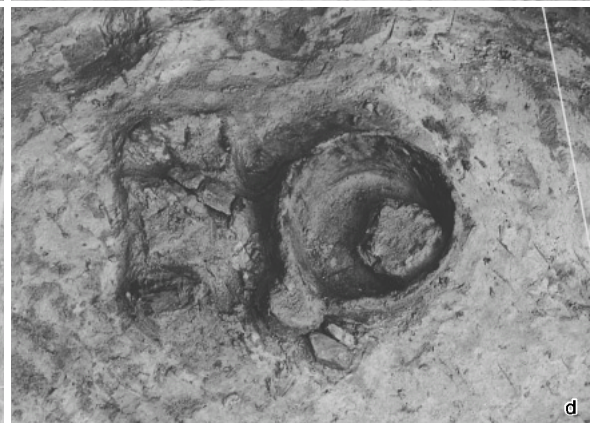
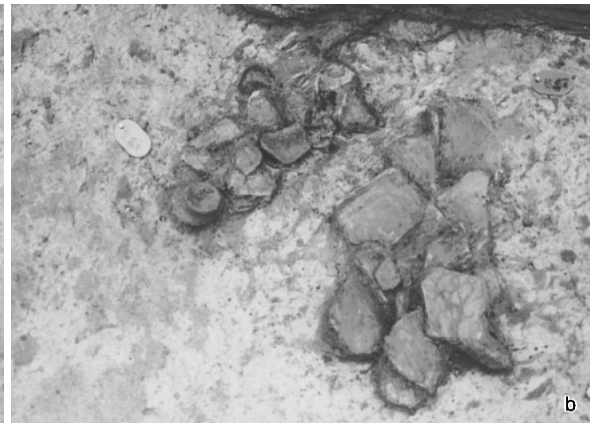
4 1号溝跡断面

(東から)



5 1号溝跡細部(1)

a	遺物出土状況 (甕)	(東から)	b	遺物出土状況 (石包丁)	(東から)
c	遺物出土状況 (S-13グリッド)	(東から)	d	遺物出土状況 (T-13グリッド)	(南西から)
e	遺物出土状況 (T-13グリッド)	(西から)	f	遺物出土状況 (U-14グリッド)	(南西から)
g	遺物出土状況 (U-14グリッド)	(南から)	h	遺物出土状況 (U-14グリッド)	(西から)



6 1号溝跡細部(2)

a	遺物出土状況 (X-15グリッド)	(南から)	b	遺物出土状況 (X-15グリッド)	(南から)
c	遺物出土状況 (X-15グリッド)	(南から)	d	遺物出土状況 (X-15グリッド)	(南から)
e	遺物出土状況 (X-17グリッド)	(北東から)	f	遺物出土状況 (X-15グリッド)	(南東から)
g	作業風景		h	作業風景	(東から)



7 2・3号溝跡全景

(東から)



a



b



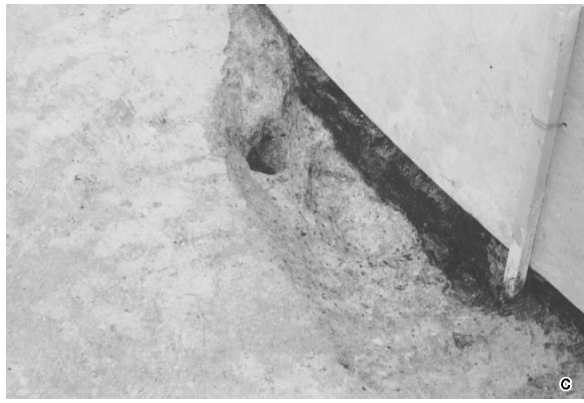
c



d

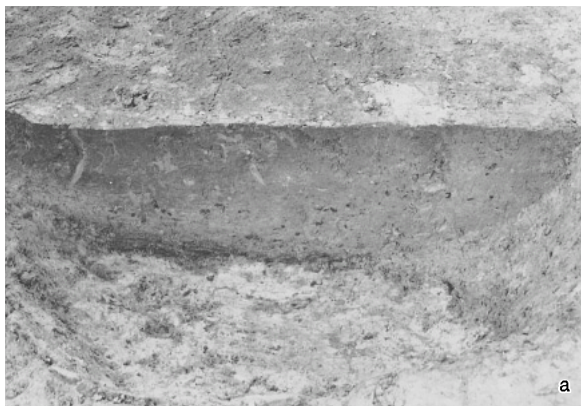
8 2・3号溝跡細部

a 2・3号溝跡全景 (西から) b 2号溝跡断面 (東から)
c 2・3号溝跡断面 (東から) d 2号溝跡石斧出土状況 (南から)



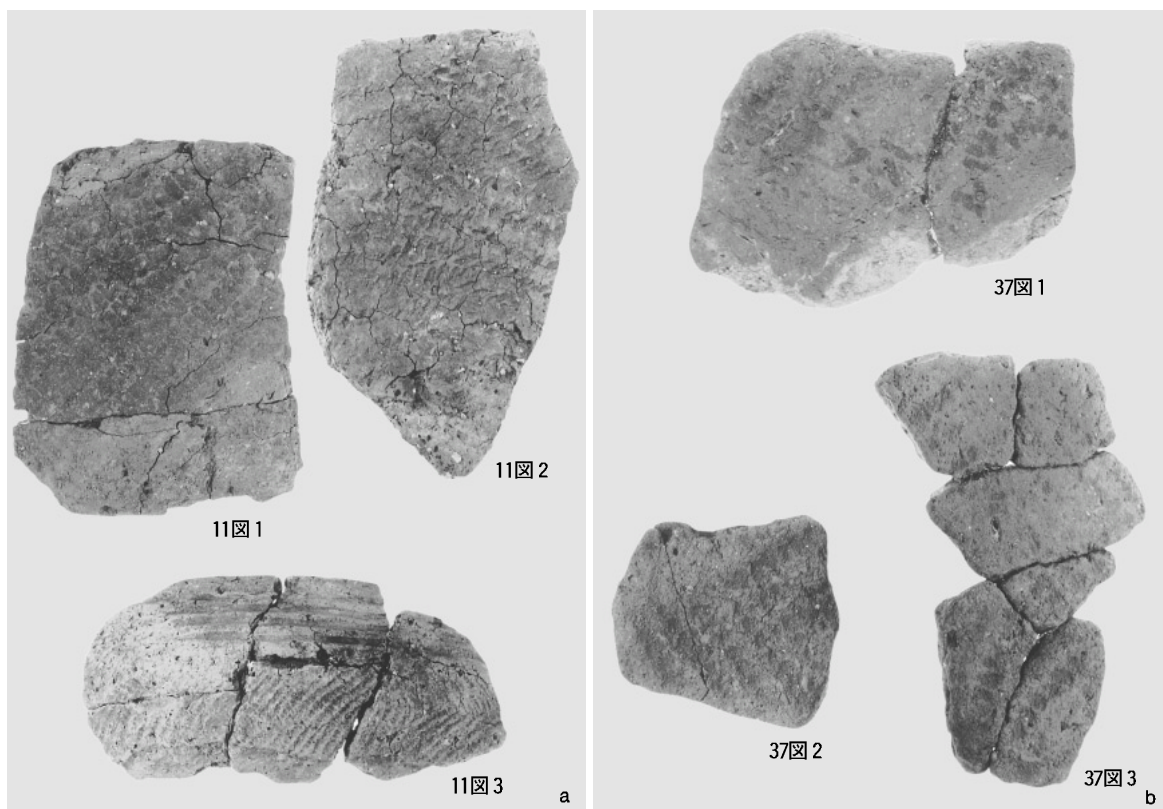
9 1号木炭窯

a 1号木炭窯跡検出状況(南から) b P1断面(西から)
c 1号木炭窯跡一部精査(南西から)

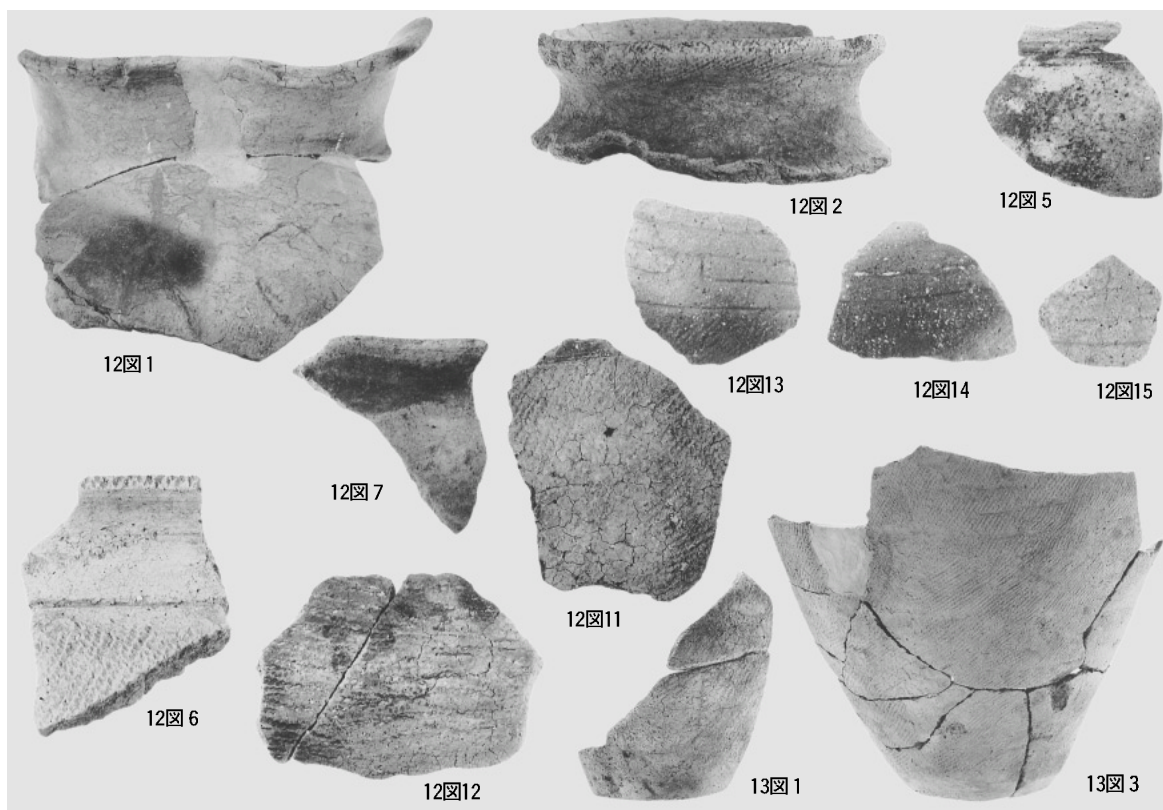


10 1・2号土坑

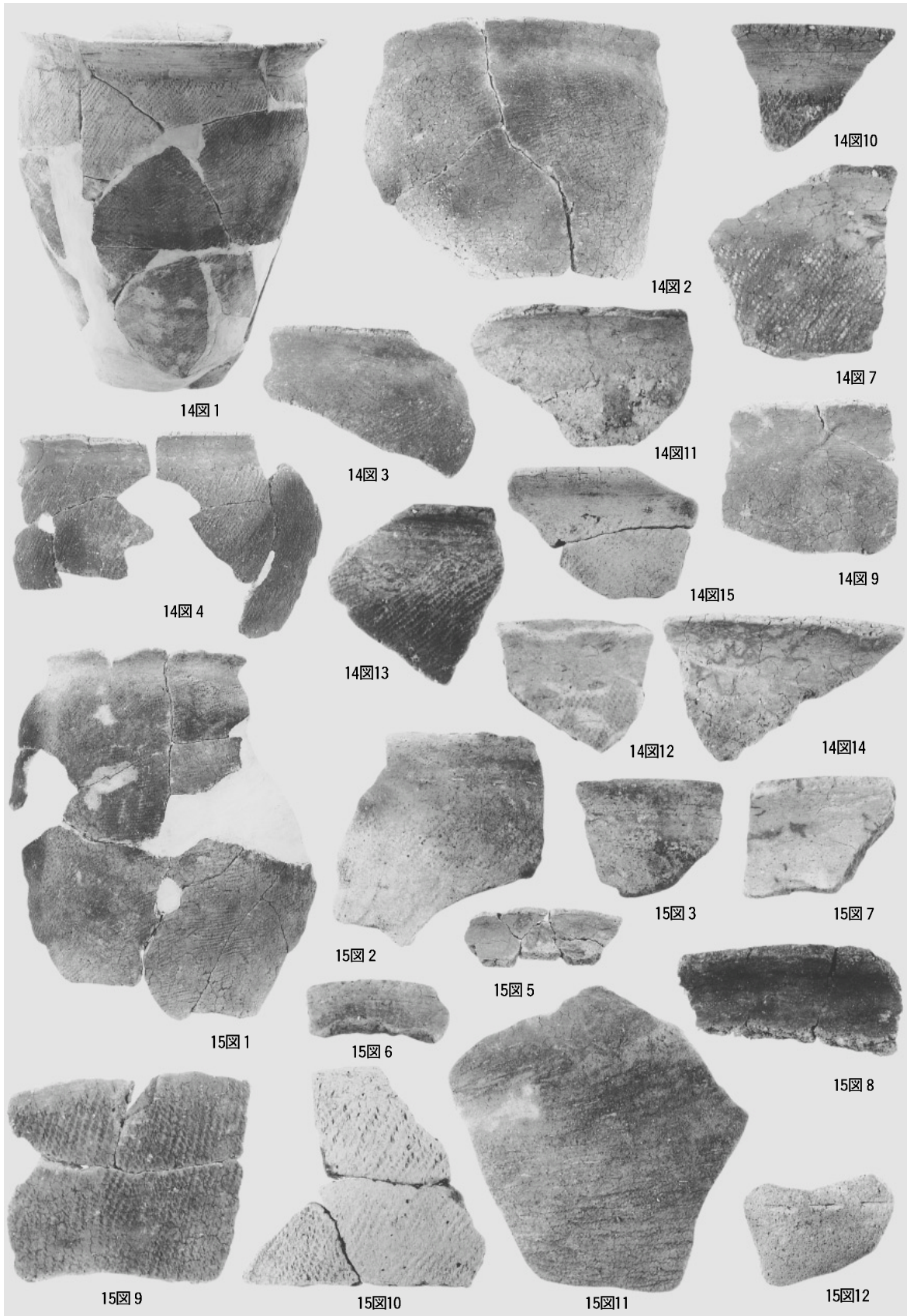
a 1号土坑断面(東から) b 1号土坑全景(南から)
c 2号土坑断面(南から) d 2号土坑全景(南から)



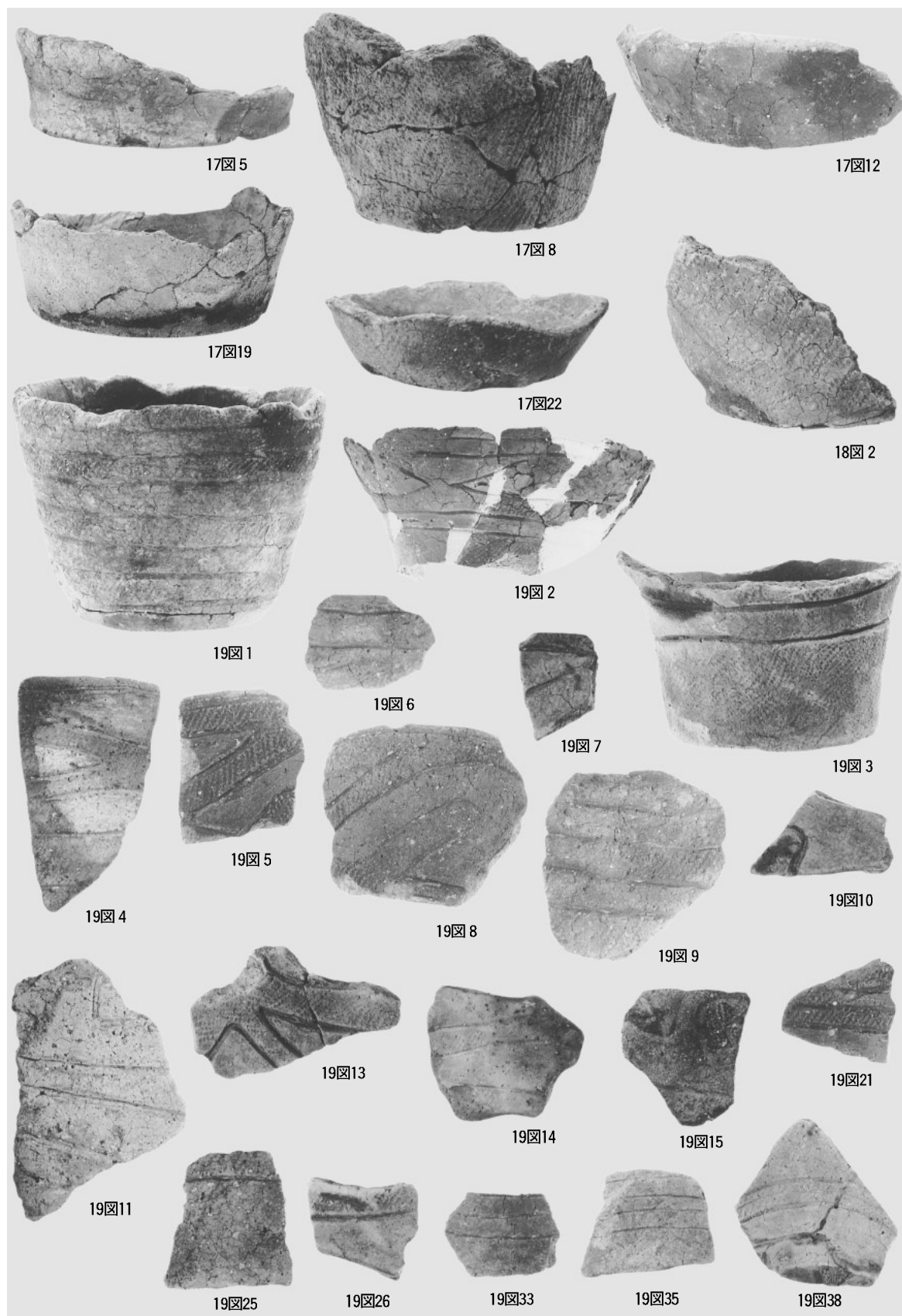
11 a 1号沟迹出土绳文土器
 b 2号沟迹出土绳文土器



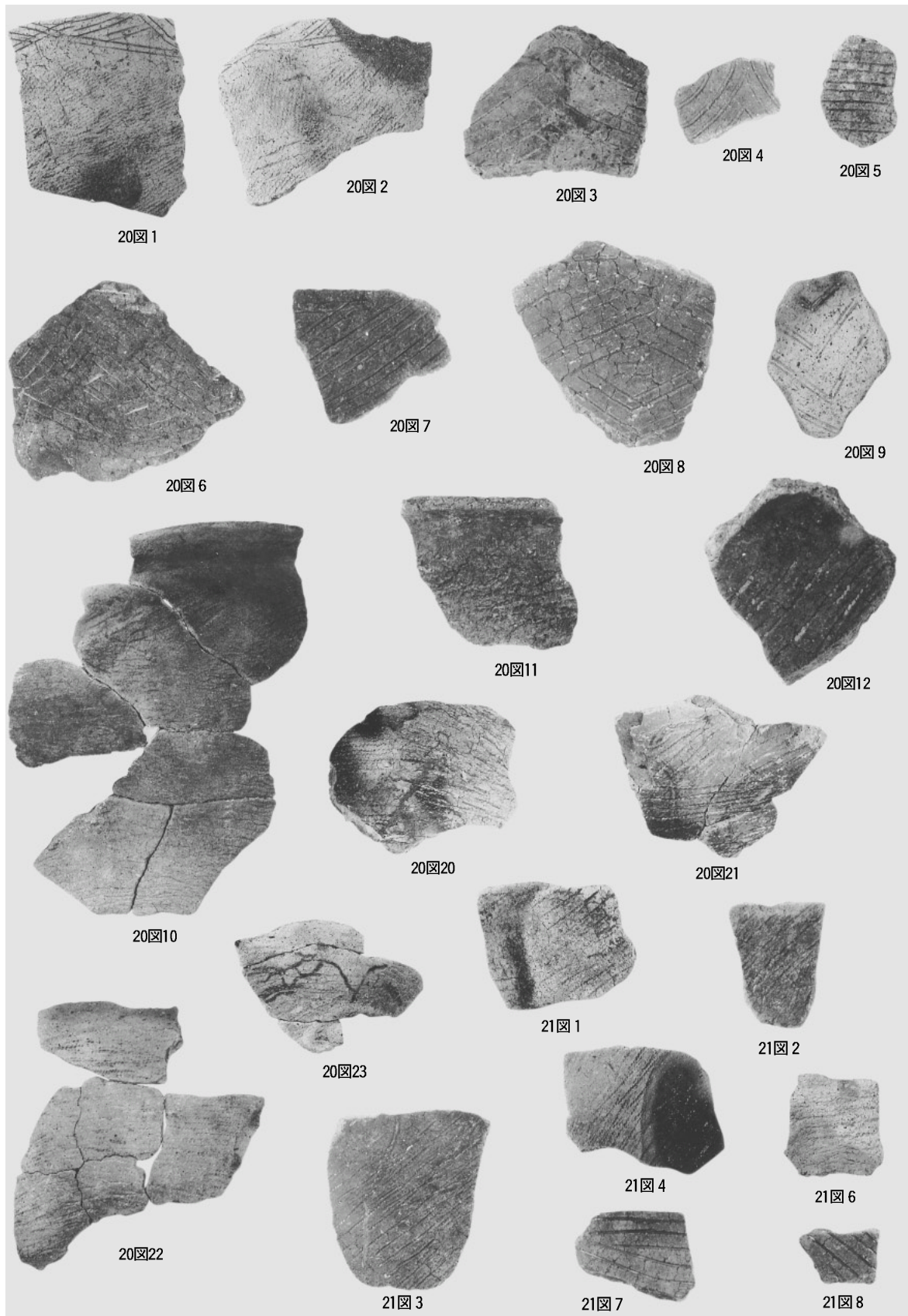
12 1号沟迹 7出土弥生土器(1)



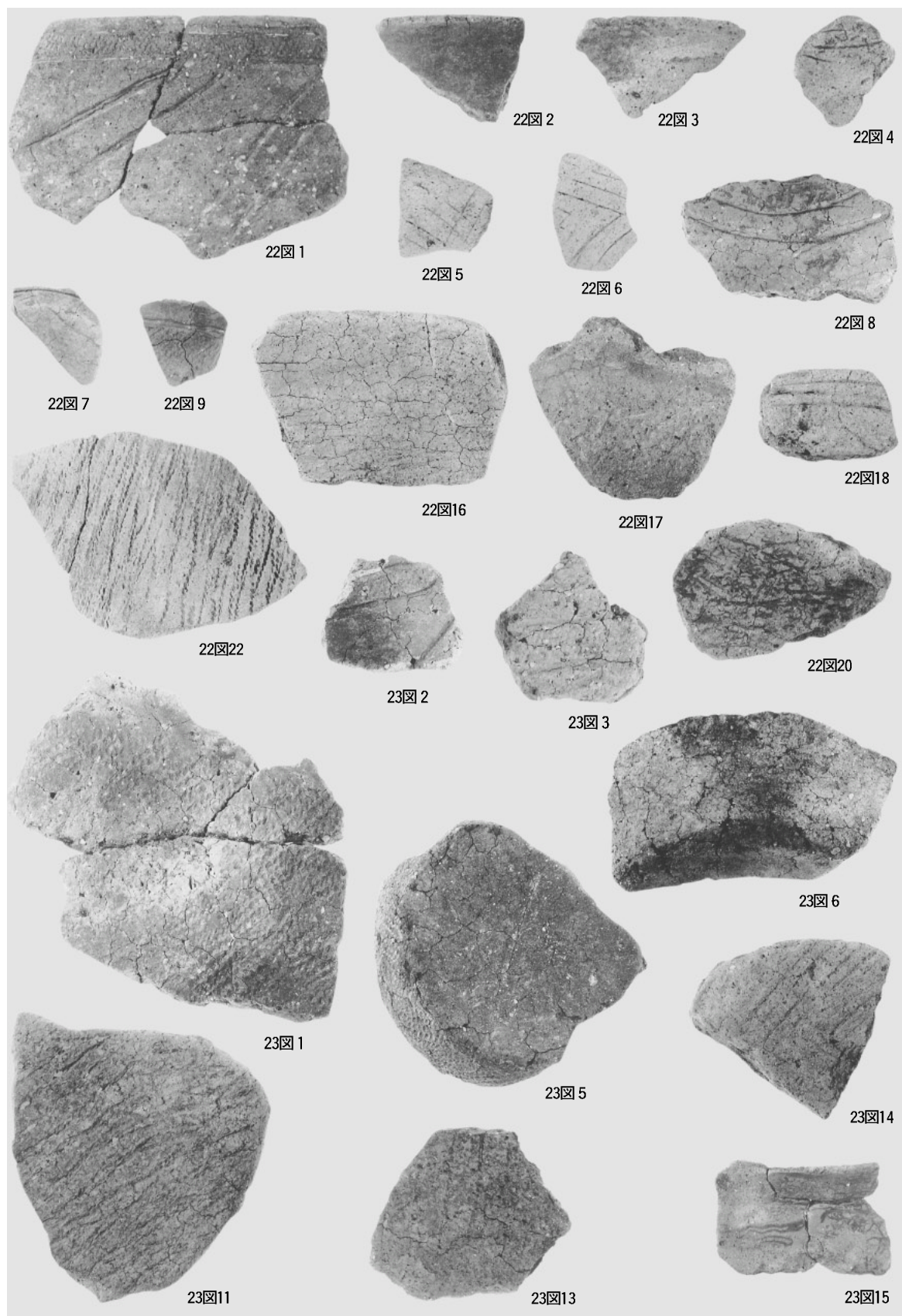
13 1号沟迹 7 出土弥生土器(2)



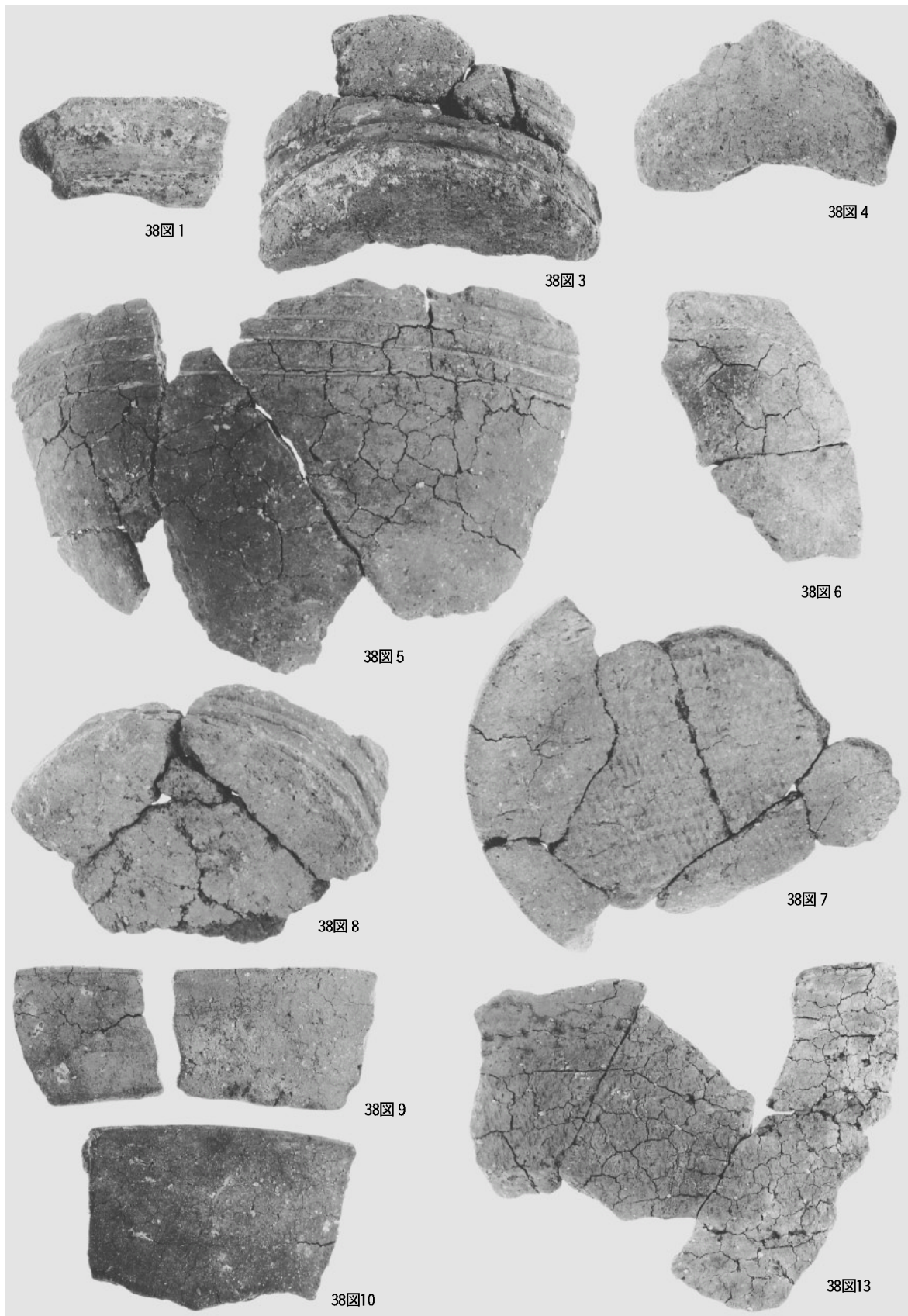
14 1号沟迹 7 出土弥生土器(3)



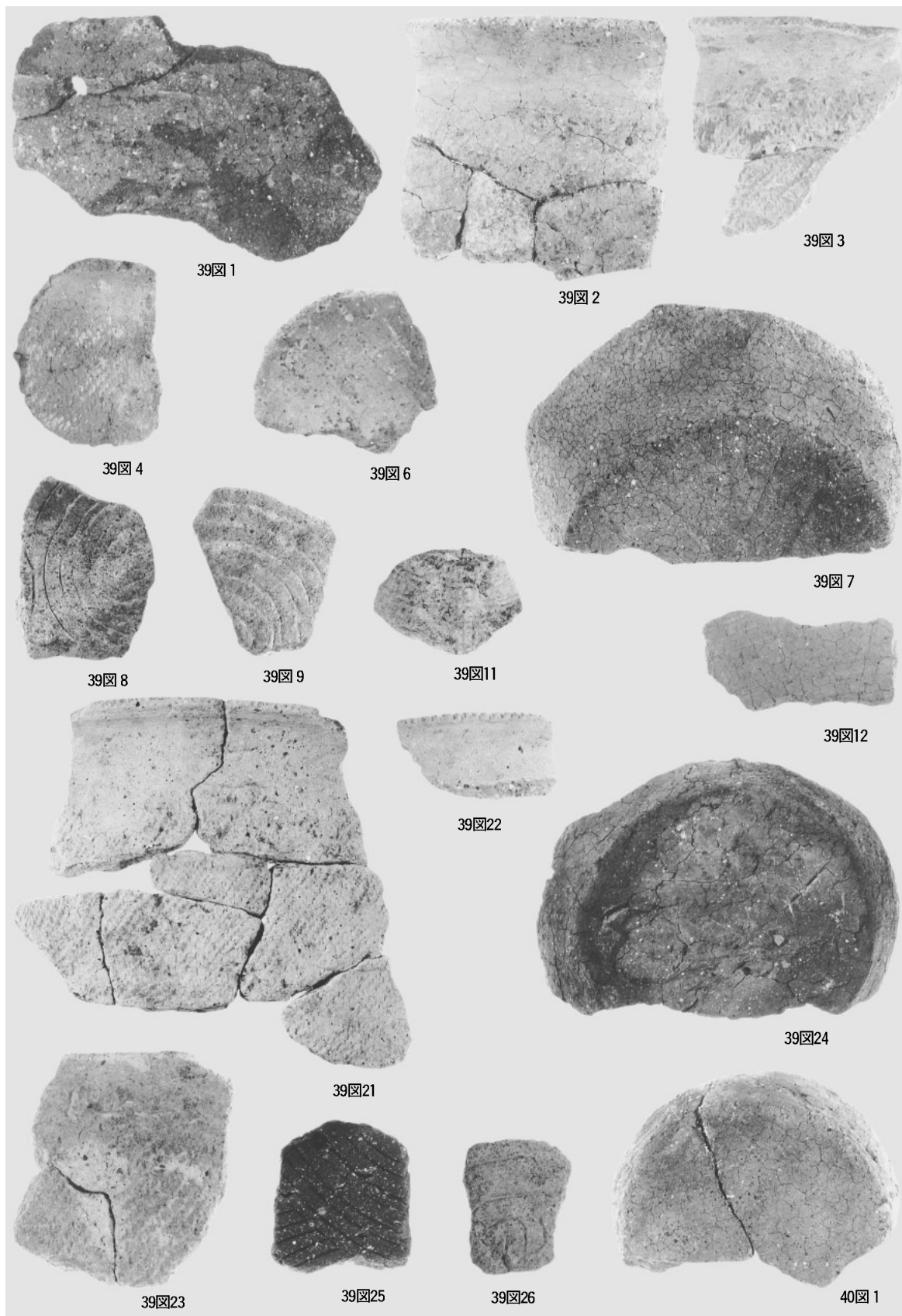
15 1号沟迹 6 出土弥生土器



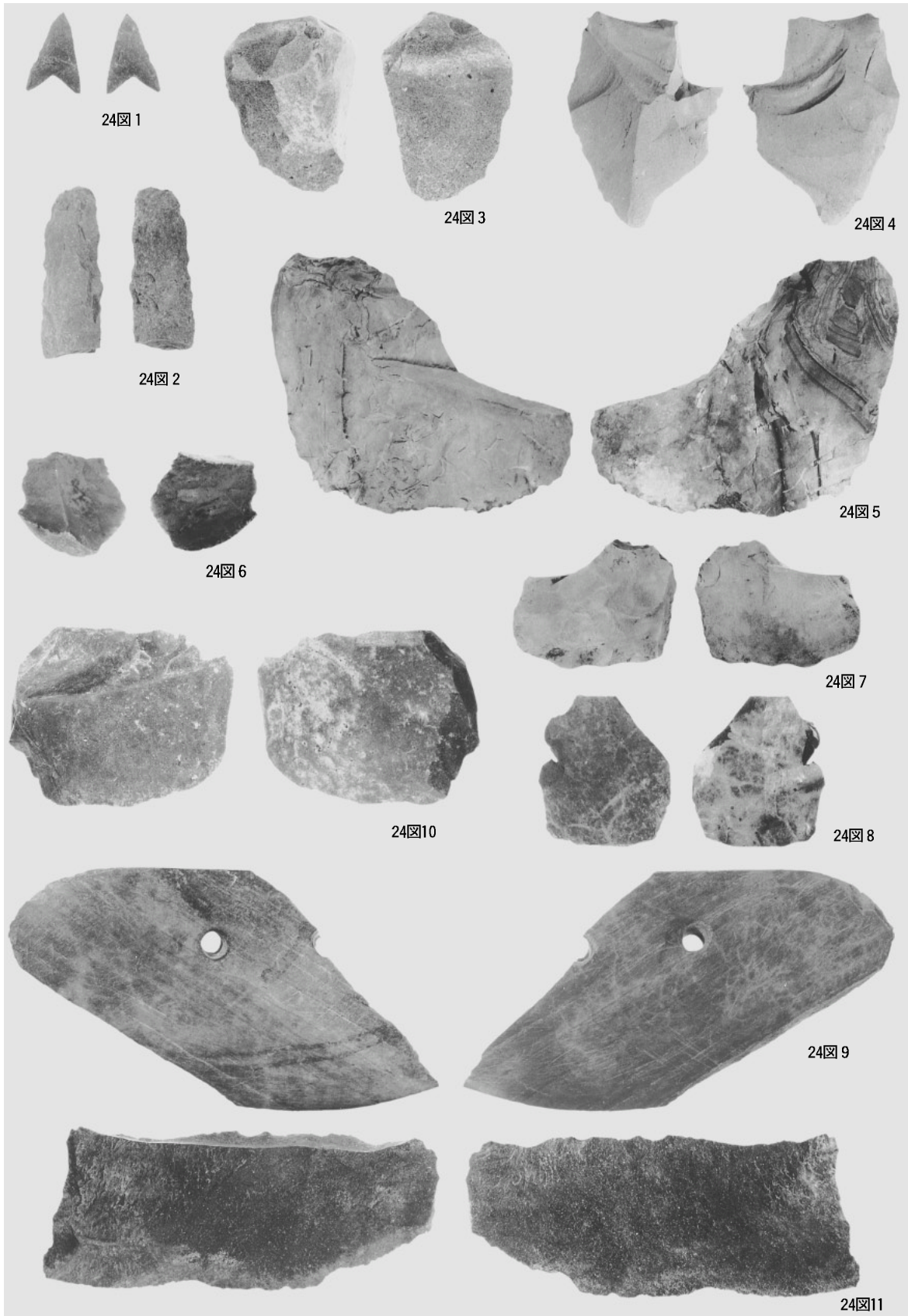
16 1号沟迹 ℓ 4 ~ ℓ 1 出土弥生土器



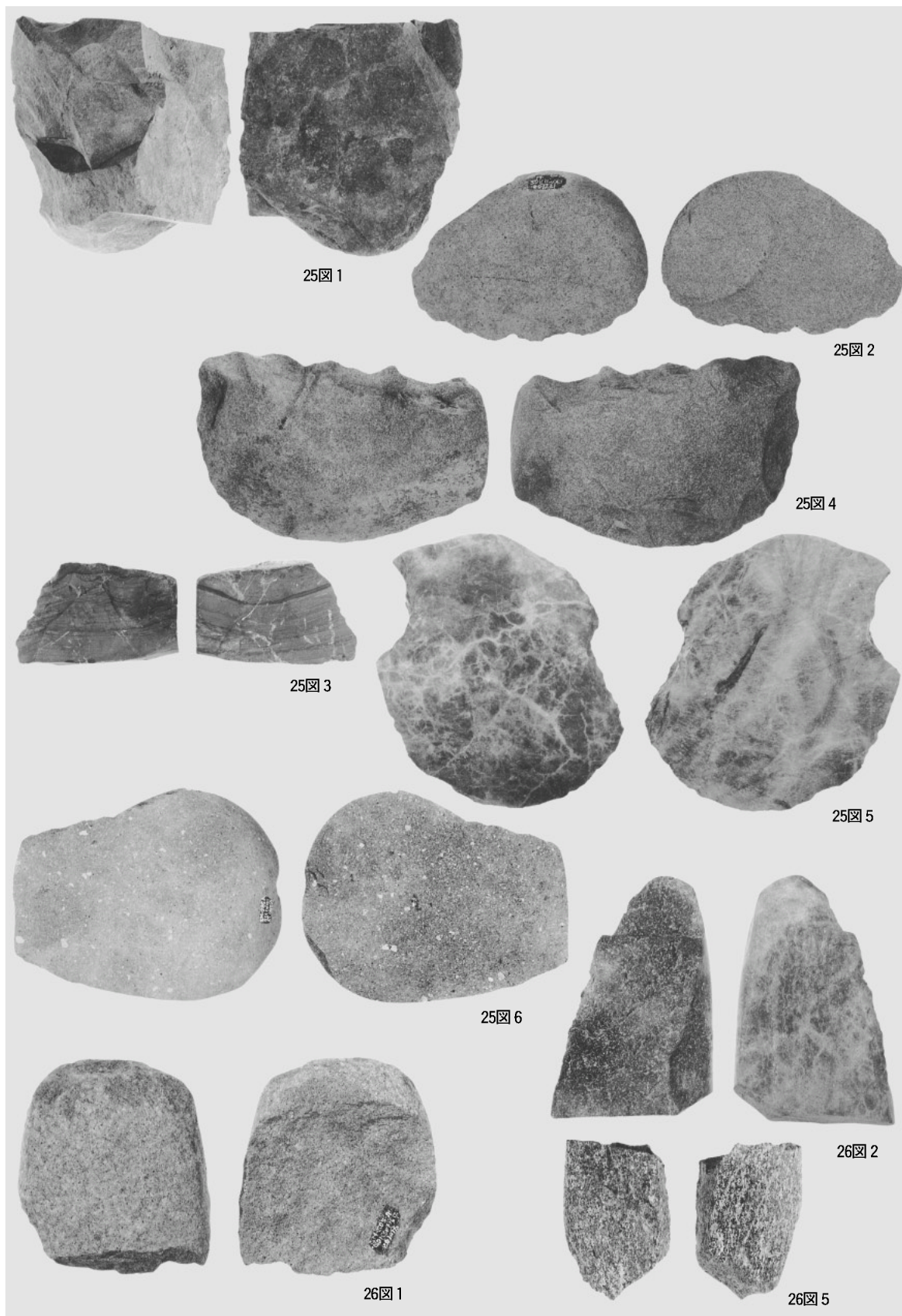
17 2号沟迹 ℓ 6 ~ ℓ 4 出土弥生土器



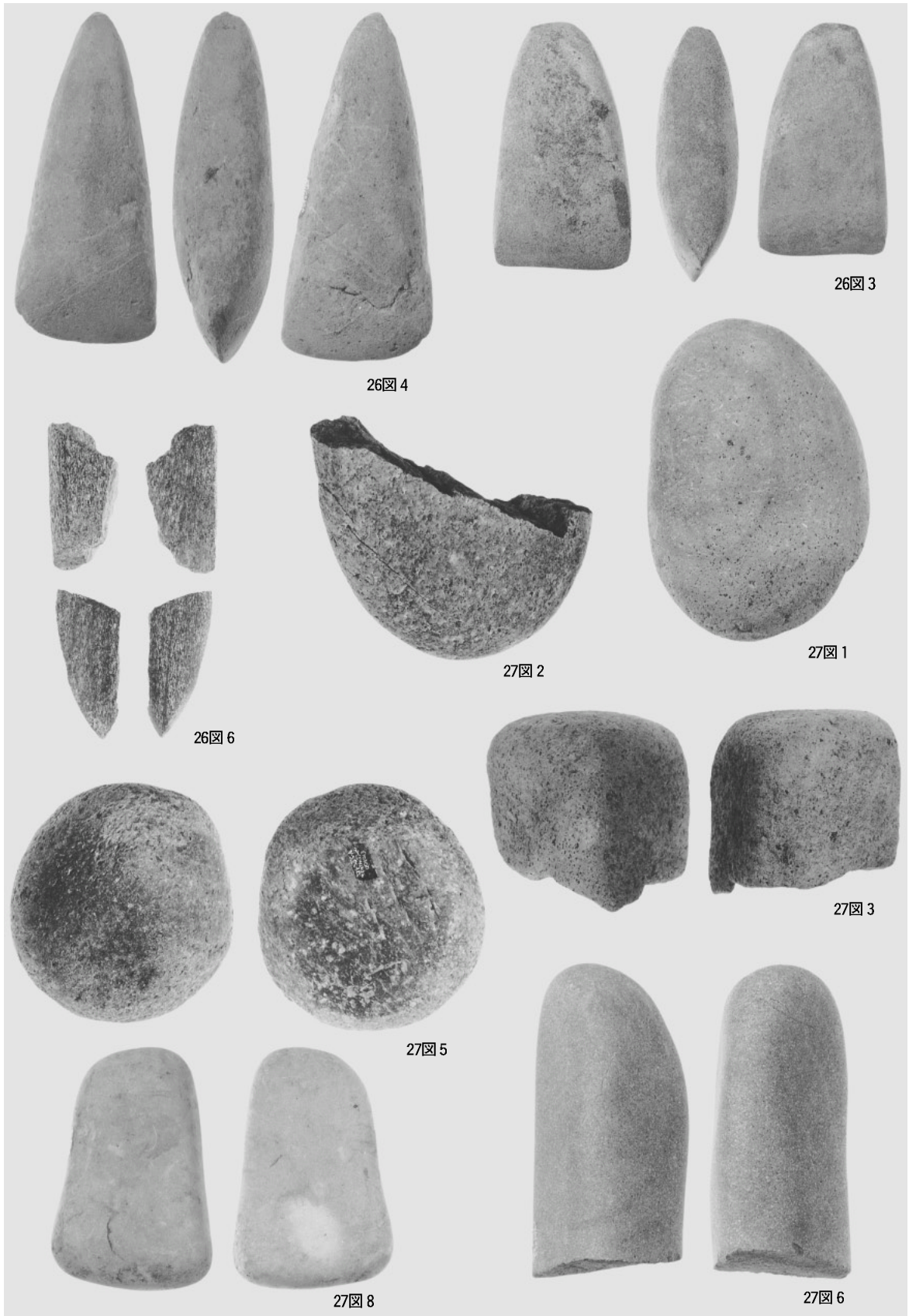
18 2号沟迹 ℓ 3 ~ ℓ 1 出土弥生土器



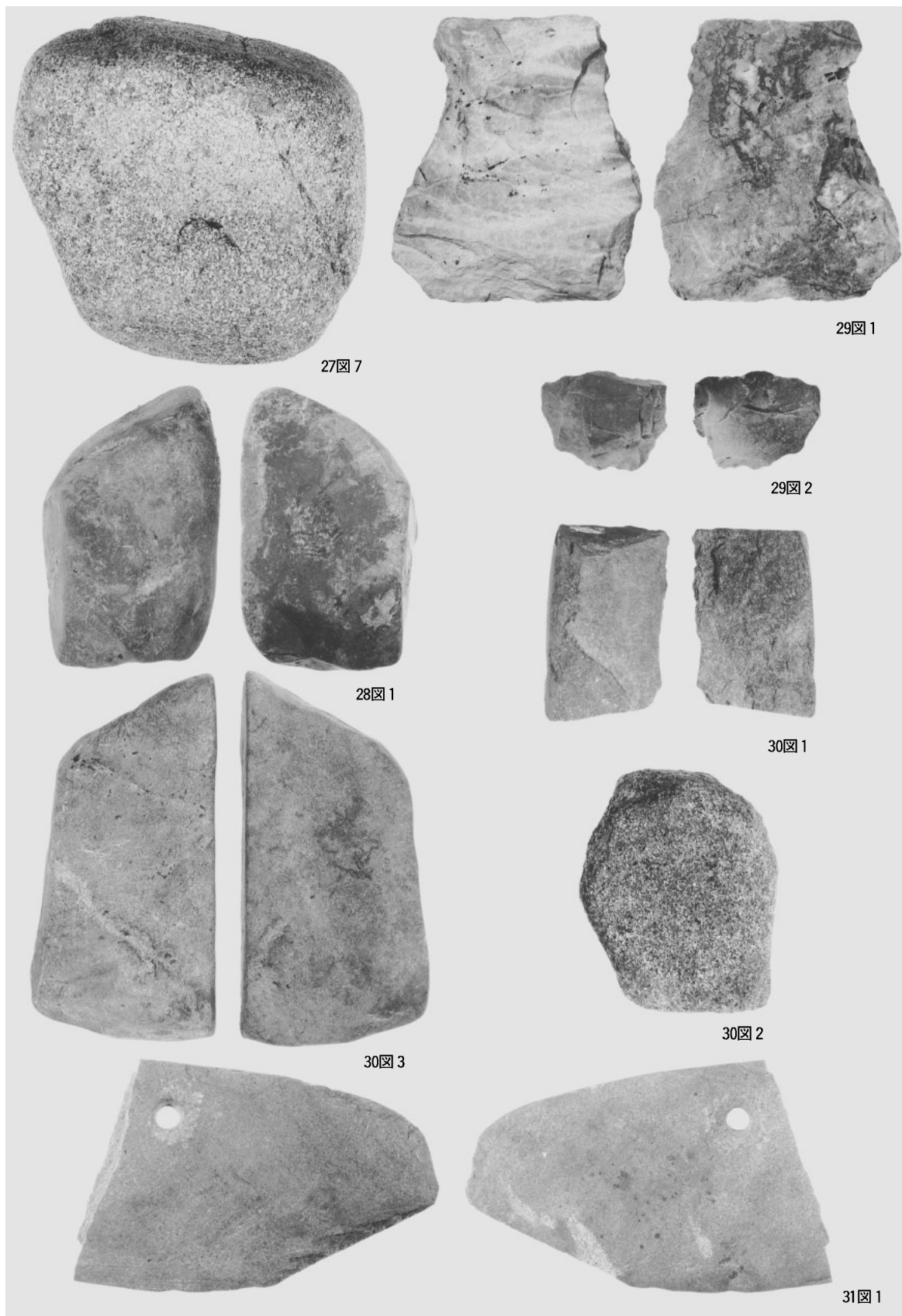
19 1号沟迹 7出土石器(1)



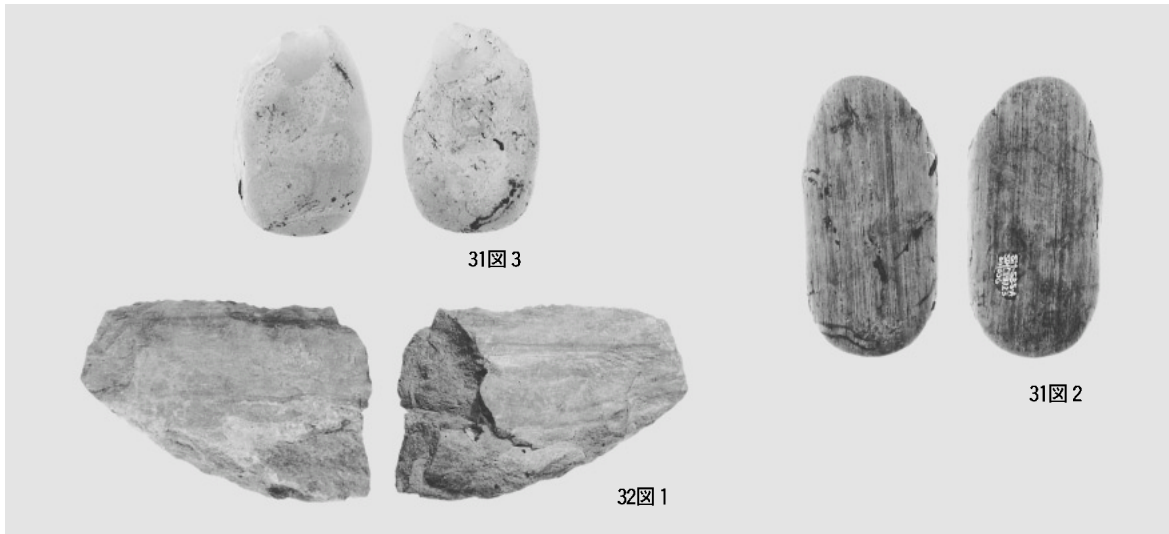
20 1号沟迹 07出土石器(2)



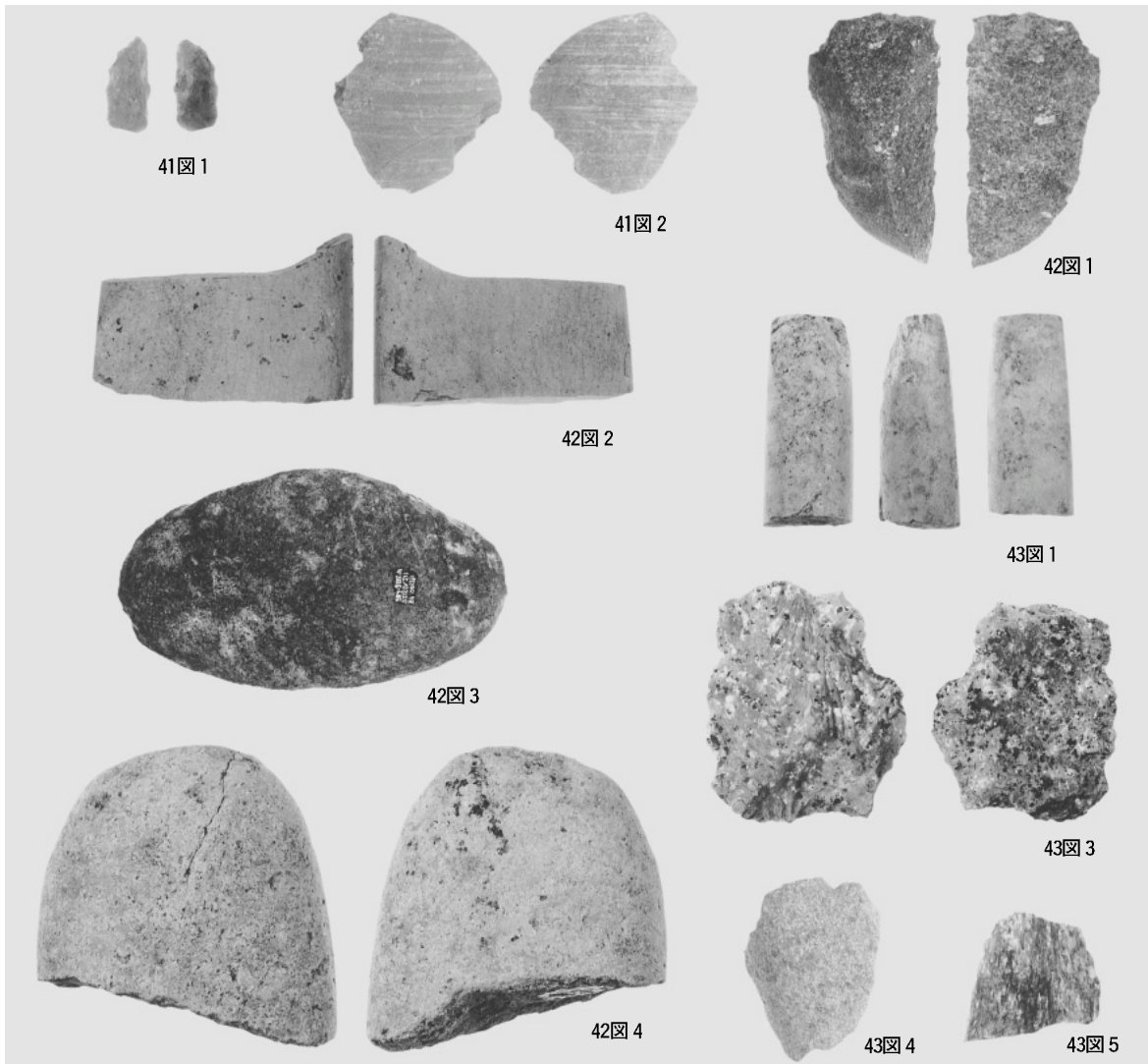
21 1号沟迹 7出土石器(3)



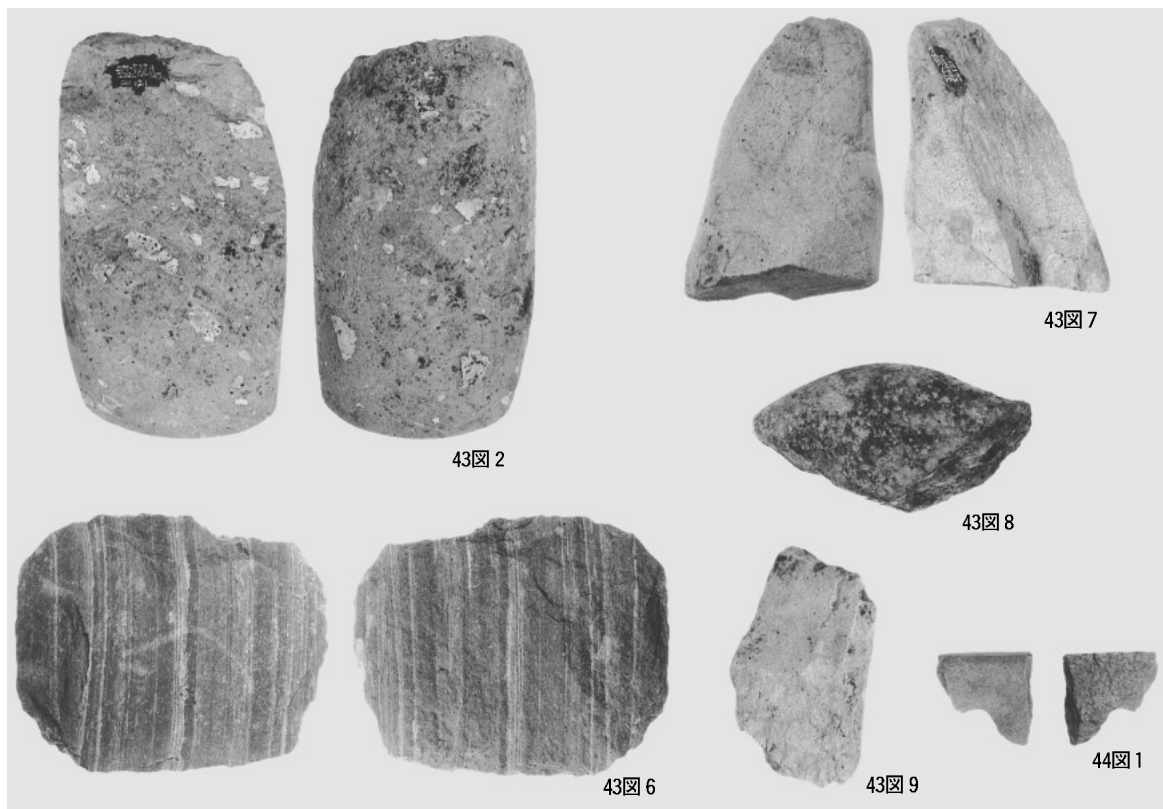
22 1号沟迹 l 7(4)· l 6 ~ l 4 · l 3(1)出土石器



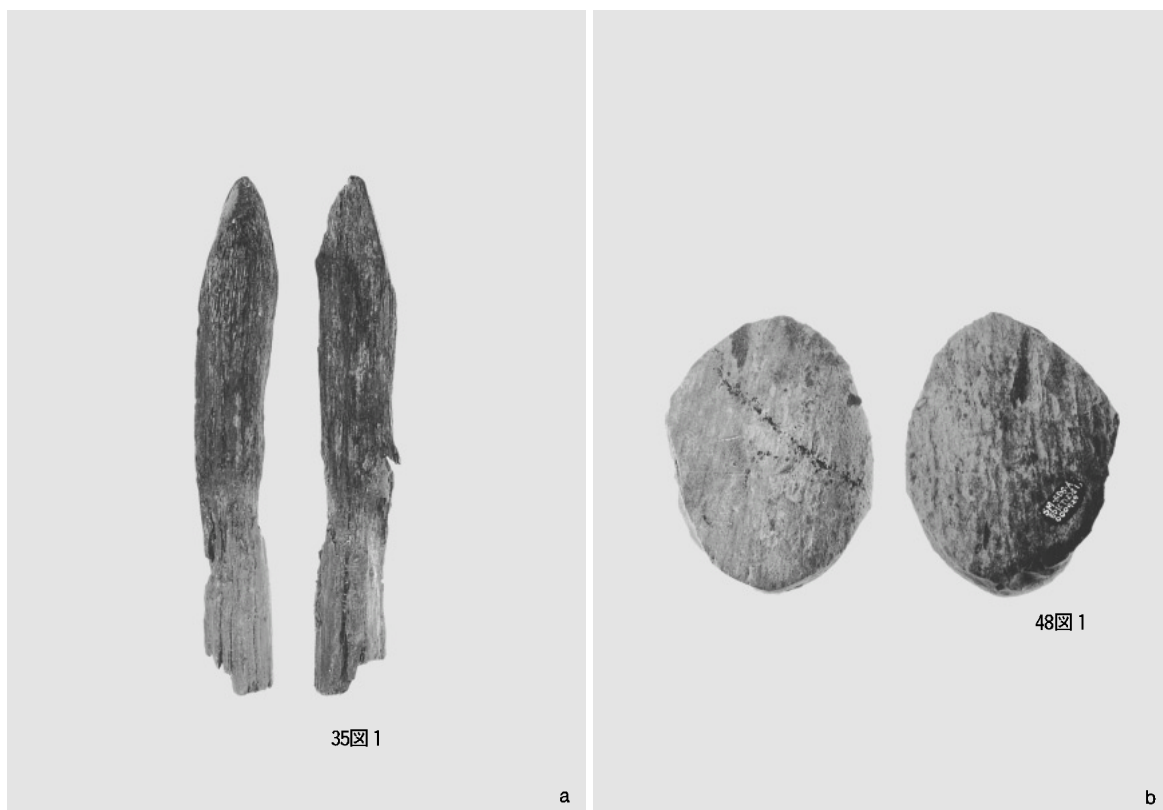
23 1号沟迹 ℓ 3(2) · ℓ 1 出土石器



24 2号沟迹 ℓ 6 · ℓ 4 · ℓ 3(1)出土石器



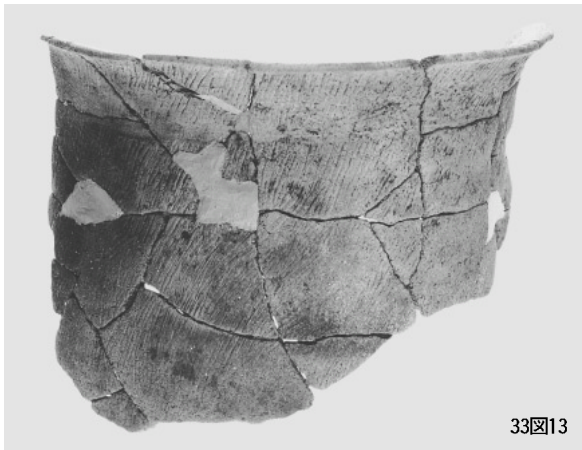
25 2号溝跡 ℓ 3(2)・ℓ 2 出土石器



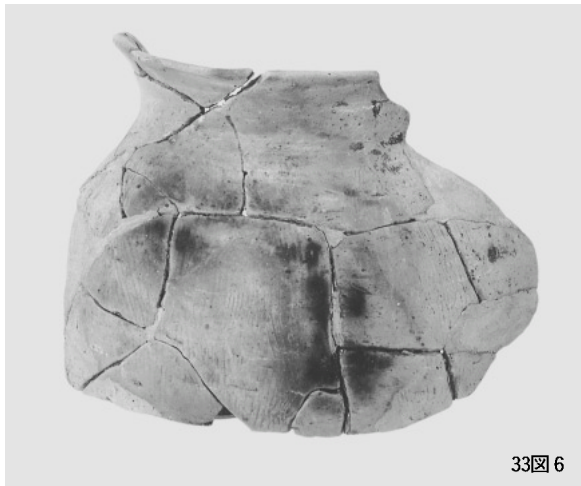
26 a 1号溝跡出土杭
 b 遺構外出土遺物



33图5



33图13



33图6



34图1



33图7



34图2



34图13

27 1号溝跡出土土師器・須恵器

写真図版

柴迫古墳群（1・2次調査）



1 柴迫A遺跡・柴迫古墳群（1次）全景

（北から）



2 柴迫古墳群（2次）全景

（北から）



3 1・2号住居跡全景

(北から)



a



b



c



d

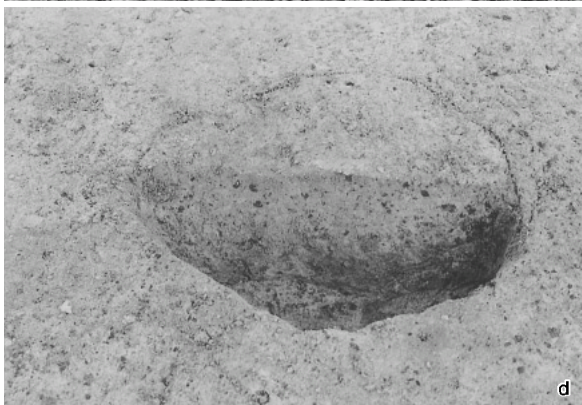
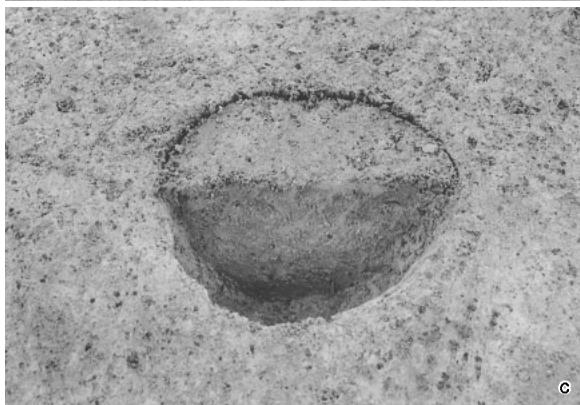
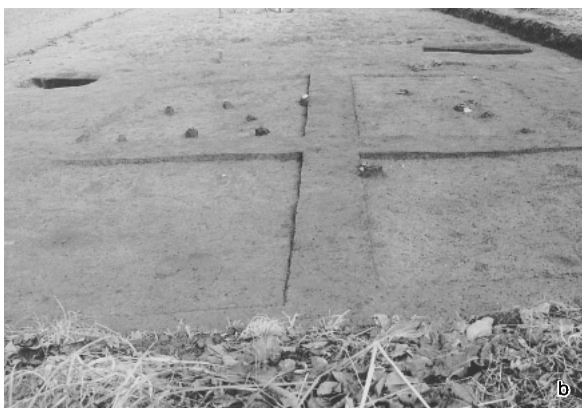
4 柴迫古墳群 (2次)

a 南西部土坑全景 (北東から) b 表土剥ぎ状況 (北西から)
c 基本土層 (北から) d 基本土層 (北東から)



5 1号住居跡全景

(北から)



6 1号住居跡細部

a 検出状況 (北から) b 土層断面 (南から)
c P4土層断面 (南から) d P7土層断面 (南から)



7 2号住居跡全景

(南から)



a



b



c



d

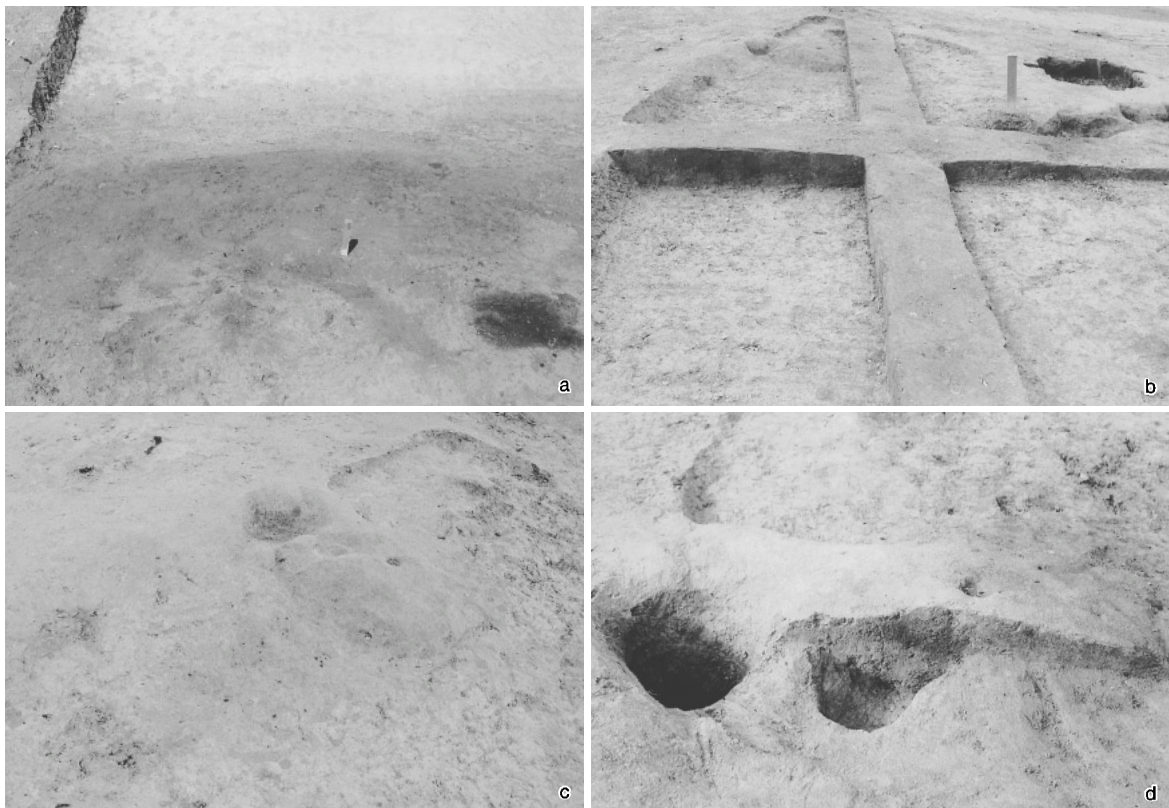
8 2号住居跡細部

a 土層断面 (北から) b P1土層断面 (南から)
c 周溝土層断面 (南から) d P2土層断面 (南から)



9 3号住居跡全景

(東から)



10 3号住居跡細部

a 検出状況 (東から) b 東西土層断面 (南から)
c 焼土範囲検出状況 (南から) d 焼土範囲断面 (南から)



11 4号住居跡全景

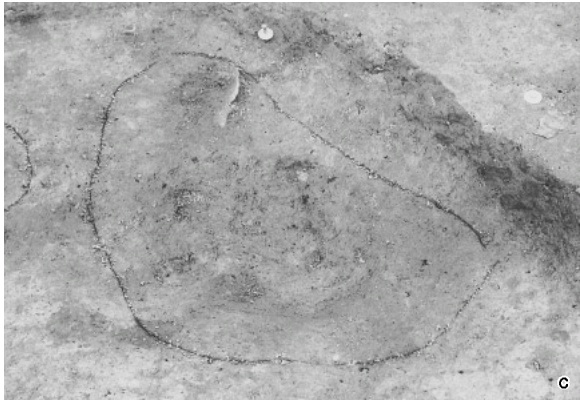
(南から)



a



b



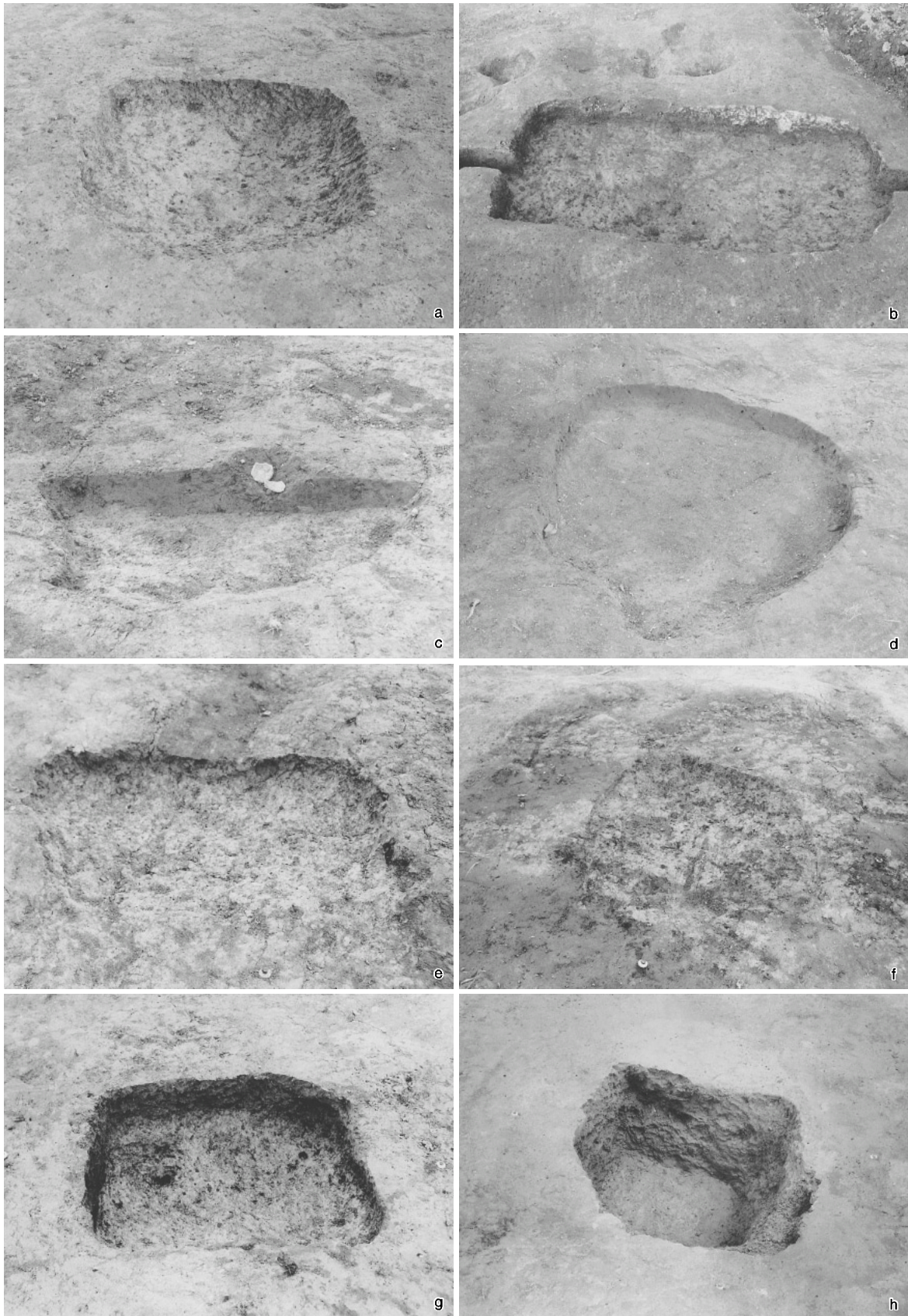
c



d

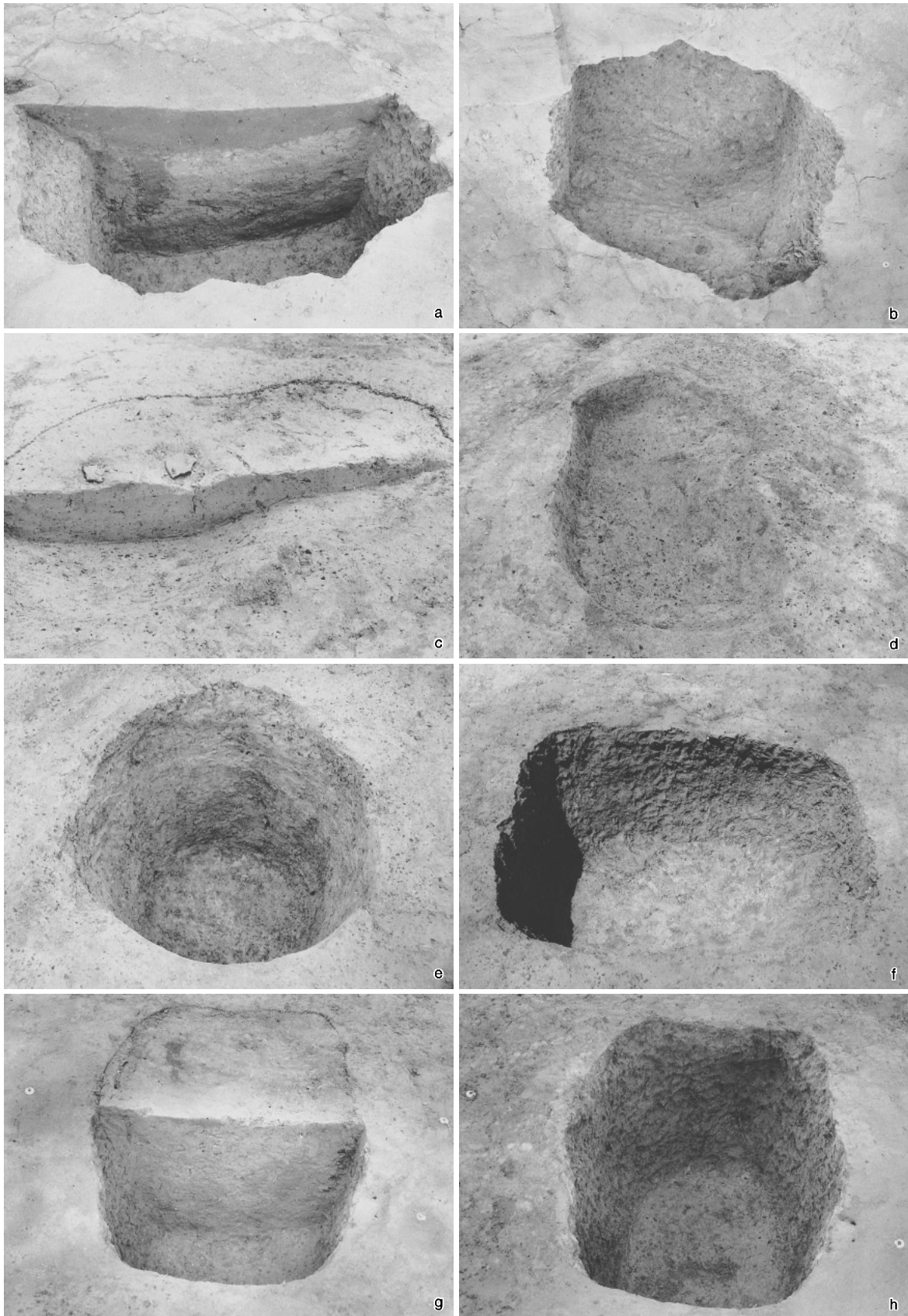
12 4号住居跡細部

a 検出状況 (南西から) b 土層断面 (南東から)
c P1 検出状況 (南西から) d 遺物出土状況 (北から)



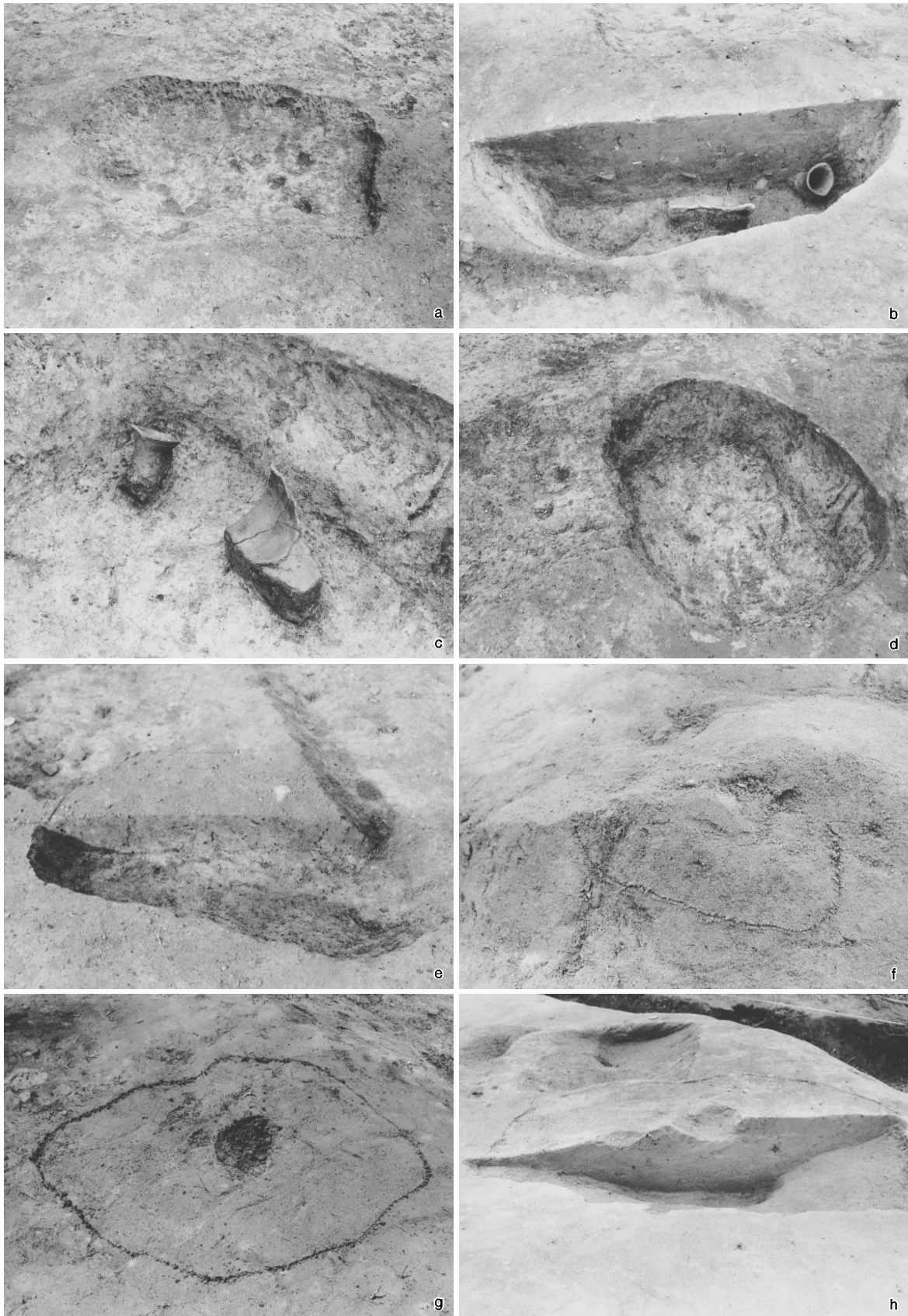
13 1～7号土坑

a 1号土坑全景 (南から) b 2号土坑全景 (南から)
c 3号土坑土層断面 (東から) d 3号土坑全景 (東から)
e 4号土坑全景 (東から) f 5号土坑全景 (東から)
g 6号土坑全景 (東から) h 7号土坑全景 (西から)



14 8~12号土坑

a 8号土坑土層断面 (東から) b 8号土坑全景 (東から)
 c 9号土坑土層断面 (北から) d 9号土坑全景 (東から)
 e 10号土坑全景 (北東から) f 11号土坑全景 (東から)
 g 12号土坑土層断面 (東から) h 12号土坑全景 (東から)



15 13~15号土坑, 1・2号焼土遺構

a	13号土坑全景	(南から)	b	14号土坑土層断面	(南東から)
c	14号土坑遺物出土状況	(南西から)	d	14号土坑全景	(南西から)
e	15号土坑土層断面	(南西から)	f	1号焼土遺構全景	(北東から)
g	2号焼土遺構全景	(東から)	h	2号焼土遺構断面	(東から)



16 1号塚土層断面

(北東から)



17 1号塚細部

a 西半部現況面 (北西から) b 盛土除去後状況 (東から)
 c 盛土除去後状況 (北東から) d 調査後遠景 (北東から)



18 1・2号道跡近景（1次）

（北東から）



a



b



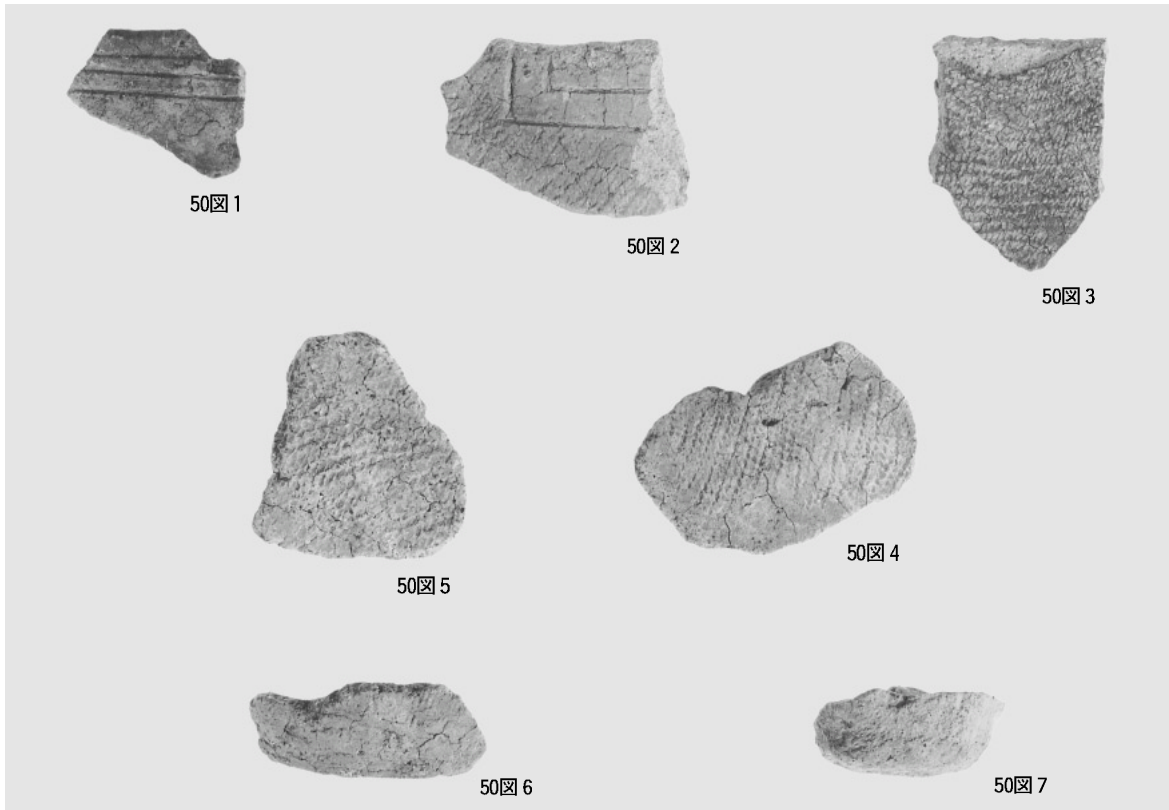
c



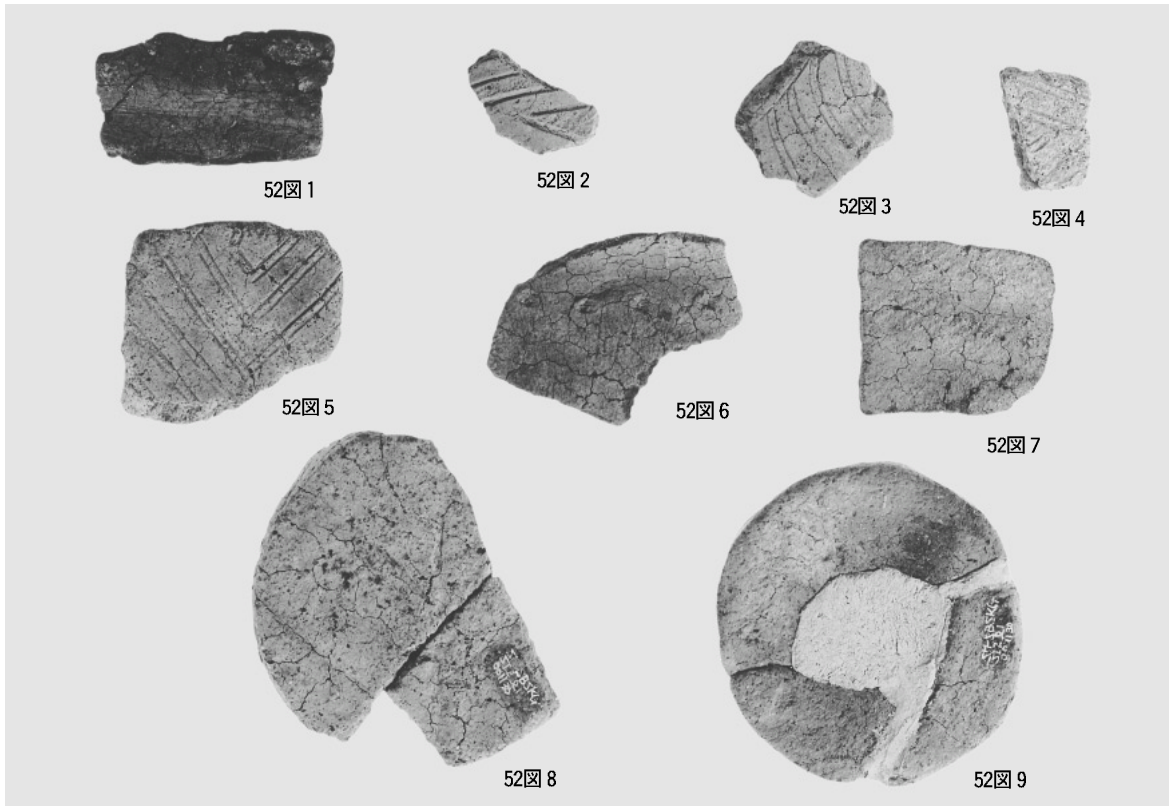
d

19 1・2号道跡
1・2号階段状遺構

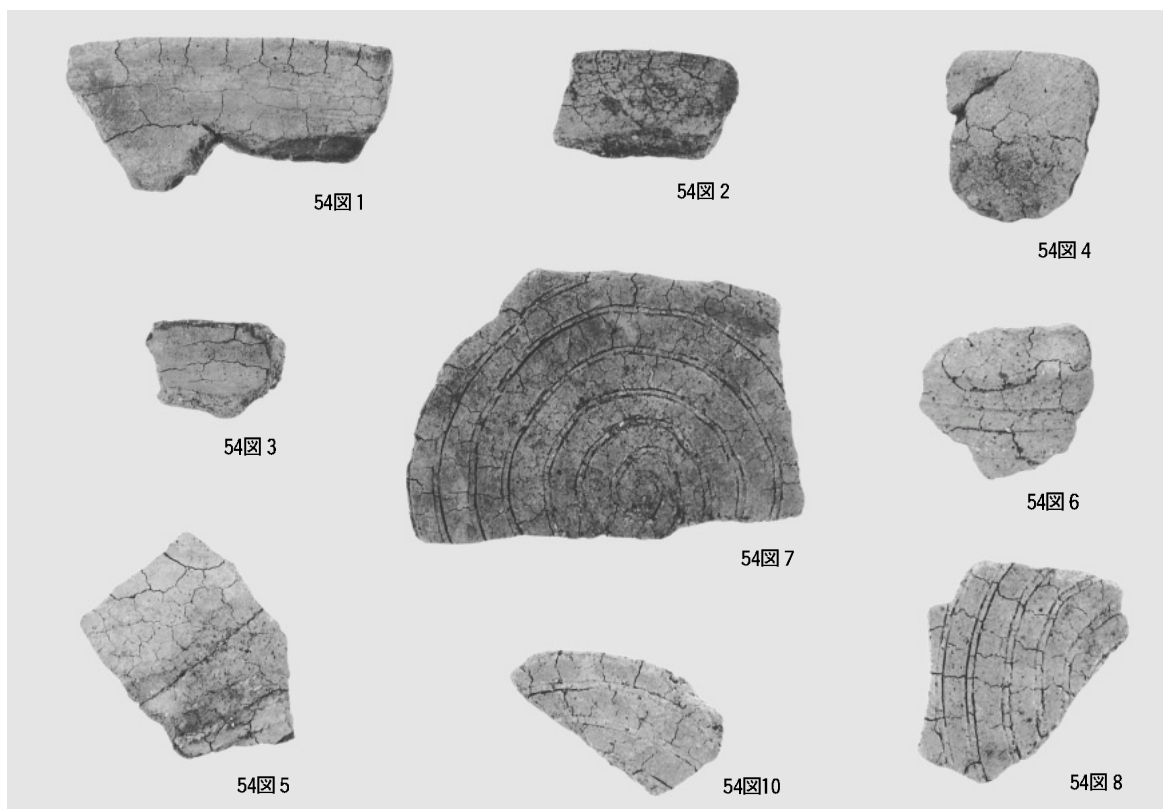
a 2号道跡近景（1次）（北東から） b 2号道跡全景（2次）（北から）
c 1号階段状遺構（東から） d 2号階段状遺構（北西から）



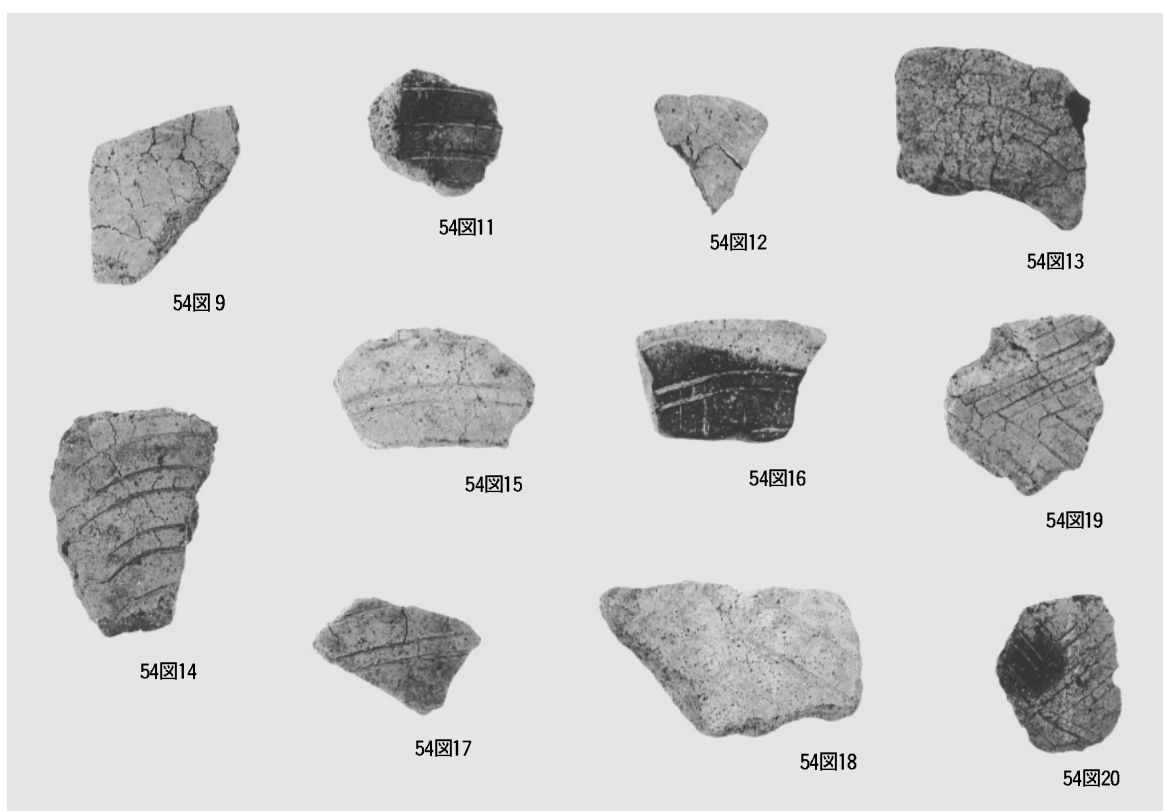
20 1号住居跡出土遺物



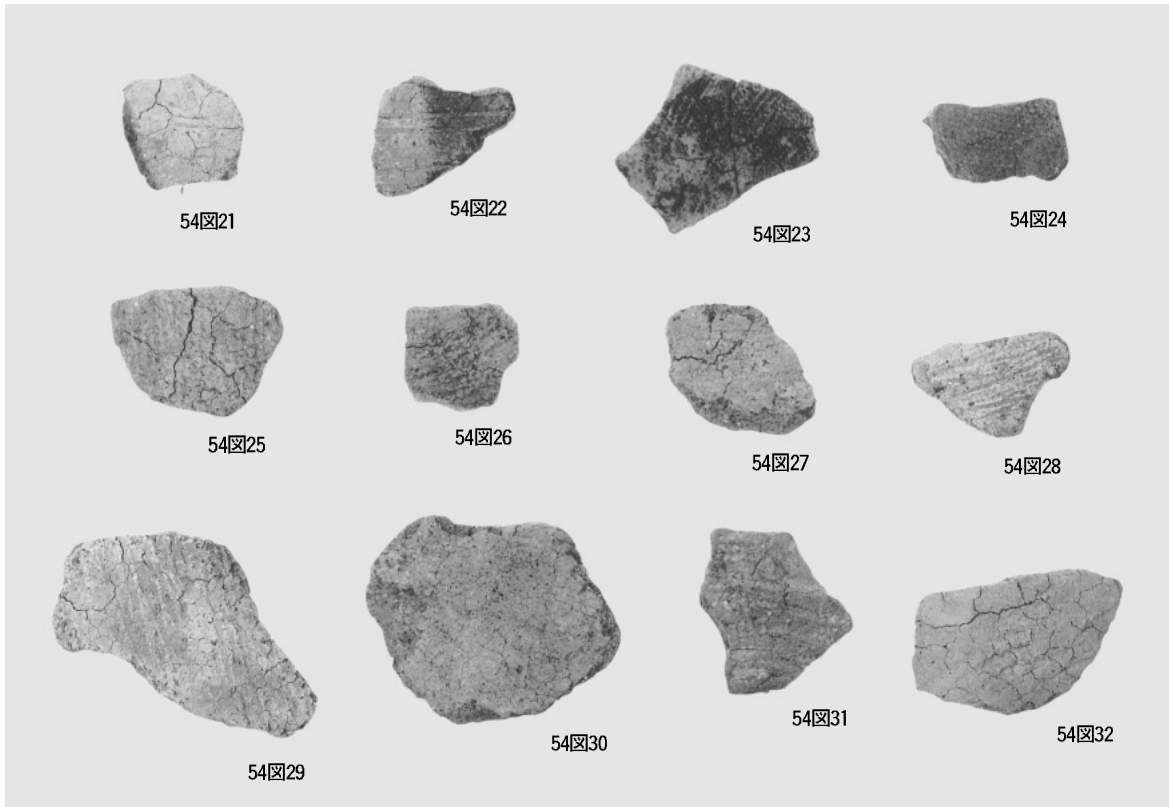
21 2号住居跡出土遺物



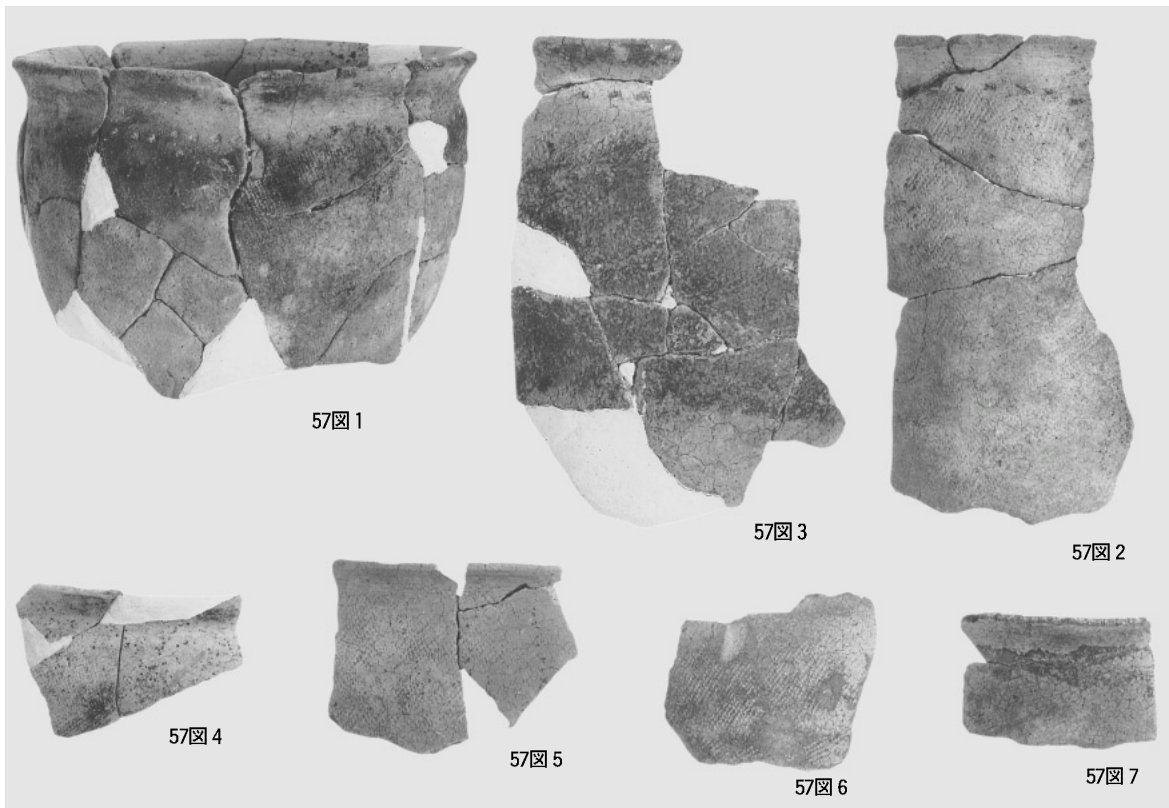
22 3号住居跡出土遺物(1)



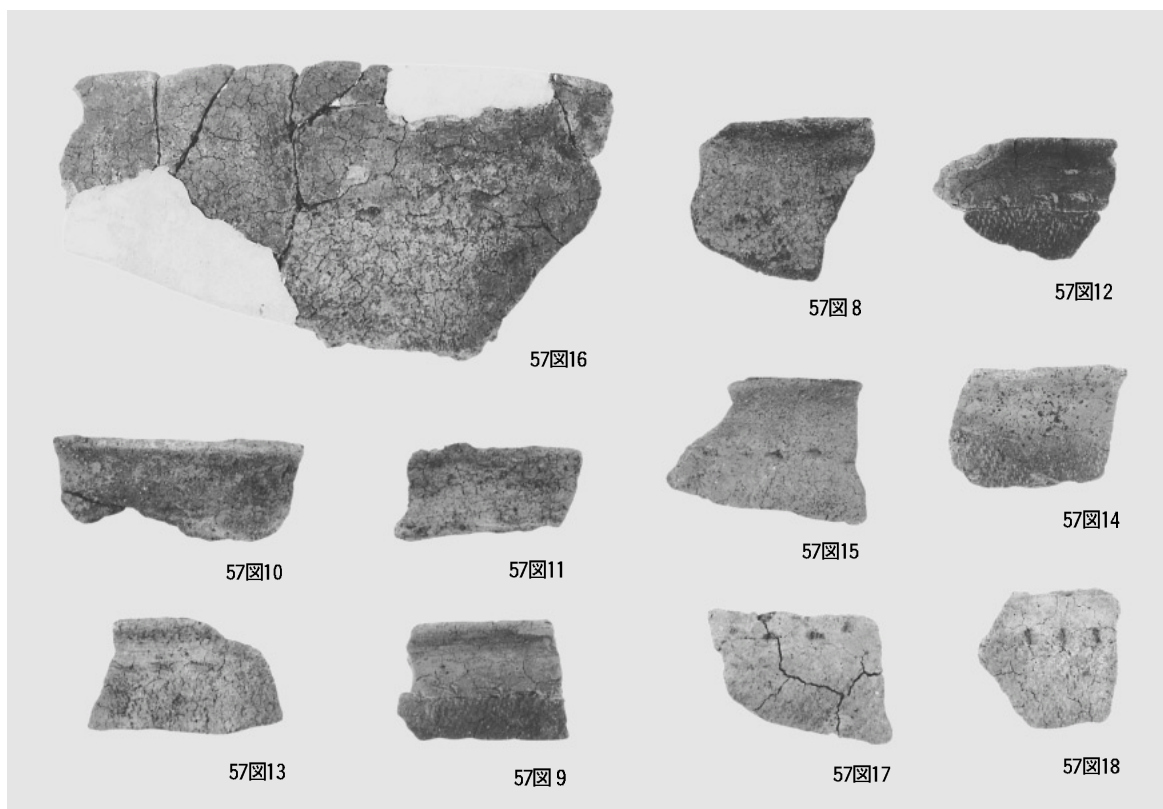
23 3号住居跡出土遺物(2)



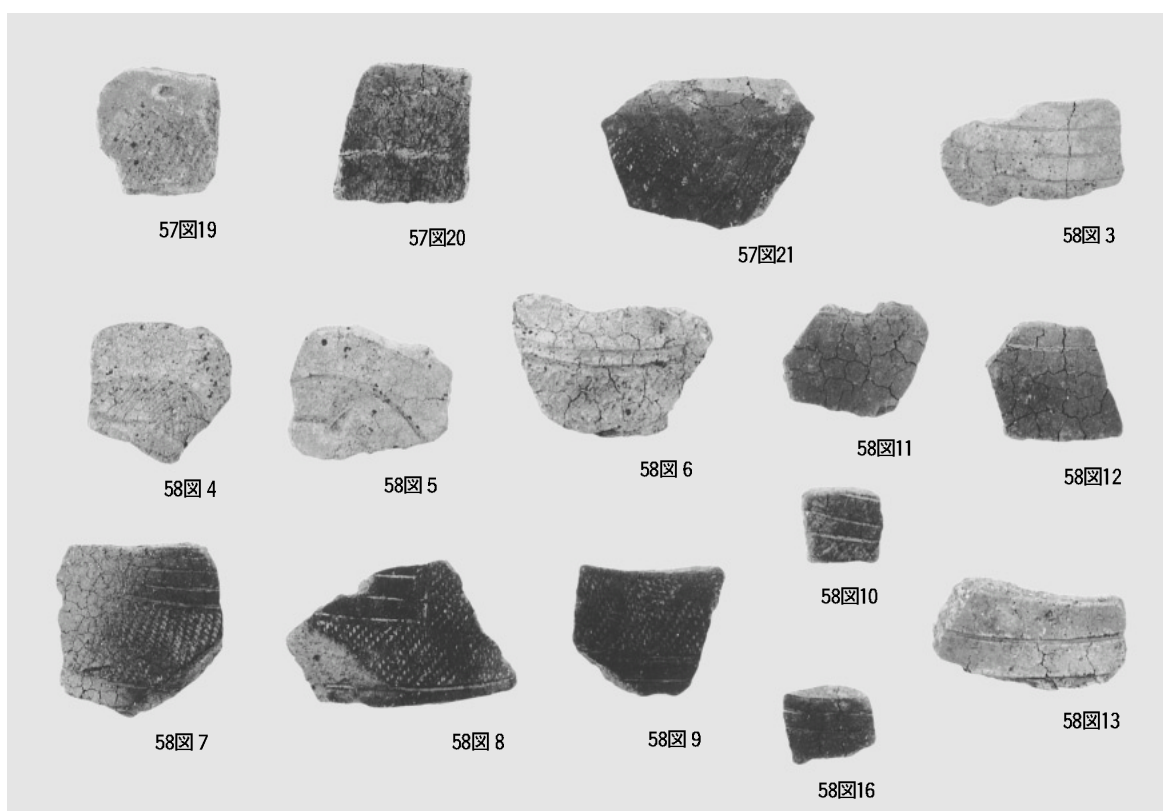
24 3号住居跡出土遺物(3)



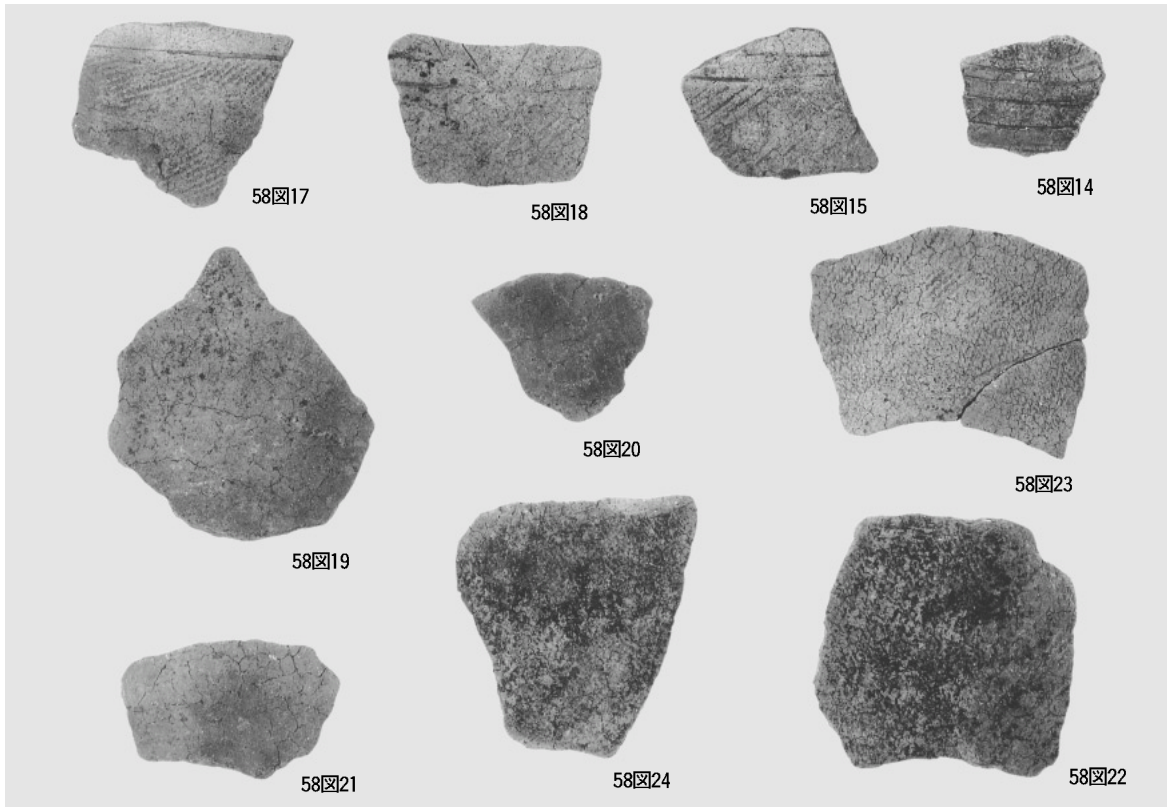
25 4号住居跡出土遺物(1)



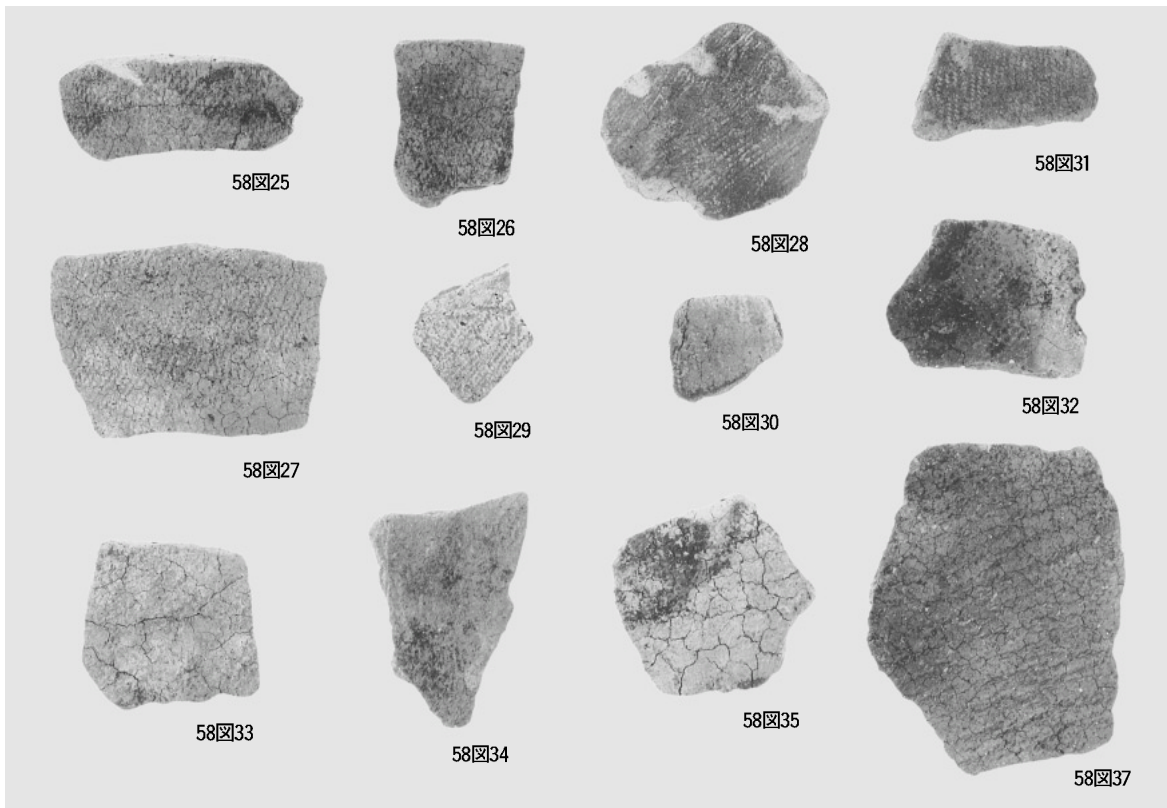
26 4号住居跡出土遺物(2)



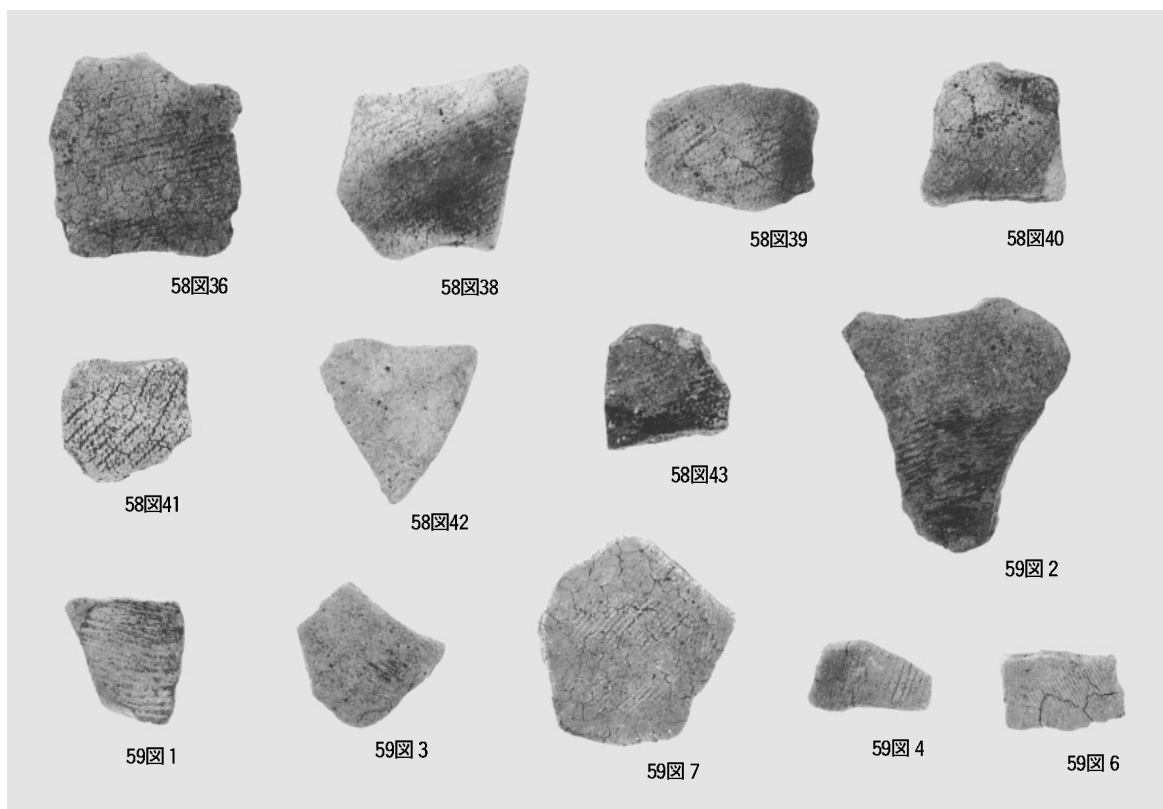
27 4号住居跡出土遺物(3)



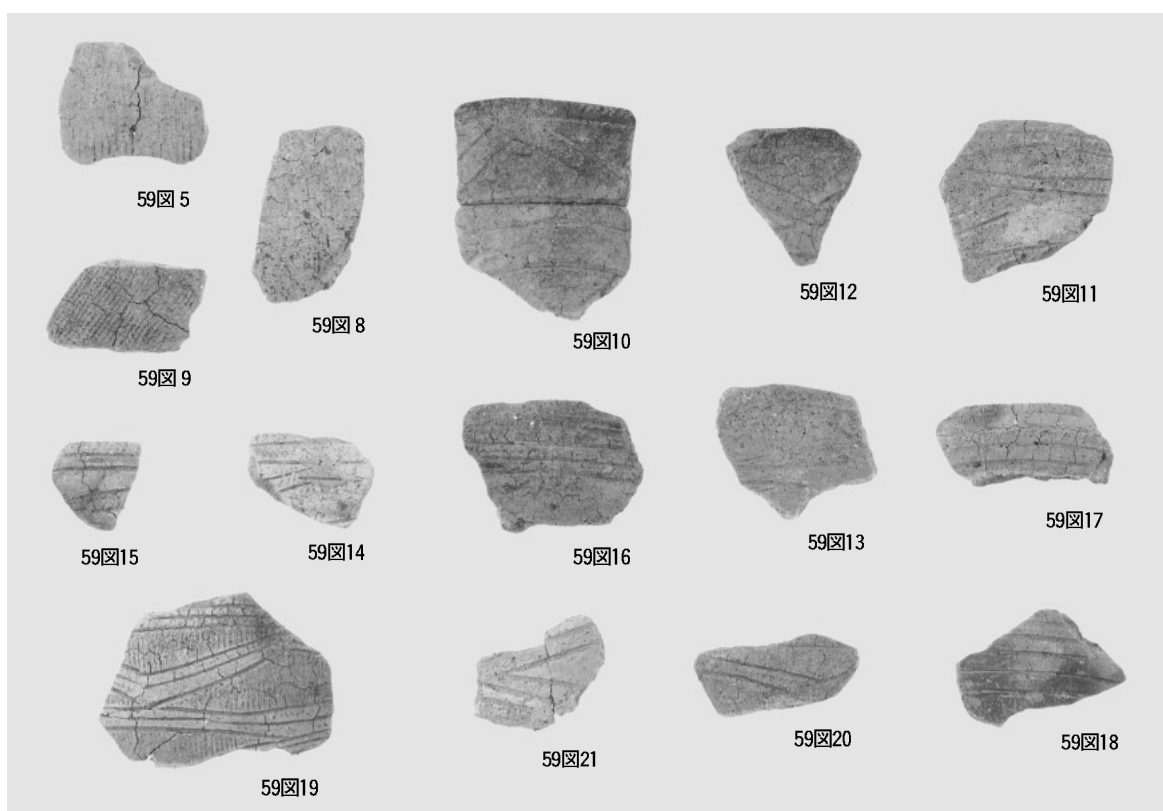
28 4号住居跡出土遺物(4)



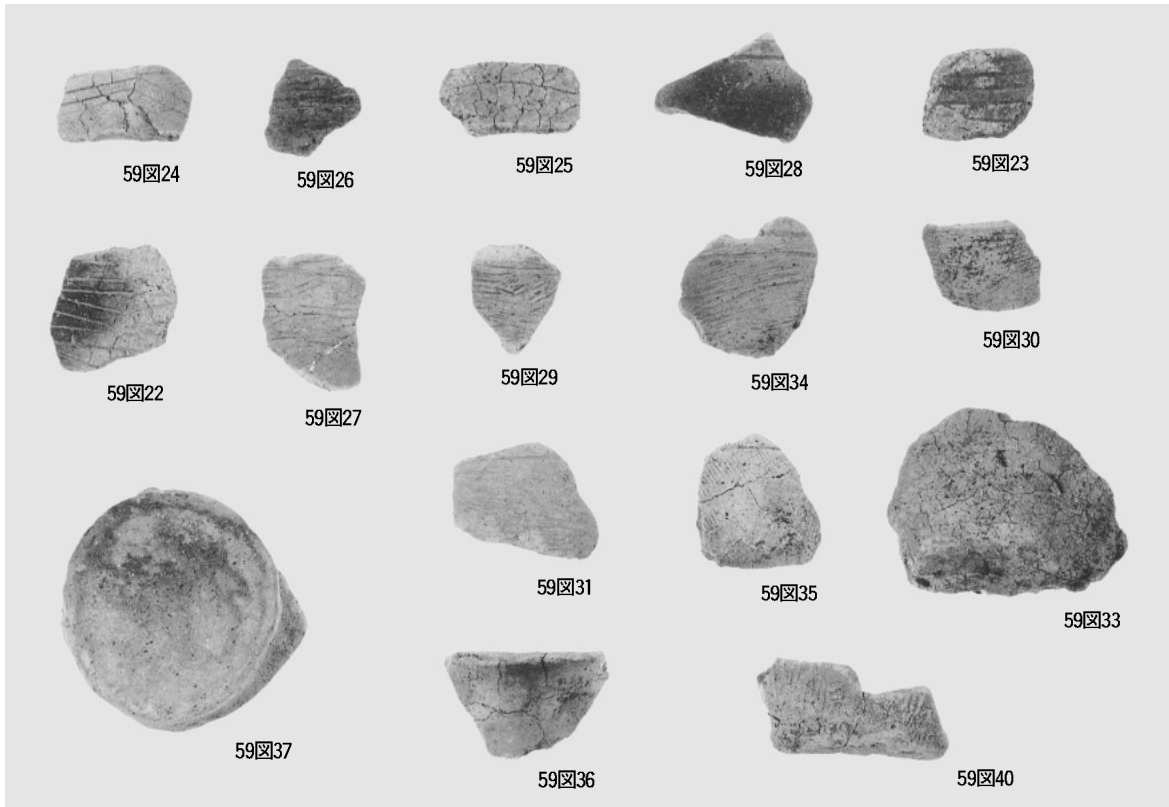
29 4号住居跡出土遺物(5)



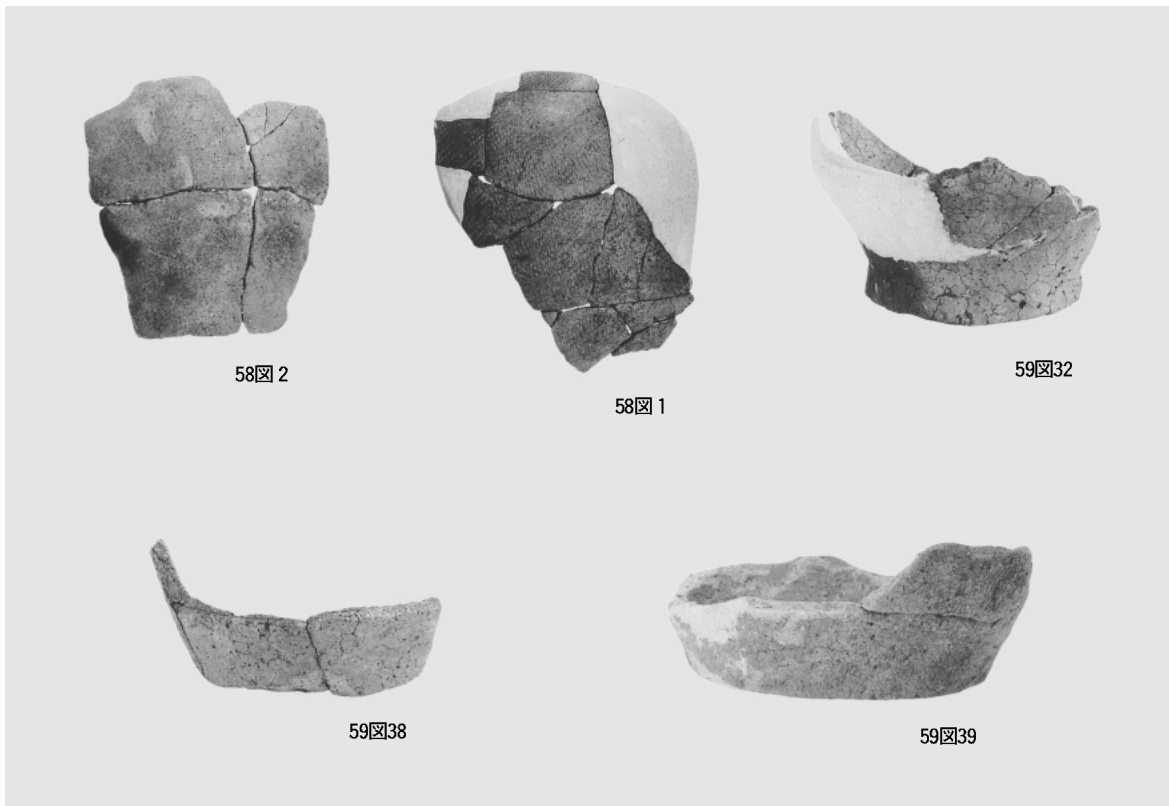
30 4号住居跡出土遺物(6)



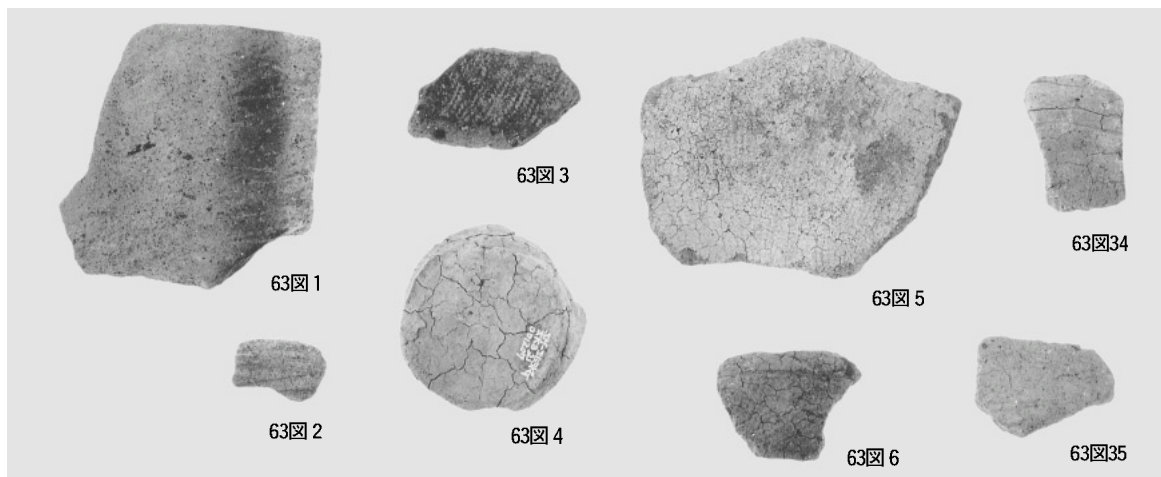
31 4号住居跡出土遺物(7)



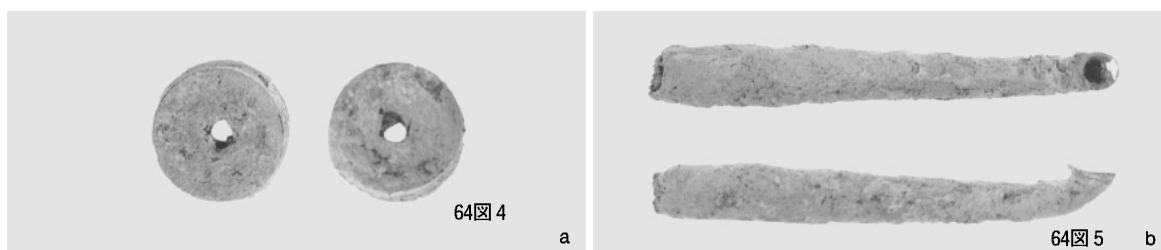
32 4号住居跡出土遺物(8)



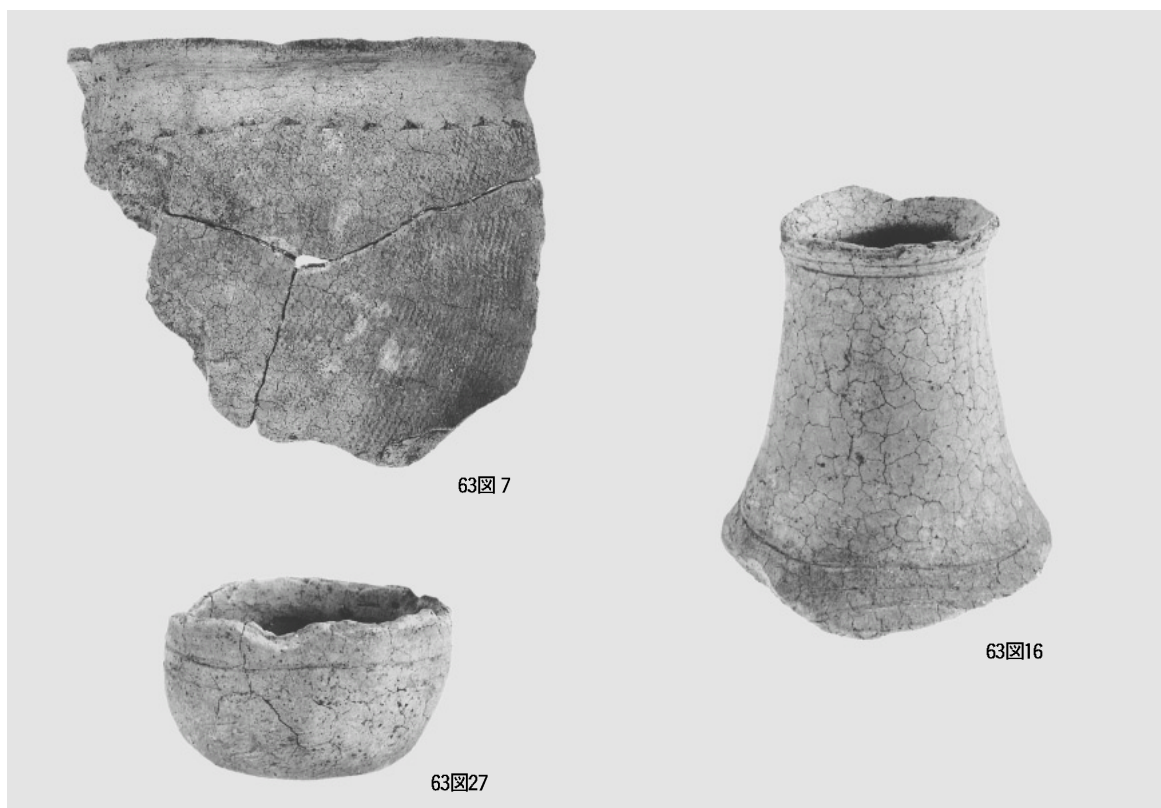
33 4号住居跡出土遺物(9)



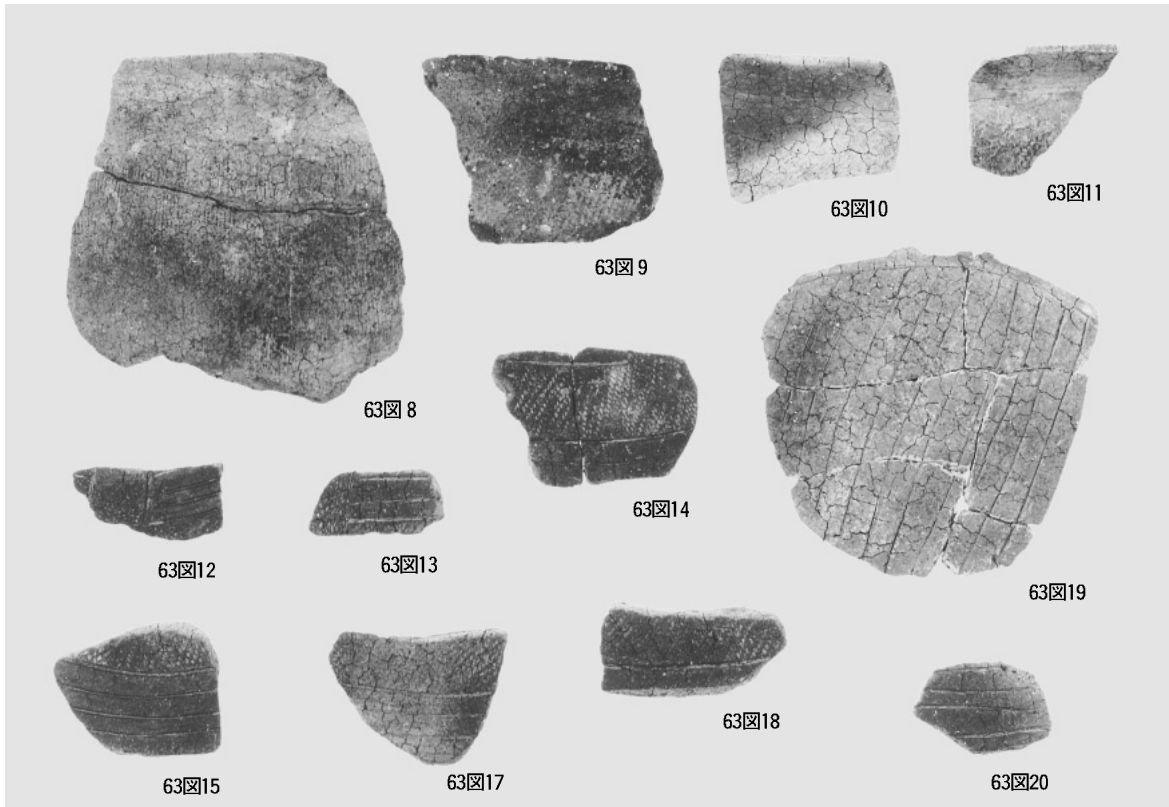
34 2・3・9・13・15号土坑出土遺物



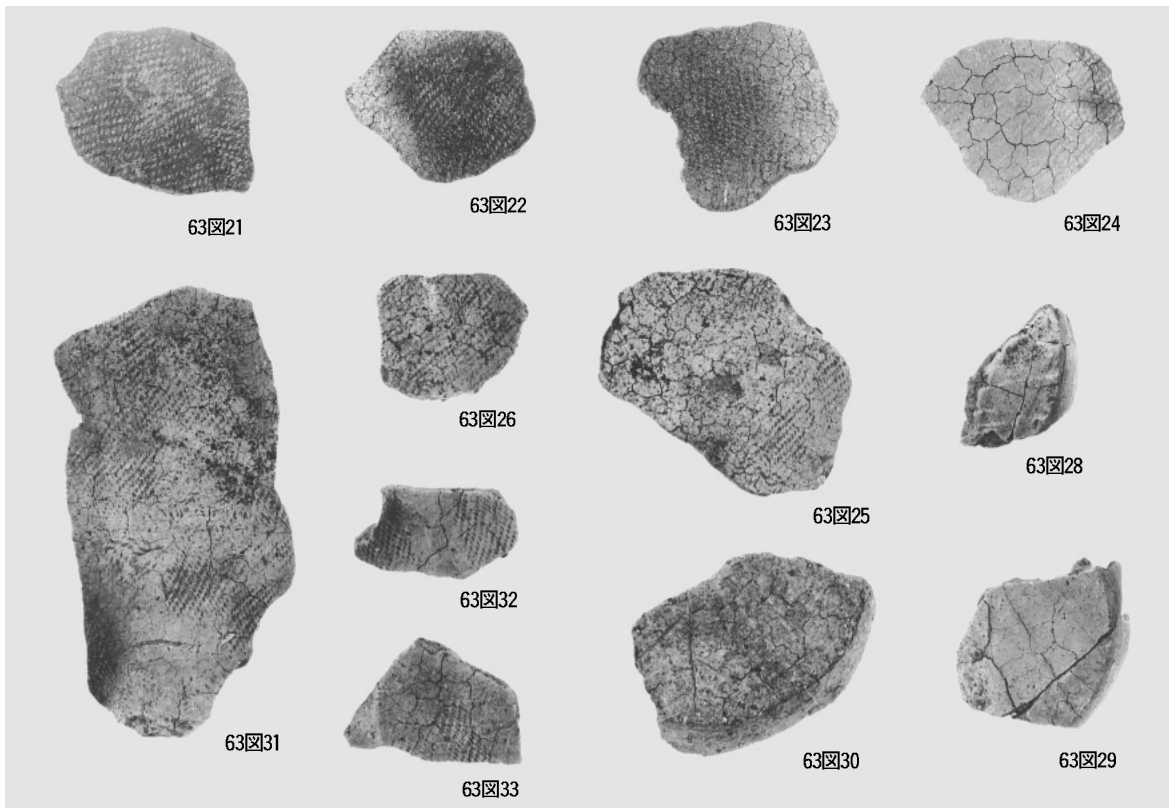
35 a 10号土坑出土遺物
b 11号土坑出土遺物



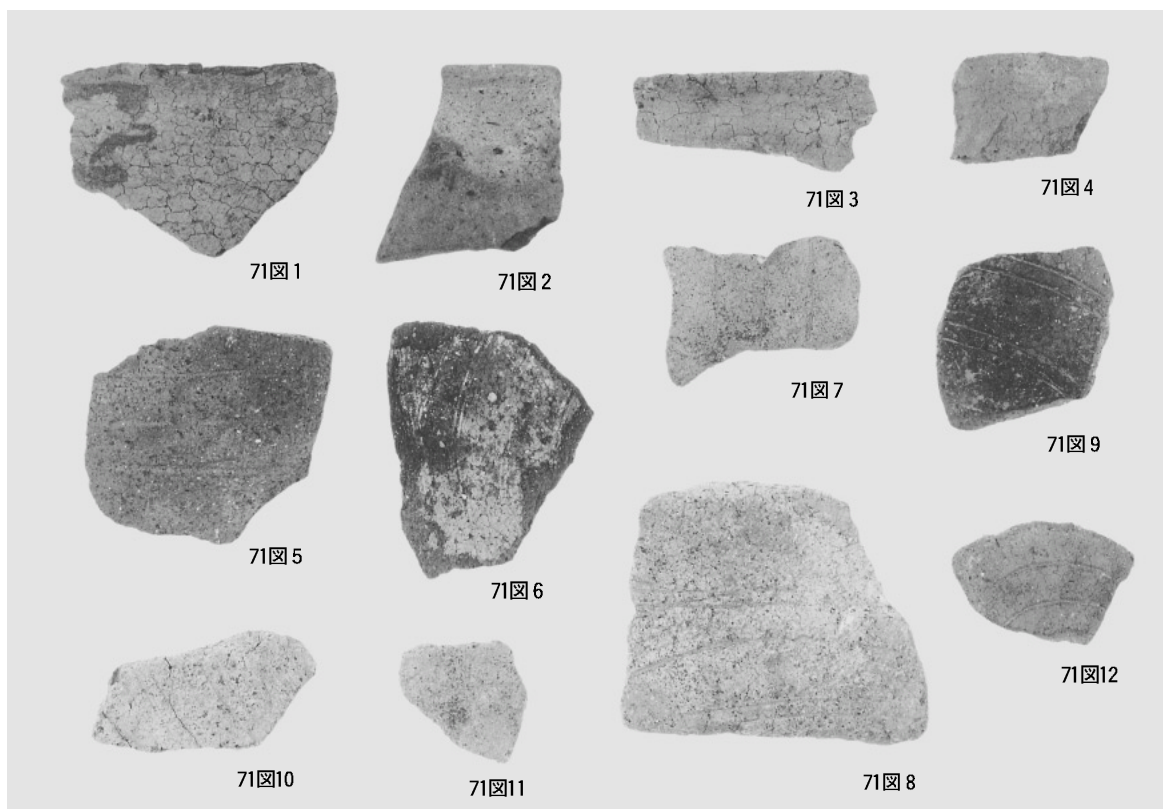
36 14号土坑出土遺物(1)



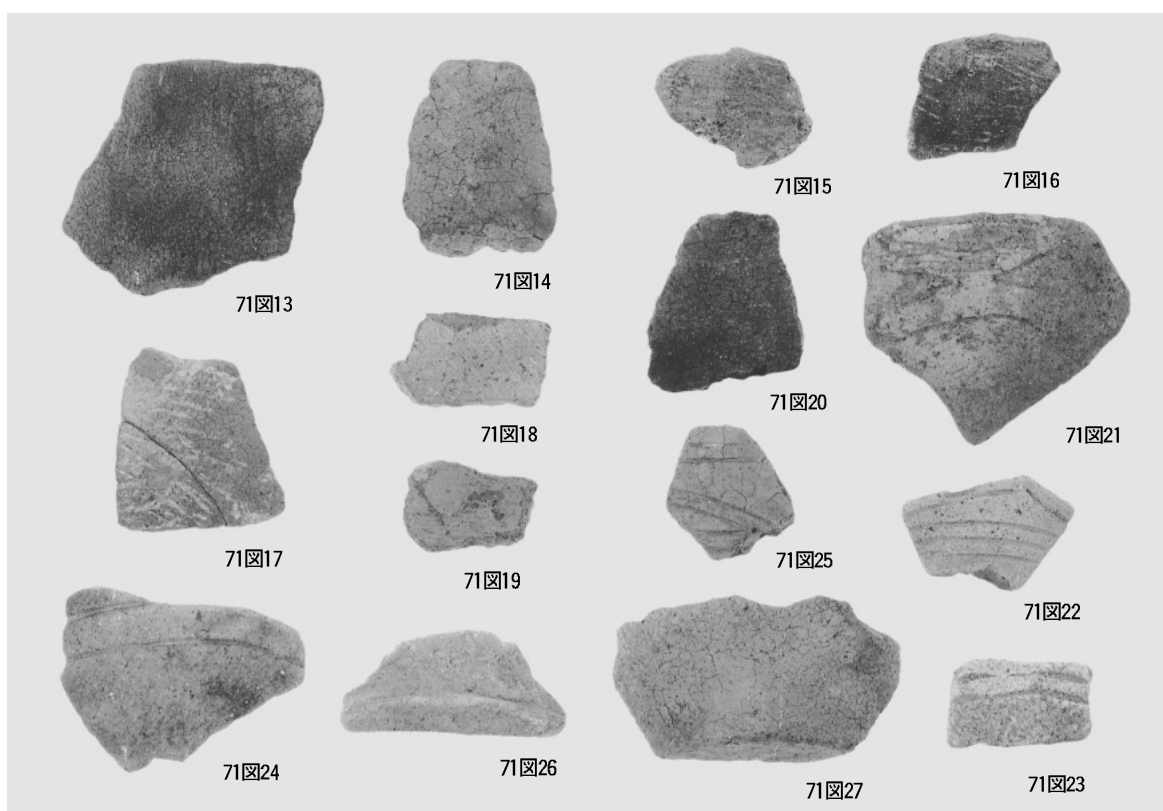
37 14号土坑出土遺物(2)



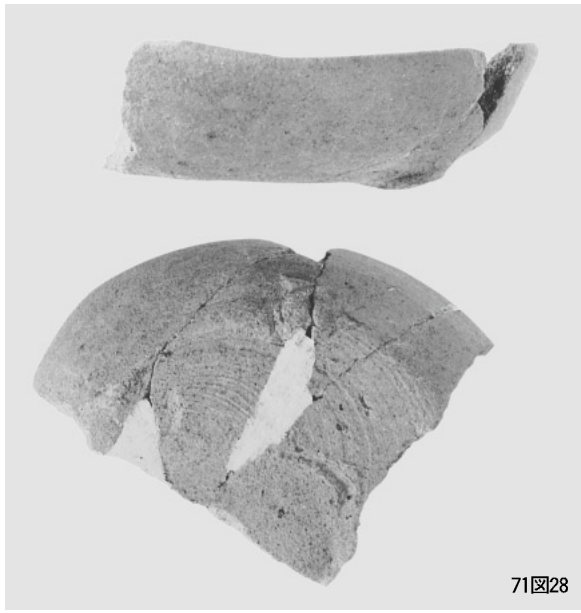
38 14号土坑出土遺物(3)



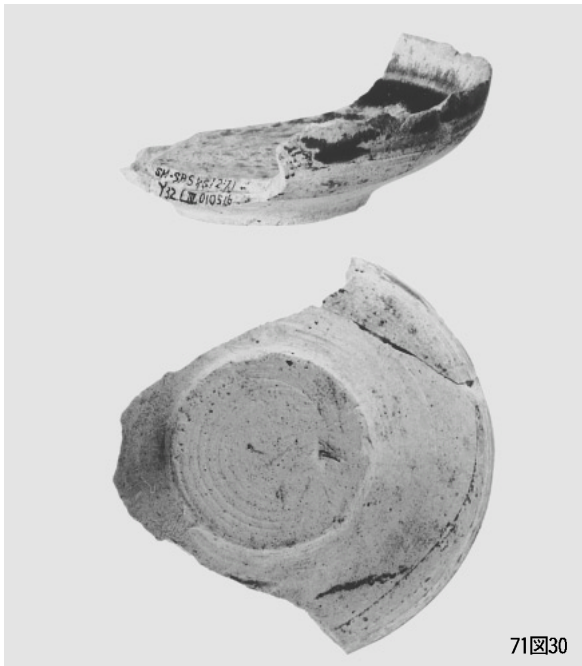
39 遺構外出土遺物(1)



40 遺構外出土遺物(2)



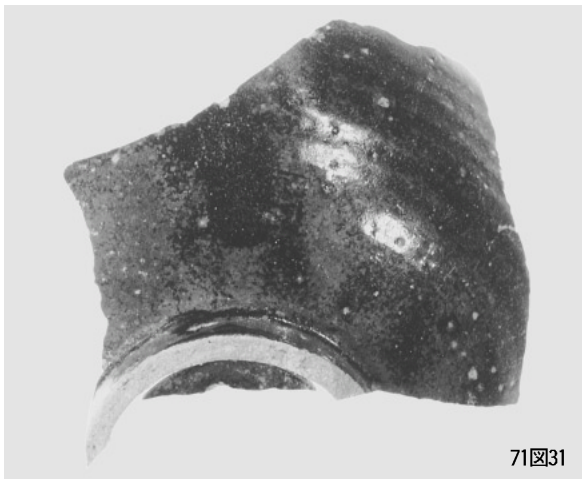
71圖28



71圖30



71圖29



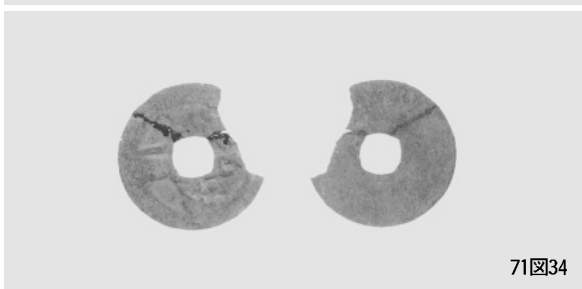
71圖31



71圖32

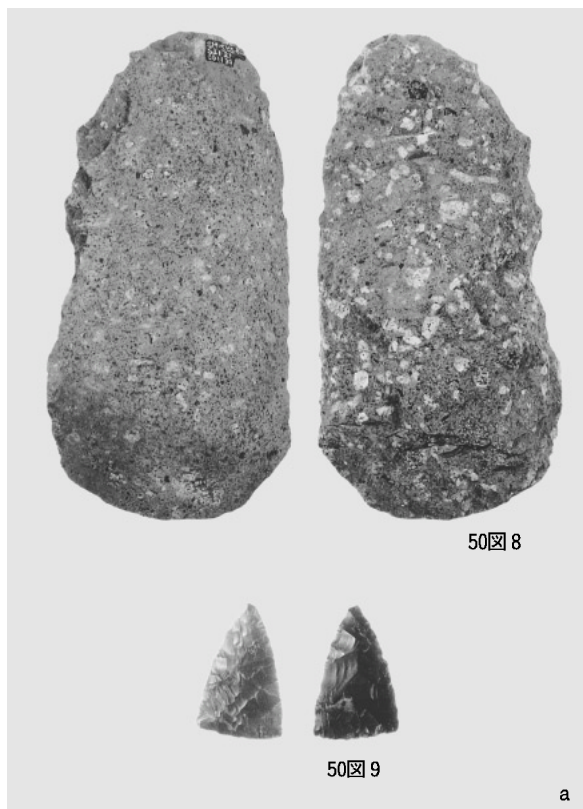


71圖33

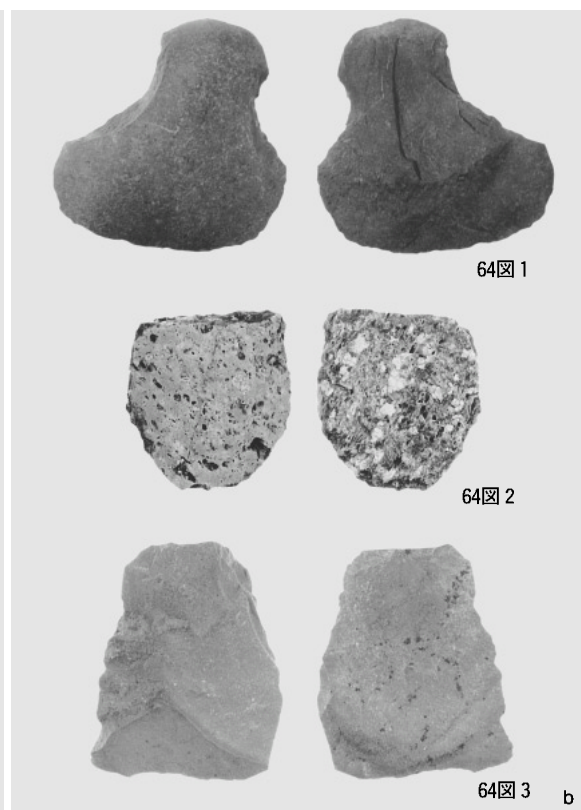


71圖34

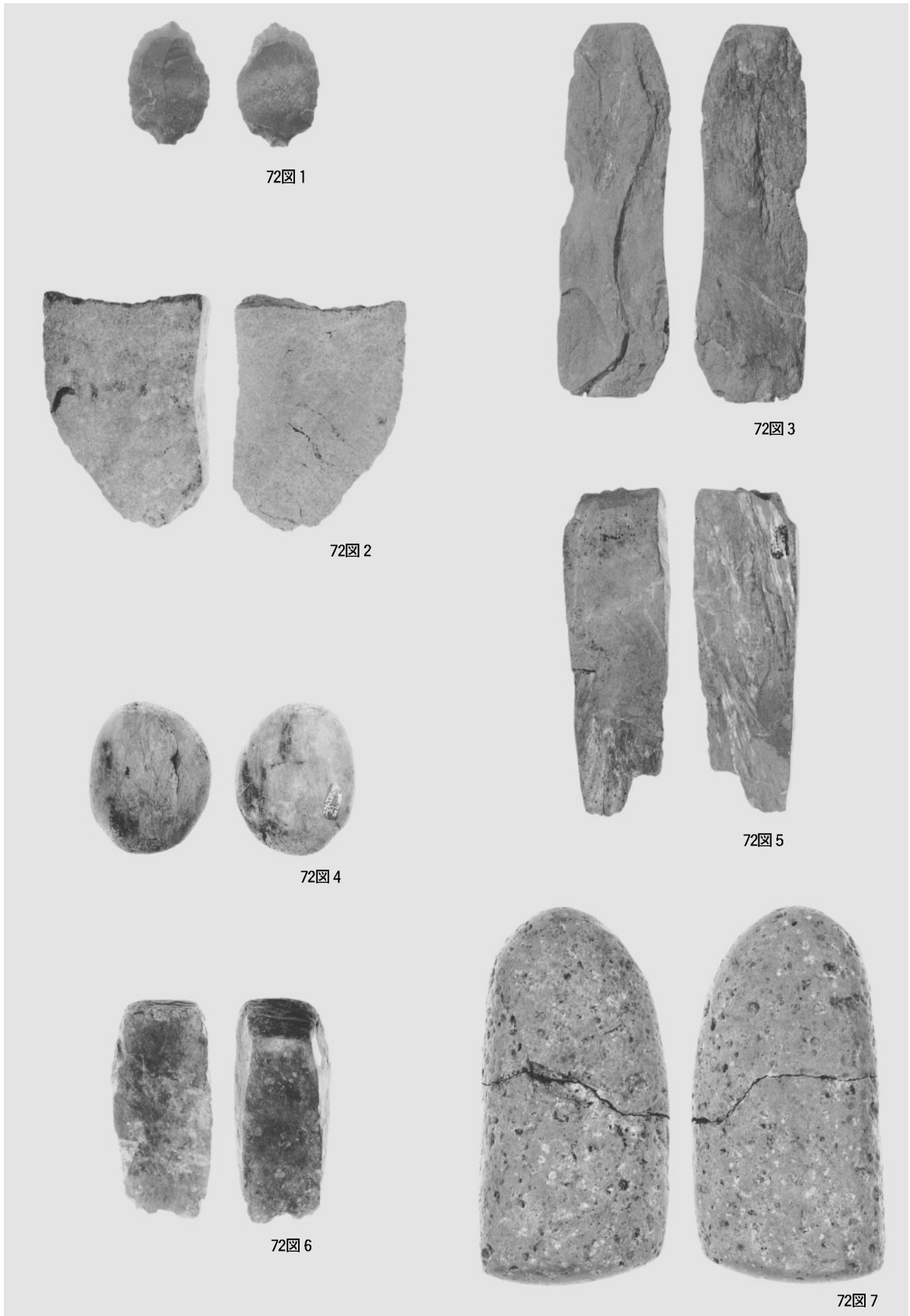
41 遺構外出土遺物(3)



42 a 1号住居跡出土石器
b 2号住居跡出土石器



43 a 4号住居跡出土石器
b 2号土坑出土石器



44 遺構外出土石器

付 編

付編1 柴迫A遺跡のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

柴迫A遺跡は、宇多川が流れる中村低地を南に臨む相馬丘陵の丘陵斜面地に位置している。発掘調査では、弥生時代中期および、古墳時代から平安時代にかけての遺構や遺物が検出されている。弥生時代中期の溝跡とされている1号溝（SD1）では、遺構覆土内に榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP：町田・新井，1992）と推定される白色粒子が混在している様子が確認された。この白色粒子が混在する層を挟んで上層からは7世紀代の土師器，下層からは弥生時代の中期の土器が検出されている。今回はこのテフラの由来を明らかにすることにより，溝の構築時期に関する情報を得ることとする。

1. 試料

柴迫A遺跡のSD1では，覆土は上位より1層～7層に分層されている。1～3・5層は黒褐色，4層は灰黄褐色，6層は褐灰色，7層は灰色を呈する砂質シルトであり，1～4層にHr-FPと推定される白色粒子が混在している。テフラ分析を行う試料は，2～5層の各土層より採取された試料FBC00S052～055の計4点である。

2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り，水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後，実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し，その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

3. 結果

テフラ分析結果を表1に示す。分析を行った試料全てにスコリアは含まれず，火山ガラスと軽石が含まれている。火山ガラスは2・3層に中量，4層に微量，5層に少量含まれている。認められる火山ガ

ラスは，無色透明で，薄手の平板状あるいは薄手で緩い曲率の曲面を有する球体の一部のような形状である，バブル型とよばれる形態のものが最も多く認められる。バブル型火山ガラスには褐色を呈するものも多く認められる。また，表面に小気泡を非常に多く持つ塊状あるいは気泡の長く伸びた繊維束状である軽石型とよばれる形態の火山ガラスもわずかに認められる。軽石型火山ガラスにも無色透明のものと褐色を呈するものが認められる。軽石は，4層に多量，2・3層に中量，5層に微量含まれている。認められる軽石の特徴はいずれの試料も同じであり，白色を呈し発泡がやや不良～不良である軽石が認められる。また軽石の中には角閃石の斑晶を包有しているものも認められる。4層の試料中に含まれる砂分は軽石が最も多く，角閃石や長石などの鉱物粒も認められる。2・3層の試料中に含まれる砂分でも軽石は最も多く含まれているが，角閃石や輝石・長石・石英などの鉱物粒，岩片，火山ガラスなどが含まれている。5層には軽石が少ないため，砂分は角閃石や輝石・長石・石英などの鉱物粒，岩片，火山ガラスなどで構成されている。

4. 考察

今回認められた軽石は，軽石の特徴と遺跡の地理的位置から，前述のHr-FPに由来するものである。Hr-FPは，6世紀中葉に榛名火山から噴出したとされ，給源から北東方向に分布主軸を持っている（町田・新井，1992）。また同文献によれば，Hr-FPは給源から約300km離れた仙台付近まで飛散していることも確認されている。4層には軽石が多く含まれており，軽石以外の砂分が少ないことから，4層はHr-FPが降下堆積したものがそのまま保存されたものである可能性が高い。2・3層および5層には，降下堆積後にテフラが拡散あるいは再堆積したものであると考えられる。この場合，4層は

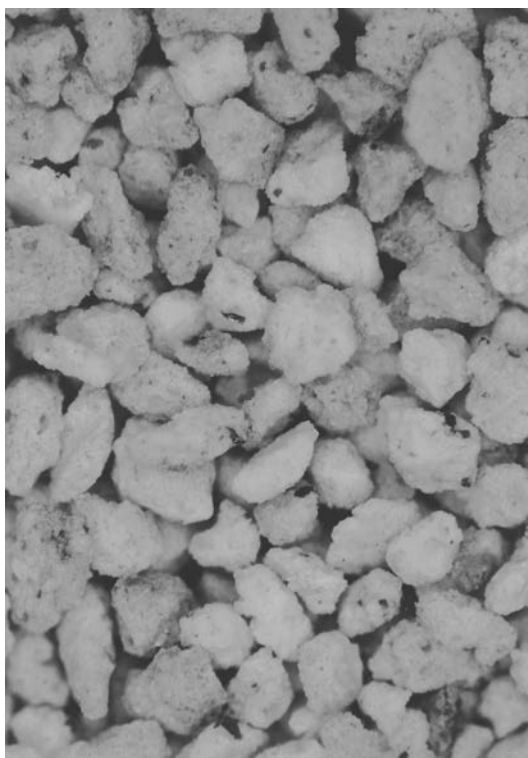
Hr-FPが降下した6世紀中葉に堆積したといえることから、溝の構築は6世紀中葉よりも前に行われたと考えられる。このことは遺物の検出状況ともよく整合する。今回認められた火山ガラスは、その特徴から鬼界-アカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井, 1978)に由来すると考えられる。K-Ahは、約6300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した広域テフラである(町田・新井, 1992)。同試料にHr-FPの軽石が含まれていることを考慮すれば、溝周囲の黒ボク土に含まれていたK-Ahの火山ガラスが、

溝壁の崩壊や降雨による黒ボク土の流入などにより溝覆土に混入したものと推察される。

引用文献

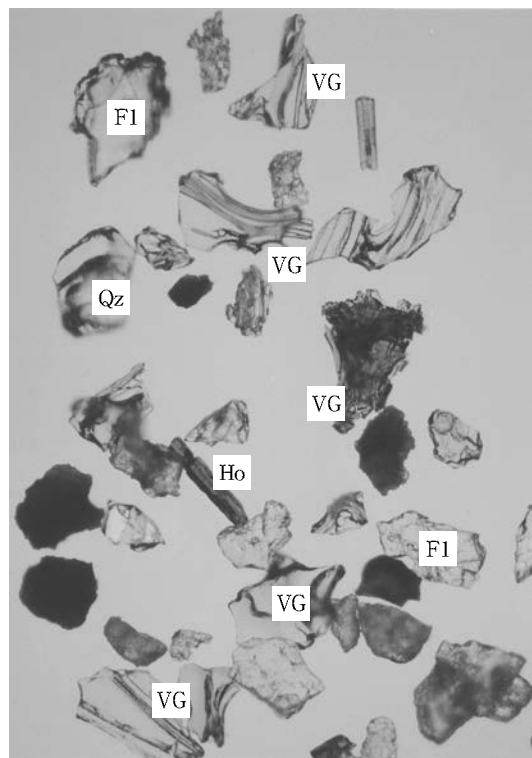
町田 洋・新井房夫(1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰第四紀研究, 17, p.143-163 .

町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス, 276p., 東大出版.



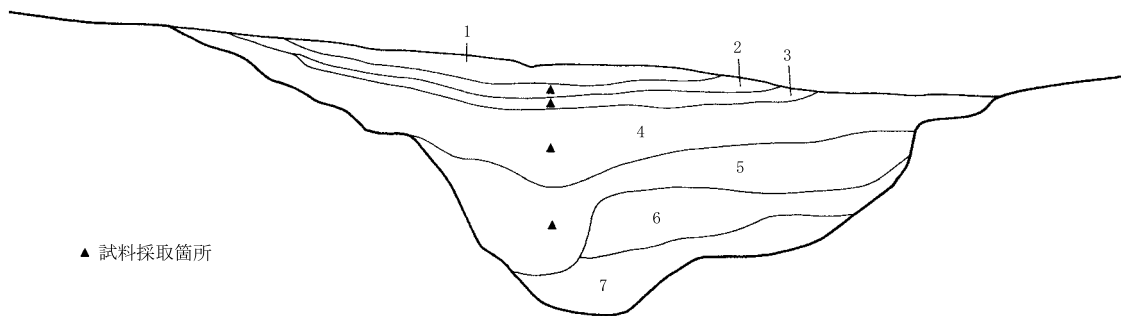
1. Hr-FPの軽石
(柴迫A遺跡 SD 1 4層 FBC00S 054)

1 mm



2. K-Ahの火山ガラス
(柴迫A遺跡 SD 1 2層 FBC00S 052)
VG:火山ガラス. Qz:石英. FI:長石. Ho:角閃石.

0.5mm



▲ 試料採取箇所

図1 柴迫A遺跡のテフラ

付編2 柴迫A遺跡から出土した木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

柴迫A遺跡では、弥生時代中期の溝跡が検出されている。溝内からは多量の弥生土器と共に、杭や自然木などの木質遺物が残存していた。

本報告では、これらの杭材・自然木について樹種同定を行い、用材選択や古植生に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、溝跡(SD1)から出土した杭材1点(FBC00S025)と、自然木6点(FBC00S026~031)である。

2. 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。杭材は落葉広葉樹のクリ、自然木は全点が針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus* subgen. *Diploxylon*)

マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急~やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1~15細胞高。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1~4列、孔圏外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に

配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

4. 考察

弥生時代中期の古植生と用材選択

柴迫A遺跡の溝跡から出土した自然木は、全て複維管束亜属(ニヨウマツ類)であった。複維管束亜属は、陽地などに先駆的に生育する種類であり、土壌の少ない岩場、痩せ地などでも生育できる。この結果から、溝周辺の日当たりの良い場所に複維管束亜属が生育していたことが推定される。一方、杭材は落葉広葉樹のクリであった。杭材は、各地の調査例(島地・伊東, 1988; 伊東, 1990)で多くの種類が認められ、特定の樹種が多い傾向は見られない。これらの結果から、遺跡周辺に生育あるいは植栽されていた種類が利用されていたことが推定される。今回の結果についても、遺跡周辺に生育していたクリを杭材として利用したと考えられる。クリは、果実が生食可能であり、縄文時代には栽培されていたことも指摘されている(辻, 1997)。このことを考慮すると、クリは野生の他に栽培されていた可能性もある。

今後、溝埋積物について花粉分析や水洗選別によって得られる植物遺体の同定等も行い、より詳細な古植生を明らかにしたい。

引用文献

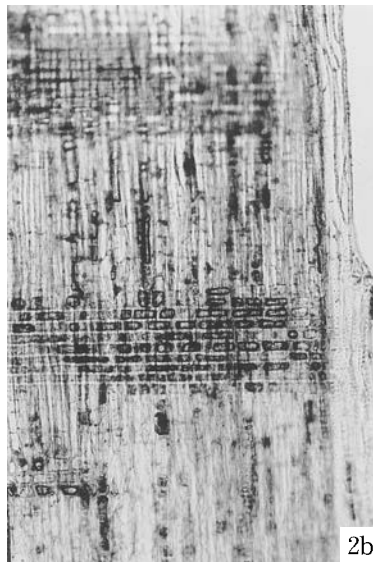
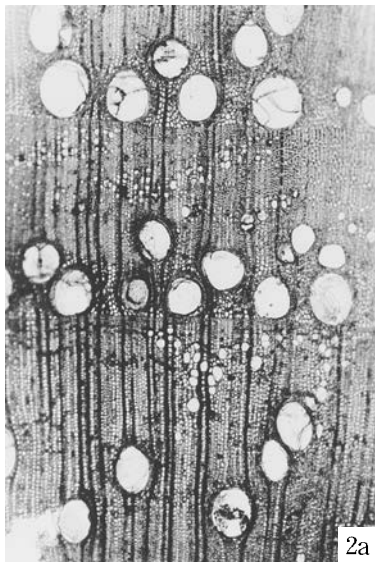
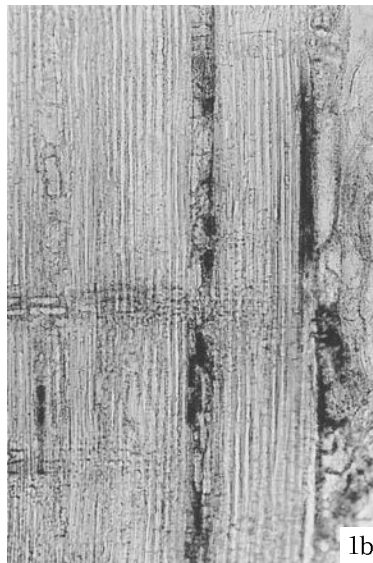
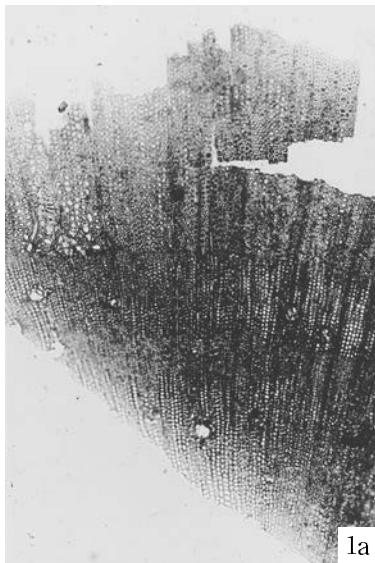
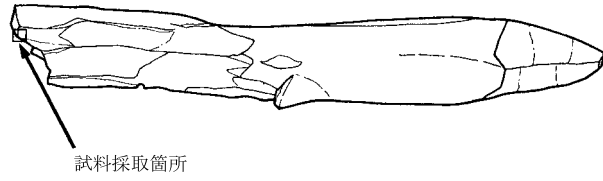
伊東隆夫・島地 謙(1990)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ。木材研究・資料, 26, p.91-189, 京都大学木材研究所。

伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧。296p., 雄山閣。

辻 誠一郎(1997)三内丸山遺跡を支えた生態系。岡田康博・NHK 青森放送局編「縄文都市を掘る」, p.174-188, NHK出版。

表1 柴迫A遺跡の樹種同定結果

試料番号	出土遺構	層位	年代	試料の質	樹種
FBC00S 025	SD 1(T13)	ℓ 7	弥生時代中期	杭	クリ
FBC00S 026	SD 1(X17)	ℓ 7	弥生時代中期	自然木	マツ属複維管束亜属
FBC00S 027	SD 1(X17)	ℓ 7	弥生時代中期	自然木	マツ属複維管束亜属
FBC00S 028	SD 1(Z18)	ℓ 7	弥生時代中期	自然木	マツ属複維管束亜属
FBC00S 029	SD 1	ℓ 7	弥生時代中期	自然木	マツ属複維管束亜属
FBC00S 030	SD 1	ℓ 7	弥生時代中期	自然木	マツ属複維管束亜属
FBC00S 031	SD 1	ℓ 7	弥生時代中期	自然木	マツ属複維管束亜属



1. マツ属複維管束亜属 (FBC00S027)

2. クリ (FBC00S025)

a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μm : a
200 μm : b, c

図版1 柴迫A遺跡の木材

付編3 柴迫A遺跡・柴迫古墳群付近の地質と石器石材

五十嵐俊雄

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

1. はじめに

平成13年3月14日に、財団法人福島県文化センター山下町分室で、福島県相馬市柴迫A遺跡・柴迫古墳群から出土した弥生時代中期を主体とする石器石材の肉眼鑑定を実施した。その結果、遺跡周辺の地質と石材の関係や石器の器種と岩種の関係など、当時の石材の利用状況に関する情報を得た。ここでは、その概要を報告したい。

2. 地質の概要

本遺跡は阿武隈山地の東縁に位置する相馬市の丘陵にある。本地域の上流域(宇田川流域)は阿武隈山地東北縁を構成する先デボン系から完新統まで、幅広い地質系統が分布している。巨視的には、宇多川・真野川流域は、次の4帯の地質系統に区分される。

1) 上流～中流部は北北西-南南東に走る2列の畑川破碎帯と双葉破碎帯に挟まれる地帯では、先デボン系の山上・松ヶ平変成岩類と未区分の変成岩類、相馬古生層、高倉層および貫入岩体が分布する。

2) 畑川破碎帯より西方から双葉破碎帯までの間には、中新統の塩手層、天名山火山岩類、霊山層、大内層などが分布している。

3) 双葉破碎帯の東側には、鹿狼山層と中部ジュラ系-最下部白亜系の相馬中村層群が南北方向に露出する。

4) さらに東方の海岸までの丘陵地は、鮮新統～更新統に覆われている。

したがって、本遺跡はきわめて多様な在地性石器原料となる石材が供給され得る立地条件を伴っている。なお、本稿に用いた地層名は柳沢ら(1996)によっている。

(1) 変成岩類

山上変成岩類：相馬市を流れる黒川および地蔵川の上流域に、小規模で露出する。変成度が高い緑簾石角閃岩・白雲母石英片岩と、変成度が低い苦鉄質

片岩・砂質片岩があり、一部は接触変成作用を受けている。

松ヶ平変成岩類：鹿島町を流れる真野川の中流域に分布している。松ヶ平変成岩類の大部分は泥質-珪質片岩で、部分的に緑簾石角閃岩・緑色岩類・砂質片岩・珪質岩を挟在している。

(2) 相馬古生層

真野川から上真野川にかけて、ほぼ南北に伸長して分布する。相馬古生層は、下位から合ノ沢層・真野層・立石層・上野層・大芦層・弓折沢層の6層に区分され、上部デボン紀から上部二畳紀にかけて堆積した海成層で岩相や包含する化石から、南部北上山地の古生層に対比されている。概略的な各層の構成岩石は次の通りである。

合ノ沢層：赤紫色～緑色凝灰質頁岩、淡緑色凝灰岩・灰色細粒砂岩互層、および暗灰色頁岩。

1) 真野層：灰色細粒砂岩と案灰色頁岩の互層。

2) 立石層：暗灰色-黒色塊状石灰岩。

3) 上野層：灰色-暗灰色砂質頁岩および白色葉理を伴う灰色-暗灰色貫岩。葉理に沿って薄く剥離する性質を有する。

4) 大芦層：灰色～淡緑灰色細粒-中流砂岩。

5) 弓折沢層：剥離性に富む黒色頁岩と貫岩・砂岩互層を主体とする。

相馬古生層は、石器原料として重要視されている。とくに本地域の弥生時代遺跡から出土する、刃部が精巧に作出された石包丁の石材は岩相から上野層の頁岩または砂質頁岩と認定されている。

(3) 鹿狼山層

双葉断層の東側に沿って分布する先ジュラ紀堆積岩で細粒～中粒砂岩を主体とし、一部に貫岩を挟む。しばしば平行葉理が発達するが双葉断層の活動による破碎化が著しい。

(4) 相馬中村層群

双葉断層の東側の比較的狭い幅で、南北に長く連

続している。下位から粟津層・山上層・栃窪層・中ノ沢層・富沢層・小山田層の6層に区分されている。本層群は、中部ジュラ紀から白亜紀にわたる堆積岩類で構成されている。

粟津層：下部は礫岩・砂岩，上部は黒色～暗灰色頁岩で構成されている。

山上層：中粒～粗粒砂岩を主とし，頁岩を伴う。

栃窪層：アルコース質の粗粒～中粒砂岩と頁岩で構成される陸成層。

中ノ沢層：下部・中部はアルコース質の粗粒～中粒砂岩，上部は石灰岩で構成される上部ジュラ系堆積岩で，鳥の巣系とされている。

富沢層：粗粒砂岩と頁岩で構成される陸成層で，最上部ジュラ系とされている。

小山田層：黒色頁岩を主とする海成層で，最下部は最上部ジュラ系，主体は下部白亜系とされている。

(5) 中新統

本地方に分布する中新統は，双葉断層の西側にある塩手層・天明山火山岩類・霊山層・大内層である。

塩手層：本地方での塩手層は円礫岩，中礫交じりの極粗粒～中粒砂岩，細粒砂岩～シルト岩などの河川堆積物，および浅海成堆積物で構成されている。

天明山火山岩類：塩手層や霊山層に付随して断片的に分布し，玄武岩火砕岩と同質溶岩で構成されている。

霊山層：玄武岩溶岩および同質の降下堆積物などの火砕岩類で構成されている。

大内層：礫岩，砂岩，シルト岩，流紋岩質凝灰岩で構成される陸成層である。

(6) 貫入岩類

双葉断層の西側には，苦鉄質～珪長質にわたる白亜紀貫入岩体が分布する。主な深成岩類は，輝石角閃石斑れい岩，角閃石黒雲母花崗閃緑岩，中粒片状黒雲母花崗岩，黒雲母花崗岩で，半深成岩として花崗閃緑斑岩，珪長岩，角閃石ひん岩の露出が知られている。

(7) 鮮新統

相馬中村層群分布域東側の丘陵地は，仙台層群と

呼ばれる鮮新統が分布している。下位から亀岡層・竜の口層・向山層・大年寺層が堆積している。いずれも，泥岩・砂岩を主とする地層で亀山層と向山層は亜炭を挟在している。

3. 石器石材の岩種

(1) 弥生時代中期石器の器種と岩種

今回鑑定した石器は，柴迫A遺跡および柴迫古墳群から出土したもので，その時代は，弥生時代中期と古墳時代～古代に2分され，内訳は弥生時代中期74試料，古墳時代～古代5試料である。

1) 堆積岩類

砂岩・頁岩・珪質頁岩・チャート・凝灰岩よりなる堆積岩類が占める比率が高く，全体の53%である。

砂岩：石器原石として砂岩が最も多く使用され(19試料)，廉製石斧・打製石斧・石包丁・敲石・磨石など多角的に利用されている。ただし，器種により砂岩の岩質が異なっている。石包丁は細粒砂岩で，相馬古生層に属する上野層の砂質頁岩に類する岩質を有している。磨製石斧に使用される砂岩は，石英に富む珪質砂岩である。珪質砂岩は，この他に不定形石器やピエス・エスキューに用いられている。また石皿には，アルコース砂岩を使用している。

頁岩：頁岩は，全11試料中の9試料が石包丁と直縁刃石器に使用されている。このうちの6試料は白色葉理が明瞭で，縞状を呈する上野層頁岩の特徴を備えている。

珪質頁岩：本稿で用いる珪質頁岩は，珪質で硬度が高い中～古生層の黒色頁岩をさし，山形・秋田県等に産する新第三系の硬質頁岩とは異なる。硬度が高いことから，直縁刃石器・石槍等に使用されている。

チャート：チャートは2試料検出された。いずれも非変成チャートで，石鏃に使用されている。

凝灰岩：1試料のみで，大型蛤刃石斧に使用されている。

2) 火山岩類 (18試料)

堆積岩に次いで多く，全体の25.7%を占める。

流紋岩・デイサイト：流紋岩は10試料で，これらの2試料が磨製石斧，1試料が柱状片刃石斧に，他の7試料は不定形石器である。デイサイトは敲石

に使用されている。

安山岩：8 試料中の5 試料が輝石安山岩，2 試料が珪化安山岩である。直縁刃石器，打製石斧，不定形石器に各1 試料が使用されるほかは，磨石・凹石，または敲石に使用されている。

3) 半深成岩

アプライトが2 試料と微閃緑岩1試料が検出された。

アプライト：2 試料あり，磨石，凹石または敲石に用いられている。

微閃緑岩：1 試料のみで，石皿に用いられている。

4) 変成岩類

石英片岩・片麻岩・ホルンフェルスが認められる。

石英片岩・片麻岩：石英片岩1試料および片麻岩3 試料が検出された。いずれも磨製石斧として利用されている。

ホルンフェルス：不定形石器として，1 試料がみられた。

5) 変質岩

変輝緑岩が3 試料検出された。それぞれ，扁平両刃石斧，両刃石斧および磨製石斧として用いられている。

6) 鉱物

敲石として石英（珪石）が1 試料，玉髓が3 試料検出され，石核，不定形石器，石錐に用いられている。このうち，石錐原石となる玉髓は瑪瑙の外観を呈する。

(2) 古墳時代～古代の石器・石製品の器種と岩種

砥石4 試料と焼け石1 試料がある。砥石のうちの2 試料は，粘板岩，他は凝灰岩と堇青石ホルンフェルスである。焼け石は輝石安山岩である。

(3) 器種別にみた岩種の特徴

石器石材と岩種との特徴的な関連がみられた事例について，以下にまとめておきたい。

石鏃：2 試料ときわめて少ないが，いずれも非変成チャートを用いている。

石包丁・直縁刃石器：13試料が出土している。もっとも特徴的な器種で，9 試料が頁岩，2 試料が砂岩，1 試料が安山岩である。頁岩のうち縞状となっているものが5 試料存在し，その他の頁岩も質的に

類似することから，同一産地である可能性が高い。

磨製石斧：両刃石斧を含む磨製石斧は，13試料検出されている。多彩な岩種がみられるが，片麻岩・変輝緑岩・珪質砂岩が各3 試料，流紋岩が2 試料である。

打製石斧：磨製石斧と岩質が異なり，砂岩が3 試料で最も多く，他は凝灰岩・流紋岩・輝石安山岩が各1 試料となっている。

不定形石器：珪質砂岩（3 試料），珪質頁岩（2 試料），瑪瑙（1 試料）など，硬質な堆積岩と流紋岩（6 試料）が多用されている。

4. 石器石材の産地推定

本遺跡が分布する地域は阿武隈山地の東縁にあり，宇多川・真野川などの河川が発達していることから，西方の阿武隈山地に露出する岩石が供給されやすい環境にあるが，異地性岩石と目されるものが少ない。

(1) 堆積岩類

縞状頁岩：石包丁および直縁刃石器に多用されている頁岩は，白色葉理を伴う灰色～暗灰色頁岩で，一部は砂質である。この岩質は，相馬古生層上野層の頁岩の特徴と一致する。同層の頁岩は堅硬で，層理面に沿ってうすく剥離しやすい性質を持っているため，石包丁の製作に適している。

珪質頁岩：本岩は直縁刃石器・石槍・不定形石器に使用されている中～古生層に属する珪質な頁岩で，在地性とみなされ，日本海側の新第三系に産する硬質頁岩とは岩相が異なる。相馬古生層や相馬中村層群の地層中には頁岩が多産し，一部は珪質となっているために，原石の供給は在地で可能である。

砂岩：砂岩は粒度や岩質の点で多様性がみられる。石包丁や直縁刃石器に用いられる細粒砂岩は，相馬古生層中の砂岩，石皿に使用されているアルコール砂岩は相馬中村層群桁窪層か中ノ沢層に属すると判定される。このほか，珪質砂岩としたものも，相馬中村層群中にみられる砂岩と同質である。したがって，砂岩に関してはすべて在地性岩石であると判断される。

チャート：本地域ではチャートの分布が少なく，松ヶ平変成岩類中に珪質岩として存在する程度であ

る。この珪質岩は灰白色であるが、やや結晶質で酸性凝灰岩の変成岩とみなされている。石鏃に使用されているチャートは、いわゆる非変成チャートであるため、異地性岩石と判定される。

(2) 火山岩類

流紋岩・デイサイト・安山岩の3岩種がみられる。

流紋岩・デイサイト：10試料の流紋岩が検出されているが、本地域の近辺に流紋岩産地は知られていない。他地域からの流通が考えられる。

デイサイト：1試料のみ検出されている。本地域にデイサイト溶岩の産地は知られていないが、霊山層の一部にデイサイトの礫が存在することが報告されている。

安山岩：本地方に分布する天名山火山岩類や裏山層は玄武岩質溶岩と火砕岩を主とし、安山岩質岩はきわめて少ない。しかし、遺跡から出土する石器の9試料は輝石安山岩で、一部は珪化安山岩に変質した岩相を呈している。相馬市北沢河川堆積物中の大礫として斜方輝石単斜輝石安山岩が報告されている(柳沢ら, 1996)ことから、霊山層の火山活動に伴って安山岩溶岩も存在する可能性があり、直接的には当該河川礫から石器原石を採取したことも想定される。現段階では、在地性の可能性が高いと考える。

(3) 半深成岩類

アプライト2試料と微閃緑岩1試料が該当する。いずれも花崗岩体に伴って形成される岩相であり、在地性岩石と判定される。

(4) 変成岩類

石英片岩1試料, 片麻岩3試料およびホルンフェ

ルス1試料が検出されている。石英片岩と片麻岩は変成度が高く、山上変成岩類と考えられ、在地性岩石と判断される。

ホルンフェルスは、花崗岩体の周縁に産出する接触変成岩である。本地域では、山上変成岩類と松ヶ平変成岩類が花崗岩と接する部分で、ホルンフェルスが形成されている。在地性とみなされる岩石である。

(5) 変質岩

3試料の変輝緑岩で、いわゆる緑色岩類に属する。本地域では、松ヶ平変成岩類中に緑色岩類が鹿島町相ノ沢川に露出している。しかし、変輝緑岩は磨製石斧に最も多用される岩種であり、岩相も類似するので、在地性・異地性両面からの検討が必要である。

(6) 鉱物

石英(珪石)は、阿武隈山地の花崗岩分布地域でペグマタイトとして産出するほかに、中-古生層中に脈状に発達することが多く、花崗岩類と中-古生層が広く分布する本地方では在地性であると判断される。

これに対し、玉髄(瑪瑙を含む)は通常流紋岩帯に伴って、その変質帯や晶洞中に産出することが多い鉱物である。本地方の近隣では流紋岩の分布が知られていないことから、異地性であると判定される。

参考文献

柳沢幸夫・山本孝広・坂野靖行・田沢純一・吉岡敏和・久保和也・滝沢文教(1996)相馬中村地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, 144p.

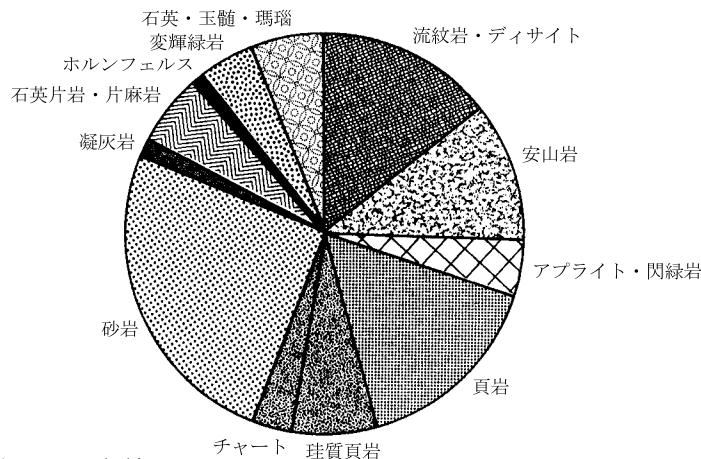


図1 弥生時代中期石器の岩種

表1 柴迫古墳群・柴迫A遺跡石器（全試料）の岩種別一覧表

	石鏃	石錐	石包丁	直線刃石器	磨製石斧	打製石斧	石槍	石核	石皿	砥石	剥片	敲石	磨石・凹石	礫	その他	計
頁岩			5	4								1			1	11
珪質頁岩				1			1				1				2	5
砂岩			1	1	6	1		1	1			2	2		4	19
チャート	2															2
凝灰岩					1					1						2
流紋岩					3										7	10
デイサイト												1				1
安山岩				1		1							5	1	1	9
アブライト													2			2
閃緑岩									1							1
粘板岩										2						2
石英片岩					1											1
片麻岩					3											3
ホルンフェルス										1					1	2
変輝緑岩					3											3
石英												1	1			2
玉髄							1	1								3
瑪瑙		1														2
計	2	1	6	7	17	2	2	2	2	4	1	5	10	1	18	80

表2 柴迫古墳群石器一覧

単位：cm・g ()は推定値・依存値を示す。

図版番号	出土位置	層位	遺物名	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考	時代	写真番号
50図8	SI 1	ℓ 1	打製石斧	13.8	7.3	3.2	390.0	輝石安山岩	自然礫素材、裏面のみ調整	弥生中期	
50図9	SI 1	ℓ 1	平基無茎石鏃	2.5	1.7	0.3	1.0	チャート		弥生中期	
52図10	SI 2	ℓ 1	打製石斧	11.9	5.8	2.6	242.3	砂岩	自然礫素材、刃部・側縁のみ調整	弥生中期	
52図11	SI 2	ℓ 1	不定形石器	4.5	6.0	1.4	29.9	輝石安山岩		弥生中期	
59図41	SI 4	ℓ 1	磨製石斧	10.9	4.6	2.4	174.0	砂岩	先端部一部破損	弥生中期	
59図42	SI 4	ℓ 1	不定形石器	2.4	2.1	0.9	2.8	瑪瑙		弥生中期	
64図1	SK 2	ℓ 1	直線刃石器	7.6	7.7	2.2	103.6	頁石	挟り2カ所あり	弥生中期?	
64図2	SK 2	ℓ 1	不定形石器	4.8	4.4	1.4	34.0	流紋石		弥生中期?	
64図3	SK 2	ℓ 1	剥片	4.4	3.5	1.0	14.3	珪質頁石	微細剥離痕あり	弥生中期?	
72図1	Y32	L III	石鏃未製品	2.8	1.9	0.7	3.3	流紋石		弥生中期	
72図2	Y27	L I	環状石斧?	(9.9)	(7.1)	2.6	195.2	砂岩	敲石の可能性あり	弥生中期	
72図3		L I	砥石	13.8	4.3	1.6	91.4	粘板岩		古墳～平安	
72図4	Z28	L I	敲石	5.8	4.8	3.0	116.3	石英		弥生中期?	
72図5	Z28	L I	砥石	(11.8)	3.8	1.5	97.2	粘板岩		古墳～平安	
72図6	Z28	L I	砥石	8.4	4.0	3.6	123.6	凝灰岩		古墳～平安	
72図7	A36	L II	磨石	12.3	6.3	3.6	488.0	石英斑岩		弥生中期	

表3 柴迫A遺跡石器一覧

単位: cm・g ()は推定値・依存値を示す。

図版番号	出土位置	層位	遺物名	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考	時代	写真番号
24図1	SD 1(X17)	ℓ 7	凹基無茎石鏃	3.0	2.0	0.5	1.6	チャート		弥生中期	
24図2	SD 1(X17)	ℓ 7	石槍	(5.1)	2.0	1.3	11.7	珩質頁石	基部のみ	弥生中期	
24図3	SD 1(Z18)	ℓ 7	不定形石器	6.7	4.9	2.4	64.4	流紋岩	一部自然面残存	弥生中期	
24図4	SD 1(V15)	ℓ 7	不定形石器	6.3	4.7	1.7	30.1	流紋岩		弥生中期	
24図5	SD 1(Y18)	ℓ 7	不定形石器	8.6	8.1	1.8	93.9	珩質頁石	自然面残存	弥生中期	
24図6	SD 1(Z18)	ℓ 7	不定形石器	3.2	3.3	1.0	7.6	玉髄	自然面残存	弥生中期	
24図7	SD 1(Z28)	ℓ 7	不定形石器	4.0	4.8	1.2	20.9	流紋岩		弥生中期	
24図8	SD 1(W15)	ℓ 7	石包丁未製品?	(5.2)	(4.6)	(0.8)	18.0	頁岩(縞状粘板岩)	石種不明	弥生中期	
24図9	SD 1(X15)	ℓ 7	石包丁	6.8	(12.9)	1.0	88.6	頁岩(縞状粘板岩)	紐孔2ヵ所あり	弥生中期	
24図10	SD 1(T14)	ℓ 7	直縁刃石器	6.2	7.6	1.9	86.6	珩質頁石	自然面残存	弥生中期	
24図11	SD 1(W16)	ℓ 7	不定形石器	5.7	13.1	1.8	76.1	珩質頁石	横長剥片素材	弥生中期	
25図1	SD 1(X17)	ℓ 7	石核	8.5	7.9	5.3	410.0	砂岩		弥生中期	
25図2	SD 1(Y18)	ℓ 7	直縁刃石器	6.4	8.9	1.3	78.8	砂岩	自然礫素材	弥生中期	
25図3	SD 1(X17)	ℓ 7	不定形石器	3.9	6.0	1.4	39.3	頁岩	自然面残存	弥生中期	
25図4	SD 1(X16)	ℓ 7	不定形石器	8.4	11.9	3.6	350.0	砂岩	自然面残存	弥生中期?	
25図5	SD 1(T14)	ℓ 7	直縁刃石器	9.6	9.2	1.2	113.9	頁岩(縞状粘板岩)	挟り2ヵ所あり	弥生中期	
25図6	SD 1(W15)	ℓ 7	直縁刃石器	7.6	9.5	1.7	124.4	安山岩	自然礫素材	弥生中期	
26図1	SD 1(Y17)	ℓ 7	大型蛤刃石斧	(7.7)	7.1	(4.8)	173.4	砂岩		弥生中期	
26図2	SD 1(W15)	ℓ 7	磨製石斧	(10.7)	6.9	(2.3)	194.3	珩質砂岩		弥生中期	
26図3	SD 1(X17)	ℓ 7	扁平両刃石斧	8.0	4.6	3.0	151.4	変輝緑岩	特異形態の両刃石斧	弥生中期	
26図4	SD 1(X17)	ℓ 7	刃石	11.4	5.0	3.4	222.0	変輝緑岩	基部が窄まる特異異形	弥生中期	
26図5	SD 1(V15)	ℓ 7	磨製石斧	(5.7)	(3.9)	3.4	113.7	片麻岩	裏面平坦な磨製石斧	弥生中期	
26図6	SD 1(W15)	ℓ 7	磨製石斧	(15.5)	(4.1)	4.0	279.5	片麻岩	裏面平坦な磨製石斧	弥生中期	
27図1	SD 1(Z18)	ℓ 7	磨石	11.2	8.0	4.0	495.0	輝石安山岩	自然礫素材	弥生中期	
27図2	SD 1(X17)	ℓ 7	磨石	(8.9)	9.5	4.7	390.0	珩化安山岩	自然礫素材	弥生中期	
27図3	SD 1(X17)	ℓ 7	磨石	(6.8)	6.5	6.7	500.0	輝石安山岩		弥生中期	
27図4	SD 1(X15)	ℓ 7	磨・凹石	(7.5)	8.4	3.5	278.2	アブライト		弥生中期	
27図5	SD 1(W15)	ℓ 7	敲石	8.5	8.1	5.5	500.0	珩化安山岩	自然礫素材	弥生中期	
27図6	SD 1(W15)	ℓ 7	敲石	(11.1)	5.8	4.5	400.0	砂岩		弥生中期	
27図7	SD 1(X17)	ℓ 7	石皿	12.5	12.5	9.4	2150.0	微閃緑岩		弥生中期	
27図8	SD 1(Y18)	ℓ 7	敲石	10.1	6.8	3.2	340.0	細粒砂岩	自然礫素材	弥生中期	
28図1	SD 1(V14)	ℓ 6	敲石	10.3	6.3	5.2	490.0	細粒砂岩		弥生中期	
29図1	SD 1(U14)	ℓ 5	直縁刃石器	11.8	10.6	1.5	230.0	頁岩	挟り2ヵ所あり	弥生中期	
29図2	SD 1(U14)	ℓ 5	不定形石器	3.1	3.9	1.3	12.4	珩化流紋岩		弥生中期?	
30図1	SD 1(W15)	ℓ 4	磨製石斧?	(8.2)	(5.2)	(2.3)	106.6	珩質砂岩	欠損資料	弥生中期?	
30図2	SD 1(U13)	ℓ 4	石皿?	9.0	7.8	5.0	500.0	砂岩(アルコース)		弥生中期?	
30図3	SD 1(T14)	ℓ 4	砥石	13.3	7.6	4.7	600.0	董青石ホルンフェルス	自然礫素材	古墳~平安	
31図1	SD 1(S13)	ℓ 3	石包丁	5.3	(8.4)	0.9	55.2	細粒砂岩		弥生中期	
31図2	SD 1(T13)	ℓ 3	敲石	7.8	3.9	1.9	102.3	頁岩		弥生中期?	
31図3	SD 1(S14)	ℓ 3	礫石核	4.7	3.2	2.6	54.3	玉髄	装身具未製品?	弥生中期?	
32図1	SD 1	ℓ 1	石包丁未製品	(5.3)	8.0	1.6	70.4	頁岩	石包丁の再調整失敗品	弥生中期	
41図1	SD 2(T20)	ℓ 6	石鏃	2.3	1.1	1.0	2.0	瑪瑙(玉髄)		弥生中期	
41図2	SD 2(T20)	ℓ 6	石包丁	(4.1)	(4.3)	0.7	21.2	頁岩(縞状粘板岩)	欠損点、紐孔1あり	弥生中期	
42図1	SD 2(V22)	ℓ 4	不定形石器	7.2	3.0	2.3	43.7	珩質砂岩		弥生中期	
42図2	SD 2(T20)	ℓ 4	磨製石斧	(5.1)	7.3	2.9	150.0	流紋岩	裏面平坦な磨製石斧	弥生中期	
42図3	SD 2(V21)	ℓ 4	磨石・凹石	11.6	6.7	4.9	490.0	輝石安山岩	全体的に磨滅	弥生中期	
42図4	SD 2(U21)	ℓ 4	敲石	(8.6)	8.5	4.2	395.0	アブライト		弥生中期	
43図1	SD 2(T19)	ℓ 3	柱状片刃石斧	(5.6)	2.4	2.2	47.6	流紋岩	刃口欠	弥生中期	
43図2	SD 2(T20)	ℓ 3	大型蛤刃石斧	(11.1)	6.3	(4.0)	309.0	凝灰岩	基部欠損	弥生中期	
43図3	SD 2(W22)	ℓ 3	不定形石器	6.7	5.9	1.6	60.0	流紋岩		弥生中期	
43図4	SD 2(W22)	ℓ 3	磨製石斧	(5.1)	(3.7)	2.6	34.3	変輝緑岩	欠損資料	弥生中期	
43図5	SD 2(U20)	ℓ 3	磨製石斧	(3.5)	(3.6)	(0.9)	14.0	石英片岩	裏面・基部・刃部欠損	弥生中期	
43図6	SD 2(W21)	ℓ 3	直縁刃石器	6.9	8.2	1.6	110.8	頁岩(縞状粘板岩)	自然面残存	弥生中期	
43図7	SD 2(T20)	ℓ 3	磨製石斧	(8.0)	5.2	3.0	135.7	砂岩	裏面平坦な磨製石斧	弥生中期	
43図8	SD 2(T20)	ℓ 3	磨石	(5.9)	(5.6)	4.5	159.0	凝灰質砂岩	磨滅著しい	弥生中期	
43図9	SD 2(W21)	ℓ 3	磨製石斧	(6.2)	(4.1)	(2.1)	40.4	流紋岩	磨製石斧再調整失敗品	弥生中期	
44図1	SD 2(S19)	ℓ 2	石包丁?	(2.2)	(2.3)	(0.7)	3.8	砂岩	紐孔?あり	弥生中期	
48図1	T12	L I	敲石?	7.5	5.8	2.1	127.4	デイサイト	敲打痕あり	弥生中期	

報告書抄録

書名	一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅳ							
副書名	柴迫A遺跡・柴迫古墳群							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第403集							
編集者名	稲村圭一 山田幹雄							
編集機関	財団法人 福島県文化振興事業団 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL024-521-1111 財団法人 福島県文化振興事業団 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL024-534-2733 国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所 〒970-8026 福島県いわき市平字五色町8-1 TEL0246-23-2211							
発行年月日	2002年12月26日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柴迫A	福島県相馬市 大字和田字柴迫	07209		37度 48分 25秒	140度 56分 56秒	20000918～ 20001222	2,500	道路（一般国道6号バイパス）建設に伴う事前調査
柴迫古墳群 (1・2次調査)	福島県相馬市 大字和田字柴迫・西和田	07209		37度 48分 23秒	140度 56分 56秒	(1次調査) 20001106～ 20011222 (2次調査) 20010416～ 20010719	(1次調査) 750 (2次調査) 1,450	道路（一般国道6号バイパス）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柴迫 A	集落跡	弥生・古墳 奈良・平安	溝跡 3 条 土坑 2 基 木炭窯 1 基	縄文土器 弥生土器・石器 土師器・須恵器 木製品	弥生時代～古墳時代の 溝跡の調査
柴迫古墳群 (1・2次調査)	集落跡	弥生・古墳 奈良・平安 近世	竪穴住居跡 4 棟 土坑 15基 焼土遺構 2 基 塚 1 基 道跡 2 条 階段状遺構 2 か所	弥生土器・石器 銅銭・煙管 陶磁器	弥生時代小規模集落・ 近世の土坑墓群の調査

福島県文化財調査報告書 第403集

一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅳ

柴迫 A 遺跡・柴迫古墳群

平成14年12月26日発行

編集 財団法人 福島県文化振興事業団遺跡調査部
発行 福島県教育委員会 (〒960-8688) 福島市杉妻町 2 - 16
財団法人 福島県文化振興事業団(〒960-8116) 福島市春日町 5 - 54
国土交通省東北地方整備局磐城国道工事事務所
(〒970-8026) いわき市平字五色町 8 - 1
印刷 六陽印刷株式会社 (〒960-8056) 福島市八島田字中干損田 8 - 1
